

「農村生活改善協力のあり方に関する研究」検討会

第3年次報告書（第4分冊）

- 国内調査報告書編 -

目 次

沖縄県国内調査報告	1
協同研究会「農村開発における地域性 - 農業普及・地方行政・生活文化 - 」	15
東京都・神奈川県国内調査報告	43
鯉淵学園調査報告	53
大分県・山口県同行報告	63
長崎県国内調査報告	85
簡易水道国内調査報告	131
北海道国内調査報告	141
長野県国内調査報告	209

沖縄県国内調査報告

【沖縄15-1】

日時：平成15年3月4日

場所：沖縄県読谷村 O-B氏自宅にて

お話を伺った方：O-B氏（読谷村生活改善研究会リーダー）

議事録担当者：牧 由希子

訪問目的と概要：前回2月の訪問時に拝借した生改活動に関する当時の資料を返却すること。前回、依頼しておいたその他の関係資料・記録などの収集を行う。また、それらの資料の補足説明を受けながら当時の生改活動で実行したことなどを伺った。

- ・ 戦後、アメリカからの食料配給は7～8年続き、配給に使われていたメリケン粉の袋を活用した洋服作りを生改グループで行った。
- ・ 当時の生改普及員の初仕事はカマドの改善だった。三つ石カマドから改良カマドに替わって行ったが、当時は萱葺き屋根の屋敷だったので、屋根に穴を開け、煙突を出すのが大変な仕事だった。
- ・ 食の改善に関して。生改グループで味噌作りを行った。当時は原料である大豆から作っていた。また、グループで作っていたイモ料理なども隣近所に分け合っていたので、すぐに周囲の人達に料理の仕方が伝わり、皆、レシピを教えてもらいたかった。
- ・ 冠婚葬祭などの行事の改善について。行事などに係る交際費が家計を圧迫していたことから、冠婚葬祭の簡素化を勧める運動を行った。
- ・ グループの集会について。昼は生産活動で忙しいので、グループの集まりはたいてい夜行われた。
- ・ 行政側からの支援について。保健所から衛生面でトイレや台所の改善指導があった。とにかく物資が不足していたので米兵のヘルメットなども台所の改善に利用していた。
- ・ 同じ部落内で、基地の仕事に就いた人達とそうでない人達との間に所得の差が出てきた。O-Bさん宅は配偶者が教員だったので定収があり、経済的にゆとりがあった。
- ・ 戦争をくぐって生き延びてきた人達は皆助け合って生きてきた。紙、洗剤や食用油などは基地に勤めている人が基地からもらってきて、隣近所で分け合っていた。
- ・ とにかく、物資が何もなかったもので、いろんな物を利用して工夫してきた。そのお蔭で暮らしの知恵がついた。その工夫が実った時の感激は忘れられない。
- ・ 今でも部落の中には共同体意識が残っており、また時間のゆとりもある。
- ・ 当時、座喜味区では300世帯ぐらいあり、150人ほどが生改グループに入っていた。最初はグループも一つしかなく、30名程のメンバーがいた。その後、各グループ14～15名程のメンバーになった。グループで真似合いなどもよくやった。
- ・ 座喜味区は基地も近く、基地で働いている人達も住民の中に多かったせいもあって、物の考え方などアメリカ人の影響を多く受けているといえる。
- ・ 座喜味区は女性達の活動も活発になり、姑からも信頼を受けるようになり、嫁に財布を渡すのが本土に比べて早かった。
- ・ 座喜味区では、生改グループの集会へもその後夫婦で参加するようにもなった。

【沖縄15-2】

場 所：沖縄県石垣市農業改良普及センター

日 時：平成15年3月6日(木)午前9:40~

面会者：O-C氏(沖縄県元生活改良普及員, 専門技術員)

O-D氏(沖縄県八重山農業改良普及センター)

O-E氏

O-F氏

O-G氏(石垣市生活改善グループ員)

調査者：佐藤, 太田, 服部

議事録担当：服部朋子

急な依頼にもかかわらず, 3名の女性起業家の方々と会うことができた。普及センターで話を伺い, その後O-F氏の工場を見学した。生活改善運動にどのように取り組まれていたか(初期), 開発途上国の人達が研修等で来日した際にはどのようなことが伝えられるかといったことを主に伺いたい旨説明した。この3名の方々は食品加工を発展させ, 各自独立し, 女性起業に成功している方々である旨紹介を受ける。ここ10年間位多い形態で, 平成8年には小規模事業の補助を受けている。

面会者のプロフィールなど

O-E氏：O-E 熱帯果樹園 菓子製造業 代表者

パパイヤ漬物シリーズ, パパイヤジャム, マンゴージャム, ピパーズかりんとう, 等を製造

O-F氏：O-F ヘルシー加工所 代表者

パインゼリー, パインジャム, サーターアンダギー, 麦味噌, アンダー味噌, 等を製造

O-G氏：石垣市生活改善グループ員, O-G 農園農産加工部

パインゼリー, パインジャム, パインソー等を製造

活動状況

O-G：子育てが終わり, 世の中の流れに乗ったという感じ。平成7, 8年から開始。

O-E：昭和60年1月に農業をスタート。普及員の先生方に誘われてグループに入会。今生きていれば90歳の母親達も入っていた。小さい頃から母親の活動を見て憧れていた。生活改善グループは農業をしながら新しいグループを作ったりしていた。お茶を飲みながらお料理教室をし, 月に1, 2回集まっていた。マンゴー農家。自分の友人知人を集めた。マンゴー農家という捉え方で誘った(O-C)。夫は公務員で退職後健康のために農業をしようとマンゴーを始めた。家族全員でマンゴー, パパイヤなど, 最初は自分たちが食べるぐらいで楽しく, 魅力的だった。月に一回集まって, 味噌・佃煮を作り, 忙しい時に農家に一品だせるようにした。これは, 普及員さんが指導してくれて, 月に何回か普及センターに来た。料理講習があった。

O-C：石垣は市内にセンターがあるので足しげく農家の人がある。拠点であり, 便利な所である。那覇市では普及センターの人が出かけるという。

O-F：宮古出身で石垣にお嫁に来た。復帰前の昭和20, 30年代は自分がグループに入って活動した。母が宮古出身でこの母親の時代から活動しており, それがきっかけといえる。赤ちゃんをおんぶして

後を追っていた。苦しい時代から自分の周囲にある材料を使って漬物や味噌作りをした。

O-G：引っ越してきた。川原は活発で長く活動が続いている所。昭和31年に発足し、集落センターがあった。南米移住を希望しており、憧れはブラジルだ。夫婦ともに東京農業大学出身で学生時代、暑さに慣れようと夫が石垣に来ることを決めた。夫は、南米よりもここを気に入ったため、石垣にいる。自分は沖縄本島から。計画移住民がほとんどだ。復帰の年に自宅を購入し、学校も復学した。昭和35年に正式にここに移住。在学中から普及員を知っていて、憧れていたし、農村で生き生きしていた。JOCVで南米に行こうと思い、大学に入った。アマゾンへ行こうと考えていた。子育てで多忙な生活は大変だったが、先輩について覗きに行ったりして、子育てが終わってからグループに入った。伝統のある活発な川原で入会することは厳しい。10名以上の人が活動していた。こんなに私は入りたいたいの簡単なことではなかった。以前は簡単に入会できると思っていた。

O-C：登野城地域で生活改善グループはスタートした。昨年からは50周年記念誌を作成中。昨年は式典をした。グループには活動形態の変化が見られる。自分を活かして独立する人や活かしきれない人もいる。八重山北部は移民地域である。明石集落という所はグループ表彰（農林大臣賞）をもらったが、今は停滞気味である。以前は、普及員が食事を作って農家の人達を待っていたものである。野菜直売所があり、売り子をやったりもする。農業をしながら学習をする。普及員としてはやり甲斐のある所で、シラキタマエさんとタケハラさんが八重山のことを一番よく知っている。

自給体制の確立。販売は一手にJAが持っていたため、なぜ農家が販売してはいけないのか？儲けてはいけないのか？と思った。物々交換をやったりした。そのうちに農林水産省が自主流通を進めた。技術があっても場所が無く（加工室等）、施設で困った。川原の集落センターは大量加工が可能。県単位では無理なので国の補助事業で少しずつ、設備を整えて行った。商品化するためには必要があった。例えば、真空包装機が必要であった。まずは、普及センターで技術の確立をする必要があるので、機械購入希望を出した。雇用拡大を目的に商工労働部があるが、小規模農家向け補助は平成8年から開始。今日いる3名は小さい加工場として受けた。八重山では最初である。農村のものは補助金を受けられない。加工所は自分の施設として動かし、パート雇用などもしている。

O-G：川原地区では大規模農家（10町歩¹⁾～20町歩）が多い。片手間に加工はできないので大規模農家は農業だけで充分。私のように外から来て小規模でやっている人間は加工まで手を伸ばさずにはいられない。

O-C：形態の違いがある。グループの中でも条件が違うので一緒にやろうといってもやる人がいない。生活改善グループ員は月に1回集まる。積み立てをして大阪万博やヨーロッパ旅行に行っている。

O-E：母親がグループ活動をしていた。私がグループに入ったらやめてしまった。世代交代である。

O-C：グループ活動では、各会員の家をまわっていたが、夜しか集まれないので手狭だったり、家族に気を遣ったりする。場所が欲しいという話しになり、公民館ができた（昭和53年？）。

O-C：皆それぞれ自分の農産物を持っている。そして、例えばパインを工場にだしている。

O-E：傷ついたパインは自給用に使用していたが、ジャムづくりを始めた。パインでのジャムづくりはペクチンがないため、固まりにくくて大変。しかし、工場の大釜でトライした。

O-C：農家は自給を拡大した形の企業である。加工をやっている人達は、皆それぞれに特徴（味など）があるが、技術は皆に教えるのでオープンである。女性企業家が生まれてから、ある程度は情報を出

¹⁾ 1町歩約1ha。

すが企業秘密として、ある一定は独自の技術などを秘密にしようと申し合わせた。営利に関わってくるので。普及員から基本は教えてもらうが、個人個人の味覚や舌触りは異なるので基本以上は個人で変える。食品に関してはセンターで講座を開催し、勉強してもらっている。

O-G：自分の名前ですと社会に出た感じがしたことを覚えている。

O-F：企業ではないが、大それた感じがし、信じられなかった。頭に販売、売る意識が無かった。

O-C：売る意識のなかった農家には意識啓発が必要だった。売るためには規則を守ることが必要である。産業祭りの際（始めは農業のみだった）にマンゴーを消費拡大として売らせた。昔は保健所のチェックがなかったため、臨時許可証が必要とか色々いわれた。まだ加工所が無かった頃は、色々なイベントに政府の名前でやった。イベント用に臨時で作ったものを法律など無視してやった。農家の皆さんが元気づけられるのならいいと考えた。普及員は売り子となり、消費拡大という名目で実施。最初の頃、農民は「いらっしゃいませ」といえなかった。このようなイベントに出すということは、本島で始まったものである。キッチンカーなども本島のみであったが、祭りの時に石垣に持ち込んでいる。このセンターに来て、学び、技術を持ち帰るとというのが特徴である。公民館は集落単位であった。その横に農業主体の振興館を作った。調理室や研修室を備えた。集落ごとの農村振興会は女性がメイン。公民館の役員クラスは長老、有力者、婦人会関係者など男性が多かった。集落行事は煮炊きが伴うので、自然と必要になる。そして、農産物加工が必要ではないかと一緒にくっつけたのである。公共施設は通常、モノが減っていったりするが、いつもきれいで調度品も揃っている。

O-E：昭和 60 年に戻ってきた。通勤農業も最近は多い。混住している。

ドミニカ共和国のマイラさんについて（研修員）

O-C：広く、この地域を見てもらうことを考えた。O-Gさん、O-Eさんの加工所を視察してもらった。「熱帯果樹」がテーマ。実際に受け入れて実習ということはできなかった。半日間に3カ所、訪問した。県内からの受け入れはあるが、外国人の受け入れはこの1回のみである。

O-G：こんな汚い所でこんな綺麗なものができるのかと感心していた。園芸農家でパパイアを植えていた。これは果樹の苗を売ることがを目的としていた。しかし、大きな台風でやられ、処分されてしまった。損失は大きく、頭にきた。台風で落ちた実で夫のオツマミ用の粕漬けを作った。技術を持つ普及員に教わり、川原のセンターの料理室でやった。

O-C：小規模と県単位の事業の両方をやる。小規模の所には、JICAの研修生20人（偉い人達）が来たことがある。外国人がきたのは初めてだった。その頃、本庁にいたO-Cさんがマイラさんの件を受けて八重山にお願いした。以前、JBICの技術顧問が来た。道の駅に関する呼びかけ文書があった。政策に乗せるまで各地域によって異なるので、やれないかもしれないが、小さなことから、足元からやる。道の駅も夢の話であり、ここにはない。3名ともコウチ市場の2階に石垣の特産品として出している。ここは石垣産のみの店。商工会員になった人向けに販売している。空港の売店にも入っており、電話やFAXでも注文を受け付けている。新規参入の兆しはない。加工をするのは主に女性なのでなかなか時間が無い。大規模農家の女性にとってはその必要も無い。協同加工はある。後継者が課題だが、女性が行動するきっかけ作りになればと思う。条件が揃わないと技術を持っていても加工まではなかなかできない。

O-E：夫の理解がある。一緒に加工はしないが、元気な頃はシール張りや伝票書きをしてくれた。

O-F：夫が亡くなって10年。老人ホームへ働きに行ったりした。サーターアンダギーが好きでやり

たかったので普及センターへ相談には行っていた。子供たちは「農業はやらんでいい」と言っていた。味噌やジャムを作り、販売している。宮古味噌は魚と合ってよい。夫は男二人で女手がなく、早くに嫁に引っ張られた。夫の父親が器用で味噌作りが上手だった。姑はいなかった。夫の父親に教わった。

O-G：夫は農場で私は加工だった。バブルがはじけて苦しくなった時、別々に仕事をしているのもどうかということになった。園芸中心に加工は2番手にするかと最近悩んでいる。

O-C：やっている人達は営業マンにもなり、商工会員にもなる。自分の経営が、数字がしっかりでてくる。販売先をしっかりと探し、見てくる。

O-F：販売センターで売っているモノを見て、うちにも入れて下さいと電話がある。

O-C：我々は本当に零細で、パッケージからシールまで全部自分でやる。女性起業のための講座をやった。女性の組織は5段階（東京は7段階）で進む。タバコや和牛づくり。JA婦人部、婦人会、生活研究会とあり、社会参画の目標をメインにしている。JA女性部には立派な加工所がある。情報交換はするが、担い手が大きいので難しい。活動をしている女性はいる。準会員の人に何かできないかと思っている。八重山の生活研究会は150名。JAの方も研究会の活動もする。観光客向けに加工の体験とかいいのではないかと考えている。グリーン・ツーリズム（県単位）はやっている。農村生活係（営農）が立ち上げ、今人材育成をしているところである。農村活性化のためもある。暢気に暮らすのは既存集落。協同で買い物をしているうちに自分たちで販売・運営をするようになる（雇用創出）。生活扶助のシステムはほとんど移民集落にある。生改は七つ道具（炊事道具）を頭にのせて普及をした。右側の海沿いはポツポツと移住集落ができた時代で車がなかった。西表島の石原さんは、生産加工＋グリーンツーリズム＋体験を実施。受け入れ研修に関してだが、沖縄の人は気を遣いすぎるのではないと思う。

O-G：大学の研修生を春と夏に受け入れたことがある。自分も初めて石垣に来た時は研修生としてであった（夫も）。25年前からやっている。日大や畜産大学の人も来ていた。人手が欲しい時は複数の人を受け入れる。農大としても部屋だけ別はいけない、生活も全て経験する。

O-C：嵩田（タケダ）の人達は、住宅事情に言及している。滞在施設が問題なのである。行政とは別に個別でやっている。心の問題や農業をやりたい人などが来る。嵩田の人達の気持ちや意欲が可能になるようにしたい。問題点は、謝礼が手薄ということもあるだろう。女性経営者としての位置づけの問題になってくる。視察研修受け入れが多く、労働時間がとられてしまうのである。

普及所は生活改善グループだけのためという勘違いがあったが、農家全体のものである。JA婦人部と上手く行かない部分もあった。グループ員もウカウカしてられない。農家を使う施設として普及所は独立した場でないといけない。農家が土足で入って来られるようにしなければならない。支庁の中に位置するが、反対をしてきて現在もこの場所にある。10年ストップしていた採用も再開した。

O-F：台湾生まれ。7歳の時、宮古島に帰った。父は兵隊。宮古に2年いた。土地がなかったので父親の妹のいる石垣へ来た。

O-G：復帰の年（1973年）に夫と私は石垣で実習をした。

O-F：仕事は忙しいが楽しい。

O-G：自分の作ったものが現金化される、数字としてお金がでてくる。生活がかかっているから趣味ではできない。美味しいといってもらえることが大切。責任が重大である。農業は夫がメインで口座も別。糸満生まれ。

・ 財布は女性が持つ。女性がしっかりすれば、家は円満。年寄りの財布もあって孫に何か買ってやり

たいと思う。年金もある。

- ・ 普及所があって得をした。グループは減り、多様化している。もっと利用すべきである。しかし、自立しなくてはならない。自立するための支援をしているのである。例えば、真空機械を使うために普及所に来てもずっと使い続けるわけではない。長くて3年位である。

O-E：昭和12年生まれ。小中学校まで父親の仕事の関係で台湾にいた。戦後、船で日本へ戻った。開墾した自分の土地は購入した。コメ、サトウキビ、イモを作っている。

- ・ 石垣島は、人口約4万で農家は1500戸（専業）。後継者が問題となっている。

【沖縄15-3】

場 所：沖縄県赤石（あかいし）集落 農産物直販所（O-H氏が毎日店番している）

日 時：平成15年3月6日（木）午後2：40～

面会者：O-H氏（生改グループメンバー）

調査者：佐藤（太田，服部は途中まで）

議事録担当：佐藤

・ O-Hさんの略歴

大正13年生まれ？昭和3年生まれ？小学校6年＋青年学校の教育。恩師は、太田先生。こちらに来てからも励ましの手紙をくれる。昭和35年に本島の玉城（たまぐすく）から来た。子どもは5人（長男は夫が兵隊に行く前に生まれた）。入植が決まった後に夫が死んだ。実家の母親は「自分の髪の毛が白いうちは、移民させない。再婚されては困る（「両夫にまみえず」の思想）とっていた。長男は入植当時13歳。「学校半分でも働く」といったので、夫はいないが入植に踏み切った。長女は6歳。2年目に、三男、次女を引き取った。

・ 野菜直販所

土地改良の一環でトイレ、公園を整備し、その中に直販所を小屋がけした。地域の手作り産物を販売。少量なので石垣市まで持って行くと儲けにならない。明石の松（漁業をする人が、漁場探しの時に目印にしている）の横に直販所。初めは無人販売 盗む人もいたのでボランティア（地域のおじいさん、おばあさん）当番 今は少額のお駄賃でO-Hさんが一人で店番。

・ 明石入植地

13ヵ町村、63名の入植。出身地が異なるので行事も銘々に行っていた。バラバラで互いの名前も知らない。入植1年目に婦人会結成。お互いを知るために。メンバーは50人くらい。そのうち34～35名がグループに。

・ 生改の位置づけ

苦しい時に見に来てくれた。出身地の玉城は生活改善が盛んだった。

・ 出身村

村議会から激励に来てくれた。

・ 生活改善活動

最初にやったこと。『接待改善』と答えたら、野里さんが訂正。『家の光』の輪読会。ケネディ大統領の話。日米戦で、ケネディ大統領は日本の軍艦に沈められた。戦後、その時の軍艦の艦長に会いに熊本に行った（？）。この話を読んでケネディとは偉い人だと泣いた。旧暦の十五夜（満月なので明るい）が定例会。ブリキのランプの灯で夜道を歩いてきた。戦後の立ち上がり期、みんなが乳飲み子を抱えていた。嫁に勉強させるためにおじいさん、おばあさんが子守をしていることもあった。会場の外で子守をしていて、赤ん坊が泣くと、乳をやる。

・ 行事改善

「あくむし払い」の行事も皆出身地ごとにバラバラにやる。村の一体感がない。大宜味から来た人、玉城から来た人、他の島から来た人、バラバラで統制が取れない。公民館長（移民団長、初代婦人会長）に相談した。「農休日」の設定によって部落の一体化を目指そうとした。しかし、年寄りには「雨降りに休め」と反対。青年団も勉強するために農休日を独自に設定。石垣の琉米文化会館から本を借

りてきて公民館の中で読む時間を取るため。野球，バレーボールなどをしてレクリエーション（今は同じメンバーがグランドゴルフをしている）。これとタイアップして「婦人は農休日に何をするか」。花を植える，集落内の掃除をする。月に一回の農休日（農休日を設定して43年になる）。「文藝春秋」に「ハワイの開拓民の農休日」の記事が掲載されていた。これに刺激されて，「農休日には畑に行かない」と決めた。農休日を楽しみに2，3日前から準備をする。第3日曜日の「家庭の日」を農休日として利用。10年くらいごたごたしたが，ようやく定着。現在でもグライダー場の掃除などもしている。

- ・ 接待改善

冠婚葬祭で天ぷらを出さないことを申し合わせた。貧富の差が出ないで済むように。「ぶがり（歩狩り）」（相互扶助の労働提供）の「ぶがりなおし」（＝労働をねぎらう食事）」に「豆腐一切れ」と決めた。多くの人から「叱られた」。食事を楽しみにしているのに。しかし，あとで貧しい人からは感謝された。台風の後で，たいてい4，5件は屋根が飛ぶ。この修復作業。屋根葺き接待の改善。簡素化。男は楽しみにしている。金のない男は助かる。「石垣市の“接待改善”スローガンに従ってやっているのだ」という理由づけで批判の矛先をかわす。生改グループの提案だが，公民館（協議会）の決定にしてもらう。

- ・ 資金作り

現金収入がない。ラッカセイを作って売り，正副婦人会長の出張交通費を捻出。正副会長が会に出るために農作業ができない時は，グループ員が代わりに作業する。1年交代。2年やることもあるが。役付になりたくなかったO-Hさんは（開拓団長に呼びかけられて？）各班（明石には4班までである）から長老格の女性が集められて婦人会の役決めを相談した。正副会長，書記，会計の4名。O-Hさんの属する4班の女性が「会長」のくじを引いてしまった。戻ってきて「あんた会長しなさい」といわれて仰天した。「言葉が通じないのでできない」と断った。「イヤだ」と1週間は駄々をこねたが，長老女性から「それなら4班から抜けよ」といわれた。「今思い出しても枕を濡らします」。（結局吉川さんが会長になって，O-Hさんは副会長）。昭和30年，入植一周年の記念日，32歳だった。このような活動を通して，集落のまとまりができてくる。組織が強化される。生改グループの呼びかけで，婦人会の奉仕作業。子どもが死んだ家，年寄りが死んだ家。農作業ができない。代わりに畑作業をしてあげる。講もある。

- ・ 小学校

先遣隊の建物を使って，最初に小学校を建てた。1～4班共同。現在は伊原間（石垣島の一番細いところ。少し石垣方面）と統合した。

- ・ カイコ

会社が中国輸入の生糸の安さにねを上げて，買い取れなくなった。顧問

- ・ カマド改善

最初は三つ石カマド 土カマド，立ち流し（開拓地では普通の所より一段階低いところから改善が始まるのか）昭和35年までに土カマドになった。地下足袋を履いて，適当な土を見つけてくる。稲ワラをまぜて，踏んで固めて日干し煉瓦にする。お金はないので，みんなの労働でやる。共同作業がすべて。

【沖縄15-4】

日時：平成15年3月6日 午後2:30～午後4:00

場所：移動の車中，および明石公民館

面接相手：O-I氏（石垣市八重山普及所初代生改）

調査者：佐藤寛，服部朋子，太田美帆

議事録担当：太田美帆

内容：八重山普及所における初期の生活改良普及員の活動状況

1. インタビュー形式

「石垣に行くならO-Iさんに会うといい」と知花さん（元生活改良普及員）に教えてもらい，八重山普及所にアレンジをお願いしたところ，急だったにもかかわらず快諾して頂いた。開拓移住村，明石集落に向かう車中，明石直売所でO-Hさんと一緒に，そして明石公民館で個別に話を伺った。短時間のインタビューで残念だったが，質問したことには的確に答えて頂いた。

2. インタビュー時入手資料：O-I氏略歴

3. インタビュー内容

生改になったきっかけ

- ・ 会社で働いていた時に，琉球大学の先生が来て生改にならないかと打診された。八重山普及所の初代生改として大浜に駐在した。
- ・ 最初の活動は避妊について。公衆衛生看護婦（公看さん）と一緒に農村を回った。自分が人集めをし，実技は公看さんがした。

開拓農民 O-Hさんとの活動の思い出（詳細はO-Hさんの議事録参照）

- ・ 生改グループ活動費の月10セントが払えない人もいたので全員加入ではなかった。払える人だけがメンバー。
- ・ 子供，年寄りが亡くなったら婦人会がボランティアをしたが，その呼びかけを生改グループがした。家族を亡くした人をも「あい」などして皆で助けあった。
- ・ 婦人会長は一人が長くしたが，生改グループリーダーは1年ごとの輪番制にした。
- ・ 月1回の農休日を青年団主導で導入した。第3日曜日を「家庭の日」としたが，導入当初10年くらいはごたごたした。今年で43年くらいになる。
- ・ 生改グループで畑を借りてラッカセイを作り，正・副会長が石垣に出張するバス賃にした。会長らがない間の畑作業はグループ員がした。
- ・ 三つ石カマド（石を取ってくるのはお父さんの仕事）からカマド改善は始まった。土を探し，稲ワラで土カマドにし，それからレンガのカマドにした。昭和30～35年ごろ。5年以内に大体皆改善した。お金をかけたら何もできないから，全て共同で行った。真似して自分でできる器用な人もいた。
- ・ トイレは一層式，二層式，そして三層式にした。このころから事業が入ってきた。村を上げて婦人会主導で行った。砂は有ったのでセメントを混ぜて作った。
- ・ 八重山支庁に開拓移住担当係が18年前まではあった。

- ・ マラリア, 日射病で倒れる人が多く, 体力をつけることが何よりも先決だった。
- ・ 昭和 59 年に農林水産大臣賞をもらった。社会教育面でも色々な賞をもらった。
- ・ O-H さんの話: 農協の営農係が資材, 種イモを持っている人で一箱買わされた。作らないと食べられないからともかく作った。台風で公民館に避難した時は硬いおにぎりが配られ, 次男が食べず困った。

大浜町駐在時代

- ・ 1955~60 年, 大浜を担当, 大浜町駐在普及員であった。初任給は B 軍票で 3300 円。バスはなく, 当然旅費もなかった。坪田運輸会社の丸太を運ぶトラックによく乗せてもらっていた。アメリカへの土産用の沖縄地図がプリントされた風呂敷を被り, 目立つようにしていた。
- ・ 大浜で当時駐在をしていたのは, 農改, 獣医と生改だけ。お巡りさんと公看さんもいる所もあった。大浜町役場に間借り。板間に石油コンロだけがあった。
- ・ 男の人は Y シャツのポケットにペンを挿すので, ポケットによくインクが滲んでいた。奥さんたちにこのインクが落ちる洗濯の仕方を伝授したところ, 男性にも大変喜ばれ, 自分のすることも徐々に理解してもらえるようになった。
- ・ 毎月満月の夜に生改グループの定例会をした。本もなければ指導書もなかった。
- ・ 後ろから男の人を見ると Y シャツが茶に変色していた。大浜には水道がなく, 井戸水は鉄分を含んでいたから。「水道を引いたら男の人ももっとかっこよくなるよ」といって男性を説得し, 簡易水道設置に踏み切った。当時の大浜町役場の前には 3 本の大きなガジュマルの木があり, その下に小さな噴水のようなものを作った。私が「生改のタイル」を使って青色で回りをデザインした。(簡易)水道出水式の時, ここから水を出した。あったかい水が出てきた。私にとってこのタイルは一生の思い出。何か一つ「これ」というものを仕事で残すといい。後にも自分の遣り甲斐となるもの。「自分の証」を持ちなさい(このタイルの写真を撮って来た: 太田)。
- ・ この簡易水道が水道(市が実施)になるのに 50 年かかった。簡易水道のインパクトは大きかったが, その後は皆そんなものと我慢していたようだ。
- ・ 1957 年に西村賞を受賞。
- ・ 私がいわなきゃ誰がいうの? 私がやらなきゃ誰がやるの? 私が声を上げなきゃ, 私が行動しなきゃと思っていた。
- ・ 泉グループは戦災に遭っていない地域だが, マラリアで死んでいる人は多かった。台湾, 本土, 沖縄本島からの引き揚げ者が多く, 「知的生活」をしていた。女学校を出た人, 大学の先生の金持ちの家でお手伝いをしていた女性などがいて, 彼女たちは「いい生活」を体験していた。このような選ばれた人がグループ活動をしていた。
- ・ いきなりグループ活動をするのは難しいので, 個人プロジェクトと共同プロジェクトに分けて両方行った。
- ・ 月 1 回の定例日に, 必要なものを共同で買う共同購入と, 共同学習をした。
- ・ 村々は歩いて回った。定例日にはランプの火屋(ほや)を子供たちが磨き, 準備して待っていてくれた。
- ・ 役場に帰って役場に勤めている人たちに伝えることも大事な仕事だった。
- ・ 個人プロジェクトでは, 「家事分担で明るい我が家」を実施。夫が布団上げ, 子供が水汲み・庭掃除・花壇の手入れ・お使い・ランプ掃除・石油買いなど。

- ・ 腰が痛いと言ったのを覚えていた。この辺りではリヤカーは引いていたが、これが腰を痛めるので押すように改善した。「リヤカー利用で我が家の改善」。
- ・ 女性が「もっこ」を頭に載せて市場へ売りに行き対売りをしていた。早く売った人はカツオだしや小魚を買って帰った。
- ・ グループ活動として、自転車に古タイヤをくくりつけて、そこに野菜を載せて売りに行くようにした。徒歩 30 分かかるところを 10 分以内で行けるようになり喜ばれた。
- ・ グループは 5 ~ 6 人くらいから始めた。頼母子するには 15 ~ 20 人くらいは欲しい。大体 14, 5 人くらいで固定した。
- ・ 「生活改善頼母子」をして 1 ドルずつ出資、衛生器具、整理ダンスなどの購入、水屋などの改善をした。
- ・ 共同学習では料理講習が多かった。必ず自分の家で成功してから教えるようにした。
- ・ 大浜の 3 年間で 27 グループ作った。

石垣普及所時代

- ・ 1960 年から石垣普及所駐在。とのしろグループ、美崎グループで栄養改善、加工味噌づくりなどをした。
- ・ 豊川みつこ生改普及主事が八重山農業高校の家政科の先生になったので、その後任として昭和 52 年 2 月 24 日に普及主事になった。
- ・ 普及主事は石垣、大浜、竹富にそれぞれ一人ずついた。

その他

- ・ 1962 年に熊本県の専技の講習を受けた。ハワイ大学の普及職員が技術指導することもあった。
- ・ ユースカー担当の西村カズオ元軍人。4 H クラブの普及などにも努め、「西村賞」を個人で設立し、沖縄の人の生活を立て直すため農業に対する気を高めるための努力をした。
- ・ 両親が 40 代の時に立身出世を目指し、石垣に移住してきた。村では中以上の生活をしていて、父は開拓団長。苦情を治める役だった。父はこらえ上手だった。琉球漆器を作った前田さんと同じ出身地。
- ・ 外から来た人が島を活性化する。
- ・ 同志が 3 人から 30 人になれば、島の中ではどうにかなる。
- ・ 物を作っても島では売れないのが悩み。
- ・ 「明和の津波」まきのきよし著？

【沖縄15 - 5】

日 時：平成15年3月14日

場 所：医療センター

お話を伺った方：O-A氏（研修員）

議事録担当者：明石秀親

沖縄県にボリビアより研修員として約1ヵ月半来日していたO-A氏が評価会において発表した内容を受けて下記の通り報告をまとめる。

O-Aさんが沖縄から学んだこと（2003年3月14日）

評価会における本人の発表内容から：

「沖縄では看護協会を訪問し、国や県の施策に合わせた活動についての説明を受けた。地域保健10原則に合わせて、保健師の方々が地域住民と協力・連携し、病気の予防やヘルスプロモーションのため、過去数十年間、心を一つにして働いてきたと伺った。また、人々の生活向上のためには行政トップレベルの方々の活動参加も必須であり、その支援を得て予防や県民の健康づくり運動活動を展開し、ナショナルプラン“健康日本21”の実現に努力している。」

この結果からO-Aさんが導き出したAction Planには以下の内容が含まれた。

「SOJO, PPM, 愛育班, フォーカスグループ・ディスカッション, 保健師や生活改良普及員などのメソッドや活動」を参考にして生活改善を推進する。

- ・ 地域ごとにグループを作る。
- ・ 人々の模範となるようなグループリーダーを育成する。
- ・ 住民に誰もが平等, 公平であることを教える。
- ・ 住民に疫学統計データを正確に伝え, 一緒に分析して行く。
- ・ 食生活改善の効用, アルコールの飲みすぎやタバコの害, 病気の予防策などについてグループ活動を通して教える。
- ・ 健康フェアなどで子供や大人（特に老人）が参加できるプログラムを計画する。
- ・ 全活動の参加人数・名前を記録する（どんな活動に何人集まったのかを知ることにより, 住民の関心が分かる）。
- ・ 活動の評価を行う。

この他, フォーカスグループ・ディスカッションのやり方, 健康改善活動に市保健局の職員を巻き込む, などが項目として出された。

表1 O-Aさん研修予定

月	日	曜日	件名(午前)	(午後)	備考
2	3	月	来日		
	4	火	JICA/TIC: プリファイナ	医療セミナー: 初エディション	
	5	水	厚生労働省: 表敬	TIC	
	6	木		国立保健医療科学院: 兵井先生	参加型評価 PLA
	7	金	品川区保健セミナー	国立国際医療セミナー	夜: 歓迎会
	8	土			
	9	日		移動(東京 佐久)	
	10	月	佐久総合病院: 出浦先生	佐久総合病院: 出浦先生	病院と地域医療
	11	火	移動(佐久 東京)		
	12	水	移動(東京 名古屋)	津島市長表敬, 市保健セミナー, 保健所	市保健セミナー
	13	木	市立病院: 田邊先生	愛知県津島市: 田邊先生	市保健行政
	14	金	あいち子供セミナー: 長嶋先生	あいち子供セミナー: 山崎先生	市保健行政、県保健所
	15	土	移動		
	16	日			
	17	月		14-17 農村生活改善: 水野先生	女性地位向上セミナー
	18	火	国立保健医療科学院: 岩永先生	国立保健医療科学院: 土井先生	統計
	19	水	埼玉県日赤輸血セミナー	埼玉県日赤輸血セミナー	
	20	木	Action Plan 作成: 秋山先生		
	21	金	医療セミナー発表会	TIC	翌日アムバさん帰国
	22	土	移動(東京 印旛)	13-17 印旛村: 島内先生	「健康文化都市」公開講座
	23	日			
	24	月	ビデオ愛育: 中馬さん		
	25	火	ビデオ沖縄: 西田先生		
	26	水		14-16 愛育会: 小山先生	PHC と住民参加
	27	木		フォーカグループ・ディスカ: 高橋先生	FGD の実際
	28	金	朝移動 山梨県: 長坂先生(愛育)	山梨県: 長坂先生(愛育) 移動	愛育フィールド発表会
	1	土			
	2	日			
	3	月	移動(東京 沖縄)		佐藤寛?(アジ研)添乗
	4	火	沖縄看護協会: 金城先生	沖縄看護協会: 金城先生	保健師、生活改良普及員
	5	水	生活改善運動(池野氏)	生活改良普及員(知花幸子さん)	生活改善、母子保健推進員
	6	木	沖縄看護協会: 金城先生	看護協会 移動(沖縄 東京)	保健運営協議会、保健師
	7	金	移動(東京 新潟、新潟県板倉町)	新潟県板倉町: 岩永先生(保医科)	地域作り型保健活動実際
	8	土	新潟県板倉町: 岩永先生(保医科)	新潟県板倉町: 岩永先生(保医科)	地域作り型保健活動実際
	9	日			
	10	月	Action Plan 作成: 明石	順天堂: 堀口先生	PPM(ブリード・ブロード・フレッド)
	11	火	医療セミナー加管理: 珍田さん	田村医院加管理: 田村先生	加管理
	12	水	Action Plan 作成	Action Plan 作成	
	13	木	いわき市: 安部様	いわき市: 安部様	PPMフィールド、健康いわき 21
	14	金	医療セミナー発表会	評価会	送別会
	15	土	帰国		

共同研究会「農村開発における地域性 農業普及・地方行政・生活文化」
～テーマ：村のリーダーたちと改良普及事業～

場 所：京都大学東南アジア研究センター 共同塔 3階研究室

京都市左京区吉田下阿達町 46

日 時：平成 15 年 3 月 17 日（月）14 時～18 時

面会者：松田武子（京都府亀岡市農業改良普及センター次長）

西潟範子（日本農業新聞記者，元新潟西蒲原農業改良普及センター次長）

安藤和雄（東南アジア研究センター）

同席者：松田，西潟，小國，黄瀬，太田，宗像，ケシャ，山下，伊藤，明石，安達，谷田，西崎，岩井，島上，西川，村山，水野，安野，佐藤

議事録担当：小笠原真紀子

1. 報告 1「亀岡市の農家のリーダーたちと改良普及事業」松田武子

はじめに

京都市から約 20km の近郊都市。京都市，大阪府に囲まれ，多くの消費者を抱えている。亀岡の人口は 9 万 5000 人，そのうち農業人口は 2 万人。消費者は 7 万 5000 人。一定の農産物を作れば買ってくれるだろうという恵まれた立地条件である。

京都府全体では農業の粗生産額 780 億円。亀岡市は 60 億の粗生産額で京都府内では第 2 位の農業地域。耕地面積は 3000ha で府内 1 位。コメ，コムギ，畜産も 1 位。野菜は小松菜の産地で，カモナスなどの京野菜ブランドなどがあり，第 3 位。

リーダー論に入る前に，リーダーと議論をするのに亀岡としては何を狙っているかについて説明したい。今までは単に，市場出荷して中央市場を通して小松菜，白菜，大根などというものを勧めている。しかし，最近は安心・安全。本来なら農薬を使わないでやるのがいい。効率的な農業ということで，農薬たっぷりで見え目がきれいな市場出荷用が見直されてきた。やはり消費者にとって大事なのは安心・安全な農業ということで，つまり環境にやさしい農業についてパワーポイントで説明して行く。

山形県では，家庭内の生ゴミを堆肥化したり，畜産農家と連携しながら土づくりを中心にしたりする安心・安全な農家を，レインボープラン認証農家として安心・安全な農産物の加工食品をやっていた。熊本県も以前は水俣病があり，イメージを上げるために安心・安全な農業を県がテーマにしていた。高知県は地産・地消ということで，学校給食センターで自分の地域の野菜やコメを使っている。こういったものを亀岡市全体で勉強してきた。亀岡市は何ができるか，安心・安全とは何なのか，環境に優しいのは何なのかを考え，一つは，モノの移動は最小限にしようではないか。そこで取れたものを活かそうではないかということで対面販売をしよう。どこの畑で何がとれているかを把握し，移動を最小限にして行く。それから次は，いらぬものは使わない。つまり農薬などを使わずに，できるだけ自然にやろう。それから，消費者にきちんと農業者が伝えて行く，という三つに絞った。

有機農産物認証のヒサさんという方は，筋金入りの安心・安全なリーダーで，有機野菜という言葉を引きちり使って内容をアピールしている。旭町にはヒライクニハルさんというエコファーマーがいる。持続的農業の促進に関する法律があり，持続的な農業をするための生産方式の導入に関する計画

を認定された農家をエコファーマーと呼んでいる。この地域の堆肥センターをうまく活用しながら、生ゴミ、糞尿を資源だとして、リサイクルしていこうという考えを持っている。ナガタさんという方は、地産・地消を広めてくれた方で、2、3億円の直売朝市の立役者。

亀岡土づくりセンターでは、もっといい堆肥を作ろうということが課題にあがっている。学校給食センターがあって、小学校だけで7000食ある。農業者が作ったものを学校給食センターの食材に使おうと、連携してやっている。一方では、小学生は給食をよく残すので、その残渣を大地に活用して堆肥に使えないだろうかという構想を持ち、リサイクル、循環型を考えていきたいと思っている。

このような事例を基に、モノの移動を少なくするというで、地域内システムを考えた。いらないものを使わないということで農薬の使用を控え、良い土づくりを推進しようと考えた。消費者への情報開示ということで、環境に優しいというエコファーマーが46名になったので、環境に優しい農家間のネットワークを結ぼうと考えた。

循環システムを考えたが、JAのような流通センターを作り、そこに行けば地域のものを買える大型の農業者マーケットを真ん中に置いた。できたものを単に消費者が使うのではなく、消費者や、給食センターや料理屋からのいろいろなゴミを残渣としてうまく活用できて、堆肥センターでいい土ができて、農家に使ってもらったらなという構想がある。こういう構想をホームページで公開し、消費者に知らせて行く。そのために、生産者の履歴の表示として、いつ種を播いたか、どんな薬を使ったかを知らせたりする。また、ネット注文もある。これは政策提案。

今のイメージで環境に優しい農業を目指して、リーダーと議論して行こうということで取り組んでいる。

今日発表の事例は二つあって、旭町の地域づくりの事例と、地産・地消活動と女性リーダーの取り組みがある。

旭町の地域づくり

旭町は、亀岡の最北端に位置していて、専業農家が小松菜やトマトなどの野菜を作って頑張っている地域である。旭町は166戸の農家数で四つの集落から成り立っている。近隣の人たちが旭町の土地を買って農業をしている入り作農家が約90戸ある。全体の1/6の面積を占めていて、地域づくりをしようとしても、亀岡市の人ではないので調整が難しい。基盤整備は7、80%くらいしか進んでいない。地域農業づくり事業が平成12年度から始まった。我々の関係機関は、そういう事業を無理やり仕込んでやるところだったが、平井健二さんという方がキーマンとなり、以前から地域農業を考えて行きたいという要請があって、平成12年度から始まったものであり、リーダー主体の地域かなと思う。地域農業づくり協議会が同年にできた。

旭は何が売りなのか、何をみんなに特徴づけるのかということを考え、直売部会と学校給食部会を立ち上げた。直売部会は毎日販売していて、多い時には60品目も売っている。朝8時には地元の人や近隣の町の人も来て盛況。平成12年度には1000万くらいだった売上げが、平成14年度には1500万円以上も売上げ、約1.5倍になっていて非常に盛況。

一方、直売部会の人を中心となって学校給食部会を立ち上げて、亀岡市学校給食センターに出している。おコメは京都府で扱っているため亀岡のコメは使われないが、野菜だけはこの部会が受け持つという気持ちを持って少しずつ増やしている。センターは、7000食を作らなければならなくて、3500食ずつのメニューにするが、それでも大変で、大きいジャガイモやダイコンの中に鬆(す)が入って

いたり、虫が入っていたりする。そうすると子どもが驚き、そうすれば保護者からの文句がでてきて問題になる。そんな中、日々給食部会は頑張っている。小松菜 100%、ハクサイ 70%、タマネギが 30%、キャベツが 20%、その他諸々の野菜を入れ、250 万以上売り上げることができた。学校給食センターに出す野菜は安いのですが、250 万円まで稼ぐことができた。

一方、それだけでは地域づくりは面白くないということで、平井さんといろいろ協議している。たまたま環境に優しいエコファーマーが 1 戸でき、平井さんに相談し、こういう農家を目指したらどうかと聞いた。今までいろいろなことを相談してきたが、平井さんには「これはいいことだ」とみんなに呼びかけて頂き、16 戸がめでたく認定された。エコファーマーという名前は、エコ=環境ということとでなんとなく分かってもらえて、保護者としてもいいなと思われて、非常に人気はある。ただ、環境に優しい=大変であり、農薬はあまり使えない。無農薬ではないが、1/3 に減らして行こうということになっている。いざ虫が入っていたり、黒かったりすると保護者から怒られ、PTA、生産者、栄養士さんと何回か研究会を持っている。栄養士は、野菜はスーパーにいつでもあるので、旬を考えずに献立を好き勝手に考えてしまう。リーダーはそういう調整を頼まれ、いつ何ができるかという暦を作ったり、気象条件のせいできない場合があるということも伝えたりしている。また、栄養士さんにも圃場を見に行つてどのようにして野菜ができるかを知ってもらいながら勉強会をやって、生産者とうまくやっている。

学校給食センターの所長からは、食品の残渣が 1 日 30t 出るといふ、かなりの多さに悩んでいるので、残渣を使ってもらえるシステムが欲しいと頼まれた。旭には堆肥センターがあるので、そこと連携しようと話し合いを持つまで進んだ。残渣をそこにいれるほどにまでは行ってないけれども、将来は乾燥処理させて、1/10 まで水分を落とすことができる。堆肥センターの堆肥を使おうとエコファーマーの呼びかけができ、地元産堆肥を作つてやろうといふところまでできた。これは、リーダーと普及員がともに価値観を一緒にしながら進めてこられたからかなと思つている。

一方、平成 14 年から受託部会があるが、圃場整備を進めていたら、30a くらいの区画ができるようになった。それだけ放つておいて自分のことは自分でやつたらいいといふ 50 代、60 代がしっかりしている地域なのですが、入り作農家も含めて全部の人にアンケートをとつたらどうかとやってみたが、将来を見据えると私らは 10 年、20 年たつたらやつて行けない。そう考えたら、土地を真ん中に預けて、オペレーターがうまく入つて農作業を受託できるようなシステムを考えて行かなければならないと、役員たちは地域のリーダーでもあるので、そこら辺まで見据えて全項に答え、名前もきっちり書いて自分はどういう思ふかを述べていた。また、経営者だけじゃなく、女性やら後継者にも記入してもらおうじゃないかと配布した。配布したものを普及センターは、全部、一人一人どういふ機械を持っているのか、受託後規模拡大を希望しているのか、後継者はいるのかなどを打ち込み、一つの情報のカードにして、どこの農家が何を思っているかをすぐに分かるようにパソコンで情報整理をした。

その中でキーマンとなる平井健二さんが中心となっているが、それ以外にも取り巻く人たちの中で光っている人や何か考へている人を見つけ、リーダーとリーダーを結び付けて行くのが我々の仕事だと思つている。そうやつて結び付けて行きながら進めた結果、なんとか 14 年に一部受託が始まった。まだまだ秋の刈り取りは一部であり、少ないけれども将来オペレーターとしてやつてやろうじゃないかといふことで、何回も講座に行かなければならない農業機械士といふのがあつた。その農業機械士としてのオペレーター候補 20 人が誕生し、いつでもできるという体制になった。平成 15 年度からは全部受託、刈り取りまでやれるように目指している。コメに使う労働力を他に活かしながら、直売部

会などに力を入れ、野菜づくりにも目を向け、もっと旭町の顔として全体に呼びかけて、誰もが直売に持ってこられて、誰もが販売できるシステムにしようとしている。そうなってきたら、旭をもっと活気あるようにさせるためにどうすればよいかということ。

役員たちの話し合った今後の方向を考えてみた。地域を守る仕組みができつつあるので営農して行こうとか、守る部分だけでなく、攻める部分を持つとか、地域農業だけでなく、都市農村工業も進めて行こう、旭を売り込もうと出てきた。文化財とか、美しい景観とか、美しい水を紹介しない手は無いとして、地域づくり研究会をやる予定でみんな燃えている。次は、旭ブランドを作ろうとしている。価格が倍でも売れるコメを作ろうとしている。また、一方では地域で加工しようとしている。人気あるのは加工であり、餅を作るつもりである。加工所は無いけれども、保健所に届出を出し、勉強会を進めている。また、ITを活用して行こう、直売をやって行こうとかいうこともあり、こういうビジョンをみんなが持ってこられるようになった。これは、たった一人のリーダーが勝手にやるのではなく、ここで大事なのは、協議会のリーダー、工事部会のリーダー、自治会のリーダー、営農組合のリーダーなどの役割的なリーダープラス、この人なら環境に優しい農業を凄くやっているエコファーマーのリーダー、直売を中心に進めている直売のリーダー、学校給食を中心に進めている学校給食のリーダー、旭の顔となるという、なくてはならない女性のリーダーをうまくピックアップしながらうまくつないでいくのが重要かなと思っている。それに失敗してしまえば、協議会長とかとはりあってしまったり、連絡がうまく取れなかったり、残念ながら村のことなので自分が自分がとか、もしかしたら遠慮しておくゆかしくしているのかもしれないが、まず連絡が行かなくなってしまうことがある。そこら辺をうまく見て、こちらも立て、あちらも立てながら行かないといけないということを痛感した。旭町の地域づくりの例はこれで終わりたい。

女性リーダーの取り組み

次に女性リーダーの取り組みについてだが、これはもともとの私の前からの専門である。みなさんのお手元に、「地位向上を目指した農村女性とともに」というレポートがあるが、亀岡のことが一部書いてある。4ページ目に概略が書いてある。

昭和54年に新任普及員として亀岡にきた。その時のテーマは女性の悲しみ。意見が言いえない、家の中での嫁姑問題、家の中で自分を主張することができない、地域に発言できない、活動しようにもお金もない、財布は夫か母親が握っている、騙されて結婚した、農業しなくていいといわれてきたのにさせられている、などという話をずっと聞き、何て農村女性は不幸なのだろうと思っていた。その時は、就職難の時期で困っていて、大学出てから就職するのに苦労したけれども、農村女性に比べたら全然たいしたことないと思った。そして新任普及員の時に、自分のライフワークはこれなのだということがピンときて、女性の活動をサポートして行けるというこんなありがたい仕事はないと思った。

23年前に亀岡に行き、その後、3年前に再び亀岡に行かせて頂いたが、「ころっと」変わっていた。中には泣いていて話を聞かなければいけない人もいたけれど、直売部会で頑張って毎週土曜日の朝市に行き、どんどんお客さんと呼んできてやっている人もいたり、女性の農業委員として登用されて、男性30人中2人しかいないのに、男性より発言権を持っていたり、もっとちゃんとやって行こう、毎回出席しないでどうするのなどという。男性は休む人もけっこういて、会議そのものをいい加減に見えるように見えるそう。ところが女性は真面目なので、一生懸命頑張って発言しようと勉強している。男の料理講座や介護教室などでも、今までやってきたことを男性たちに発信して講師として活

動して教えてあげている。泣いていた女性たちが、どんどん自分で儲けて、自分の口座に自分の名義で貯金して、欲しいのは買ってあげよう、海外にだって行こう、勉強しに国内の視察にも行こうなど、普及センターが何もいわなくても、私たちあそこに行ってきたよ、ここよかったよ、という女性の声が聞こえてくるようになった。

ただし、そこでよかったなあで終わってしまえばそれだけだが、そういう時代が変わってきているのは確かだけれども、まだまだ十分ではない。すべての人がそうではない。やはり、何年も前から我々の先輩たちが女性たちと関わって、もっと家の中で発言しよう、そのために農業技術をうんとやって実力をつけようではないか、家計簿をつけてどんなに家計運営ができていいのか、あるいはコメの増収はこうすればできるなど、夫に主張できるような実力をつけようなどと、そういったことをしっかりと学習に組み入れて、その結果、そういう人たちが増えて行って、現在に至っているのではないかと思っている。残念ながら全部の女性ではないので、リーダー的な女性たちが今残って、後継者を作り、元気なリーダー的な女性が活躍しているのではないかと思っている。

このレポートに書いてあるAさんは、本当は一人ではなく、涙を飲んで騙されて結婚した人や、教師になりたかったのにあきらめて農業やったとか、看護婦として自立していたのにこちらにきたという思いを持った人たちで、でもこれだけ頑張っているのだという人たちの話を一人のAさんという事例にした。3ページ目。その一人を追いながら、関わってきた生活改善普及を、先輩たちがやってきたであろう、また、聞いたことや教えて頂いたものやを参考にしながら、生活改善普及活動をまとめたものである。

おわりに

最後に「おわりに」ということを書いているが、やはり、パワフルな女性経営者に共通するものが四つあって、それは、例えばビニールハウスが突風や雪などでつぶれた時に、もう辞めようと思うのではなく、やってやろうと立ち上がる明るくて前向きな姿勢のある人、これが大事だなと考えた。また、家族関係が良好な人。やっぱり姑さんに虐め抜かれて、恨みごとばかりいっていたのではいつまでもだたてもだめ。また、騙されて結婚したといっているのもだめ。縁があって結婚できたのだから、この方と会ってよかったなと思える人は、家族関係が良好だなと思う。外に活動したり、海外に行ったり、勉強したり、夫や家族が出かけといでと励ましてくれるようでなくてはだめ。何ととっても、夢や目標を持ち続けることかなと思う。努力を惜しまないで、しっかり勉強して行く。そして、それをたった一人の目標ではなく、地域や仲間と一緒にやろうという目標を持つ人。そして、最後に未来につなぐということで、後継者が仕事に行っても、お母さんが倒れたら家に帰ってきて農業するよというように、後継者を育てるという未来につなぐ経営をしているというのが、大切である。

私ももうすぐ50歳になるが、これだけ長く生きてこられたのは、家族であり、職場のみなさんであり、こうやって出会いがあったみなさんのお陰だと思っています。そう思った時に、毎日が楽しくていいことばかりというわけではないが、女性経営者たち、地域づくりのリーダーたちとお会いしたお陰で、明るく前向きな姿勢、家族関係が良好、夢や目標を持ち続けること、未来につなぐために後継者を育てること、この四つは決して農家だけのことに限らず、自分の生き方にも関係するのかなと思っている。こういう四つの生き方を一つの目標にしながらやって行きたいと思っている。

質疑応答（以下敬称略）

佐藤 - 生改さんの話を聞くといつも元気が出るが、コメントや質問はどうか？

島上 - 私も常に生改さんの話を聞くと前向きになれるような気になっている。亀岡市の中で、旭町が特に伸びているのか、他の地域はどうなっているのかということが1点と、リーダーをつなげて行くのは誰で、リーダーのリーダーがいるのかどうかということが2点目、最後に次の世代のリーダーは伸びるのかということをお聞きしたい。

松田 - まず旭町のことだが、旭だけが特にいいというのはなくて、むしろ旭はよくないから地域づくりをしたということになる。今では、地域の平井さんというリーダーが光ってきて、亀岡市でも地域づくりということで表彰があり、環境に優しい農業の推進ということでエコファーマーは旭からということでモデルになっている。立地条件は悪く、トータルでは旭がとてもしっかりとはいえない。それぞれいいところがある。旭が頑張っているのを見習おうとしていることはある。

普及センターはなかなか難しい仕事で、普及活動ということでできたが、私も普及活動をやっているというよりは、どちらかといえば地域づくりの男性リーダーの方が多く、女性リーダーを見つけるということはあまり前に出られない。一方で普及事業の風当たりは強く、構造改革で農業の補助金も改革され、普及員の仕事は経済的に見たらいらぬ。経済効果はない、投資はどうだ、直売やっても女性小売者だけなんてどうなのだといわれ、何とかして60億に対して3億、6億までできましたといっている、残念ながらそういう状況です。しかし、与えられたものだけが仕事とは思っておらず、地域のために、本当の農業振興は何かと考えたら、何が本当に消費者とうまく農業振興やって行けるのかと考えたら、必要だろうと思ひ、じゃあ関係機関と議論して必要性を認識することが必要だ。そのためには、いろいろな事例調査をまとめ、考えをしっかりと持った上で議論し、関係機関からの応援者を得る。こういうことをやるのは構造改革であるといえるようにしたい。リーダーと話していても仕事でやっているのか、本気でやっているのか、その中の熱意や迫力が違うし、数字も違うし、こうすれば地域が盛り上がるといえる。

エコファーマーの話にしても、やってみたら新聞にも報道されていいといわれ、亀岡市内でも増えてきた。こうなってきたらいいことが間違いでなかったのだな、よかったなと、いろいろ提案していたら、話を聴いてもらえるようになる。一人のリーダー、二人のリーダーとだんだん増えて行く。これも仕事の一つだと思っている。

旭では50代が一番頑張っている。この人たちはビジョンを持っている。JAのOB会によると30代の方がリストラされて、新規農業者が増えつつある。夢が大きすぎて実現するのかなと思うが、直売でも思っていたよりはお金が稼げるのだなと感じているようだ。女性リーダーも少ないけれどもいる。生改さんで京大出身の人がいます。子育て中で休んでいるけれどもいる。

村山 - 20年間の変化はあったか。変化の主な原因として、何が意識などを変えたのかと思われるか？

松田 - 「普及だ」といいたいところだが難しい。でも実際、子どもを育てて仕事して行こうとするのは、毎晩泣くほど辛かった。こういう仕事だったからやってよかったけれど。この前、毒舌のおばちゃんに3人産んだな、どんなに迷惑だったかといわれた。でも今も少子高齢化の社会でめっちゃめっちゃ貢献している。こういう見方が最近できるようになったのかなと思っている。そういう時代が変わってきているのかなと思う。

ケシャ - 地域の平井さんというリーダーが光っているように思える。強力なリーダーの存在の意味合いと、そういうリーダーをどうやって発見するのか。

給食のところで野菜を出せるようになるというのは、教育委員会とのぶつかり合いがあると思うが、その壁をどうしたのか、どのように口説いたのか教えて頂きたい。

松田 - 前任が見つめてきてくれた。平井さんが自主的に出てきてくれた。見つけたより、見つかった。恵まれていた。あとは巡回したり、圃場へ行ったり、何かをしながら見つけてきた。

リーダーは3人いたらいい。地域を変えるには3人必要。どんな組織論を見ても3人必要。3人がそうだといたらついてくる。一つの組織を動かすことができる可能性がある。教育委員会はもともと、20年前であれば、泣いて終わっていたけれども、今では教育委員会も変わってきて、栄養士さんを口説き、栄養士さんから所長さんに伝えたりした。

西川 - リーダーは誰にとってのリーダーなのか。

松田 - 地域づくりというか、農業の面での。

西川 - 周囲の人にとっては、どのような人がリーダーになるのか。

松田 - 地域で実践的に農業をしている人は説得力がある。自分のことしか考えてない人にはついてこない。自らの経営がしっかりしている。その上で、こういう地域を目指そうとしているビジョンもしっかり持っている人かなと思っている。

西川 - 農業を展開する上でのリーダーということだろうか。

松田 - そうである。農業振興のための地域づくり、その視点である。

佐藤 - 今の提案は、最後のディスカッションでまたできるかと思う。

2. 報告2「生活改善活動で進めたリーダーの確保・育成について」西潟範子

略歴紹介

普及員だったから、京都も新潟も地産・地消の話や学校給食の話が出て、目指すものは相通ずるところもあって重複するところも出てくるかもしれないが、今日はリーダーの確保・育成というところでお話したいと思う。

生まれ育ったところが新潟県の越後平野の真ん中の水田単作地帯の農家に生まれた。36戸の集落の中で、村の人間模様を子どもなりに見てきた。

初めての就職が茨城県日立市の教育委員会の婦人教育係だった。その時に、婦人団体協議会の会長が県の会長で、事務局をしながらその会長の人となりを見てきて凄い関心を持ってきた。学生時代に山梨県で集落の意識構造の調査をして、農村集落の構造というのは面白いなと思い、じゃあ私が普及員になって、どういう動きをすとうまい具合に入り込んで人の育成ができるのかなというのが、小さい時からの夢、願いというか、人が人らしく生きる集落構造というか、生き方というか、そういうものに興味を持っていた。今日はたまたまリーダー育成ということでお話する。

私の毎日の仕事は、普及員を退職してから、59~65歳の6年間、3月でちょうど6年間だが、日本農業新聞の通信部の記者をやった。今は地産・地消、学校給食、女性リーダー、村づくり、地域づくりとか、経営とかいろいろと立派な農家なり、集落なり取材しながら、皆さんのリーダーの仕事を新聞紙上に載せて賞賛をしてきた。私どものできない実践力を、私は何もできないから、せめて文字で書いて売りこもうと、これがまた私の人生観の一つであり、新聞を利用させてもらった。

今日はまた皆さんに、そういう農村の持つ、人を育成する力みたいなものを分かって頂ければ嬉しいなということである。毎日の新聞取材に追われて変な原稿を持ってきたので、ちょっと目を通して頂ければ幸いである。

はじめに

それではまず、「はじめに」というところにリーダーの確保はなぜ必要かということがある。どこの国にもリーダーがいる。リーダーの良し悪しは誰が評価するのか。自分自身の評価では無いと思うが、やはり周りがリーダーを活用したり、尊敬したり、頼ったり、ビジョンを見出したり、そういう中でリーダーは育成されて行くと思う。リーダー一人が努力してリーダーになるわけではない。

そこで、なぜ必要なのかということだが、私は今まで30何年も普及員をして、先ほど松田さんもおっしゃっていたが、5年、7年単位ぐらいで生改はいらないと、ちっとも儲からない仕事をしている、何のために生改が必要なのかと散々いわれながらも、私どもが育てているリーダーが村を牛耳っているのではないかというような、心の中では闘志を燃やして普及をやってきた。そして、今の若い人たちに「私たちの資金を作っているのではないか²⁾」といわれるが、今育てているリーダーはかつて私たちが育成したリーダーだよと、厚かましいおばさんを演じてきたが、いつもそんなことを気軽にいって笑ってきた。

リーダーがなぜ必要かという、やはりその地域に、その家庭に、そのグループに芽を出させて、根をはらせて、幹を太くし、枝葉を広げる。そして、お隣のグループまで及ぼす。これがリーダーの必要な理由である。一人一人が真面目に生きていけばいいじゃないかというのでは、社会の発展にはつながらない。生活改善というものは、村長さんと同じなのですよと、よく村長さんにいうが、どこに何をやっているかは見えないかもしれないけれど、大きく住民の教育向上とか、環境改善とか、もっと広い視点でみんなやっている。では、育成すべきリーダーというのは何かと考えてきた時に、今、佐藤さんがやっていらっしゃる開発学、その部分が育成すべきものだと思っている。やはり開発学というのは地域の課題、自分の課題、集団の課題、将来の課題、こういう課題を見つめて行った時に、そこに関わるリーダーがいる、必要である。非常に短絡的に結びつけて申し訳ないのですが、後で反論を頂きたいと思います。

ここに様々なリーダー像、時代が求めるリーダー像とあるが、行政の長という、権力のリーダーもまた非常に大事なリーダーである。今までの過去の仕事の中では、大事に使わせてもらった。でも、それを一辺倒にすると非常に問題が多くなる。権力のリーダーを支えている地域住民の本音というのはどこにあるのか、その部分を役場にいつてこられるようなリーダー、それは市役所の課長にお前さんは圧力団体を敵に回したなといわれたが、自分たちの住民から声があがるのが市町村の職員にも嬉しいことなのじゃないかなと思う。様々なリーダーをうまく活用することが生活改良普及員なのではないかと思う。でも、一番大事なのは、農家主婦の一人一人の、その100人の1歩が大切だと思う。100人一人一人がリーダーになることの値打ち、活力がある。それを率いるリーダー、だから農家主婦の方から頑張ってもらってリーダーになってもらう。しかし、私の持論は、「リーダーの人は、またメンバーになるのよ。メンバーの人はリーダーになるよ。誰でもリーダーになれるのよ。誰でもリーダーであり、誰でもメンバーである。」これが私の主張であります。これをやるためには、自分の生活も正さないといけないし、応援団も必要だし、スクラムも非常に大切だし、そのために勉強もするわけである。

²⁾年金のことと思われる(編集部注)

リーダーの育成目標

資料にリーダーの育成目標とあるが、個人・集団・地域とある。これは、固有の生き方がそれぞれの信頼を受けて、いつかはリーダーになる素質を磨くわけで、集団の場合は、集団を率いる力を持っていて、周りを育てる力があるというようなリーダー。地域では、地域を動かす力、共通の目標をみんなで理解させながら、また、スクラム組ませながら推進するというようなリーダーという、この3種類がある。地域だけを育成しているわけではなく、個人だけでも集団だけでもない。これを一体的に組み合わせながらリーダーというのは、単なるリーダーを育成しているのではなくて、機関車のような走るリーダーにゆっくり引っ張ってもらって、車輪がはずれないように支えてやるような応援リーダーというか、いろいろなタイプのリーダーをくっつけながら動かす、というシステムになっている。個人・集団・地域というように有機的に連動するように動かしている。

それから、その次が生活周期別の育成というのがある。私はこれが地球の中で一番大切だと思っている。

(黒板に示しながら)20~25歳の時期に4Hクラブ活動とか青年講座とかをやる。この多感なこの時期にいろいろな支援をすると、この人たちがここで一段と力を発揮してくれる。だから、ここは家庭の子どもの基礎づけの時期である。ここが社会との接点を作る時期。ここが新婚期、子育て期。ここが次の世代の担い手を育成しようとする。で、ここの高齢期で集落でも個人でも、自分が今までやってきたことを次の世代に渡す。リーダーでいえば、次のリーダーをここで育成する。育成して走っている時にリーダーがいないと、育成されていないと、今日がそういう状況のところにあると思う。青年講座とか、この辺ですと豊かな村づくり講座ですとか、生活教室とか、こういう一つのライフステージ別の支援でリーダーを育成するということ。そんな指導をしてきた。もうあなたは次の担い手を育成しないと間に合わないよね、と声をかけたりした。ずっと長々と会長なんかしている人はドキッとしていた。やはりずっと会長さんでは困る。下が育たないから。リーダーは一杯育って一杯いる。そういう社会、集団、地域というのが発展して行く。

先ほど松田さんは3人といわれたが、新潟県のように停滞気味のというか保守的なところでは、私は5人必要だという。グループだと3人で足りるが、集落はやはり5人。目的集団だが、例えばきちっと栄養改善しよう、子育てを考えようとか、学校給食に野菜を出そうとか、いろいろな目的のためにグループができる。そのできたグループに対して、結局、何を目的にどのような方向でやって行くのか、課題の掘り起こしというのが、非常に重要になって行く。その掘り起こしというのに時間をかけると、その後はとんとん拍子で行くが、安易ななれ合いで始めると、途中でゴタゴタしてしまって、何をすればいいのかわかってしまう。ある程度、最初の目的で学校給食に低農薬の野菜を出そうとなったら、山形県の小学校に行って勉強して、順を追ってその目的達成のために課題を進めて行くわけである。そこでリーダーが育って行く。

それから、私の活動内容などを読んで頂ければわかると思うが、私自身もリーダーのみなさん、メンバーのみなさんに育てられ、出会いがあって、そういう中でリーダーをどう引っ張って行ったらいいか、どう育成して行ったらいいかと、私自身が育てられた。例えば、ほんの単純な料理教室をする。5人ぐらいずつの5班なりできると、その人たちが、献立を見てこういうふうに準備するのよという人や、トントントンとだまって献立を見ながら野菜をきざんでいる人と、いろいろなタイプの人がいる。その人たちをずっと見ていると、この人はきっとここでリーダーになれるなとわかる。人が仕事しているのを見ていると。

それからもう一つは、子どもは調査や何かで農村に入ったり、集落の話し合いに参加したりすると、やはり光る人がいる。その人を個別訪問する。そうすると、あ、この人はリーダーになれそうだなと、すぐではないがわかる。本人は全然自覚していないのですが。あらゆるリーダー育成には、あらゆる場を活かして使ってきた。

みなさんの手元に手書きで望ましいリーダー探しという資料があると思う。リーダーに必要な能力というのは、まず一つが価値志向性。価値の志向性がどの程度、例えば権力のような村長さんの価値の志向性と、本当に足元から自分の暮らしなり、農業なり、そういう地域なりを発展させて行くような価値を見出している人、そういう目標、願いがあってやる気や情熱、知性がある。これがまず一つ。

それから対人関係、対話ができること、自分自身を知って認知できる人。あの人はちょっと具合が悪そうだなとか、何か悩んでいるなという、メンバーの感受性を感じ取れる人、集団に対する洞察力のようなもの。それから活動の展開のところの問題解決能力ですが、情報処理とか分析、例えばシステムなり、自分たちの目標を運用して行くための運用能力、決断力、そういうのがあればリーダーは十分誰でもなれるわけである。これは、みんな最初からついているわけではない。一つあっても、あ、この人はなれるのではないかと私は思う。それは育って行くから。私はもう60歳だから育つ心配はないよねという、そんな心配はしなくていい。生きている限り育って行く。ただ、固定観念にずっと縛られている人は、人の板ばさみになって揺さぶられたり、うまく適応できなかつたりして、リーダーには向かない。だから、私はリーダーとは発掘するものだ、一つでもいいところがあったら、発掘して行くと適応性のあるいいリーダーが順々に育って行く。

2ページ目のところに私が現地で出会ったリーダーのことが書いてあるが、私は昭和36年に、新潟県の陸の孤島といわれる松代町というところに赴任した。6ヵ月間雪の中で、男の方は関西、関東などの新幹線の工事などに出ておられた。その時にやはり一番感じたのは、先ほども松田さんがおっしゃったように、女性の地位が低い、貧乏だ、封建的だ、電話がない、水道がない、外部者に対しては閉鎖的だ、そういういろいろな面で大変な時代だった。学歴でいうと小学校卒ということで、みんな勉強したくてうずうずしていた。でもなかなか勉強できない。中学が終わると集団列車に乗って、「次三男対策」といって、次三男は農業では食えないから、東京に出稼ぎに行く。そんな時代に私は農村に入って、リーダーの掘り起こしをやっていたのですが、じゃあどういふ人をリーダーにしたらこの村が動くかなと思っていた。

松田さんもいったように、ちゃんと農業やっている人、作物を作るのも上手で、いい嫁やっていて、ニコニコしていて、そういう人はリーダーにしてもみんな文句をいわないが、要するに、ある程度全体の賛成の得られるような人をまず確保しておき、そこに応援団と婿取り、金持ちをバックにうまく配置しながら、集落を指導してきた。親戚関係とかいろいろあるのですが、そういう個性豊かな人というか、リーダーは組み合わせることによって、1の力が10の力になる。例えば、東南アジアのどこかの国に行っても同じだと思う。村長さんから、組合長さんから、末端の区長さんから、名もない若妻、農村女性、おばあちゃんから、その辺の組み合わせをうまくすると、村は蘇るというか、元気が出る。そうすると指導者という、指導者といっても私は月給をもらっているから、あなた方は月給をもらわないで村のためにやっているのだから、もっと胸をはって発言していいのだよと、その人たちを励ますことによって、その人たちは嬉々として頑張った。その励ます材料が、味噌づくりであったり、保存食であったり、マヨネーズ作りであったり、新しいサラダのような料理であったり、自分たちでドジョウを飼ったり、会議所を作ったり、栄養補給するためにヤギを飼ったりと、今の開発途上

国とほとんど同じ形の、そういう中から出発して、そして5人集まれば、その地域をどうしよう、こうしようというところに周りが寄ってくる。そうすれば、集落が一丸となって動けるといふ、みんなの到達目標が立てられる。

最後に一つだけ。昭和59年に、新潟県の農家のお母さん方に選んでもらった「好かれるリーダーの条件、嫌われる条件」というのがある。人の話をよく聞く人、明るくて活発な人、まとめ上手、知識のある人、誰にも公平な人、思いやりのある人、実行力のある人、先にたって何でも嫌がらずにやる人、気兼ねなく話し合える人、人の気持ちを大切に人、親切な人、気持ちが平らな人。これを農家のお母さんがあげて下さった。この反対が嫌われる。リーダーは育つものだ、育成するものだということ。みなさんからそれを組み合わせ、実践課題を含まないとリーダーは育たない。口だけではリーダーは育たない。何か一緒に実践してみる。その実践の中から光る人がいるはず。それをいかに見つけられるかである。本当に根無し草の普及員もたくさんいる。あんなに優秀で、お話が上手なのに、一つも芽がない、どうしたことだろう。そういうことで、できるだけ私は組織づくりができるようにリーダーを育成してきたつもりだ。だから何か所かに私は、生活改善グループ協議会を結成したりとか、自分たちで料理をして本を作ったりとか、そういう自主活動を援助してきて、今でも仲間、友達というか、農家のお母さん方と親しい縁を結んでいるお陰で、農業新聞の取材も非常にスムーズに行わせて頂いている。

やはりリーダーを育てるには、自分を育てなければならない。自分も育つということが非常に大事なのではないかとこのところで終わらせて頂きたい。

質疑応答（敬称略）

佐藤 - 西潟さんは、新潟県の中でも「組織づくりの西潟」と有名だ。先ほどの松田さんのお話と、西潟さんのお話、西潟さんはだいぶ開発途上国についても触れてくれた。我々が、この研究会をやっている一つの目的として、開発の問題と日本の生活改良普及の接点がないかと模索しているわけだが、では、今の西潟さんのご報告に対して、援助の現場からどんなことが見えるか、小國さんから少しコメントをお願いしたい。

小國 - 最後にいわれた根無し草の普及員がいっぱいいた、これが一番大きな問題ではないかと思う。根無し草の普及員は、仕事をしていないわけでもなく、失敗しているわけでもない。普及員がいる間はうまく行っている。いかにも援助で成功した事例が援助している間はうまく行っているけど、帰ったら続いていない。なぜかという、個人をエンパワーしてしまって、結局継続的にやって行くための根をつけていない。西潟さんが先ほどいわれたように、目をつけて、芽を出させて、幹を伸ばし、枝をはってということが普及員の仕事だということ。

それで、もう一つのコメントとして、まずきちんと農業も嫁もやっている人、誰でも認められる人をつれてくる、それはどういうことかという、社会的に、この社会の中でお父さんでも姑さんに認められる人をとりあえず置く。でも、その人だけでは変わらない。変わらないから、そういう人を確保しておいて、そこに外からきたお嫁さんや大学に行って帰ってきた人とか、そういう人を結び付ける。こういうことというのは時代を超えて、また、国を超えても十分学ぶべきものである。

佐藤 - 今の西潟さんのお話や小國さんのコメントに関連してご質問あればどうぞ。

安藤 - 大変面白かったのですが、ただ一つ、西潟さんが活動された松代町は歩いて6時間もかかったそうだが。

西 潟 - 5時間。夏はバスが1時間に1本あるが冬はない。今はほくほく線（北陸急行）の特急が5分で行く。車では15分。

安 藤 - それで、そういう地理的な、環境的なことは影響するか。

西 潟 - 何にも情報が行かない。村に電話があるお宅は一軒もないから。大歓迎である。情報を持ってきてくれるから。

安 藤 - 大学院生の方で、そういう所で仕事をやっている人がいるので、その人にコメントをもらいたいと思うが、話を聞いていてどうか。

某院生 - 雲南省のベトナム国境に近いところで仕事をした。西潟さんの村は、(自分の場所より)もっと遮断していたのではないかと思う。電話が無いということです。私が調査している場所は、けっこう年中出稼ぎがあり、市場が近くにあり、他の地域とのかかわりがあった。

安 藤 - そういう所で生活改良普及員の人は住み込みするのか。

西 潟 - 街に住んでいて、冬は1ヵ月に1回ぐらいしか帰ってこないで泊まり歩きする。そして料理なんかでも、何も買ってこないで、家にあるものを並べてみて、これで何を作りますかね？と料理講習する。

安 藤 - なぜこういうことを聞いたかということ、是非とも誤解しないで知って頂きたいのである。実は、生活改良普及員とか農業改良普及員とは、僕らが見ている行政の人たちと全然違う。手当がどれくらいかというのはさておいて、いくら手当があっても、こういうことを一昔前は日本の行政がやっていた。それをしっかりと認識した上で、いろいろな意見があると思うが、だからそういう活動をしていた。この辺がかなり、西潟さんが考えておられる行政とはだいぶイメージが違う。そういうことだけいいかった。

佐 藤 - 黄瀬さんにお聞きしたいのだが、さっきの松田さんのお話も同じだが、もしも普及所がなかったら、もしも西潟さんがいなかったら、発掘されなかったリーダーは発掘されないままなのだろうか。我々の言葉でいうと、開発ワーカーにあたる村落開発普及員には、普及の言葉がついてくる。我々がやっているのは普及である。普及というのは、意図的に働きかけるということである。意図的に働きかけるということをして仕事とする人たちがいて、そこには明らかに介入性、操作性、よそ者性があって、それを最大限に活用したと思うが、西潟さんは普及員だったからこそできたのでは。

西 潟 - 普及員でなければできない。戦後のみなさんが、食べ物もなくて、貧乏で栄養がなかった。例えば農家のお母さんたちは、妊娠できないくらい栄養がなかった。子どもが欲しいけど妊娠しない。私が栄養指導して、西潟さんのお陰で2人目の子どもができたといわれた。それほど栄養の足りない時代だった。朝から晩まで働いている中で、その中でどれだけ知恵を絞って栄養補給するか。3年間味噌づくりに専念したのはそれだから。ダイズ・タンパクを摂ろうということで。その味噌の中に、麹を作る時の技術に入れて1日分のビタミンB1、B2、A、Dとカルシウムが摂れるように味噌の中に投入した。この人たちは味噌汁で栄養をとっているなど分かったので、まず味噌の改善をした。

佐 藤 - 味噌を使うというのは普及員以外では絶対できなかったのではないか。

西 潟 - 昔の味噌があった。麹が少なく、外からの雑菌で発酵させた。作業もすごく大変だった、冷たい作業で。新しい味噌づくりをしようとしたら、おじいちゃんおばあちゃんからそんな勝手なことにはさせないよという雰囲気の中で、変えて行ったわけだ。そのために、お母さんの会以外におばあちゃんの会に行って仕事をしたり、お父さんの集まりに行って話をしたり、そういうふうに足を運んで認めてもらい、お母さん方の活動を、あの先生がいるならいいよとなって、味噌の技術を普及した。

1 件のお宅に集落みんな集まってきてねと作らせて、集まってきて3日で出来上がるので、順番に手伝いあいながらやると、あとは一冬のうちに7回経験すればあの人たちも先生になれる。普及員は1回泊り込みして行けば、あとは日帰りで見るができる。そういうふうにして技術を習得してもらえた。何からでもいい。心が開けば、意識が変われば。

佐 藤 - そこでポイントは、味噌づくりという新しい技術、革命的な技術をどうやって根付かせているかというところで、あの手この手でグループ活動を通してやっていた。一般的に農業技術も同じですが、同じ普及所の中に、農改さんと生改さんがいて、農改さんと同じように生改さんも技術を持っているというのが、今の開発ワーカーと違うところ。ただ味噌づくりの技術を持っているからといって、どこでも使えるわけではない。

西 潟 - そう。でも、指導者の勝手というか、指導者が見て、アンケートでもいいし、みなさんの意見を聞いて、何が問題だといって吸い上げた。地方はどこにでもあるわけですので、希望しなければ別ですけど、どんどん口コミで広がってきた。

安 野 - 色々調べてみたら、観察してみたら、味噌じゃなくて、他の栄養を摂るものもあつたら、普及員は持っていなくても勉強から始めて技術を習得したのだろうか？

西 潟 - やっぱり本人たちが持っているものを使う。アンケートもするが、個別訪問で出てくるものが信頼ある。

安 野 - 話が変わるが、リーダーというのは政治的な人も利用してきたとあるが、私がやっているパキスタンの村では、リーダー的存在はどうしても政治的なことが重なっているといえる。何かを動かそうとした時には、そういう人たちを動かして行かないと、実際には動いて行かない。確かに村の中では信頼を得ているけれども、政治的なつながりが弱い。普及所というのはある種行政ですから、つなぎ役になれるのかなと思う。もう一ついうと、小さいNGOを作って、我々が行っても何者だといわれる。行政を背負っていた方が、村に受け入れてくれる。そのところはどうか。コメントを頂きたい。

西 潟 - 当時は昭和36年だから、電話、ガスも水道も何もなく、山の水を引いていたわけだが、普及員というのは神様だった。私の前に、たまに隣の普及センターから来てくれていた。そのあと2年くらい隣の普及所から来て、もう1年だけ外から生改が来て、新採用が3人来ただけだけど、新人はなかなか行動を起こせなかった。そして4番目に私が行ったけれども、よその茨城県で恥をかいてきたから、お前は使えるなと組合長の口癖だった。もう一人生改がいれば全然違うが。新卒をポンと放り込むのは非常に動きにくい。

佐 藤 - 新卒を放り込むというのはNGOと同じ。生改さんというのは、「先生」と呼ばれている。なぜかという、第1期の生改さんは教員の経験者だったり、村のちょっとしたエリートだったりということもあって、ステータスが確保されてしまった。農改さんは先生と呼ばれなかった。

安 藤 - いや、どちらも先生だった。みんな先生だった。

佐 藤 - 行政で先生と呼ばれるステータスを持っているというのと、我々が開発をやる場合と、先生として行くわけではないので。

安 藤 - いや、そうでもない。Sirは直訳すれば、先生だ。

西 潟 - 全然説明しなかったが、生活改善グループが地域課題に取り組むまでの7年の流れが書いてあるが、その成果に関心のある方は是非見て欲しい。最初に仲間を作って集団活動する。始めから地域活動できない。今ではグループは7年ではなく、3年じゃなきゃ遅い。それから、リーダーの条件

というところもあとで読んでおいて欲しい。

ケシャ - 強いリーダーの存在が際立っているのかなど。そして、それを育てるのは普及員であると。その中でも強い普及員だと。つまりは、好かれる普及員であると。これは、開発途上国の開発もそうなのだが、偶然の一致なのか、システムの影響か。日本にはそういう強力なシステムがあったのか。

西 潟 - 私どもの年代から、短大卒で同じような教育を受けてきたものが普及員になっていたが、元学校の先生とか、未亡人というか、人生経験が豊かな方が非常に得意な活動をしていて、学ぶところが非常に多くあった。今はシステムとかで新卒ですぐ仕事ができないということから、入る前に1ヵ月研修とかをして、古い先輩にくっつけてから現地に出すという、そういうシステムだった。専門技術員制度が充実して、私の頃はまだまだだったが、ちょっと迷っている人には手を差し伸べる時もあった。今は合併し、普及所は普及センターとして大きくなったので、生改が一人ではなくなった。当時は普及所の中に全部で8人の農改さんと一人の生改と一人の事務だった。合計10人いたが、生改一人だった。それが今は、隣の普及所と合併してまた将来はもっと大きくなるということで、一人で山の中に置き去りにされることはなくなった。

黄 瀬 - 普及員に採用された時は普及所に一人だった。何をやっていいかわからない。農改さんは誰も教えてくれなかった。図書館に通って勉強した。生改の集まりの時に素晴らしい先輩を見つけて、あの普及所センターに行って教えてもらおうと思って、その人に習って、勉強した。

西 潟 - (次の通り黒板に記して説明)

生改 生活改良普及員 オーバーワークの傾向 横をつないでいる。 保健婦を専技
専門技術員
4 H
専門 生活経営
農産加工
居住環境 普及指導方法

生活改良普及員というのは、農業改良普及員に対しての生活改良普及員で、車の両輪ですといわれている。そこに、青少年ということで農業、担い手、生活と称して、これが農村で一番大事な項目というような呼び方もしている。今は名前が変わって普及センターでは改良普及員という、誰でも何でも同じような仕事をするというようになっているが、実際に生活をやっている人たちは、やはり昔の「生活」を担当して、そっちを中心に地産・地消とか消費者交流とか地域づくりとか、ちょっとオーバーワークの傾向になっている。今までよりも新しい時代の問題を抱え込んでいる。農業の専門よりも広い生活を横につなぐ仕事である。だから栄養士とも保健婦とも連携しながらできない仕事ということだ。専門技術員というのは、農業の専門技術員もあるが、普及指導方法といって普及員を指導する、指導の仕方を指導する、そのこの生活の部分を農民生活という試験を受ける。その他に専門技術として、今、黄瀬さんが持っている生活経営、そして食生活ではなく農産加工だ。

黄 瀬 - 今は、生活および農業経営になった。

西 潟 - それから居住環境といって、村づくりとか、環境整備とか、村の共同排水とか家の周りとか景観とか、要するに居住環境の整備。労働衛生といって健康で安全な働き方ができるという労働衛生がある。それと普及指導方法。つまり、これを一号専技、これを二号専技と称していた。これが専門

で、これが教育方法といってよいかもしれない。

佐藤 - ポイントは、生活改良普及員が開発ワーカーだとすると、背後にシンクタンクな機能を持つ人がいて、それぞれ専門性を持った人がバックアップしていたという制度があったということ。

西潟 - 4Hは「Health」、「Head」、「Hand」、「Heart」の意。

佐藤 - アメリカの地域青少年育成の運動だ。

3. 報告3「バングラデシュの農村開発と農村リーダーたち」安藤和雄

今日は、二つの話とバングラデシュの話をしたと思ったが、なぜそういう話が必要だったかを述べたいと思う。

はじめに

昭和30,40年代、生活改良普及員の仕事について掘り起こしをされていて、佐藤さんの意見はそこから学んで行けばいい、そこから抽出できるものを開発途上国に活かして行けばいいという考え方ののだが、佐藤さんがやられる前から生活改良普及員とか農業改良普及員には興味があって、その過程で亀岡の黄瀬さんとかから活動を見せてもらっていた。

僕自身も農家の生まれだし、農学部を出ており、自分も過去に普及員になろうと思っていた人間なので、いろいろと普及員には興味がある。最近の生活改良普及員の掘り起こしは、昭和30,40年代のことを見直そうといういろいろな動きが、農業以外のあらゆる分野でも起こっている。プロジェクトXは最たるもの。我々にとって昭和30,40年代は貧しかったけど、やはり希望はあった。未来を疑うことがなかった時代だ。そういう中で、戦後すぐにどういう状態だったかということ、西潟さんは貧しさを強調していたけど、実は昭和20年代は農家にとってはある意味黄金時代だった。農業に、他産業から参入、実は、復員してきた人たちが、農地解放があったということもあって、不在地主を認めないということが前面に出たので、教員をしている人も県に勤めている人も土地を持っている人は、最初に考えたのは土地の確保だった。農業にかなり戻ってきた。それを支えたのは所得の高さであった。昭和30年代には、僕の家でも耕耘機を買った。当時耕耘機は何十万もするから。昭和30年代、全国がそうだとはいわないが、機械化をどんどん進めている。これは農業が持っている所得の高さ、それを皆さんに心にとめておいて欲しいなと思う。東北や新潟は、プロジェクトXを見て頂ければ分かるが、出稼ぎが始まっている。戦前に関しては暗黒の時代だった。しかし、昭和の戦後10年は、東北地方も含めてそれほど悲しむべき時代ではなかった。むしろ大地主から解放されて夢を持っていた。そういう時代である。だから生改さんもそうだし、農業改良普及員の人も生き生きとして仕事ができる。そういう時代を我々は考えて、そこから学べることを学びたい。

しかし、昭和30,40年代の話をバングラデシュで話したら、今はどうなのか、そんなことがあったら現在の日本はもっと幸せだろうと返ってきた。それはうそだ。とんでもないことが起こっている。彼らが非常に疑問に思うのは、どうなったのかということ。生活改良普及のよさを共有して行こうと思うのなら、現在の生活改良や農業改良普及に連続性を我々はきちっと見て、その中で持って行けるもの、そういう視点が必要だと思う。それと2番目に、対象としている開発途上国とのズレなり、比較ということをきちんと距離を測りながらやって行かないと。いくら昭和30,40年代によいといっても、それは昭和30,40年代のことであって、そういう作業が今から必要になってくるのではと思う。もう一つリーダーといったのは、今までの研究会で欠けていたものは、担い手であるものは誰かと

いう発想だと思う。それは一つの運動体として見る必要があって、昭和 20, 30 年代当時というのは、戦前の農業期があって、生活つづり方運動、それは生活改善の普及も切り離して考えてはだめ。昭和 20 年代前後というのは、確かに戦争時だが、戦争の前からどんどん運動が起こっていた。水野さんが詳しいと思うのだが。なるべく、絶えず現代と開発途上国を相対化しながら、昭和 30 年代を考えるようなことをして行けば、昭和 30 年代のよさが本当にもう一回、力を持ってどうかといえるのではないか。そうでなければ過去のことで終わってしまうという危険性があると思う。

バングラデシュのリーダーたちと普及事業

レジュメにも書いたように、私がリーダーを考えるきっかけになったこと、これがどのように自分がやっていることと関係して行くのか、それらについて述べて行きたいと思う。私が青年海外協力隊で海外に行った時は普及員をやっていた。政府の普及員ではなく、NGO、昔はボランティア団体といったが、そこがやっている村づくり、農村開発プロジェクトに普及員として村に入った。

僕は大学を出てすぐの 23 歳で行ったので、右も左も分からない状態で、とにかく農学部を出たということで稲作には少し自信があった。しかし、現場に行くとイネだけやればいいという話にはならない。初めは NGO のエグゼクティブ・ディレクターが私たちに「何でもやってくれればいから」といった。カチンときた。駐在員と調整員がいたが、35 歳、30 歳と歳が近く、若い集団で、何でもありの時代だった。けしからんといった。だいたいテストしておいて、1 次 2 次面接もあって、しっかり専門を植え付けたのに、何でもいいというのはふざけるなと思った。当時何も知らなかったから、そんなことを抱きながら村に行った。そういうところで何をやるかと思った時に何をやっていいかわからない。当時は本田勝一の本にかぶれていたが、1 年間は何もせずに見ていなさいと書いてあった。ルポルタージュの方法という本かな。僕が青年海外協力隊に行った時、一緒に行った仲間は院生で、朝とかに勉強会をした。何もやらない方がいいだろうと。何もやらないでデモンストレーション・ファームだけをやっていて。自分を鍛えるためにやった。本田勝一流に。8 月に行き、1 ヶ月、2 ヶ月して、村から批判が起こった。「あいつは何もやらない」といわれた。「日本人の癖に」と。

ところが、外に出たくても何もわからない状態で、どんな人とやって行ったらよいかもわからなかった。調査といっても調査のノウハウもないし、わかりません。研究者でもないし、知識もないし、興味もない。非常に迷って、デモンストレーション・ファームだけをやっていて。村人からあれやってくれ、これやってくれといわれる。野菜を普及してくれなど。しかし、野菜の普及をしようにも、環境もはっきり押さえていないので失敗が目に見えていた。乾季の時を契機に、これではいけないと思い、1, 2 年上の先輩のところに行き、農業関係で評判のいい人に聞きに行った。1 年上の二階堂さんという方で、広島県の農業改良普及員。改良普及員といっても青少年活動をしていた。1977~79 年に、若い人たちのユースクラブを作って育成しようという活動をしていた。ロングプールという 500km 以上離れたところで色々話した。普及をやって行きたいのだけれども、まずどんな人をどういう形でやるのかさっぱりわからない。今一つピンと来ないがどういう人が受け入れてくれるのかと相談しに行った時、いつくれたのは「いい人だったらいい人が来るよ」という答え。二階堂さんと一緒に活動していた。二階堂さんは、青少年活動ではなく、土地なし農民の活動をしていた。すみませんが土地なし農民協同組合の組合長とはどうやったら出会えるかなと聞いたら、「リーダーを探すな、探さないでいい。自分がきちんと活動していれば、自然と寄ってくる人がいる。そういう人を大切にしたらいいのではないか。実践の中では、そういう探し方が今でも一番いいと思っている。西

淵さんのレジユメの中に、好かれるリーダーの条件、嫌われるリーダーの条件とあるが、確かに、結果としてはどこにでもあるようなものになっているが、こういう形でリーダーを評価するというのは、実践の中で見て行こうという人たちの見方だと思う。社会学、人類学、農学など学問をやっている人は属性を全部考えてしまう。例えば土地をどれだけ持っているかなど。そういうのは一切不問にして、まずは活動の接点から見て行くべきだと思うし、それもまた、もう一つの見方だと思う。現場にいる時は、そちらの方が変なバイアスがからなくていい。それ以降、研究協力プロジェクトなど、経済調査も属性調査もやったが、何も見えてこない。分析はできるが、結局、自分は何をしようとしているのかというのが、私自身に明確であって、その活動をした時に寄ってくる人がいる。その中でいろいろ対応することで、一つのリーダー像が見えてくる。紙の分析の上では、いろいろなリーダーを語ることができる。血縁のリーダーとか、宗教のリーダーとか。それが、生活改良事業などの事業の担い手としてリーダーの分析結果が必ずしも反映されるかということ、あまり関係ないといい聞かせた方がいいと思う。

私が出会った人たちというのは、いろいろな事業をしていた。ナスの普及をしたら、雨季の頃の状況を把握していなかったのが、私がやったナスは洪水で全滅してしまった。しかし、私が一緒にやった農民は、僕がやったことに関してはその努力を認めてくれて、大丈夫だからと励ましてくれた。来なかった人たちがものすごく批判の声をあげてきた。日本人はだめだと。6人の侍というように書いたのだが、シラデイ村では、ここは対象域外だったが、噂を聞きつけて、ある程度活動が軌道に乗ったということで、2年目だったが村人がわざわざ来てうちの村でも農業普及の組合を作って欲しいといわれた。6人来たが、その人たちと一緒にやってきました。これも実は、自分から探したわけじゃなく、来た人である。

ランプール村で何をやったかということ、私が二階堂さんのところで会った土地なし農民のリーダーたちは、リーダーを探すなら、ナイトクラス(スクール)をやりなさいといった。それをやれば、意識のある人がくるからと。しめた!と思って、僕の同僚と始めた。ところが、その村は出稼ぎの村だった。僕が期待したのは若い人で、勉強ができなくて一生懸命仕事やっていて、夜に勉強しに来るだろうと考えていた。そうしたら全部子どもが来ていた。大人じゃなくて。若くて元気のある人は、外に出て行った。しかし、ナイトクラスをやることで村の見方は変わってきた。これはどういうことをいっているかということ、すべての事業がある一つの事業をすればリーダーが出てくるかということ、そういうわけではない。非常に地域性がある。それに気づいて自分なりの活動をしていたわけだ。農業普及を中心とした、現在そこにいる人たちを組織化しながら、野菜の普及とか、大根とか新しいものを植えてみたり、イネの普及とか、ナイトスクールをやったりしながら活動をして行く上で、村から人が出てくる。行くわけじゃない。「さあ、やろう」というのではなく、来た人とやって行く。来た人と一緒になって、そういう非常に臆病な方法でやっていた。それで、シラデイの村からも出てきて、6人の人たち、単位として大きいから、組合的な活動もして、そこでやったことは残った。例えば大根の普及、新しいものは僕が帰ってからずっと残り続けた。経済効果があったからということもあるが、基本的には集団の持っている力があつたと思う。

そういう活動経験から、ドッキンチャム村のJICAのプロジェクトに入って、そこで我々は何をやったかということ、事業から入らなかった。研究者だったから。当時1980年前後は、そのころはコミットすることが悪だった。今でこそ、実践的研究というが、当時の風潮は、研究者が農業改良普及事業とかやる、要するに距離の問題をご破算にするようなことをやって、そこから得たデータにはどれほど

信頼性があるのか。参与観察とか、まだ当時非常にいわれていたことで、僕もやはりしょうがないということがありながら、僕自身のものの見方が相対化できていなかったのも、一応最初の1986年から90年にかけて徹底的に参与観察した。要するにデータをとりまくった。コミットメントは一切しなかった。普及事業するとか、こちらからの働きかけを一切しないで村を見ていた。その時に出会ったのは、ピチャーという村の寄り合い。寄り合いというのは、揉め事があった時に、揉め事を仲裁する機能だが、そういう機能とか、ユースクラブとかそういうものは非常によく見えた。そういう中で、どんな人がリーダー的な人なのか。でも、その時に作られたリーダー像は、私にとって複数の多面的に存在する多面的なリーダー像である。

今日の話の中で、非常に新鮮に聞いていたのは、生活改善の人たちが見ているリーダーは決して村の中にヒエラルキーがあるリーダーではない。いろいろな機能を持った人たちが存在しているリーダー像である。ところが、日本の村にはヒエラルキー的なものがあって、閉鎖的で実際個々のところを見ると組織性が備わっている。僕も、実践から入っていない研究の中で見たリーダー像というのは、村というものを見る、その中が作り上げたリーダーだ。だから、それはそれでよかったと思う。例えば複数のリーダーとか、いろいろな観察が生まれてきて、それはそれなりによかったが、でもそれはそれだけだ。だからといって、そのリーダーがどういう形で機能して行くのかというのは、実証もされていない。ただ話を聞いてみているだけだから。それで、第2段階になった時に、最初は観察、その次に実験ということで、我々は小規模な農村開発をしたが、最初はパトンド村で実験をやった。今日お配りしたのは、前に佐藤さんが編集した本で書いたこととある程度重複するが、それから多少考えたことがあり、放送大学の教科書に出てくるもので、ケシャさんと一緒に書いたものだが、その中の1章なので、それを読んで頂ければ、私のリーダー像が見えると思う。

パトンド村で社会のリーダーを考える上でも、パトンド村で道路整備委員会、まさに普及員の方がやっているのと同じで、委員会を作って行く。その時に、幸か不幸か二つのことをやってしまった。一つの村ではある程度メンバーを育成するようなことをした。ドッキンチャムリアのように。パトンド村は何もせずに作って下さいと、もう当然のように我々は考えていた。そのリーダー構成というのは、集団の中でリーダーは入れ子状態というのが分かって、そういう意味でピチャーというのを見て行くと、そこに作用しているリーダーのあり方、バングラデシュの場合は村長がいるのではなく、複数の合議制を採っているのだから、そういうところで出てくるメンバーのあり方だとか。パトンド村で見たような入れ子の構造になっているとか。組合運動がうまくいかない理由は、彼らが持っているピチャーに見るような入れ子構造が成立しないとか。それは、今までリーダーというものの出会いということをお話したが、時間がないので省略する。

大切なのはまず、プロセスというのは二つあるような気がする。一つは、習慣的に育つリーダー、制度が育てるリーダー。今日の前半の話は制度が育てるリーダーということが盛んに議論されていた。もう一つあるのは、習慣が育てるリーダー。バングラデシュの村でいつもいわれたのが、リーダーがよく分からない、そういう話がいっぱいできている。なぜかという、一つは、制度そのものが、政府が関与して行く制度的なアプローチが、日本と比べたら1/100より少ない。日本は制度的なアプローチを江戸時代からやっていた。バングラデシュは、そういうことが非常に小さい。外の制度が育てるようなリーダー像というのは非常に見にくい。合致していない。ところが、習慣的に育つリーダーというものはよく見える。そのところが我々のイメージと違う。例えば、日本はどうだというと、日本でも習慣的にリーダーが育てている。個人的な経験で申し訳ないが、日本の村にはいろいろな装

置がある。小さい時に集団でやる行事があって、そこで誰がリーダーになって行くかということ、話す機会があったら話す。セレクションだから。小学校1年生から6年生まで、村の集落のおこぼれをやる。2週間泊まって家々を周って、豊年祈願のお神輿担ぎをやる。そこでは決まって戦ごっこをする。その中で誰がリーダーとして、僕自身も3年生までやったが、小学校の低学年ですら何を議論したかということ、あいつはだめだということ。中学校1年生になれば、誰でも中学1年生という資格の中でリーダーになる権利がある。親父が亡くなったので、村の行事に参加するが、そういうところでどういう立ち振る舞いが要求されるか。まず、黙ることである。まず、黙ってじっと聞くことである。まず、話し始めてしまう人は烙印を押される。いろいろなセレクション、いろいろな行事が持たれて、世代が交代した時に村の家の代表として入ってくるが、セレクションがかかってくる。良し悪しは別として、そういう習慣的なものの中でリーダーとしての要件などが行われてきている。僕がしたいのは、遊びの世界とか行事は無視できない。我々は開発途上国では、どんな遊びをしているのか、どんな行事があるのか、必ず見る必要があると思う。

リーダー像というのは、ネットワークにかけて伝統とか近代とかを説明したいのは、いつも我々が掴んで来たリーダー像のことをいうと、絶えず反論として出てくるのは、マタボールといわれるリーダーがあって、我々が知っているマタボールを使って、村のリーダーを使うといういい方をするが、彼らを involve したような農村開発のやり方というのはおかしいのではないかと。リーダーはそんなに倫理的に動くような人ではない。倫理的に動く人は伝統的なリーダーなのだと。私は一度たりとも伝統的なリーダーとかいったことがない。リーダーというものは、伝統も近代もない。あるのは、その時々で選ばれてきた人たちと村の中において、機能的な面はあると思うが、伝統的、近代的という言葉で片付けてはいけない。リーダー像を間違える気がする。多面的なリーダー像というのは、結局、リーダーというのは、外との関係、その人の役割が色々できるものだから、内側から出てくるリーダーはいない。だから、結局、私たちができるのは、刺激を与えることによって、リーダーとなる素養のある人たちが出てくる。そういう契機になる職場になるのではないかと。そういう西潟さんと同意見だが、育てるということは育つということ。禅問答みたいなことをいうが、意識がやはり必要ではないかと思う。

PRDPについてまとめるが、現在のプロジェクト事業としてはパターン化しなくてはならない。我々がパターン化することによって見えてくるものがある。我々は何をやっているのか。我々が何をやっているのかということとバングラデシュの公は存在しないので、公を自分たちで作っている。他者を非常に気にする。見られることに非常に気にする。こういうものを作っている。ミーラーメソッドと書いたが、ユニオンの単位で、行政の人とリーダーが集まってミーティングしている。教える時に教室型ではなく、ある一つのユニオンと、もう一つのユニオンを呼んで互いに観察会をやった。そうすると驚くべきことに、彼らは教えなくてもうまくやる。私が見たいのは、恐らく、パターンとしてどのようにリーダーを捕まえてくるか、そういう知識を持ちながら、現存するリーダーを刺激し合いながら、高めながら、次のリーダーとなる潜在力を引き伸ばして行く。そんな気がする。

質疑応答（敬称略）

佐藤 - リーダーの話が、今日の設定したテーマだが、時間もないのでリーダーに絞って話して行く。安藤さんがいったのは誰のためのリーダーなのか。

安藤 - 研究者であれば、やはり誰のためのリーダーか、機能的な側面で大分違ってくると思う。そ

の人がどんな機能をするか。グラミンバンクのリーダーであれば、そのグループの人たちのことを絶えず考えなくてはいけないのは、その人たちも社会の中で生きているから、こういう二重構造になっているわけだ。ある機能的なグループと、彼らが持っている社会的なリーダー、両方だろう。一致していれば、村のリーダーでその集団は親和力を持って機能して行くが、もしくは村のリーダーと機能的集団であるリーダーは何か対立関係にある場合は、機能そのものがうまく行くと思うが、誰にとってのリーダーかといった時に、リーダーの役割とか機能とか、それが明確になって初めて見えてくるだろう。

佐藤 - バングラデシュの場合、マタボールが適当なリーダーではないという判断をする介入者が多い。ドナーにとって適当なリーダーではない。今日話しているのは、よそ者が働きかける時に都合がいいかどうかではないのだろうか。

安藤 - そういつてしまえば都合がいいリーダーである。しかし、この人がリーダーだ、リーダーじゃないというのはどのように見ているのだろうか。我々は仕事をしようと思っただけ。そうすると、我々は暗黙のうちにリーダー性というのは、ほとんどの民族を超えて誰もが納得する。そういう人たちをリーダーにアプローチして行く時に、前提としてやっているのは、事業をやって行く上でのリーダーの捕まえ方をいっているわけである。だから、そうなった時にどうやるのか。

西潟 - 事業をやって行くためのリーダーとして考えてない。それは既存のリーダーでいい。きっかけとしてそれは使うが、やはり継続して人が尊敬し、地域課題を解決するような価値を見出して生きようとする人をやはり、そういう機能を果たす人を迎え入れようとする。でも、一人だけではだめ。応援団がいる。いろいろな続く人がいる。私のリーダー育成はほとんど集団思考なので、集団思考の中で、自分たちが戦わせた意見の中からリーダーが育って行く。リーダーが地域に与える影響というのは、最後のまとめに書いておいたが、リーダーを期待して選ぶ。

安藤 - 自分でやってきた経験を振り返ると、誰にとってもリーダーというのは、非常に見えにくい。特にそれが、村の中で認知されていないような行為になればなるほど、リーダーとリーダーを支える人の関係がやすやすと見える。なぜ、研究的な分類手段が、ある種の危険性を孕んでいるかということ、ブラックボックスだからである。極端なことをいえば、バングラデシュの社会にも裏と表がある。裏が牛耳る場合が多い。裏の構造があって、裏のリーダーは見えるけど、裏のリーダーを支えているような人たちはなかなか見えてこない。戸別訪問しても見えてこない。絶対いわないし、派閥もあって。リーダーと非リーダーの関係というところに集中してしまうと、無い物ねだりになってしまって、何が何だかわからなくなってしまう。リーダーの分析というのはいつもクエスチョンで考えている。事業の時とそうでない時のリーダーは違うし、思わぬところでこの人とこの人がうまいことやっているのだと思う。恐らく西川さんは産婆さんを勉強されていると思うが、そういうところはどうか。

西川 - 前半は何かを普及するという目的があって、この普及のためにどのようにリーダーを育成するかという話で、安藤さんの今のお話というのは、何かをするためのリーダーとは違うし、リーダーとは何かという、もう少し違う話のように思う。違うというか、一緒に議論するのは難しい。私は、日本では産婆さんの研究をしている。

具体的には大正、昭和時代にどうやって出産し、どうやって家族計画して行ったらいいか。昭和30年代、40年代は昔の様に、どうしてどうやって栄養を教えていたか。いろいろなレベルの窓口がある。婦人会だったり、産婆さんがいたり、何かをしようとする時、この人が窓口にいるという。私が松田さんのお話を聞いた時に、農業のリーダーを育成するという話だったが、産婆さんはある特定の役割

だけを持ったリーダーではなく、ある違う分野のリーダーに渡して行ける。

日本の産婆さんは一番望まれていて、婦人会の女性であったりした。村の人にも、一つのリーダーではなくて、ものすごく複雑な窓口があったのだろうなど。昭和30年は出稼ぎに行き、田舎けれども、情報を受け入れるルートはあったのでは。情報網も発信して行った。情報が入る窓口と聞く窓口があった。情報を受け入れるのは田舎でも、結構情報網が回っていた時代だなど。誰にとつてのリーダーなのですかと聞いたら、特定の人の中のリーダーではないのではないかという意味で、私は聞いた。

安藤 - バングラデシュをやっている時に、村の中から見ていて、やはり一つの機能に一つのリーダーではないか。行政がやろうとしているのは、むしろ一つの機能に一つのリーダーではなくて、全部を、あるいは何らかを扱ってくれる人。一人の人が多面的な機能を発揮している人である。

佐藤 - 今の我々の議論は、外部者が働きかける時のリーダーの役割に絞った方がいい。普及でもいいし、開発でもいい。何か伝えたいものを持っていて、それを伝える時に窓口になってくれる、そういう機能を担っている、私たちにとってのいいリーダーなのである。

安藤 - 僕がしたいのは、こうだからリーダーというやり方での側面がでてくる。もっとリーダーはいろいろな、多面的な側面を持っている。

佐藤 - 我々が問題にしたいのは、その窓口になって普及の対象、適切な普及の手段の道具としてのリーダーというのが一つある。

西潟 - 事業を下ろす時に、ある程度リーダーの理想なところを探している。いつもリーダーは活動して、農村の中に人は育てておこうとする。

安藤 - そうなのだが、佐藤さんがいったみたいに農業改良普及のために都合のいいリーダーというのは、実は、ブラックボックスである。農業改良普及をやりたいとあって、リーダーが出てこないというのが私の考えである。今の我々の開発途上国でやっていることの危険性はライフワーク。始めからリーダーを決定しない。

佐藤 - 働きかける側が認定する。西潟さんの場合だと発見するのだが、そういう働きかける側に絞って検討すべきで、ブラックボックスにしてしまうのはどうか。

安藤 - 農業に意味があるリーダーというのは、必ずある何らかのコネクションを持ちながら、社会の中でのある機能を持っている人たちである。農業だといっているものでも失敗しているものは多い。

西潟 - 技術のリーダーと集団を率いるリーダーとはちょっと違う。窓口として環境整備を下ろすけれども、実際に推進する時になると他に内部リーダーがいないと推進できない。今の時代だから。

佐藤 - なぜ生活改良普及と開発途上国の外国の話を重ねているかということ、外部者が働きかける時のファンクションなのだ。太田さんより普及学から見た時の段階分け、分類をしてみようと思う。

太田 - 普及というものを類型としてみている立場で説明すると、まず普及というのはただ外から働きかける、こっちが伝えたいものを持って行って、リーダー構わず、個別でも何でもよくてグループとかも考えずに、技術を移転するだけの普及というのがあって、これが集約できるのは上からあるモノを降ろして行く。そのために住民が使われているという普及のパターンを第1型だとすると、第2型としては、アドバイスをするための普及。第1型とどう違うかということ、住民のニーズを汲み取ってそれを試験所に伝えて、例えば農業であれば、農業でどういう技術的問題があるか、それを試験場に持って行って、そこで住民にあったような技術開発をして戻して行く。第3型と考えているのは、住民がやりたいことをとにかくやらせてあげるとのこと。とにかく普及は下から行ってお金が予算

化して行くという、最終的に事業化するというプロセスがあるが、とにかく住民がやりたいことを汲み取って行くのが普及員で、それを働きやすくする、例えばネットワークをしていたというのが普及所の役割だったと思うが、あっちの人をこっちに引っ張って、保育園で給食に入れたい時に協力してあげるのが普及員。行政が入ることで事業がうまく行く普及所の役割もある。

佐藤 - 今の三つの類型があって、基本的には、第1～3とだんだん進化しているのですが、開発援助は、全く同じような形で技術伝達をやるというのもあるし、少し住民参加型でやるというのもあるし、こっちから何かを持って行くのではなくて、彼らのファシリテーターをしようということになっていると思う。それぞれにおいて期待されるリーダーというものは違うと思う。普及員や開発援助を仕掛ける側としては、第1型の場合には、篤農家でよい。村には一人のリーダーがいればいい。2番目の類型というには、住民のニーズをとりまとめ、普及員と対話できる。あくまでもリーダーを通してやろうとしてきた。第3類型は、先程のネットワークであって、たくさんのリーダーがいて、それらを活用できるような場を作って行けることが普及員だっていえる。第1、第2、第3型それぞれに我々にとって都合のいいリーダー像があると思う。そこのところをきちんと整理して行くことがここでリーダー像を語ることに意味があると思う。

安藤 - 全然違うと思う。第1～3型まで全部あることだ。昔も今もある。直線的に1からではなく、1～3もある。類型に合ったリーダーというのではない。リーダーというのは生活関係の中で成立しているものなので、こういうものは全部複合的に持っている。現在の普及関係の事業において、今僕がいった視点が抜けていると思う。農業技術だけの、生活改善だけのリーダーとか、リーダーという見方をするからこそ、いつまでたっても村人たちが持っている全体像が見えてこない。ある時はこれ、ある時はこれ、なんです。これを勇気づけているのはやはり、そこに持っている村の全体性だ。

佐藤 - 生活改善の中に「三つの禪（たすき）」という言葉がある。婦人会長もやり、農協婦人部長、生活改善グループ長もやるという「三つの禪」。それぞれ別だけど、それが一人の人がやる村もあれば、三つ別の村もある。別々のファンクションで別々の人が求められるとわけた方がいいだろう。ファンクションを分けて考えないとブラックボックスはいつまでたっても話にならないだろう。

安藤 - ファンクションというのはずっと分けていた。リーダーも人間だ。

西川 - 頭でただ単に感じたことだけをいうと、今の佐藤さんから「三つの禪」というのがあったが、全く時系列とかではなくて、生改さんのアプローチから何を学ぶかというのは、彼女たちがいろいろなリーダーシップを持って、その中には安藤さんが教えてくれた遊びの世界で育ってくれるリーダー、行事の中でのリーダー、その中でこういう役割が与えられてやってきたわけである。事業を落とすためのリーダーではなくて、地域社会全体の活性化を目指す。

安藤 - 機能別のリーダー像だけを見ても、普及事業というのは成果が出てこないかもしれない。長期的なリーダー像とは何かを明らかにして行かないと。

西川 - この時系列を見るのではなく、雑多なブラックボックスの事例を見ると、いろいろなことが頭に入ってきて、整理することを学び、どこかで生きてくる。

西嶋 - ライフステージ別の課題があるように、自分の生活設計みたいなものがある。それと、地域の設計というか、そういうのが集落の中に生きてると、この集落がもっと元気になったり、もっと綺麗になったり、もっと和やかになったり、そうしたらいいなというものはある。ではどうするかは喧喧譁譁とやる。そういう中で、私はこうがいいとか、いろいろなタイプがいて、どの部分を強調して発言し、引っ張るか、このリーダーの時にはこの面の都合がいい、この普及員の時にはこの面を

見せれば都合がいいとか、農家がそれなりに計算していると思うのだが、トータルには我が家は、我が地域は、我が集落はどこに落ち着くのがいいのかというのが、常に頭の中にある。一人ではできないので、団体なり、協議会などで役場に行く。

安藤 - 私もそういうことがいいたかった。全体像がなく、機能面ばかりが追及されている。

村田 - リーダーシップ、リーダー像については二人とも同じことを主張されている。西潟さんは全人的に信頼を得ているリーダーということだし、安藤さんはいろいろな側面を持っているリーダーということで、いろいろなファンクションも一致していると思う。安藤さんが何となく矛先とされているのは、西潟さんの事例ではなく、バングラデシュで、安易に基本的な側面だけを取り出してきたリーダーとして引っ張ってきて、そこに援助を落として行くという見方に対してだろうと思う。そのことだとして、安藤さんがされているプロジェクトにしても、生活改善のプロジェクトにしても、やはり、プロジェクトとしてリーダーと付き合いに行くわけだ。そこに、先程いろいろなリーダーをミックスさせてというお話があったが、予防策というか、シナジー効果で、一人のリーダーのところの一つの権益を集中させないためにということもあるが、それでも失敗した例はないのだろうか、やはり援助などで付き合いに行く以上、リーダーを育てて行く、付き合いに行くことで、もしかしたら触媒されることもあるのではなからうか。

西潟 - ある。

安藤 - それはしょうがない。それさえも分からない。分からなくてもいいといたい。入る前にいくらリーダーだといっても変わる。

ケシャ - リーダーは、私から見ると担い手役に過ぎない。だから、リーダーは働き蜂である。あくまでも担い手役ではあって、小さいリーダーというか働き蜂である。

佐藤 - 小さいリーダーか？

ケシャ - はい。働き蜂と女王蜂を同次元で考えない。女王蜂が全人的なリーダーはリーダー。普及にとってリーダーはあくまでも小さなリーダーである。リーダーの用語に含まれる意味には合わないと思う。

西潟 - 生改はどちらかというリーダーを大きく捉えているが、農業の側に立つと、自分の技術や経営を立派にやっている人をリーダー的と称する場合もある。

ケシャ - 産婆、栄養士も農業と一緒にと思う。捉えやすい。生活は広い。産婆で切っても、栄養士で切っても。

西潟 - 自分は何もできないけど、生改は人をつなぐ仕事をしている。普及員自身は何もできない。集団思考の中での歩く姿を思い描いている。

西川 - 伝達するというのは、この人にいったらうまく伝達されるという場合と、この人が実践したら他の人が影響を受ける、インパクトが与えられるということがある。ある技術を普及するために、この人にいったら技術が伝わる。この人がやったらみんながやろうというように、そういう人を見つけるリーダーとか。この村でも、この人が始めたらついて行くのと、あの人がやってもあの人は「やってる」、というだけで終わってしまうことがある。この人が行ったら、私も行ってみようかなと思ってしまう人がいる。それをどのようにして見つけるかということなのだが、見つけ方があるみたいだ。

西潟 - 私たちは表面に出た個人プロジェクトをやっている。自分を大切にというものである。その発表会をして、みんなからはあの人ならばと認め、そんなことをするような、そういうプロジェクトはよくしてもらっている。

安 藤 - 今日の研究会ではっきりさせることができればいいなと思うのは、リーダーの見つけ方は、案外あまり属性を調べないように。その人の気持ちはわからないだろう。バングラデシュのリーダーは話がたつ人でうまくしゃべれる人。リーダー論を避けて通ってきたというのは、リーダーをどう発見するか、パワーストラクチャー論で、パワーはどこにあるかということはお金のある人、土地のある人。パワーストラクチャーの中で見えてくるのは一面的ですよというのがいい。バイアスを持ちすぎである。

佐 藤 - 一般的なリーダー論はする必要がない。介入するリーダーについて議論すればいい。

安 藤 - なぜかといえば、そういうところが土台となって、バングラデシュとかのアプローチが決まってくる。経済的な環境の中で、決められて行くものは、違ったものが出てくる。できれば失敗したくないとすると、それを助けてくれる人が欲しいがシステムが無い。

それを見つける時にどうすればいいかわからない。悪い人を想定している。

水 野 - リーダーとフォロワーは入れ替わったりする。確かにその捉え方が大切で、過程で育って行くのはその通り。何百年の間に築いてきたリーダーがいる。それを見てこなかったが時代性が変わってきた。短期的に見れば佐藤さんの見方もあるが、長期的に見れば安藤さんの見方もある。フィリピンの農村開発を見た時、政治的な面だけではなく、機能的なリーダーを必要とするか。30年経って変わってきたが、事業にはリーダーが必要。

西 潟 - 集団指導の中からリーダーは大事。

以上の議論を経て閉会となった。

亀岡市の農家リーダーたちと普及活動

亀岡農業改良普及センター

松田 武子

1 亀岡市農業の概要

耕地面積	府内 1 位	畜産粗生産額	1 位
米粗生産額	府内 1 位	野菜粗生産額	3 位
麦粗生産額	府内 1 位		

肥育牛を中心とした畜産業や米、野菜を基幹とした複合経営による総合産地化をめざしている。市場出荷と都市近郊の立地条件を生かした直売等産地消がすすめられている。

2 亀岡市での主な普及活動の取組

(1) 旭町の地域づくり

ア 現状

亀岡市旭町における現状（普及活動から）

京都府亀岡市旭町 亀岡市の最北部

旭町営農組合 166戸 入り作農家約90戸

生産基盤整備着工率74%・115/155ha（14年3月現在） 15年度完

12年 旭町地域づくり協議会設立

直売部会、学校給食部会・・・学校給食センターに農産物を提供

13年 直売部会、学校給食部会から環境にやさしいエコファーマー16戸認定

14年 農作業受託部会の設立・秋から1部作業受託開始（秋の刈取作業 7.5ha

農業機械士（オペレーター20人誕生）

エコファーマーの会設立

* 直売部会 毎日朝市開催 売上総額1500万円以上

学校給食部会 250万円以上

* 集落排水事業12年度から進行中

イ 普及活動

普及計画課題の位置付け

所内での体制づくりと関係機関との連携

各事業との関連性

リーダー主体の地域づくりをめざして

連携は密に

キーマンは確実に
農家アンケート全戸配布とまとめ
地域づくりへの普及活動の問題
地域の特色を生かす
直売活動、学校給食部会、環境にやさしい取組
都市と農村の交流
地域の点検活動の導入

(2) 地産地消活動と女性リーダーの取組

ア 亀岡市の直売組織 18
観光農園・果物直売 9
加工組織 6

イ 女性リーダーの役割

農村女性連絡会の活動

男の料理教室や介護教室、ベストメン賞、ベストパートナー賞
女性農業委員の登用にに向けた活動

女性起業ネットワークの活動

女性グループが協力しあって直売活動

新鮮で安全な農産物の提供

行事食研究会の活動

家族経営協定の推進

ウ 女性リーダーの共通する特徴

明るくて前向き

家族とのパートナーシップ

夢や目標が明確で勉強好きである

未来につなぐ経営

(参考)

旭地域活性化のアイデア (2 / 8 旭町役員の方々のお話から)

今後の方向

- ・ 地域を守る仕組みはできつつある。損しないように営農してゆく。
- ・ 守る部分だけでなく、攻める部分をもつ。農業を守る + 地域農業活性化

都市農村交流で旭を売り込もう

- ・ 旭で1日ツアー
(朝市、循環型農業、安心安全、野菜バイキング、鯖寿司など料理教室、神社仏閣散策)

- ・ 地域の資源を生かす。文化財、人材、農地、景観、美しい水。

旭ブランドをつくりましょう（米、野菜、加工品）

- ・ アンテナショップ（販売先、売り方、何が売れるか）旭以外にうってでる。
- ・ 野菜箱の宅配（野菜 2500 円 + 送料 1000 円、旬野菜週 1 回送付）
- ・ 米政策大綱 自分たちで地域農産物売ってゆく
- ・ 米の販売先確保には、団地の自治会と契約してはどうか。

地域で加工をはじめたらいいね。

- ・ 餅はよく売れて、手間も少なく、儲かる。
- ・ 加工をするには、女性が活躍。
- ・ 地域で加工所をもつ。調理師免許をもつ人が中心になり、許可をとる。

IT活用しましょう

- ・ ホームページでのPR、栽培履歴の提示、顧客づくり
- ・ 地域の天気情報の活用
- ・ インターネットメールを利用した情報交換。

直売をうまくやってゆくには

- ・ 直売での午前中の売れゆき情報を昼にみて、品物補充。
- ・ 専業農家は主要品目をたくさん作れる。新規生産者は隙間をぬって珍しい品目を少量作るように。いつ、何が作れるか。
- ・ 年間このように品目を組み合わせると、これだけ儲かるといったモデルが提示できたら。

地位向上をめざした農村女性とともに ～ サポートする普及活動 ～

1 はじめに

今から 23 年前、新任普及員として農業改良普及センターに赴任した私は、まだまだ女性性の嘆きや悲しみを切々と訴えられ、その置かれている立場の低さに驚いたものでした。

しかし、今や農家の女性たちの活躍ぶりは目を見張るものがあります。農業就業人口の 6 割が女性だが、生産だけでなく、加工品づくり、観光農業、農産物の直売等消費者の心をうまくキャッチしながらビジネスとしても忙しい。また、女性たちが学習し実践してきたことを自ら講師となって「男の料理や介護教室」等で男性達に発信しています。

ここでは、こうした農村女性の活動の歴史をもう一度振り返ると共に先輩普及員や私たちが生活関係普及活動で農村女性達とどう関わってきたかを活動の経過と共に、変遷を分析し、男女共同参画社会の実現と今後の普及活動を考えたいと思います。

2 農村女性との活動事例

- Aさんとの出会いから -

厳しい農村女性の立場であるに関わらず、明るくて運命を切り拓いていったAさんの半世紀の紹介です。現在 70 歳になる A さんの新婚時代は前近代的な農村の因習の中で夫の妻と言うより、大世帯の農家の大事な「手間」として朝から夜まで働きづめで自分の考えを家族の中で主張することもできない状態でした。しかし、先輩普及員との出会いを通じて「生活教室」「農業講座」等に参加し、学習と実践を続けながら家族の理解を得、消費者との交流を通じて農業に誇りを持つ農村女性として成長してきました。今では、その後続く若い農村女性達の活動のモデルとなる地域リーダーとして活躍しています。

3 農村女性をサポートする普及活動 50 年の変遷

農家の素晴らしいリーダーを掘り起こし、グループ活動を通じて学習の機会や実践の場を提供し、その活動をサポートする普及活動はなかなか成果が見えにくく評価しにくいものです。しかし、自ら考え問題の解決を目指して立ち上がり、歩んでいく中で、たくましく成長する農村女性の活動は、彼女らに影響を与え続けてきた普及員から普及員へとバトンタッチされてきた普及活動の歴史でもあります。我々の仕事は農村女性の地位向上に向けた学習や実践活動をサポートすると共に、女性リーダーのめざましい活躍を通じて農業の振興や地域の活性化を図るものです。

4 おわりに

パワフルな女性経営者に共通する「明るくて前向きな姿勢」「家族関係が良好」「夢や目標を持ち続ける」等、私も生活関係普及活動の仕事を通じて大変大きな影響を受けました。私はこの仕事を大変誇りに思っています。今後、男女共同参画社会を目指すと共に、地域で取れた新鮮で安全な農産物を、そこに住んでいる消費者に提供できるシステムづくりを農村の女性たちと協力して取り組んでいきたいものです。

東京都・神奈川県国内調査報告

【東京・神奈川15 - 1】

日 時：平成 15 年 4 月 24 日（木）14 時～15 時 30 分

場 所：国立感染症研究所昆虫医科学部セミナー室にて（東京都新宿区戸山）

お話を伺った方：K a - A 氏

議事録担当者：関なおみ

1. 「力と八エのいない生活運動」の担い手について

- ・ 衛生組合は戦争中からあった。
- ・ 「鼠族昆虫駆除」という名称で警察が所管して強権を発動できた。衛生教育も警察が行っていた。
- ・ 戦争により体制は破壊されたが、住民の中にその「精神」は残っていたと思われる。

2. うまくいった地域の特徴

1) 熱心な指導者のいた所

- ・ 「キチガイ³⁾のように熱心な人」がいる所はうまくいった（このような人々に、村の人々も巻き込まれて行く 村八分にされたくないの）。
- ・ このようなキチガイのように熱心な人をおだてて、育ててうまくやった。
- ・ 「指導者」たちはほとんど肩書きのない人ばかり（村長などではない人） このような人はどこにでもいるものである。問題の対象は時代によって変わる（当時は衛生害虫対策に夢中になっていたが、その後は公害になったり、環境破壊になったりなど、常に街をよくしようということに燃えている）。
- ・ 当時は「お役所」に苦情をいう人はいなかった = 役所もお金がないのは分かっていたから。
初期の活動が有名であった県 = 新潟、広島、長崎など
後期 = 栃木、北海道（富良野にキチガイのように熱心な人がいた = 全国のリーダーになった。
すでに亡くなっている）
目黒在住のイモカワ氏（女性）は紹介できる（いつもテーマを変えつつ街の中で活躍している）
- ・ 昭和 30 年代後半の神奈川県（トイレは汲み取り式、肥溜めもあちこちにあったころ）でも町内会の衛生部長は 2 週間に 1 回の日曜日にドブ掃除をして薬を撒いた（私もやっていたことがある）。
- ・ 薬は無料で保健所から支給された（有機リン剤など）
- ・ 昭和 40 年ごろから市のゴミ収集などが行われるようになり、衰退した。

2) 熱心な県職員がいた所

- ・ 県の係長（出身は事務職と環境衛生監視員で薬剤師などの専門職が半々）が中心となって県の活動に力を入れたところはうまくいった。
- ・ 県ごとにシステムは異なっている。例えば；

³⁾ お話を伺った方の口癖のようだが、当時はある物事に熱中し、没頭するような人を評してこの言葉を使ったもので、他意は無い（編集部注）

京都：町の薬剤師と連携して「防疫事務所」を作り，患者隔離と鼠昆虫駆除の対応を行った。

東京都：「防疫課（＝感染症対策課）」と「虫疫課（＝鼠族昆虫対策課）」があった。「虫疫課」の課長は医師で，事務の係長が補助をし，ネズミと衛生害虫の駆除を行っていた（環境技能職の配置による薬剤散布＝かなり大きな組織で多額の予算を扱っていた） 保健所（市町村）とは別。当時の事務係長であったヤスモト氏（80歳ぐらい）は大井に住んでいるので紹介できる。

川崎市（当時Ka-A氏が住んでいた）：多摩川のデルタ地帯による湿地帯が広がり，カが大発生していたため，川崎市の衛生班はカ駆除が中心でドブ掃除と殺虫剤散布を行った（川崎は「カが崎」といわれていた） 都市部のため，住民組織は脆弱で，市の力でやった。工場地帯の発達による公害とは10年ぐらい時差があった。当時の市の担当で環境衛生監視員の和田氏（最後は衛生研究所所長で定年退職した）は紹介できる。

- ・ 社会的な変化で住民組織は衰退したが，地域連帯性というものは現代も残っている。
- ・ 現在の町内会の役員は長年勤めているため，セミプロ化している。
- ・ 常任でやっているのだから「町を大切にしよう」という心を持ち続けている。

3. 「カとハエのいない生活運動」の法的根拠について

- ・ 衛生害虫駆除の根拠は「伝染病予防法」しかなかった（伝染病蔓延防止が目的）。
- ・ GHQが4～5年間莫大な金額（今でいえば何百億円の単位）をベクターコントロールにつぎ込んだ。
- ・ 昭和20～21年「環境衛生監視員」制度を全国に定着させ，形を整えた（衛生班の設置＝3万人に一人 達成できていない地域も多かった）。
- ・ これに担い手＝戦前からの「自分たちの健康は自分たちで守る」という精神が合致した。
- ・ 昭和30年に全国の指導者を集めて大会が開かれた。
- ・ この大会は本当に盛大だった（各大臣，県知事，秩父宮殿下が出席した）。
- ・ これにより「閣議了解」という形で国民キャンペーンとしての「カとハエのいない生活運動」が始動した（お墨付き＝錦の御旗になった）。
- ・ 法的根拠が無いだけに，市民運動としてやるしかなかった。

4. 「カとハエのいない生活運動」における専門職の役割について

- ・ 環境衛生監視員＝当時の仕事の80%がベクターコントロールであった（公共の場を対象）。40年代以降はゴミ問題ばかりになってしまった。
- ・ 県の担当者と一緒に夜，村の公民館などでの集会に出かけて行って話をした。
- ・ 組織としてというよりも，個人のつながりで動いていた（予防医学研究所としてやっていた訳ではない）。
- ・ 厚生省は鼠族昆虫駆除に対して担当者1名のみで，予算も100万円程度しかなかった（いつも継子状態）。
- ・ 当時この運動には生活改良普及員は直接的にはほとんど関わっていないはず 農林省と厚生省の縦割り行政で連携は無かった。
- ・ 昭和30年，この運動をバックアップするために厚生省の外郭団体として「日本環境衛生協会」が作られた。
- ・ 昭和40年，川崎市にラボ付で脱皮し「財団法人日本環境衛生センター」となった。

5．国際協力との比較

- ・ グアテマラのこと：ネッタイシマカ（デング熱媒介昆虫）の駆除 断水のために水を貯めるので発生する。これを防ぐためには個人個人の生活様式を変えるしかない コミュニティー・パーティシペーションの重要性。GAS（衛生活動組織）と一緒に活動をした。

6．これらの聞き取りから導かれる仮説

生活改善普及員の育てた住民組織が独立して力を持ち始め、自分たちで身の回りの問題は何かと考えた時、カとハエが目についた。戦前からの意識もあり、こうして問題としてあげられた衛生害虫駆除活動を住民組織が始めた。それに保健所の環境衛生監視員が専門指導を行い、おだてながら育成した。衛生害虫が目に見えて減ることがモチベーションとなり、運動が成功した。

【東京・神奈川15 - 2】

日 時：平成15年4月27日(日)14時15分～15時40分

場 所：横浜市泉区のKa-A氏自宅

お話を伺った方：Ka-A氏(一部その配偶者)

調査者：佐藤, 池野, 伊藤, 関

議事録担当者：関なおみ

1. はじめに(Ka-B氏によるインタビュー「衛生昆虫学と国際協力」を基に)

Q: Ka-B氏との関わりについて

グアテマラのプロジェクトには長期専門家として社会人類学者が4～5年来ていた(長崎大学医学部大学院卒の女性とKa-B氏)。Ka-B氏は以前から医療人類学に個人的興味があった(後に長期専門家)。

Q: 医療人類学は現場に本当に役に立つと思うか?

人類学者の狙っていることが実現できれば有用だと思う。現地の人は何を考え、何を望んでいるのかを考えずにこちらのやり方を押し付けてもうまく行くわけがない。しかしながら、現実には医療人類学者が期待通りに簡単に道を開いてくれるわけでもない。現実には難しい。

Q: 人類学・社会学は海外のプロジェクトでは必要だと思われるが、日本での活動の場合はどうであったか?

日本でも大いに必要であったと思うが、私の経験では、社会学者(人類学者)との接点は無かったし、社会学者も興味を持たなかったと思う。また、こちら側も本来であれば必要であったと思うが、社会学者を入れてまでテコ入れをする機会は無かった。

Q: わざわざ社会学者にやって来てもらわなくても、技術者がいれば充分やっていけたということか?

当時の衛生昆虫学は基礎分野のラボの仕事が主流で、社会の中に入って行くことは異端視された。私がフィールドに入って行ったのは個人的な興味からで、機関や組織の仕事ではなかった。当時私の所属していたのは国立の研究所で、そこでの仕事はラボワークが中心であって、フィールドに出かける人自体が珍しかった。私はフィールドに興味がある方だったけれども、ところで、少なくとも私が興味の対象とした仕事は、まったく自然科学の領域で、社会科学者を必要とする分野ではなかった。

Q: フィールドにおいて住民とどう取り組んでいたか? 住民組織が技術者を受け入れる力があったのか?

住民との関わりについて我々は外野席だった。出かけて行ったのは自然科学の領域におけるフィールドに対する純粋な興味であって、必ずしも住民組織問題は対象には入っていなかった。

Q: 技術者と住民組織の調整は誰がやっていたのか? 「カとハエのいない生活」運動の推進者は誰だと思えるか?

厚生省の技官を中心とした行政組織が中心となり、県衛生課の係長、保健所の環境衛生監視員であろう。全国レベルで住民運動を組織化し、体系化し、意味づけしたのは厚生省の技官であり、もちろん一人ではなく部長や課長もしっかりしていた。推進や段取りなどを行ったのは厚生行政のラインで都道府県、市町村にそれを受け取る核があった。行政が引っ張らなければ住民運動は瓦解していたのではないだろうか。

Q: 自治体ではなく、住民主導でうまく行ったところというのはあったのか?

もちろんあった。しかし、多くは下から盛り上がり行ってというよりは、役所の指導や支えが大きかったのではないだろうか。「民衆の盛り上げた運動」というのはやや贅辞が強すぎる面があったようにも思える。

Q：おっしゃる通りで、そもそも海外にも住民主体でうまく行った例というのは実際あるのか、という話にもなる。そうであればやはり行政整備が必要だ、という揺れ戻しがあってもいいと思うがどうか？

当然です。やはり行政組織の役割は大きい。

2. グアテマラのプロジェクトについて

私がいた時は熱帯病の研究プロジェクトであった。現在はその延長線上のオペレーションの段階に入っているのだと思う。私が行く前に長いマラリア根絶プログラムというのがあって、その伝統が残っており、行政のオペレーションは非常にうまく行っていた。薬剤散布をするブリガード（衛生班）が育っていて、よく機能していた。そもそもは WHO によって育成されたものであるが住民も撒布には協力的で、家財道具を外に出すなど室内に薬を撒布するのに協力していた。マラリアだけでなく、南京虫やハエなど、いろいろな害虫がいなくなるのでメリットもあったと思う。家の中を真っ白にするくらい薬を撒いてもらうのに協力していた。

3. 日本での活動の実際

Q：グアテマラでは住民が自分たちで薬を撒いていたのではないということか？日本の場合はどうだったのか？

グアテマラでは住民自身が撒くということにはなかった。しかし、日本では住民自身が撒いており、これは世界に冠たるものである。

Q：住民自身が薬を撒くことによる技術的な問題や弊害は無かったのか？

技術が普遍化しているからか特に無かったと思う。過剰撒布による耐性なども問題にならなかった。家一軒一軒は各個人の責任なのでこれを共同作業でやったのではなく、本来は役所がやらなければならない道路の側溝など、公共の場を共同作業でやっていた。農家は家畜小屋がハエの発生源となっており、共同で一軒一軒の家に撒いていた。東北地方などは家畜が家の中にいるのでハエが多かった。ハエが天井に止まるという性質を利用して、天井に残留性の薬剤を散布するという方法で個人の家を噴霧していたが、日本人は潔癖性で家の中に薬を撒くのを嫌がり、あまり普及しなかった。

Q：薬剤散布方法について

多くの散布法があるが、普及したものの一つに煙霧法というのがあった。これは煙霧機を使い油剤を煙状にして空間処理をするものである。30秒ほど玄関などから吹き込むだけで作業も簡単だし、家の中も汚染しない方法である。しかし、その場の空中を飛んでいるハエ・力は殺すが効果は一時的である。数時間すれば元通りになってしまう。見栄えも良いし、市町村のデモンストレーション的な方法であった。

- ・ 三兼器（日本製、共立農機が生産していた）= fog, dusting, spray。市町村が各衛生班に一つ揃えなければならぬ機器の一つであったので、かなり普及したのではないか。

4．衛生班について

伝染病予防法により各市町村に設置義務があった（3万人に1班程度。例えば川崎市の場合は七つの保健所に各衛生班があり、1班5～6人程度、多いところは10人位いたのではないかと）

衛生班員は行政（市町村）の吏員であるが、臨時雇員も多かったように思う。（Q．後の失業対策、雇用促進の意味もあったのでは？ あったと思う）

側溝など、週に1回薬を撒く仕事（実務）だけをしていても、長い間、仕事を続けるうちにベテランとなって、熱心な地区組織へ呼ばれて夜になってから指導しに行ったりするようになった。この衛生班員の指導をやっていたのが政令市の保健所の環境衛生監視員である。

法的背景

明治30年、伝染病予防法により「衛生組合」が設置されたが、昭和22年の年ポツダム政令により解散命令。GHQにより新しい衛生班の組織化（6人1組からなる9000組、5万4000人が訓練を受けた）。当初のプランでは人口2000人に1班を設置し、割り当てられた地域の全ての人家を毎週訪問。昭和23年までに人口1万5000人に対して1班まで削減、占領が終了するころには常勤として3039人、検査官として7000人程度。

（「戦後日本の医療改革」、「DDT革命」より）

5．保健所環境衛生監視員について

環境衛生監視員は担当地区の窓口であり、鼠害虫対策の第一線の責任者であったが、その後は営業6法を背景とした業務が主となり、廃棄物に関する業務も増え、業務内容が拡大してきた。当時資格要件が厳密ではなく、学歴もそれほど高くなかった。食品衛生監視員には資格要件があったが、当時は法的な背景が異なった。一つの保健所が複数の市町村を管理していたが権限が小さく、住民が指導を求めてきたらやらなければならないといった程度だった。

Q：例えば「あの村の状態が悪いようだ」と判断したら自主的に行ったりしていたのか？

監視員個人の裁量に依存する面が大きかった。保健所と住民の間にクッション役として市町村役場の衛生係があった（事務職で専門職はいなかった）

Q：そもそもあまり専門性がない人を技術職として雇って、仕事をして行くうちに専門家として育てて行くという方法は開発途上国にも応用できるのではないかと？

数年のOn the job trainingの後、国立公衆衛生院（現保健医療科学院）に派遣されて3ヵ月間の環境衛生監視員トレーニングのコースを受けることになっていた。そのカリキュラムの中には衛生行政学、衛生教育学などが含まれ、住民との関わり方についても盛り込まれていた（本省時代に地区衛生組織の育ての親であった橋本氏が行政学部長だったので）。住民組織への対応、という言葉が入っていたかどうかは不明であるが。このような過程でプロフェッショナルになって行くが、資格が取れるわけではなく、給料も変わらない。

6．国民運動としての実態

- ・ 全国環境衛生大会：第1回昭和32年4月24日（水）東京千代田区大手町（産経ホール）10時～13時。この時に「日本環境衛生協会」が厚生省の外郭団体として創設され、大会開催について中心的な役割を担った。現在も第50回として続いているが、内容は時代とともに変化し、三つあった分科会の中から「ネズミ衛生害虫駆除地区組織活動」という部門が20年位前に無くなった。

法的背景

1946.5.4.覚書「昆虫及びねずみ族駆除取り締まり官の任命」。担当官の設置と昆虫ねずみ族駆除計画の策定。

1946.9「環境衛生監視員設置要綱」= 暫定措置のまま法的統一にはついに至らなかった。

1947 年ごろまで役割は伝染病予防のための駆除が中心。

1948 年ごろから広く環境衛生の一環として保健所業務の中に位置づけられるようになる。

1950 年ドッジラインによる財政の極端な緊縮政策により、昆虫ねずみ族駆除作業員などに対する国保補助が地方財政平衡交付金へ切り替えられ、以後衰退。

(以上、「戦後日本の医療改革」より)

Q：外郭団体は開発途上国でいうと NPO にあたるようなものか？ どうして行政が直轄でやらず、わざわざ外郭団体を創設しなければならなかったのか？

行政組織はまず人手不足だ。例えば、厚生省で昆虫担当技官は一人しかいない。しかも兼務だ。また予算もない。予算無しでは事業はやれない。やりたい、あるいはやらねばならない事業を団体にやらせる。日本環境衛生協会も発足時は厚生省の中に机を置いていた。雑用までやってくれるわけだ。団体は民間だからかなり自由にやれる。業界は賛助会費を拠出し、これが団体の基金となる。今から考えると、「カとハエのいない国民運動」に協会の果たした貢献は大きい。この協会にはいなかったが、団体は役所の天下り先にもなる。他に、関連団体としては DDT 協会や全国地区衛生組織連合会などがあつた。例えば、DDT 協会 = DDT を製造販売していた会社(製薬会社)によって構成される業界団体(BHC 協会も同様)。現在は日本防疫殺虫剤協会に脱皮した。

Q：新生活運動も閣議了解という形で同じころに始まっているが、関係はあつたのか？

まったく接触が無かつた。正に役所の縦割り行政であつた(新生活運動 = 1 年間は文部省、その後総理府が管轄。社会教育主事と関連があつた)。名前は知っていたが、当時私の視野には入っていなかつた。後日報告書を見て初めて知つた。あんなに活発に活動していたとは知らなかつた。しかしながら、住民組織内では新生活運動協会などとはメンバーがオーバーラップしていてポジティブな意味でニアミスしていたと思う。今にして思えば、村の集会に出かけて行くと、新生活運動の議題も一緒に看板に書いてあることがあつたように思う。

Q：「カとハエのいない生活」運動は学校との関わりはあつたのか？

国としての大きな流れの中では必ずしもあつたわけではない(社会教育主事との関係は無かつた)。新潟県などは、子どもたちに虫の観察などさせて発表をさせるなど、積極的に取り組んでいた。

7. 住民組織について

Q：運動の受け皿としての住民組織は千差万別だつたと思うが(感謝状贈呈者名簿の所属地区組織参照)、技術者から見て差はあつたのか？

技術者から見れば、どの住民組織もマクロには似たようなものであつたと思う。ポイントは、全住民の自発的意志に基づくものであつたかどうかである。これを行政がうまくサポートしているかどうかだつたと思う。引きずられてやっているというのではうまく行かない。やはり自発的意思と自覚が無ければ早朝から作業には出られない。

Q：衛生害虫対策はその性質上同一地区で一斉に対策を行うことが重要だと思うが、共同作業に出て

こない、やりたがらない住民にはどのようにアプローチすればよいか？ 保健所も何もできなかったのではないかと。むしろ住民組織の中に何か仕組みはあったのか？

行政としてインセンティブは無かった。住民組織でも無理な場合も多い。傍から見てうまく行っているところというのは、リーダーシップの強い人がいたように思う。今でもそうだと思う。まとまったアクティブな町内会には熱心なリーダーがいる。行き過ぎると、村八分にされるのが怖いなんてことにもなるが、結果的にうまく行っているようだった。住民の「自覚と認識」の足りない部分を拾い上げて行くのが住民組織であり、参加しない住民を巻き込むのは人望と強制力のあるリーダーがやるしかない。今でいう「カリスマ」、当時の言葉としては「キチガイ」ももちろん空回りしていたり、独り相撲になったりしている人もいたが、行政としてはうまく活用していたと思う。

- ・ 横浜市瀬谷在住時の経験から（昭和 30～40 年ごろ）自治会の衛生部長をやっていたがあまり苦労した覚えはない。衛生部員は何人かメンバーがいたと思うが、自分が名乗り出てやっていたと思う。その時代の一つの典型的なスタイルであった住民組織を作って人数や活動内容を書いて市に申請すると、薬剤が無料で貰え、機材が貸与された。衛生部長はその薬剤を保管し、2 週間ごとの撒布の日にはそれを水で希釈して、ブロックの住民代表が取りに来て、各自家の前を掃除した後、薬剤を撒くシステムになっていた。対象戸数 120 戸ほど。希釈する技術というのは特に専門的なものではなかった。婦人会が中心になって取りに来て、担当地域に配っていたので、婦人会がとても仲良くなり、エンパワメントされた。自分はカリスマのあるリーダーではなかったのでサボった人はそれっきりだったと思うが、何回かに 1 回は来ていたのではないかと。
- ・ 横浜市泉区の場合（現在）ここは新開地で、5～7 年前に外からやってきた人ばかりの町内会であるが、非常にやる気がある。役員をやっている人は毎年変わらない常任で、いつも町のことをよく考えている。何かあれば今後も地区組織として十分に機能できると思う。見捨てたものではない。ヒトスジシマカが多いので町内会でどうにかならないかという話し合いがもたれている。都内では「役所に何とかしてくれ」という問題でも、ここでは町内会で解決しようという土壤があるように思う。

Q：「市に申請して薬をもらおう」という技術は住民が元々持っていたものなのか？ また、薬剤を貰うことがメリットであるという衛生教育が住民の間に行き届いていたのか？

そうだと思う。チラシが来たので、自然に町内会レベルで「申請してみよう」という話になったと思う。このシステムは、市町村にとっても地域の住民組織率を上げるというメリットがあった。とにかく形の上で組織率数を高めることが重要で、組織率が上がると地域担当者の業績になるというインセンティブもあった。

Q：このようなインセンティブは開発途上国では機能しないのではないかと？

グアテマラではほとんど機能していなかったと思う。実は、GAS (Grupo de Accion de Salud) という日本の地区衛生組織にあたるようなものがあった。しかし、一部の地域に限られ、なかなか全国的な広がりまではいかなかった。GAS は厚生省の一人の職員が熱心に作ってできた組織である（地域行政ではない）。 Dengue 熱対策プロジェクトでは、飲み水を貯めたドラム缶が媒介蚊の発生源となっており、発生を防ぐのにこれらのドラム缶に蓋をすることは家庭の主婦でなくてはできない。これを GAS が担っていた。

Q：運動がうまく行く秘訣はなんだったと思うか？

基本は住民の意識改革と実践意欲。それと環境衛生監視員等の行政の末端組織の指導力であったと

思う。また、県レベルで施策として取り上げるには県の係長クラスの関心と能力も大きなキーファクターになっていたと思う。

Q：「方法論についてはどうしても引っかかるところがある。大政翼賛会⁴⁾的だ」と話されているのはどの辺りか？住民参加型というのが本物ではない、ということか？

いや、住民参加型というのは本物だった。公式には、昭和30年代当時の住民組織率は70%と報告されていた。しかし、これは建前で、実際は反対の20-30%程度だったのではないか。まあ多く見積もったとしても50%程度ではなかったか。大政翼賛会的といったのは、国民の大多数が整然とこの運動に参加したといわれるが、実態は、その組織率は公表の数字通りではなかったということ。「これに従って行かなければ隣近所とうまくやって行けない」という体制順応型の参加をしていた人も多かったのではないかということである。引きずられて参加することによって不都合があったわけではなく、むしろそのような人々も結局成果を享受しているわけである。問題はその過程に少し問題を残しているのかなと考えている。

Q：住民が「自覚的に動く」ことは可能だと思うか？そのためにはどの層にアプローチするのが有効だと思うか？すなわち、住民のリーダー層に納得してもらって進めるのか、住民参加やエンパワメントの観点から貧しい人も含んだ全員を説得してから進める方が良いのか？

効率としてはリーダー層にアプローチする方がよいと思う。

8. モデル地区方式について

モデル地区方式の発想は、全県的に一斉に運動を展開することは物理的に困難なので、数ヶ所をモデル地区に指定し、ここに人的・物的資源を投入して事業を実施し、出来上がったところで他の市町村に経過や結果を展示して参考にしてもらおう。こうして第2次モデル地区ができ、さらに3次、4次と地域を拡大して行こうというものであった。モデル地区は模範地区とも呼ばれ、県段階、国段階で表彰される機会が多く、多くの見学者が訪れた。

⁴⁾ 1940年、10月、第2次近衛内閣の下で新体制運動の結果結成された国民統制組織。

鯉淵学園調査報告

【鯉淵学園 15 - 1】

日 時：平成 15 年 5 月 29～30 日

場 所：茨城県内原町鯉淵，財団法人農民教育協会「鯉淵学園」

お話を伺った方：K o - A 氏，K o - B 氏（当時の担当教授），K o - C 氏（当時の担当教授），K o - D 氏（当時の担当教授）

議事録担当者：西潟範子

鯉淵学園で実施している青年海外協力隊の技術補完研修と学園教育について

1．はじめに

茨城県内原町鯉淵にある財団法人農民教育協会「鯉淵学園」は，4 年制の農業・生活の専門学校として，日本の津々浦々の農業・農村で活躍する人材を育成している。教育内容は自然・農業・食物・健康を範疇に総合性の発揮と人づくりを目指している。

JICA 委託の青年海外協力隊技術補完研修もこの学園の持つ教育環境と資源のすべてを活用して行われている。同研修の委託は 1980 年当時，東京農業大学宮古亜熱帯農業研修センター・八ヶ岳中央農業実践大学校と同学園の 3 ヲ所で，同学園は 1993 年から「育成研修者」の正式委託を受けている。

同学園は委託以前から広く海外に目を向けた研修を受け入れている。例えば病害虫，土壌分析，野菜栽培など個別依頼の専門項目（3～8 ヲ月間）の技術補完を行い，各研究室がそれぞれの専門指導を行ってきている。

研修生らの評価は高く「現地ですぐ役立った」など好評である。帰国時には学園に足を運んで活動成果を報告している。

なぜ日本農業の指導者育成が，広く海外の研修生の受け入れとなり，研修生に愛され・信頼され，心の拠り所になってきたのか。学園の設立から教育活動の経緯を以下の調査の中から探ってみる。

2．学園教育と人づくり（自然と向き合う実践教育は開発途上国での頑張りを産み出す）

同学園は終戦直後，閉所となった満蒙開拓義勇軍幹部訓練所の土地と施設を受け継いだものである。全国農業会の組織的な尽力で 3 年制の高等農事講習所として 1945 年 11 月 1 日に発足した。約 140ha に及ぶ土地を（現在 50ha）活用，戦後の何も無い中で食糧難時代を切り開く実践的農業指導者の育成を目指した。初代所長（学園長）には小出満二氏が就任された。小出氏は民主的な思想の持ち主で自由な教育の大切さを行政にも働きかけ，学園教育の根幹を確立されている。1955 年に就任の 2 代目鞍田純氏は初代の教育思想を継承，新しい農業を開く農民指導の理論と行動のあり方を構築した。以来，実践的農業指導者の育成が今も脈々と受け継がれている。

青年海外協力隊技術補完研修もこの学園教育の根幹に触れ，農場実習，自治運営の栄養部など，種播きから食卓までの食農教育の一環を学び，体験している。また，学園は今日も施設整備は十分でなく，創意工夫の手づくり教育をしている。この純農村で自然と向き合う実践教育環境は，開発途上国での困難辛苦の中でも対応策を産み出す素地を兼ね備えていると思われる。

3. 海外研修生受け入れの関わり

1960年4月、農林省からの依頼により、エジプト・カイロ大学から5人の研修生を受け入れた。当時は酪農場長の久米小十郎教授が中心になって対応。通訳はついて来たが初めてのことでゆえ、受け入れ施設、専門用語の理解、意思の伝達など研修生との意志疎通がうまく行かず、「研修内容に満足が得られない」と6月までで研修を中断した事例がある。学園教育だけでも多忙な指導陣を研修に向けながら、双方とも満足の得られない結果になった。

2年後の1962年、国はこの反省を踏まえ、内原町内原に国際農業研修センターを設立、新たな対応策にでた。これを機に鯉淵学園からは各専門分野の教授らが出講して、研修支援に当たった。日本農業論、土壌肥料、病害虫、農協論、普及論などの講義と土壌肥料分析、病害虫の診断実験など、かなりの部分の指導を分担した。このような協力体制は、1980年に国際農業研修センターがつくば市に移転するまで18年間続いた。

同センターの移転後は、一部の出張講義や鯉淵学園の視察、学生交流程度に減ってきている。こうした数々の協力による授業調整は、学園の自由な人間教育に由来し、何とかしてやれるように心を広げ、対応してきた成果であると思う。

以下、記録に残る事例を中心に聞き取りしたこと紹介する。

1) 初期の研修(1955年から)

(1) 中国から米国国際協力局の要請で受け入れ。

内 容：「日本における戦後の農業改良普及事業の考え方と具体的活動方法」

期 間：1958年8～9月の約3週間および1959年9月の約3週間。

対 象：台湾の農業普及関係者20人。

(2) 南米諸国移住者研修。農林省振興局の要請で受け入れ。

内 容：農業の基礎研修と鍛錬的農業実習など約3ヵ月。

期 間：1959年6月～翌年10月までの1年4ヵ月間(女子寮を空けて宿舎にした)

参加者：常時10数名から20数名で、家族連れが主流。

2) 国際協力事業団(現・国際協力機構)に対する協力

内 容：カンボジア農業技術センター建設に伴う技術支援。

期 間：1960年12月から約1年8ヵ月間。

派遣者：作物学の酒井博教授。

3) アセアン東南アジア諸国連合から(国際農業者交流協会の依頼)

内 容：基礎・専門研修8ヵ月間の内、学科研修2～3週間。農家実習の後、学園で講義、実験・演習に入る。トマト、ナス、スイカ苗の接ぎ木。稲作、野菜、花卉の病害虫対策と栽培管理。乳牛・肉牛・鶏の飼養管理。農業経営計画や記帳。市場流通。実験(最初3～4年間は農場実習も受け入れ)。女子は前述の希望科目受講の他、調理・食品加工、衣服構成、母子保健、食品衛生、居住環境などの講義と実験。別に約1週間の家政関連研修も実施した。

対象国：タイ、マレーシア、インドネシア、フィリピン。後でペルーも加わる。

参加者：例年70～80人。内女子はタイ、インドネシアのみの10人。

4) その他、1991年(平成3年)、中南米移住者の子弟を受け入れ、農業経営・営農設計を指導。さらに下記の国から研究者などを受け入れて、開発途上国の農業の支援に協力している。

* 1988年7月、ペルーから野菜栽培、土壌分析学の研修受け入れ。

- * 1990年4月，ネパールから作物栽培学の研修受け入れ。
- * 1990年8月，ネパールから植物病理学の研修受け入れ。
- * 1990年12月，ペルーから試験研究研修生受け入れ。
- * 1992年7月，パラグアイから栄養学の研修受け入れ。
- * 1995年，フィリピンから家畜飼育学の研修受け入れ。

4．青年海外協力隊技術補完研修について - JICAの育成研修者 -

協力隊員適格者として合格したが実務経験不足のため，長期技術研修が認められた「育成研修者」として年間を通じた四季の農業を体験する（1993年から期間1年）。

1）学園での農場実習

- * 実習が第1目的で，技術を学ぶとともに労働の質と量を体で覚える。
- * 必要な技術習得は反復実習することで身につける。
- * 大面積圃場の作業体系は，経時的に捉え，作業を経験的に身につける。
- * 花卉や野菜の施設栽培は，圃場の人為的な環境コントロールを覚える。
- * 永年作物のナシ，ブドウ，リンゴ，ウメ，クリなどの果樹は，花芽形成の前年の気候を探り，季節をまたいだ植物生理の一貫を理解して作業をする。
- * 実習は「とにかくやる」という姿勢を貫いて実施する。

2）プロジェクト学習（すぐに役立つ，多品目・多様な複合技術を修得）

青年海外協力隊員が派遣される地域の問題や環境の実情に応じて課題を選択する。

- * 畑作，養鶏は自給自足畑や庭先放し飼い養鶏もあり，プロジェクト課題で明確にする。
- * 開墾により栽培田畑を作る方法（開墾実習）。
- * 質の良い堆肥やぼかしの作り方（発酵有機質肥料）。
- * 保温・保水・土づくりに役立つ籾殻クントンの作り方。
- * 殺菌剤の役割を担う木酢液の採取方法。
- * 経営費の低減と快適作業のための農具の手入れ方法。
- * 動力機械のガソリンエンジンの整備（小型2サイクルエンジンで実習）方法。
- * 手軽な自転車のパンク修理や修理工具の使い方など。
- * 栄養価を高める野菜の調理方法。
- * パン・麺類・漬物・燻製などの農産加工技術の習得。
- * キノコや野菜，生食用植物の安全でおいしい食べ方知識の習得。
- * 間伐材木などを利用して鶏小屋など小屋作りの方法（小屋組実習）。
- * 農家の廃鶏を譲り受け飼育実習し，屠殺と解体・燻製作りなどの加工方法。
- * 冬はキャンパス内の杉や檜，サワラで材木を作り木工建築の方法など。

3）2年目以降の研修支援の展開 自主販売活動の組み入れ -

研修内容・方法はほぼ1年目に準じ一貫させ，主体性を重視した。その結果，プロジェクト圃場が拡大し，生産量が増大した。調理教材以外の生産野菜や卵は購買部前で販売，お客さんの反応と需要と供給関連の実践学習をした。病害虫が付いていると苦情を貰ったり，生産物を紹介する名前の違いを指摘されたりとの学習もした。

- * 販売金額は種子代金や研修生独自の企画に自主運営され，毎年数万円が有効な教材費として活用

されている。

4) 協力隊派遣国や派遣任務の情報収集, 変更・その他の対応

受け入れ2年目以降は毎年, 開発途上国の現地にいる協力隊の先輩と情報交換を行い, 旅立つ前に彼らの任務を事前に把握する資料を収集している。

派遣後, 事前に示された任務と異なる勤務内容や職場, 地域が違うなどと苦悩する研修生に対し, 彼らが求める新たな情報資料や技術資料を送信して問題解決を支援している。「どうしたらよいか」の便りや悩みも学生同様に親身に対応している。

協力隊事務局に改善要望を提出し, 1997年度(平成9年)から派遣国を決めた上で9ヵ月間の技術補完研修に変更されている。

現地からの活動報告や多くの情報を受信, 後輩研修生の研修に活かしている。

5) 特別講義と特別実習

技術補完研修は農場実習とプロジェクト学習を研修骨子にしているが, 研修生の希望により特別講義, 特別実習も行っている。「海外農業事情」, 「作物保護」, 「土壌診断」, 「農業普及」, 「農業経営」, 「農村社会」, 「食肉加工」, 「野菜調理」, 「農産加工・粉食加工」, 「エンジン整備」, 「野生植物観察」, 「家畜飼育」などの分野を各先生方の協力により, 調整している。

6) その他(資格取得)

青年海外協力隊員の研修生にも受験期のタイミングに合わせ, 可能な範囲で大型トラクタや建設機械の運転ができる「大型特殊自動車運転免許」や「農業改良普及員」の資格などを取れるように配慮し, 希望者は受験して取得している(派遣先により資格にこだわる国もあるという)。

5. 研修生の動向と学園への里帰り

1) 研修生のその後の動向

青年海外協力隊として技術補完に参加した青年の多くは帰国後, 農業自営, 青果市場, 外国物産見本市, 食品会社, 福祉施設(介護の道)などに就職している。一部は再度協力隊員となって開発途上国に行く。また, 一部は大学・大学院に進み, 医学や農学, 看護学など身につけ, 新たな道を探っている。他に NGO の活動を目指す者もいるが, いずれも学園に近況報告などを兼ねて時折訪れる。学園の自然環境が心の拠となって訪ねる者が多いという。

2) 卒業生の渡航先

学園卒業生で青年海外協力隊員として派遣されるのは近年減少し, 卒業年次に1名から2名程度である。1970年代まで毎年数名の参加希望があり, 海外で活躍する学園卒業生も多かった。現在は40人(2003年調べ, 過年度実績を含む)。内訳は米国・南米など10人, 東南アジアなど17人, アフリカなど13人で, 約半分が青年海外協力隊での参加と見込まれる。補完研修生の多くは2年で帰還し, 若者の目で, 新鮮で身近の情報を運んでくれる。これを学園教育の海外情報の機会として, 交流を勧めている。

6. 学園での補完研修生交流の意義と評価

研修成果は帰還した研修生によって「向こうで自信がついた」など言葉で語られ, 技術研修の効果が行動意欲に現れたことなどが報告されている。特に多種の作物を栽培した経験がおぼろげながらも身に付いたという。例えば1996年の6人の研修生はキビ, アワ, ヒエ, ゴマ, ハトムギ, アズキ, チ

コリー、ビート、ケール、スベリヒユ、コールラビなど 81 種類・156 品種を栽培した。他の年次も 40 種以上は栽培しており、多様な産物との出会いを体験している。また、開発途上国の農業規制や環境保全型農業に対し、手づくりの発酵有機肥料の堆肥やぼかしの作り方の技術などが有効に活用できたという。

青年海外協力隊 OG の K o - E さんは、かつて栄養士として開発途上国の栄養改善などに貢献してきた。現在、農業生産を学ぶために農業経営科学科に編入学、新たな海外協力支援の道を目指している。K o - E さんによれば「学園での勉強は食糧の生産構造がわかり、作物の栽培と食材の現地供給や加工などがわかりやすい。食糧生産物の安心・安全、日本の自給率向上の課題も再確認できた」と食農一環教育の利点を評価している。新たな国際協力についても「自分の考えをここで確かめる事ができた」と、学園での学習に意欲を燃やしている。

また、教務部長として公務多忙の中でも、学生・研修生の話に耳を傾ける K o - A 氏は、青年海外協力隊の補完研修は、「学生にグローバルな時代と日本農業の大切さといった両方の考え方を育てている。本来の担い手教育は、実践を深めて世界的な広がりを作り、今後の方向性を理論構築して行かねばならない」と、補完研修で「新たな日本農業の担い手像を輝かせたい」と話している。

7. 総合所見

今回の調査で、学園関係者の工夫努力が研修内容の充実を期したものが多く感じた。自校の学生で手一杯の教育機関の多い中、学園も同様だが、学園の持つ自由な教育は、広く海外研修なども受け入れ、学園教育の全人的な教育の糧として取り込んでいる。学生らの情報交換、体験交流もその一つである。時代を先取りした食と農、環境保全の教育は 21 世紀の課題にチャレンジしている姿といえる。

この流れの根幹は、初代学園長小出満二氏の姿勢によるところが大きいと思う。同氏は東京帝大卒業後、イギリス・ドイツに留学、ゲッチンゲン大学で農業経済学を研究。シドニー大学客員教授から文部省に入り、九州帝大、東京農工大の学長などを歴任して退官されている。本来の教育は、長い目で見た人間育成で、自らが自らを育てる自由な教育を目指して鯉淵学園長になられたと聞いている。新渡戸稲造・内村鑑三に師事、生涯を自由主義教育に徹したクリスチャンでもある。多くの優れた人材を世に送り出していると聞いている。

学生の信望も熱く、自らの著書「デンマルク農民教育」などで西洋思想を汲む長い目でみた人間教育を行政当局にも提言したと聞く。小出学園長は自分が今までに行ってきた教育の集大成を図ろうと取り組まれ、実践されたという。

2 代目学園長の鞍田純氏は、農村指導者の教育一筋に農民指導の理論と行動を学問的に追究、指導者のあり方を「流れに棹さず筏士の役割」と方向づけ、農民主体の一貫した指導理念を構築された教育者である。これらの教育思想は学園教育の根幹を成し、現在 7 代目の井上隆弘学園長時代も変わらず、鯉淵学園に受け継がれている。

しかし、あまりにも純粋な人間教育が先行し、経済や経営面の対策が後回しになり、今日的な経済優先社会に対応できない要素も含んでいると嘆く卒業生もいると聞いている。絶えず寒風にさらされ続けた経営の中で、数々の努力をされてきた恩師のご苦勞は計り知れない。日本の経済成長とともに農業構造は変化し、農業の厳しさは益々拡大している。学園の人づくり教育は、人間の尊厳を求める 21 世紀の社会にこそ輝いて欲しい。

今後は、日本人の暮らしの見直しや日本農業・農村の価値づくりに期待したい。日本の食糧自給率

向上対策への踏み出しこそ、学園の持つ農業活性化の底力を発揮できるのではないかと考える。

JICA 青年海外協力隊の技術補完研修も、学園教育の創意工夫と畑から食卓への食農一元化で地についた研修ができたと思う。学生自治会・栄養部の自主運営も食農一体の教育の成果であり、開発途上国に役立つのではないか。ここで学ぶ学生らも相互に切磋琢磨し、今後の日本農業の発展と海外協力を多大な成果をもたらすものと確信するに至った。

[付 記]

調査にはK o - A 氏(現教務部長)が1993年から6年間補完研修を担当された鯉淵学園教育研究報告14号(1997年度発刊)を基に研究成果をお聞きした。

その他の事項は当時の担当教授、K o - B 氏、K o - C 氏、K o - D 氏の3氏とK o - A 氏の同席でお聞きした。学生さんにも今後について意見を聞き、いろいろお世話になりました。農業の厳しさと学園経営の厳しさ、教職員スタッフの教育への熱い思いも同時に感じさせて頂きました。本当に有り難うございました。

(14期卒、元新潟県生活改良普及員)

【鯉淵学園 15 - 2】

日 時：平成 15 年 5 月 29～30 日

場 所：(財) 農民教育協会 鯉淵学園（農業・生活専門学校）

お話を伺った方：K o - A 氏：教務部 部長・教授 技術士（農業部門・有機農業）

K o - F 氏：農村社会研究室 教授 / 筑波大学講師 農学博士

K o - B 氏：名誉教授（植物病理学）

K o - C 氏：名誉教授（土壌学）

K o - D 氏：畜産学 同窓会長

K o - G 氏：名誉教授（栄養学）

調査者：西潟範子，伊藤ゆうこ，太田美帆

議事録担当者：太田美帆

内 容：鯉淵学園概要把握，次回の調査打ち合わせ，情報/資料収集

日程および協議内容

5 月 29 日（木）

時間・面談者	協議内容等
13:50	学園着（友部 13:36 着フレッシュひたち 25 号）
14:00 K o - A 氏 於：講師控室	挨拶 我々から今回の訪問目的および検討会の趣旨説明 鯉淵学園（以下，学園と略記）概要 <ul style="list-style-type: none"> ● 学園史に関しては，平成 7 年（K o - B 教授教務課長時代）にまとめた『五十年史』に詳しいので参照のこと（図書購入）。 ● H 7 年に 4 年制に改編。S 58 年に改良普及員の受験資格が「大卒」となり，3 年制短大扱いだった学園の卒業生 / 見込み者の受験資格が無くなってしまった。そこで S 60 年に学園は 1 年の「普及専攻科」を設け，学生は本科 3 年プラス専攻科 1 年を受講することにより，普及員の受験資格が得られるようになった。しかし，これにはいくつか問題点があったため，H 7 年に全学科 4 年制に改編した。 ● 各種学校 / 専門学校扱いだが，教育の中身は大学レベルだと自負している。人事院規則による待遇面では H 13 年にようやく 4 大卒と同等の扱いになった。 ● 研修科が JOCV の技術補完研修，アセアン農業者，小学生の農業体験学習，就農準備などの研修も受け入れている。 学園の特徴 <ul style="list-style-type: none"> ● 農業と生活の 2 本立て。互いの存在が互いを支えあっていることを学ばせる。「食農一貫教育」，「種播きから食卓まで」。 ● 実技・実験・実習が多い。「実務の体得」。 ● 寮生活「生活実習の場」（1 年生は全寮制。2 年生以上は通いも認めているが，数年前までは 4 年間全寮制だった）。 ● 学生の自治「自分の生活は自分です」。 ● 学生が全国から集まっている（現在は 40 都道府県から）。自然と「異文化体験」の場を提供している。 ● 環境保全巡回型農業，有機農業，バイオテクノロジーの実践。 農業経営学科の目指すもの <ul style="list-style-type: none"> ● 生産から消費者の手に届く（流通，加工，貯蔵など）までわかる農業士の養成。 生活栄養科学科の目指すもの <ul style="list-style-type: none"> ● 食材の生産現場がわかる栄養士，畑を歩き回る栄養士の養成。 学生の特徴

	<ul style="list-style-type: none"> • 素朴で真面目，純真。 • 寮生活を通し，わいわいしながらお互いの違いを感じ，認め合うことを学んでいる。 • 「生活実習」が行き届いているからか，学生のアルバイト先からも「鯉淵の学生は礼儀正しく，気が利く。茨城大学の学生より鯉淵の学生が欲しい」といわれることがある。
<p>15:00 K o - B 氏 K o - C 氏 K o - D 氏 於：同窓会館</p>	<p>K o - B 氏プロフィール 75 歳。福島県いわき市出身。植物病理学専門。S21 年から 57 年間鯉淵に勤め，この 3 月に退職。教務部長もした（通称「歩く学園字引」）。4 期生（「鯉淵学園」として募集した学生としては 1 期生）。S20 に現東京農業大学へ入学する予定だったが，東京は焼け野原で何もないので東京行きはやめ，当時農業の士官学校のようなイメージのあった鯉淵学園に興味を持つ。食費，寮費，授業料も無料なのは魅力だった。3000 人も受験希望者がいると聞きびっくりした。1 次試験で 600 人に絞り，2 次試験で 150 人が合格した。同じ学校から 20 人受けて自分しか受からなかったし，これだけの倍率なのだから，大層良い学校なのだと思った。S21 入学。同期の仲間は授業ストライキなど色々したので，卒業したのは 118 人。卒業時に国家公務員上級職（現在の国家一種）を受験したところ，九州の農業試験場行きを命ぜられたので気が進まず断り，そのまま学園に残った。その後何度か各地の研究所への転職を誘われたが，なんとなくその気にもなれず結局どこにも行かず鯉淵に勤めた。（K o - B 氏は読書会をしていて，西潟さんはそこでお世話になった。）</p> <p>K o - C 氏プロフィール S25 年入学。S27 年 3 月卒業，7 期。その前は普及事業の後援団体に 3 年勤めた。土壌肥料専門。この分野は段々細分化され，数年前から環境の要素が強くなり，いつの間にかメインになっている。S35～55 の間，内原に JICA の農業研修センターがあり（S55 つくば市に移転），そちらでも土壌学を教えていた。40 歳くらいの時インドネシアの「食糧自給運動」の専門家として 5 ヶ月間派遣された。プロジェクトではフィリピンの IRRRI で開発されたインディカ米を普及していた。日本から肥料を援助し，それを農民に貸し付け，それで増産させ，収穫で返済するという計画だったが，農民は収穫まで食うものがない。借りた肥料を売ってその日の食糧に代えていたので，計画は失敗だった。滞在中につくば JICA の農業研修センターで教えた研修生の一人に会ったが，日本の研修経験を武器に出世コースを歩んでいた（失望したというニュアンス）。今時の若いものにも色々な人がいる。鯉淵の同級生の孫が入園してくるといっているので何人かと一緒に自宅に招いたところ，「じいさんの話を聞いて普及員になりたくなった」という。親ときちんと話ができていてる学生もいることを嬉しく思った。</p> <p>K o - D 同窓会長プロフィール S27 年入学。9 期。畜産学専門。寮に入る前は厳しい上下関係や規律を覚悟していたが，鯉淵の寮は全く自由で先輩も厳しくなく，こんなんでいいの?! と驚いた。しかし，この頃から腕力の強いのが威張りだし，少々乱れてきた。卒業してそのまま学園に残り，農場，畜産農場を中心に学園に参画してきた。11 年前に定年。同窓会にはずっと関わっている。同窓会長は協会の理事として学園の運営に携わることができる。ボランティアだが。西潟さんが学生の頃は「歌声」クラブを主宰していた。ロシア民謡などをコーラスしたり，フォークダンスを踊ったり，とても楽しかった。多少労働組合のような雰囲気もあった。西潟さんは S31 年入学。14 期。</p> <p>昔と変わったこと</p> <ul style="list-style-type: none"> • 寮の管理が不十分。自分の部屋はとても綺麗にしているのに，外から入る時どこからが廊下かわからないほど汚い。廊下を土足で歩く。公共の場の掃除がされていない（K o - D 氏）。 • 自治会の質。リーダーシップが取れない。会議でルールを決めたとしても，それを守らないし，守らせない。他人に干渉しない（K o - D 氏）。

	<ul style="list-style-type: none"> 自分本位で社会に関わりたくない人が増えた (K o - C 氏) 学生が変わったのは世の中が変わったから。S20~30年代は農業に希望があったが今はない。若い人を責められない。 <p>鯉淵の卒業生はなぜ出世しない？</p> <ul style="list-style-type: none"> 個性の強いが多い。一匹狼的。ここを出ても優遇されないのだから自分でやるしかないと思っている。名声を望むような人がいなかった。S20年代の体制の整わない時代は自分の力でやるしかなかった。S30年代になってそういうがんばりの出番がなくなってきた (K o - B 氏) 「上は知,下は力で御勲受け」(?)と冷やかした。農村で地道な活躍をするよう教えているが,目立ったことをするには教えていない (K o - B 氏) 卒業生の進路: 自営と民間の農業従事者が少し増えている。代わりに公務員, 団体職員となるものが減っている。 卒業生本科累積 5000 人, 選科 300 人ほど。この他にも通信教育などもあり, 同窓会名簿に載っているのは 6000 人くらい。
17:30	夕食 (K o - B 氏が学食を案内)
18:30	学内散策 (女子寮, ハウス, 他)
19:30 K o - F 氏 K o - A 氏 学生 4 人 於 同窓会館	<p>懇談会</p> <p>テーマ: 日本の農村と国際協力</p> <p>新潟県出身の学生 2 人と, 農業経営課の学生 (青年海外協力隊栄養士 OG, 活動中に栄養士でも農業を知る必要性を痛感し, 帰国後食農一貫教育を実践している学園を知り, 入学), 技術補完研修中の青年海外協力隊野菜隊員候補生の計 4 人が集まり, 国際協力について, 農業協力について, 農業の未来について等々, 夜半まで活発に議論を深めた。</p>

30日(金)

時間・面談者	協議内容等
9:00 K o - F 氏	図書館見学 (農業, 農業普及, 生活改善, 茨城県に関する図書資料多数。学園史, 卒業記念誌等に当時の様子を知る資料価値の高い写真資料が多く残っている)
10:00 K o - G 氏 於 K o - G 氏宅	<p>K o - G 氏プロフィール</p> <p>T5年生まれ。87歳。食品加工。いつだか忘れたが満蒙幹部訓練所時代から鯉淵にいる (K o - G 氏夫人情報: 結婚がS19年。それより前から鯉淵にいた) 訓練所を卒業後, 農林省の農業報徳連盟 (?) の友人に頼まれ, 小隊 30 人くらい引き連れて満州に半年の約束で水田を作りに行き, 共同炊事を担当した。ソ連との国境沿いに水田を作るのは, ソ連の戦車が通れないようにする作戦だったと後で知った。4月に満州に渡り 10月の末に北京経由で帰国した。雪は降らないが地下 1m くらいまで凍る, ととても寒い所らしい。10月でもとても寒かった。共同炊事は石炭を使って 500 人分の食事を作らなければいけなかった。炊事は当番制にして回した。鯉淵に戻ってきて, 実践学園で栄養を教えさせられた。当時は水稻栽培をしていた。満蒙開拓幹部養成所にいた K o - D さん (学園 2 期生: 兵隊に行っていたから勉強しなかった) の母が川田村婦人会長だった。(その縁で?) 村に出かけて行って農家の主婦達に集団給食 (共同炊事) や料理講習会をよくやった。マヨネーズやサラダ (ジャガイモ, ニンジン, サツマイモの葉に果物を混ぜてマヨネーズをかけたもの) をとても喜んで食べてくれた。進んでいる農家は自分で野菜栽培するようになった。戦後 3, 4 年間は料理講習をいっぱいやった。県の栄養士さんと一緒に保存食の展示会をやったりした。訓練所時代から栄養学を教えていた。65歳まで鯉淵に勤めた。退職してからも 70歳まで鯉淵に週 1 回くらい通うつもりだったが息子の事業の会計係をすることになって, 結局退職後は通っていない。学生係を 15 年務めた。生まれは北海道。木挽きの両親が御料林を 5 町歩もらって開墾。20 町歩まで広げた。祖父母に連れられて山形で木挽き生活。高等学校 1 年までいて, 北海道に戻り, 畑 20 町歩を耕した。第 2 回栄養士国家試験で資格取得。25 年間茨城県の栄</p>

	<p>養士会の会長を務め、勲5等受賞。栄養改善学会会員。初代生活科は宮崎のサカイムツコさん（配偶者も鯉淵卒。県でも活躍）と山形の遠藤さんの2人だけだった。教室もなく、長屋の寮の空いている部屋で授業した（西潟さんはスイトン、鳥の血でコメを蒸し・揚げた物、ピーナッツの砂糖まぶし菓子などを教えてもらったことを覚えている）。給料のことは考えたことがなかった。家を顧みる暇がなかった。いつの間にか奥さんが勝手に保険の外交員を始めていた。</p> <p>学生係</p> <p>15年間学生係をしていたので、自分の仕事は5時からだと思っていた（「いつでも学生係は明かりがついていて、先生が黙って話を聞いてくれた。よく通った。」西潟）。全寮制は難しいし責任がある。自分が退職してから下宿も可能になった。</p> <p>鯉淵で楽しかったことは何ですか？</p> <p>学生が可愛かった。親を離れてくる子たちだから、寮では自分が父役であり母役だと思っていた。学生は300人。ぼろい寮で今と比べて設備はひどかったが、古い学生は昔の方がよかったという。</p> <p>鯉淵で大変だったことは何ですか？</p> <p>学生の親代わりにならなくてはいけない。入学直後、実家に帰る学生が毎年2、3人いた。しっかりしている子はすぐ分かるから、そういう子に頼んで面倒を見てもらった。掃除の仕方から教えた。学園長に行政の人になるか、学者になるかによって学園の運営が全く変わってくる。学園長の人選は学園側に意見はなく、農林省が任命する。その度に鯉淵の組織も変わる。学園は学校である。才能によって昇進しなければおかしいと思う。人はよそに出なきゃだめ。キッチンカーは茨城県で1台持っており、環境衛生課がS30年代に7、8年やった。S20年代は材料、食材がとにかななかった。カボチャが配給となり主食だったこともある。この配給を少しでもたくさん貰おうと、水戸の食糧庁食糧課を訪れ、頭を下げて粘り勝ちで学園の人数分の配給を貰うことができた。ナタネを栽培して油も採った。ダイズから豆腐も作った。段々技術ができてきて、自給できるくらいはできた。</p>
12:30	帰学園。昼食
13:00 K o - F 氏 K o - A 氏 於 同窓会館	青年海外協力隊（JOCV）/ 海外からの研修生関連 1. JOCV 関連 <ul style="list-style-type: none"> 野菜隊員になる者は多い。その他、食用作物、農業機械など。村落開発は一人だけいた。 JOCV 圃場は JICA の依頼で有機栽培を実践している。 JOCV 隊員は農業の専門家じゃない。農業を通してのボランティアである。いろいろな技術が必要。例えば課題を見つける力、人づくり、ものを考える力、応用力など。普及員の資格のない人はこの機会に資格取得を勧めている。 2. ASEAN 研修、他学園生の海外研修 <ul style="list-style-type: none"> 国際農業者交流協会が派遣してくる ASEAN からの農業者に対する短期の学科研修を実施している。1回 15～70人。当時東京農大の院生で通訳として来ていたタイ人が、帰国してタマサート大の教授になり、鯉淵の学生がタイでファームステイするプログラムのホストになっている。さらに去年は彼の学生を2人、学園の経費で日本に呼んだ。今年も続ける予定。 たまに JICA や県から依頼があり、数ヶ月間の研修を実施している（この聞き取り内容の詳細は西潟氏報告を参照のこと）。
14:40	学園発（友部 15:00 発フレッシュひたち 36号）

大分県・山口県同行報告
マレーシア国サバ州農村女性地位向上計画調査 / カウンターパート研修

同行日程：2003年6月29日～7月5日

報告者：太田美帆 レディング大学大学院

1. 大分・山口視察プログラム

日時	時間	場所	内容	宿泊先
6/29 (日)	18:00 20:20	羽田発 大分着 連絡バス		大分市内
6/30 (月)	10:00 12:00 13:29 14:46 15:00	ホテル発 大分県国際交流センター 昼食 大分発 豊後森着 玖珠町	講義：「一村一品運動に果たす女性の役割」 講師：OY-A専務理事 特急ゆふ3号 視察：メルヘンローズ	大分
7/1(火)	8:30 10:00 12:00 13:00 14:30	ホテル発 大山町農協 木の花ガルテン 天瀬町	講義：「大山町農協の概要」 視察：農協関連施設 視察：畦道グループ食品加工組合	別府市内
7/2(水)	9:30 10:00 12:00 13:30 15:23 16:31 17:05 17:25	ホテル発 別府市 昼食 別府市 別府市発 小倉着 小倉発 小郡着	視察：竹細工伝統産業会館 視察：温泉熱花卉研究指導センター ソニック 38号 ひかり 386号	小郡
7/3(木)	8:40 9:00 9:20 11:50 13:00 14:30 16:30 17:30	山口県庁 県政資料館 美祢町 山口市 ホテル着	挨拶 講義：山口県の農業および改良普及事業の概要 講義：農林部における体験交流支援組織の概要 山口県政の歴史と地域産物等の状況 農家生活改善士 三嶋八重子氏宅訪問 市内観光 香山園，ザビエル記念聖堂	山口市内
7/4(金)	8:30	ホテル発		東京都内

	9:30	周南市，大潮 田舎の店	普及活動の実際(地域づくり， 農村女性グループの起業活動)	
	11:30	昼食		
	13:30	周南市 和田農産物加工所		
	15:15	技術・情報推進室		
		山口発	普及員研修の概要	
		小郡発	JR 普通	
	19:25	宇部空港発	連絡バス	
	20:50	羽田着	JL 468	
7/5(土)	10:00	JICA 東京国際研修センター (TIC)	リフレクション 大分・山口視 察結果に関する協議 (宗像，太田)	TIC
	13:00		終了	

2. 参加者

研修生 Mr. Mohamad Dos bin Ismail 農村開発公社

Mr. Mohamed Dandan bin Alidin 農業省

Mr. Subiah Hj. Laten 主席大臣府女性開発局

同行者 松村みか コーエイ総合研究所(6月29日～7月4日)

宗像 朗 アジア生産性機構(6月31日～7月1日および5日)

太田美帆 レディング大学大学院(6月29日～7月5日)

3. 訪問先での協議概要

1)(財)大分県国際交流センター

(1) 対応者：OY-A氏(専務理事)

OY-B氏(国際協力推進員)

(2) 協議内容：パワーポイントを使った専務理事によるプレゼンテーション。

(3) 大分県概況：人口110万(全国人口の1%)。何においても「中堅クラス」の県。県内58市町村のどこを掘っても温泉が出て，地熱が豊富。森野率は74%で全国平均64%より高い。0～500mの標高で農業。「がんばれば何でもできる」環境。

(4) 一村一品運動発足経緯：1975年，当時通産省役人だった平松守弘氏が副知事として迎え入れられる。副知事時代に各市町村を回り，住民の声を拾い「悪いのは行政」という苦情や，自分たちでどうしようという主体性がなく，住民の行政依存度が高いことに気付いた。'70年代は農村労働人口が都市に流れ，国の補助金が削減されていた頃。地方ががんばらなくてはいけない，住民にやる気を起こさせなければいけないと考えた。大分には物はあるのに磨きがかかっていない，何とか盛り立てよう一村一品運動をデザインした。1979年に知事になると運動を開始した。58市町村長を集め，運動理念を説明。全市町村を回って住民との直接対話により，運動は補助金事業ではないこと，一生懸命やる人を県が支援するというスタンスだということ強調。県庁内部で一村一品勉強会(時間外活動)を立ち上げ，職員の横のつながりを持たせ，士気を高めた(OY-A専務理事は当時専技として県庁におり，企画部過疎地域対策を担当。一村一品運動は農村女性対策の課題に直接繋がるためやりがいがあると思い，本来の業務の傍ら運動の立ち上げにも邁進した。県庁内の勉強会は職員の横の繋がり強化に大変役立った)。

(5) 一村一品運動 3 大原理 :

ローカルにしてグローバル

自主自立・創意工夫

人づくり

(6) 一村一品運動における県の四つの支援体制 :

技術支援 : 試験研究

指導機関の充実 : 全国初の「農産物加工指導センター」設立。例えば特産品のカボスを使って 30 種類以上の加工品を開発した。これらの技術指導も行っている。全国唯一の「温泉熱花卉研究指導センター」他、六つの研究・指導施設がある。

流通促進, 販路拡大, 研修, 勉強会, 交流会, 品評会の支援

融資 : 経営主しか融資を受けられなかったが, 実際活動をするのは女性や高齢者なので, 彼らでもアクセスできる融資制度を整えた。女性でも借りられる融資は全国で大分が初。

(7) 一村一品の概念 : 一村一花, 一村一魚, 一村一料理, 一村一文化と, 人でも産物でもいわば何でもありで, 自分の町の自慢はいくつあってもよい。名前から誤解を招きやすいが「一村に何か一つだけ」ということでは決してない。その地域で誇れるものを, 地域が認定し, 県に登録する。市町村レベルにおける審査を県は信用しているので, 県レベルで認定審査はしない。1980 年の登録数 143 だったのが 2000 年には 329 と 2.3 倍に増えた。58 市町村で割ると平均一村五品登録していることになる。売上は 2000 年 1300 億円で, 480 億円だった 1980 年と比べると, 3 倍になった。

(8) 住民に対する技術支援 : 「豊の国づくり塾」, 「農業塾」, 「商い塾」, 「IT 塾」など 20 以上の「塾」がある。出資は県, 運営は各自治体, 県民は誰でも参加でき, 塾費は無料。県民のほとんどが塾を既に卒業したので, 現在は事業を縮小している。農村婦人に対する経営専門学校を設立し, アメリカ研修なども実施してきた。リーダー的女性で組織する「一村一品は女に任せろ! 女 100 人会」など住民のネットワークづくりにも積極的である。一村一朝市・ふれあい市活動も盛んで, 地産・地消, スローフードなどの取り組みも大分県では 20 年前から着手しているといつてよい。

(9) 「里の駅」: 国道沿いに設置が条件となる国土庁の「道の駅」とは別に, 県単事業でどこにでも建設できる「里の駅」を展開している。生産, 販売の場としてだけでなく, 町の人と村の人を繋ぐ役割も果たしている。施設は農協や生活改善グループが建て, それを県が宣伝・広報する。

(10) 外国人に対する一村一品運動研修 : 研修を頼まれることは多いが, イメージや資料が一人歩きすることで運動の理念を誤解されたくないのので, 大分県で直接 (国際交流センターが実施する) 指導を受けて欲しいと思っている。そのために JICA と連携して, 1 ヶ月のアジア一村一品集団研修コースを設けている。フィリピン人に対しては 1 週間の特別コースがある。平松知事はマグサイサイ賞を受賞。海外からの視察も多い。マレーシアのマハティール首相の来県は 1991 年。その後も来日の度に平松氏と会合を設けているようだ。タイへは一村一品運動支援チームが派遣され, 「タイにも『里の駅』ができた」。

(11) 大山町の取り組み : 地理環境に恵まれず, コメと畜産の貧しい村だった。1961 年に「ウメ・クリ植えてハワイに行こう!」をスローガンに, ウメとクリを中心とする特産品作りを目指し NPC “New Plum and Chestnut” 事業を始めた。ウメは品質日本一となり, 大山ブランドがよく売れるようになった。現在はエノキ, シイタケ他 30 品目以上を生産し, 高品質多品目栽培で成功している。全農家に後継者がいるという唯一の町ではないか。サラリーマンや役場職員になるよりも農業をした方が収入も

よいし、研修であちこちに行けるので農業者になりたいという若者が育っている。人口 3996。

(12) 湯布院町の取り組み：日経新聞の経済関係者に対するアンケートで「モデルにしたい村」の全国一位に選ばれた（二位は大山町）。温泉と景勝の観光の町。1979 年には 190 万人だった観光客数が 2000 年には 380 万に伸びている。自然の特長を活かした音楽祭や映画祭（町には映画館もないのに）などのイベントを企画し人気を呼んでいる。商品として売り出す物がないための工夫である。「牛食い絶叫大会」とは特産牛のバーベキューと大声大会を併せた催し。多額の経費も要らないし簡単に思えるが、この地域でしかできないことが組み込まれているのだから、このイベントだけ真似しても意味がない。牛の値段が上がって牧場主が牛を購入できなくなったため、「牛一頭牧場」として町の人に牛を買って貰い、牧場主が育て上げるというシステムを湯布院で作った。利息還元として BBQ をしたり、コメや野菜を分けたりと町村の交流に取り組んでいたという背景から考え出されたイベント。

(13) 女性の起業：個人は 68，グループでは 210，計 278 は全国 3 位，九州では 1 位。出荷組合などのグループもたくさんある。

(14) その他：外発エネルギーに頼ると、工場が倒産すれば失業者だけが残る。内発的にがんばれば、技術は残る。またがんばれる。だから地域産業をしっかりと育てよう！「ムラの生命を都市のくらしへ。豊かさを循環させたい。」

表2 外発エネルギー製品と内発エネルギー製品の比較表

品目	100g 当たり単価 (円)	エネルギー種別
自動車	200	外発エネルギーによって作られる
焼酎	240	内発エネルギー ↓ }
ミカン	300	
シイタケ	1,700	
		地域を活性化 させるほうが 儲かる!!

(15) 所感：さすが海外からの研修員を多く受け入れているだけに、一村一品運動や県の資料が英訳されているので活用できる。

OY-A 専務理事は、生活改良普及員として村回りからそのキャリアを始め、専門技術員として県庁で県内各地の普及員の指導にあたり、そして農政部企画課において過疎地域対策に取り組んでいる時に一村一品運動に出会い、事業の立ち上げから運営までを手掛け、現在は海外からの研修員の受け入れだけでなく開発途上国の地域開発アドバイザーとして海外出張も多く、大活躍されている。農村から県、海外までそれぞれの地域や行政レベルに対する理解が深く、さらに村人の目線と行政の視点の両方から農村開発を語るすることができる希少な存在であると思う。その豊富な経験から、研修員からのあらゆる質問も、その意図を理解し的確に答えていた。内容の充実したプレゼンテーションだっただけに、研修員はもっと質問をしたかったようで残念がっていた。

また、OY-A 専務理事はバイタリティに溢れる方で、柔軟性もあり、豊富な経験と併せて「生活改善」と「一村一品」の両方を語る専門家として素晴らしい方だと思う。JICA を通して、また、県単独で農村開発プロジェクトや国際交流事業をタイ、マラウイ、シンガポール、台湾などにおいてもいろいろと手掛けておられるようなので、是非とも今後、情報の提供等期待した。我々の知らない「生活改善」と「一村一品」のプロジェクトが見つかるだろう。彼女がアドバイザーになっているプロジェクトは是非フォローしたい。今月出張するマラウイ案件はまだこれからプロジェクトを展開していく予定（2003 年 7 月 18 日現在）

2)(有)メルヘンローズ

(1) 対応者：OY-C氏(代表取締役)

OY-D氏(総務・企画)

(2) 協議内容：ビデオ2本鑑賞。JICAが10年前に作ったビデオに5分くらい、「夢を語る農業」(大分県制作か?)では15分くらい紹介されている。

(3) 社名の由来：玖珠町は日本のアンデルセンといわれる久留島武彦生誕の地で、メルヘンの里と知られている。その玖珠町のバラだから。

(4) 会社概況：昭和42年に花卉栽培を開始。平成2年メルヘンローズ生産組合発足。バラ園は標高530m。9500坪。バラ出荷組合の8農家が5年越しで法人化に尽力した。平成7年有限会社を設立。従業員33人。出資金の1000万円を平成14年までに倍増した。年間400万本出荷している。出資農家の8人には役割分担があり、役割に応じて給料も違う。信頼し合っているからこそうまく行っている。

切り花の出荷のみから育種、新品種開発へと徐々に事業を拡大してきた。昭和時代はヨーロッパ産ばかりが日本に出回っており、ヨーロッパの真似をしていれば儲かった。しかし、一方安い品では中国産にかなわなくなってしまった。よって「ここ産」の代替品のない品種改良に力を入れている。

物が足りない時のモノ作りと、物が溢れる時代のモノ売りは違う。インフラが整えばモノは溢れてくる。違う戦略を立てた人だけが生き残れる。

「日本一」に止まらず、メジャー進出を夢見ている。

(5) 質疑応答(Q:質問, A:回答, O:意見)

Q - どのようなものが売れるのか。どのようにマーケティングするのか。

A - これまでの30年の経験から売れ筋がわかってくるようになった。品種改良は簡単、すぐに新しいものはできる。ただできたものが売れるかどうかは経験でしかわからない。ヨーロッパでは一輪ものが今でも人気だが、日本では小ぶりのタイプが人気。バラの好みは同じ日本人でも世代によって随分違う。市場の動向はいつもチェックしている。ネーミングは売れ行きを左右するほど重要。「バラ新品種命名本」なるものがあり、まだ使われていないバラ名として相応しい名前の候補集があるので、大体それを参考に命名する。同じ名前が既に存在しているといけないので。

(6) 所感：目の前のバラがあまりにも美しすぎたからか、「バラ」に関する目先の質問が多く集まった。組織づくりや組合活動や法人化など、こちらが意図した内容に踏み込めなかったのは残念である。訪問時間は限られているため、研修員には訪問先概要などは事前に知らせておき、質問のポイントを予め意識させて視察に望むことは大事だろうと思った。

3) 大山町農業協同組合

(1) 対応者：OY-E氏(参事)

(2) 協議内容：「瞳は未来へ」大分県大山町農協作成ビデオ鑑賞。英語版43分。最新版(大山農協は昭和30年から6年おきくらいに2000万円かけてプロモーションビデオを製作しており、希望者が多いので一本1万円で販売しているがこれもほぼ売り切れている。大山の四季を撮りたいのでどうしても製作に1年はかかり、経費がかさんでしまう)。

(3) ビデオの内容：大山農協の直売所「木の花ガルテン」は、町内、福岡市内に2店舗(車で1.5時間)、大分市のスーパー内に1995年にオープンし、計4店舗経営している。農家が自分で価格を設定、ディスプレイまで責任を持つ。安く、新鮮で直接買えることが人気を呼んでいる。

ウメの品質の確かさは既に有名になった。1993年エノキ栽培20周年、ナメコ栽培10周年記念式典を農協で開催。エノキの出荷高は九州一。各農家が役割分担をし、共同で栽培にあたっている。

1994年に加工施設竣工。ウメを用いた加工品など地元のもので商品開発している。梅蔵物産館では農協組合員の物産を販売。半地下の梅蔵には梅干樽が貯蔵されている。年に1度ここをコンサート会場と利用している。音響もよく、また、コンサート後となりのカフェ（農協経営）においての会食とチケットとのセットが人気でリピーターも多い。

農協は寝たきり老人の入浴介助サービスも行っている。

別府市に組合員が自由に使える「大山町民の家」があり、温泉を引いているので利用者は多い。

中学3年生の修学旅行は韓国。在韓日本人のホームを訪問した。中学1年生の希望者はアメリカ・アイダホ州で20日間のホームステイを体験した。イスラエルのキブツとは25年間姉妹都市であり、町民がキブツ体験に出かけたりしている。

1961年からNPC運動が始まった。第1次NPCは「New Plum and Chestnut」「ウメ・クリ植えてハワイに行こう」、第2次は「Neo Personality Combination」「豊かな人づくり」、第3次は「New Paradise Community」「住みよい環境づくり」と発展してきた。

大山町に住む外国人も増えた。4000人の住民のうち70%がパスポート保持。これまで懸命に働いてきた農業者は効率のよい農業により、余暇ができて遊び方が分からない。よって農協が色々な遊びや学習の場を提供してきた。室内のシイタケ栽培により天候に左右されなくなったので、収入が安定するようになった。

地域の植林も皆で協力する。毎年のクリスマスパーティーも既に恒例となった。ウメ祭りは県外からもたくさんの方が訪れる。

30才以上になったウメの老木は切り倒し、「ウメの木工工房」でお椀や家具となって生き返っている。

(4) OY-E 参事の説明：40数年前は日本一貧乏で条件の悪い村だった。自然条件にも恵まれない。この状況から抜け出すために知恵を出し合った。その結果、どこの村でも過疎化が問題のようだが、大山では40年間農業者人口が変わっていない。なぜ過疎化が起こるのか。若い人の農業離れは、サラリーマンは月収とボーナスがもらえ、土日の休みがあるからだという。では、農業もその仕組みを整えればいい。大山では現在週休3日の農業である。今まで遊んだ経験がないから時間を持て余す人が出てきた。そこで農協に遊び専門の企画官を置いた。農業でも月収が入り、余暇時間がある、夢がある。この基盤が整ったので若者は農村に残るようになった。

「ウメ・クリ植えてハワイに行こう」のスローガンは、農民の経済活動への参画を促すためのもの。また、農業者の教育レベルは一般的に低かったが学習意欲を高めるため、ハワイ旅行を農業者のための体験学習の旅と位置づけた。やはり外国に行くインパクトは絶大であった。町民の7割が既に海外に出たことがある。海外で新しい果物や野菜、文化に触れ、音楽・美術から刺激を受けるようになった。この町ではピラミッドを作る（住民の階層化となる）様な優等生教育はしていないが、底辺に光を当て、落ちこぼれを作らない教育を実践してきた。

海外旅行費は約20万円。毎回20~30人が参加するので、一緒に行く人同士で連帯保証人となり、農協から無利子で借り受ける。利息は遊びを企画する文化部が補填。5年で返済。月収からではなく、春のウメの収穫で2万円、秋のクリで2万円、キノコで2万円というようにボーナスから返済している。

リーダーが将来へのビジョンを語り、住民に夢と希望を与え、やる気を起こさせることが秘訣である。

(5) 質疑応答 (Q: 質問, A: 回答, O: 意見)

Q - ローンの仕事は?

A - 大山町の農業者は、少量生産、多品目、高付加価値作物の栽培をし、日本の農業者取得の平均より3倍近い月収を得ている。年収1000万円を超える農家が200戸以上ある。収入も安定している。春秋に収穫できる作物からの収入をボーナスとして、そこからローンを返済できるように計画している。個人への融資は3000万円まで。グループへの融資は1億円まで。現在会員の農協貯金の総額が76億円あり、郵便局や一般銀行にも預けていると思うので、この町の農家の貯金総額はかなり高い。

Q - 組合員は?

A - 正組合員691, 準組合員300。この村の7割が組合員である。

Q - 農産物は農協に全て出荷しなければいけないのか?

A - そのような義務はない。しかし、農協がしっかりしており、有利に売れるので99.9%は農協に出荷される。これまで農協が流通にも力を入れてきたので「大山農協」ブランドが出来上がり、農協から出荷した方が農民にも有利。生産は第1次産業、加工は第2次産業、流通は第3次産業と呼ばれるが、大山農協はこの全てを担うので「第6次産業」と呼んでいる。収益率の高い活動を推進してきた。未利用資源の活用においては、カキやイチョウ、カバの葉、クリのイガの販売を始め、料亭などに一枚100円で売れている。クリのイガは実よりも3~5倍で売れる。

Q - 経営システムは?

A - 正会員全員参加の総会を年に1度設け、皆で話し合う。理事会役員は8人。互選。理事長の任期は3年。監事4人。人口4000の村の平均農協職員数は20人位だが、大山には230人いる。人件費だけで年間6.5億円かかるが、職員と住民のふれあいを密にし、信頼関係を築いてきた。

Q - 政治との関係は?

A - 農協はあくまで経済団体であり、行政からは独立している。法人税として年間4000万円納める他に、1000万円町に寄付して貢献している。

Q - このビデオは素晴らしい。マレーシアに持って帰りたいのだが。

A - 視察に来た人は必ず欲しがるので、英語版は売り切れている。日本語版は1本だけ残っているが。

Q - 有機農業の制度は?

A - 27年前に有機農業委員会を作り勉強を始めた。大山農協独自の規格を設定している。農業を重労働から快適労働へ代えて行くため、大山全体を有機農業にして行く予定。

(6) 所感: あまりのサクセス・ストーリーにみな「素晴らしい」の一言だったようだ。「この話を職場で話しても誰も信じてくれないかもしれない。せめてあのビデオを皆に見せてあげられればいいのだが」というのはもっともな意見である。研修員は農協運営だけではなく直売所の野菜の陳列方法、パッケージ、産物の付加価値のつけ方など幅広く興味を持ったようだ。OY-E参事のような人を短期専門家でもいいので組合運営コンサルタントとしてマレーシアに来て欲しいという意見があった。

4) 農事法人 畦道グループ食品加工組合

(1) 対応者: グループメンバー4名(自己紹介なし。代表者という取り扱いなし。名刺もグループ名のみ記載)

(2)協議内容:28種類のカリントウの生産販売。今は30グループ以上がカリントウを作っているが、ここがカリントウ加工の元祖。7人のメンバーにより、毎日4人ずつのローテーションで加工にあっている。メンバーは53歳から73歳。農協や里の駅からの受注販売も受けている。

昭和54年から生活改良普及員の掛け声でグループ作りを始め、58年に加工場を建設してはや20年になる。皆農家の主婦なので、家に負担がかからないように気を使っている。

「働く時は労働者、売る時は経営者」、「一人一人がメンバーで、一人一人がリーダーである」、「チャンスをもたらしたらチャレンジして、チェンジしよう」、三つの気「元気、根気、やる気」、五つのベルを鳴らせ「しゃべる、食べる、比べる、調べる、差し伸べる」、新しいものに会ったら必ず自分の身の回り比べ、ノウハウや技術を調べよ。そして教えてもらうばかりじゃだめ、何か自分も貢献せよ、というスローガンを掲げている。

定年がない、自分たちの会社だから皆で楽しくやっている。

国際交流センターのOY-A専務理事が生活改良普及員時代にこのグループ活動に火をつけた。あの人の出会いから全てが始まった。あの人は仕掛けるのがうまい。責任をちゃんととってくれるから、私たちも安心して飛び出せた。そして一村一品の波に乗った。知事への恩返しだと思って活動している。

(3) 質疑応答 (Q: 質問, A: 回答, O: 意見)

Q - この施設は?

A - 国庫/県費/町費の補助事業と自己資金で整備してきた。調理器具はフライヤー、ミキサー、冷凍庫、ローラー生地成型機など。

Q - なぜカリントウか?

A - おやつとして作ったカリントウが懐かしい味・ふるさとの味と評判で、グループ活動資金として時々販売していたのを「これはいける」と思って事業化した。減反で栽培を始めた小麦の利活用のため、カリントウを思いついた。売上の最高時は年間3000万円くらい儲けたが、今は半分ほど。

Q - なぜ法人化したのか。

A - 資金管理がしっかりする。グループの時は10万円の税を納めなければならなかったが、収入が伸びたため法人化を決意した。普及所の指導で青色申告もしている。

Q - 家族の反対・協力は?

A - グループ活動を始めた頃は、家の中のことをきちんとやったが、外にも出してもらえるのが嬉しくてしょうがなかった。今は外のことばかり一生懸命なので、主人が「もう『家内』ではなく、『家外』だ」という。でも外に出してもらえるのだから、家のことはきちんとしようとして皆で決めているので、「外に出た日の方が夕食は豪華だ、サービスがいい」と喜ばれ(?)ている。女性が元気にしているのだから、家族から反対はない。

Q - 売上の分配は?

A - 加工・販売にあたる人には自給600円を支払い、後は事業費に回している。

Q - 後継者の育成は?

A - このグループの後継者としてではなく、別グループとして若妻会を育てようとしたことがある。わが家のコメ、キノコ、ワラビを使った山菜おこわやキノコおこわの技術指導をし、共同で「ふるさとの味レストラン」で出したところ、大人気だった。その資金を全て若妻会の活動資金としておこわ加工を始め、順調に行っていたようだが、メンバーが外へ勤めに出るなどしてしまい、今はやめてし

まったようだ。残念だが若い人には若い人の考えがあるのではない。外に働きに出る方が楽だと考えるのだろう。このメンバーは、自分の居住地内の加工所だから家のことと両立できるので大変よいと思っている。雨が降れば洗濯物をしまいちょっと家に帰れる。労働のローテーションも融通が利く。メンバーの半分が専業農家。

(4) 所感：農村女性が行政の支援を受けて、事業をここまで活発に展開していることに研修員は感銘を受けたようだ。「外」で稼ぎながらも農家の主婦として「内」の仕事もこなし、見事に両立させることができるとは、信じがたいようだった。家事と仕事の両立に関する質問がいくつかあった。

行政や補助金の「支援」を得て（決して行政主導ではない）、自分たちでできるスタンスで回りのリソースを有効活用して、女性が自ら起業化して成功した事例として、この小規模グループ法人は好例である。メンバーの方々がとても生き生きしていて素敵で、我々の訪問を歓迎しようという心意気が感じられ、嬉しかった。

5) 竹細工伝統産業会館

(1) 対応者：OY-D氏

(2) 協議内容：担当の案内で館内の詳しい説明を受けながら2時間かけて見学。ご好意で、触れてはいけないものにも触らせてもらい、写真もたくさん撮った。展示物の紹介を受けた。簡単な竹細工も体験した。2階のスペースでは県民が材料費の実費のみで参加できる、竹細工教室（年1回公募、1期10ヵ月）が催されており、20人ぐらいが箆などの作成に取り組んでいた。

(3) 所感：竹で編んだ箆が一つ何千万円とすると聞いて研修員達は目を白黒させて驚いていた。伝統工芸が高く評価され、保護されながら継承されていることを知った。箆、弁当箱、調理器具からおもちゃ、家具、帽子まであらゆる工芸品に竹が利用されており、真似のできそうなアイデアもあったようだ。

別府市内の土産物屋の商売を脅かさないため、産業会館では製品の販売はしていない。竹細工を含め、伝統工芸品一般の販売の工夫など、流通関連の話ができなかったのが残念だった。

6) 温泉熱花卉研究指導センター

(1) 対応者：OY-F氏（研究指導部長）

(2) 協議内容：一村一花マップ。これは市町村が「育てたい花」である。やりたいという声が市町村からあがれば、県が支援する。低金利融資など。施設の設立は1952年。3.3ha。

“Seeking for unknown nature of flowers” 英語のセンター紹介ビデオの鑑賞。15分。ビデオの製作は5～6年前。経済が下を向くと、花の売上も減少する。中国や韓国から安い花が入ってきたため、花栽培からの収入は益々減少傾向にある。オリジナリティを保持するため、県外にない品種開発に努めている。

(3) 質疑応答（Q：質問，A：回答，O：意見）

Q - 花卉の研究施設は他にもあるのか？

A - 各県に一つずつある。

Q - 温泉熱利用の利点は？

A - 熱がいつでもあり、枯れる心配は今のところない。環境に優しい。蒸気を使うが不純物が混ざっているためその除去に手間がかかる。配管パイプの中で小爆発を起こすので、年に3回くらいパイプ

の交換をしなければならない。もし蒸気が出なくなってきたら専門家に見てもらわなければならない。ランニングコストがかかるので、安定した価格で供給されている重油の方が使われており、一般農家にはほとんど温泉熱は利用されていない。世界に独特の地の利を活かすことにこの施設の存在意義はある。

Q - 花栽培農家数は？

A - 花専門農家は 100 戸未満。コメや酪農との兼業が 1500 から 2000 戸くらい。花栽培農家は総農家数の 6% くらい。

Q - ここで外国人の研修は受け入れているか？

A - モンゴルからの研修員を受け入れている。温泉熱に関してではなく花の栽培技術一般の研修である。

Q - 花の病害虫対策は？

A - 県内唯一の花卉研究施設なので、何か病気が出ると栽培者はここを訪れる。年間 200 件ほどの鑑定依頼がある。ここで分からないものは国の試験場へ依頼している。簡単な鑑定ならすぐに分かるが、平均 3 日、国に上げた場合でも 1 週間くらいで結果が分かる。その診断結果と対処方法を 1 枚紙にまとめ、依頼者に渡している。インターネットからも検索できる。鑑定は全て無料。

Q - 市町村の花はどのように決めるのか？

A - 栽培農家が話し合って市町村の花を決め、県に申請してもらっている。県が指定することはない。

(4) 所感：温泉熱が豊富にあるのに、ランニングコストがかかるため一般利用はされていないとはもったいない。農家にとってこのセンターの存在意義は、一般的な花卉栽培に関する技術指導、品種開発などのような。時間がなく、研究施設の見学はできなかった。

7) 山口県庁農林部

(1): Y-G 氏 (農林部長)

Y-H 氏 (審議監)

Y-I 氏 (経営普及課長)

Y-J 氏 (同課 農林技監)

Y-K 氏 (同課 農村生活班長)

Y-L 氏 (同課 技師)

(2) 協議内容：

Y-G 氏挨拶：女性が元気な山口県で、生活改善についてしっかり学んで欲しい。

研修員：マレーシアでも 1960 年から Home economics demonstrator が草の根レベルで活動していた。しかし、今は財政難のため農村の上層部をターゲットに起業化を支援している。

Y-G 氏：地域リーダーの育成として、ターゲットを絞るのは必要なこと。儲けてもらってトリクルダウン効果を期待するのがよいだろう。

Y-H 氏挨拶：農村女性・むらおこし推進室 4 代目室長 (初代は藤井チエ子氏)。当県では 1950 年から生活改良普及員を採用し、生活改善実行グループを通じた女性支援に取り組んできた。農業・農村の振興と地域の活性化を図るためには、農業従事者の 58% を占める女性の能力を最大限活用することが必要。農村女性の地位向上を呼び、能力発揮等に関する施策の総合調整を図り、農村女性対策を推進するため、平成 7 年に農林部にこの推進室が設置された。要綱設置による「部内室」扱いで、農林審議

監を室長とし、農林部7課の班長が室員を兼務し、農村生活班からは専任職員を置き、13名で構成される。

研修員：農林部の機構・組織図を知りたい（組織図を参照に各課名を英訳して説明）

Y-I氏挨拶：山口市は1300年から栄えた「教育と公務員の街」。全国の県庁所在地一人口が少ない。年間平均気温は18だが、夏は暑く冬は雪も降る。農産物生産の半分はコメ。農家戸数5万5000、そのうち80%が兼業、60%が65歳以上。若い人は職を求めて大阪、東京に出ることが多く、女性と高齢者が山口を支えている状況。

Y-I氏：県内には小規模経営が多く、1ha以下の水田が70%を占めるが、20~30haの経営もある。農業試験場で開発された「はなっこりー」は中国野菜のサイシンとブロッコリーの掛け合わせ。女性が開発。こういったここにしかないものをアピールし、市場価値を高めることが大事。農産加工グループは県内に200以上あり、朝市も3000ヵ所を超えるまでになった。子供の頃から土に触れさず教育のために、体験農園を小学校120校以上で実施。この数は全国平均より多い。農業者のための情報発信もしており、気象、病害虫防除情報などがインターネットや携帯からアクセスできるようになっている。県内の8農林事務所には170名の普及員が勤務している。専技は10人。Y-I氏もY-H氏も元普及方法の専技。Y-J氏とY-K氏は県内に二人しかいない2種で専技資格を持っている（食生活と普及方法）。今の普及員は企画・流通・販売方法・学校教育との連携まで幅広い課題に取り組んでいる。専技は技術開発と普及員の研修を担当している。農家の農業収入は総収入の20%に過ぎない。専業農家は3000戸くらいか。

Y-J氏：息子がIT関連会社の駐在でペナンに2年間いたのでマレーシアは3回訪問したことがある。その間、ホテルに日本食や寿司レストランができたので驚いた。また、スーパーで農産物の陳列の仕方が違うと思った。

Y-J氏：農村の課題は、男性や若者が外に出てしまうので農村に女性が取り残されていること、過疎化が進んでいること、地産しても地消できないことなど。健康で豊かな（経済面だけではなく精神面も）活力ある農村社会づくりを目指している。最近の主な取り組みは；

- ・ 家族経営協定の推進（女性が主体性を持って農業に取り組むためには、労働に見合った報酬を得ることが必要。家族内のルールを作り、生きがいを持って安心して農業に取り組めるように。）
- ・ 健康管理
- ・ 労働環境の改善
- ・ 日本型食生活の推進（昨今の西洋化された脂肪分の多い食事を見直し、日本型のバランス食を取り戻そうというもの。若い世代の体格は良くなったが子供の成人病が増えている。）
- ・ 農村環境整備（我が家の環境から集落の美化、地域の環境維持。農村と都市との交流のためにも。）
- ・ 高齢者対策（歳に応じた役割を發揮しよう。）

Y-K氏：女性農業者の年代別育成段階と支援事業について資料を基に説明。1993年「農家生活改善士活動促進事業」、2000-2004年「農業・農村男女共同参画推進事業」、2001-2003年「いきいき女性農業者育成事業」、2002-2004年「農山村のひと・きらめき発信事業」、2003-2005年「農村女性起業化ネットワーク推進事業」。

(3) 質疑応答（Q：質問，A：回答，O：意見）

Q - 若者のための対策は？

A - 若い人対象には技術指導が主。制度資金の特別融資もしている。4Hクラブ（会員200）で青年

の仲間づくりにも取り組み、技術・経営情報交換の場としても役立っている。農業者の所得が低ければ後継者は月収の望める安定したサラリーマン生活を志向してしまうので、県立農業大学校などで実践教育を通して農業の重要性を理解させようとしている。

Q - 農家所得をあげるための対策は？

A - 単価の高いものを栽培する。天候に左右されない施設園芸を推奨する（若者に人気がある）、新品種、希少価値の高いものを、チャレンジ精神のある若い人に取り組んでもらう。

Q - マレーシアでは野菜などばら売りが主。農家は質の悪いものも全て一緒に出荷してくるので傷みが早く、値が安くなる。市場が買わないことも多い。きちんとパッケージされているスーパーの野菜の方が値段は高くても陳列されている野菜の基準が高いので、消費者はスーパーに行くようになっている。現在取り組んでいる直売所での販売で農家の所得を上げたいのだが？

A - 仲介者を減らすためにも朝市など直売が有功。日本ではスーパーには無いばら売りや山売りが今見直されている。スーパーの規格に合わないような野菜も格安で人気がある。

(4) 所感：プログラム、会場場所、資料、昼食、写真撮影、移動、訪問先とのアレンジなど、全てにわたって受け入れ体制が整っており、その行き届いた配慮に感心すると同時に組織運営が非常に効率よく成されている印象を受けた。「行政官とはこのように動くものだ」と目の当たりにして、研修員も刺激を受けたのではないだろうか。また、呼び方、席順や配車などに強い階級制があることに気付いた。

発表の間にも質問がたくさん出たので、発表後質疑応答という形態をとらず、逐一質問を受けながら答えて行く形にした。3人とはいえ研修員それぞれの関心が違うので、多岐にわたる質問が出たが、資料で補足しながら一つずつ答えて頂いたので、研修員はそれぞれが満足できたととても喜んでいました。

農家生活改善士を Specialist と訳したため、専門技術員や改良普及員と混同してしまい、また、なぜ民間人（農家の主婦）が Specialist になれるのか混乱していたようだ。農家生活改善士の役割を説明し直す時、マレーシアの JKKK（農村開発員）との比較がわかりやすかったようだ。

8) ルーラルウエルカムセンター

(1) 対応者：Y-M氏（コーディネーター）

(2) 協議内容：地域の食文化や農林産物の活用の啓発および促進を行うために、平成12年に県農林部が設置。地域産物を暮らしに活かす知恵・技を持っている人を「ルーラルガイド」（375人認定）、そのような情報を求める人たちを「ルーラル体験隊」（714人登録）とし、両者の積極的な交流の場づくりを支援している。農山村の重要な担い手としての女性・高齢者の元気を発信し、都市生活者の農村に対する理解を深める（農山村の応援団づくり）ことにより、農山村の活性化を図る。

「ルーラルガイド」がイベントを企画し、その情報をセンターが発信する。イベント情報は毎月会員に送付、ニュースレターは年3回発行。

(3) 質疑応答（Q：質問，A：回答，O：意見）

Q - 「ルーラル体験隊」の登録者はどのような人？

A - 一般住民。県民なら誰でも。「自分で何かしたい」と思っている人。今は町に出ているけど、いずれは農村にもどりたいと思っている人。農村空間を共有したい人。農村の理解者を増やし、これをきっかけに都市の人がもっと村に行くようにしたい。村の産物を買ってもらいたい。登録料は無料。

Q - センターの運営形態は？

A - 現在は県庁に依存。将来的には NPO にしたい。県の事業費は削減されて行くし、自助努力が必要だと思うから。

Q - イベントはどこで実施するのか？

A - 基本的にルーラルガイドの地元。地域のもので、地域のものを作るから。畑や森林での材料集めから加工までを体験することが多い。

Q - 技術移転をしてしまうと将来的に商売の競争相手を育てていることにならないか？

A - 材料は全て村のものだから、よその人がやろうとしてもきっとできないだろう。起業のために技術を習いに来る人はいない。皆趣味と交流が目的で楽しくやっている。

Q - センター設立に際してどのような調査を行ったのか？

A - 朝市は 20 年、ルーラルフェスタも 10 年ほどやってきた。現在は朝市も 3000 ヲ所を超えている。地域に技術を持った人がいて、都市にそれを求める人がいることがわかってきた。都市の消費者から、買うばかりでなく作ってみたいという声があり、体験交流の場としてのセンターの設立を思いついた。(4)所感：都市と農村の交流のために、こういったセンターがあるとは素晴らしい、これは使える！という意見と、マレーシアにはまだ早いのではという意見があった。サバ州でも観光開発は進められているし、グリーンツーリズムは人気がある。しかし、サバ州では主に、外国からの観光客や首都など大都市の人を対象にしているためか、山口県では都市の富裕層だけではなく、同じ県内の一般の人々の交流のためにこの事業があり、それが成り立っているということに驚いていたようだ。また、収入を得るための手段としてではなく、単なる「趣味で」技術を習うということも新しかったようだ。

3 人ともこの事業には強い関心を示し、彼らにとって新しい概念だったようで多少補足説明する必要があったが、このセンター訪問に対する評判は大変よかった。

9) 農家生活改善士 (Y-N 氏宅)

(1) 対応者：Y-N 氏

(2) 協議内容：60 歳。70 頭の肥育牛を受託飼育。畜舎 600 m²、堆肥舎 450 m²。堆肥の製造販売も手掛ける。農業経営主体は夫ではなく本人。実労時間を 6 時間に設定。施設、機械装置による効率的な経営実践。繁忙期には地域内からパートを雇っている。生活と生産を分離。

昭和 48 年から河原生活改善グループリーダー、美祢市生活改善グループ連絡協議会会長を昭和 58 年からと平成 9 年からの計 8 年務め、現在は山口県生活改善グループ連絡協議会顧問、厚東川水系水質保全生活廃水対策指導員、美祢市農業振興協議会委員を兼任。昭和 62 年に農家生活改善士に認定された。

昭和 36 年に結婚、3 年後に肥育牛 5 頭導入。市場に牛を連れて行ったところ、ギンチク牧場株式会社の当時の社長にうちの牛を飼わないかと受託飼育の依頼を受け、昭和 40 年から 30 頭規模で牧場を設立する。この社長は飼育にも金銭面でもとても厳しい人だった。1 円の端数でもきちんとしてくれることで信頼関係を作り上げた。

最初の 2 年はうまくいったので昭和 42 年には 60 頭に倍増。しかし、手間も倍かかり、糞尿を処分するところもなく、集落の真中に畜舎があったので匂い・排水などの苦情が近所から出るようになってしまった。牛に餌を与えすぎて殺してしまうなどの失敗もたくさんした。この時、父や回りにももうやめたらといわれ悩んだ。けれども決意して昭和 50 年には畜舎を郊外に移転し 120 頭規模に拡大。堆肥の販売も始めて循環型農業に着手した。

嫁に来て家の中のことだけで精一杯で隣のお嫁さんのことも知らないような時期に、生活改良普及員が来てくれ「仲間づくりのためにグループ活動しよう」と誘ってくれた時は本当に嬉しかった。生活改良普及員に出会って世界が変わった。婦人会の貯蓄推進コンクールで表彰され、埼玉に（受賞のためか？）行ったことがある。とてもいい思い出。生活改善グループ活動は今でも朝市という形で続けている。集落環境点検も実施し、道路、集落排水の整備を提案、実施に移された。

平成6年、夫の公務員退職を期に作業支援と役割分担を開始。夫は一人息子で右のものも左に動かさない人だったが、布団干し、風呂沸かしなど簡単な家事をジャンケンして負けたらやる、というゲーム性を取り入れて楽しみながら参画してもらった。同時に「お互いいつ何が起こるかわからないから」と家族経営協定の意義を説明し、平成8年には県下初協定締結した。現在山口県で家族経営協定を結んでいるのは5万戸の農家中140戸とまだまだ少ない。

昭和63年にはフィリピン女性のホームステイを受け入れ、平成元年からは高校生の農業・農村生活体験学習ホームステイを引き受けている。

(3) 質疑応答 (Q: 質問, A: 回答, O: 意見)

Q - 受託飼育とは？

A - Y-N牧場は有限会社。機械・建物の設備は個人投資。ギンチク牧場株式会社から小牛を預かり1年半かけて成牛に育てる。牛の肥育費は1日1頭105円。つまりY-N牧場の受託飼育による月収は、105円×90頭×30日=28万3500円。餌、牛の薬、共済保健は委託先の負担。

堆肥の販売はY-N牧場の独立採算。牛の飼育料（油代、光熱費等）は月収から賄い、二つの会計は分けるようにしている。

Q - 結婚時80a持っていた水田は？

A - 人に貸している。一反あたり8~10俵とれるが、その1割を納めてもらっている。減反した田では野菜を作り、朝市で販売している。

Q - 家族経営協定の中味は？

A - (協定書を読み上げる)

Q - 作業の近代化、近代的経営とあるが、近代化とはどういうことか？

A - 男女平等にするとということ。

O - マレーシアではイスラム法典が一番重要で、その教えに忠実でなければいけない。家事分担、家庭内の収入を分けるなど、マレーシアで受け入れられるとは考えられない。

O - マレーシアは男性中心社会。男性には到底受け入れられないだろう。しかし、農家の休暇を定め、月収制にすることは見習うべきこと。

(4) 所感: 「受託飼育」の制度がマレーシアとは違うようで、説明に多くの時間が必要だった。この制度によって、女性一人でも60頭以上の牛を飼育できることに感心していた。また、「家族経営協定」の締結者に初めてインタビューすることができ、協定内容、協定までの道程、その目的など質問が多くあった。今回は夫婦間の取り決めだったため、ジェンダー関係の著しい変化をもたらすものとして、イスラム教家庭にはとても受け入れられないのでは、という意見があった。

補足：後日協定に関する“Promoting the Family Management Agreement in Japan”（農山漁村女性・生活活動支援協作成）ビデオを彼らに見せた。このビデオの中では夫婦間だけでなく、親子間の協定も紹介しており、家族経営協定は女性の地位向上のためだけの（男性を脅かす）ものではなく、農業者一般の安定的農業経営を目指す制度という理解に変わり、彼らはこれならマレーシアでも導入する意味があるという感想を持ったようだ。

10) 大潮田舎の店

(1) 対応者：Y-O氏（代表）

Y-P氏（朝市部会長）

Y-Q氏（世話役・加工部会長）

Y-R氏（加工部会会計）

Y-S氏（周南農林事務所農林部長）

Y-T氏（周南農林事務所朝市/農村活動支援）

Y-U氏（周南農林事務所農村振興課）

(2) 協議内容：大潮地区は標高300m。雪が30cmくらいは積もる。山林地で耕地は少ない。人口160人、80戸。平成元年活動開始、15年目。きっかけは余剰農作物の無人市（3ヵ月間だけ活動）。地域活動する男女30人で組織する潮路会のメンバーが材料と労働を持ち寄って、簡易直売所を建設。有志20人で「田舎の店」開店。平成3年に台風19号により倒壊。一時は落胆したが、数ヵ月後に皆でまた再建した。会員も徐々に増え、加工も始めた。Y-Q氏の倉庫を借りて餅、コンニャク作りを始めた。地産地消の試み。13年間がんばった。平成13年「高齢者・女性等生きがい発揮促進」事業の補助金を得て、施設建設の融資にあてた。建物は町のものだが、運営はグループに任されている。現在は「田舎の店」だけでなく、農協の「100円ショップ」にも商品を卸している。平成14年に店が新しくなって、新たな地域起こし活動も始まっている。

高齢者の技を都市の人に伝えたい。平成9年に小学校が廃校となり、子供のいる家庭は車で10分（7km）の町に越してしまい、この村には子供はいなくなってしまった。しかし、この店によって村は再び活気づいた。都市の人たちや、出て行ってしまった人たちを呼び戻すことが使命。それまでこの地区を守りたい。年間の売上1900万円。上昇中。

現在は豆腐、菓子（餅）、惣菜（寿司、炊き込み御飯）の加工を手掛けている。加工部門の会員は18人。年会費2万円を払えば誰でも加入可。地産地消にこだわっている。

交流部会は地域の環境点検をして、子供と同居家庭、子供のいない家庭、高齢者のいない家庭、高齢者の独居、空き家の数をそれぞれ調べ、地図にした。荒廃地、景勝地も調べ、地図に載せた。年に2回ほどだが独居老人にお弁当を届けている。夏には都市の人との交流会を設け、美しい自然を楽しんでもらっている。

(3) 質疑応答（Q：質問，A：回答，O：意見）

Q - マレーシアでも過疎化は深刻。使われなくなった農地が荒れている。農業の機械化もできないから、高齢者に農業ができず、田畑が荒れて行く。過疎化に対する具体的な対策は？

A - ルーラルフェスタを始めて9年目。ホテル祭りなど毎月イベントを催し、街に出て行った子供にも戻ってきて手伝ってもらっている。子供に親の働きを見せる。車で10分の鹿野市や40分の徳山に出ている人が多いので、定年後は地域に戻ってくるだろうと期待している。人は循環する。それまで

土地を守る。農村には定年がないからいつまでも働ける。

Q - この店の運営形態は？

A - 会員組織の任意団体。会費を払えば誰でも会員になれる。

Q - 会員は女性だけか？

A - 日々の運営はグループ員の女性だけ。会員は男女。諮問機関として「大潮地区活性化推進協議会」がありこのメンバーは男女。

Q - 加工食品の調理はどこで？

A - 保健所の許可があるので、許可をとってあるこの加工所で作ったものだけを販売している。許可申請には生活改良普及員が助言する。

Q - 商品ラベルに記載することは？

A - 加工品には生産者の名前、住所、製造年月日、納品日、原材料、商品名など。これは保健所の指導で、加工品には記名しなくてはならない項目が決まっている。加工品以外は規定がないので、野菜には今のところ値段シールを張っているだけだが、いずれは生産者の名前を書いたラベルを作りたいと思っている。

Q - 何歳以上が高齢者？

A - 65 歳。

O - 交流部会の取り組みは素晴らしい。子供をもっと産んだらいいのに。マレーシアでは人口が足りなくて消費者が不足している。政府は現在の 2500 万人から 7000 万人に増やそうといっている。

O - マレーシアの問題は貧しい人ほど子沢山で、都市家庭の子供が少ないこと。

Q - 朝市の運営は？

A - 会員のローテーションで当番制。時給で支払う。年会費 1000 円を納めている朝市会員（60 人）のみが出品できる。人件費を含むランニング・コストは売上の 1 割から賄っている。

（4）所感：まず我々を受け入れる準備を万端にして待っていたことに感激した。席順が決められ、それぞれに英語のネームプレートまで準備されていた。今回の研修旅行では初めてのこと（グループの発案か、普及所の指導か？）どの方も発表原稿を用意しており、はきはきとそれぞれの分担項目について発表された。たくさん説明したいことがあったようだが、普及所の方が「そんなことはいいのよ、ここでは」、「そこまで今いう必要はないわ」と度々指導されていた。視察者の受け入れには随分慣れている様子であった。

集まった方々がとても元気で気持ちがよかった。言葉は通じなくても、彼女たちのはつらつとした雰囲気から伝わってくることはたくさんあったようだ。

過疎化ならびに過疎による休耕田の荒廃はマレーシアで問題となっているようで、過疎対策には大きな関心が寄せられた。

11) 和田農産物加工グループ

（1）対応者：Y-V 氏（会長）

Y-W 氏（グループメンバー）、他 3 名（自己紹介なし）

（2）協議内容：昭和 59 年から地域の女性 10 人でグループ活動開始。他の地域へ視察に出かけ、自分達も何かしたいと思った。地域活性化、特産品づくりを手がけようと、廃校となった小学校の給食室を利用して加工を始めたのは昭和 62 年。平成 2 年に小学校が解体となり、「活動拠点となる施設が欲

しい、やる気はあるがお金がない」と普及所と行政へ何度も陳述。徐々に県から認められ、翌年加工所新設。家族がまず活動に協力してくれ、行政と家族の後押しによって地域でも認められるようになった。

現在の会員数 13 名。年間を通じて日曜以外毎日 3 人ずつのローテーションで加工・販売にあたる。柿茶、高瀬味噌、コンニャク、饅頭など全て地元産品による加工食品。農協の朝市、加工所の裏にある直売所で販売。毎月 1 度この集落でイベントを開催し、町の人や他のグループの人との交流を図っている。努力と工夫を重ねてきた。

毎月メンバー全員による全体会、毎年総会を開き、何でも話し合ってきている。初代リーダーはしっかりした人で 10 年務めた。その間メンバーも育った。

(3) 質疑応答 (Q: 質問, A: 回答, O: 意見)

Q - どのような加工品を作るかは誰が決定するのか？

A - 地元にあるものを工夫して加工している。柿の木はこの辺にたくさんあるから技術指導を受けて商品化した。健康茶ブームに乗って今ではあちこちで作られているが、ここが最初に販売した。コンニャクも昔からここにあったもの。それにいろいろな味をつけて付加価値を出している。オレンジ・ケーキは、この地区にお菓子屋さんがないので、グループ員の妹で菓子づくりのうまい人から教えてもらい、グループで改良を重ねて販売を開始した。とても売れ行きがいい。しっとりしていて美味しいと、イベントなどで購入していった他村の人が、ラベルを見て電話注文してきたりもする。

Q - 収入はどのように分配されるのか？

A - 日給制。

Q - 誰が技術指導をしているのか？

A - 最初は生活改良普及員。今はメンバー内で切磋琢磨しあっている。技術が確かでないとは物売れない。商品化できるまでは家族が嫌というほど実験台になっている。コンニャクも 3 年かけて商品化した。

(4) 所感：時間がなく駆け足の訪問になったが、ここでも元気な女性たちに出会えた。お茶請けに出されたオレンジ・ケーキは「これはマレーシアでも受ける味だ！」と好評。これほど質の高いケーキを農村女性が作れること、その技術の確かさに感心したようだ。また、商品の付加価値の付け方、バラエティの豊かさは普及所の指導の下に、女性たちが工夫してきたことだと理解できた。

12) 技術・情報推進室

(1) 対応者：Y-X 氏 (調整官)

Y-Y 氏 (主幹)

Y-Z 氏 (主査)

(2) 協議内容：この推進室は普及員のための研修所。専技 10 名、研修担当者 1 名、情報担当者 1 名の計 14 人が勤務している。新人普及員が一人前になるように、2 年目以降の普及員の活動をサポートするために、各専門技術、普及技術の研修を実施している。隣に農業試験場があり、連携している。農林業情報システム管理を任されており、市況、天候など、県民に対するあらゆる農業情報を発信している。1968 年建設。研修施設、宿泊施設、食堂などを備えている。

(3) 質疑応答 (Q: 質問, A: 回答, O: 意見)

Q - 研修は男女別か？

A - 普及員の割合として、生活改良普及員は女性のみ、農業改良普及員の半数以上が女性なので、生活改良普及員研修は女性のみ、後は男女混交で職種別や普及技術の研修をしている。

Q - どのような普及手法を用いているのか？

A - 農業者が「課題解決」できるようにできる普及員を育てることを目指している。具体的には普及指導計画、年間計画の立て方、効率的な実践方法について指導する。現場の状況を重視し、plan-do-see-checkができるように。

Q - 女性起業化の問題点は？

A - 基本的に地元産品の農産物加工に取り組んでいるので、年に1度のチャンスしかない。利益・収入のサイクルが長く、チャンスを掴むのが難しい。農業以外の他産業は年中チャンスがある。また、農業は産業構造がしっかりしていて入り込む隙間がなかなかない。

Q - 研修プログラムはどのようなものか？

A - 新入期：新人研修。2年生研修（専門研修：作物的なもの）、3年生研修（副専門：環境／経営／病虫害／土壌肥料／農業機械など）。中堅期：情報管理、地域経営、普及方法など、日本の農家は零細自立経営。農家集団の指導が重要。

Q - 農民は直接普及所に来て指導を仰げるのか？

A - もちろん。農民は日常的に理解しているところに行く。信頼関係が大事。

Q - 農業試験場の機能は？

A - 技術開発と、育種開発に取り組んでいる。

Q - 現在の生活改良普及員の中心的な活動は？

A - 家族経営協定の推進。労働環境改善。地域資源を使った食品加工。保健所や他機関への認可申請指導等。

Q - 生活改善グループ活動のモニタリングはどのように行っているのか（このあたりの質疑が噛み合っていない）？普及においてplan-do-see-checkは効果的か？マレーシアではplan-do-check-actionとしてしているが、それより産物のクオリティー・コントロールが重要では？

A - 普及活動は人を対象としている。最初の課題設定と達成度を確認しながら実行している。これは自己認識のためにも大事なこと。

Q - 生活改良普及員はなぜ女性だけなのか？

A - 農村女性を対象とするので。発足からしばらくは生活改良普及員には家政学の知識が必須だったので、自然と女性ばかりになった。

（4）所感：今回の研修旅行の目玉的機関であったにも関わらず、時間の都合、駆け足で質疑応答中心に事業説明をし、ディスカッションはできなかったのが非常に残念である。

普及手法についてなど専門的な質問が出たが、専門用語が多かったため通訳が十分に訳し切れず、研修生と受け入れ側の間がうまく理解し合えていなかったようだ。

補足：「課題解決」や「普及指導計画」などは訳さず、plan-do-see-checkの部分だけを英訳していたため、後日普及手法について簡単に説明を加えた。

4. 研修生の主な感想

1) 行政について

・ ボトム・アップ・アプローチが徹底されている。

- ・ 住民に対して積極的な支援を行うという体制になっている。
- ・ 農村の若者に対して農業に関心を持たせる事業を展開している。
- ・ 都市と農村の住民間交流を行政が促進している。
- ・ 行政と政治が分離できている。
- ・ 省庁，県庁，農協他組織間の調整・協力メカニズムを知りたい。
- ・ 農村青年対象，起業化促進などの研修プログラムの具体的内容を知りたい。

2) 住民について

- ・ 当事者意識が非常に高く，動機づけ，能力向上が自然と成されている。
- ・ グループ活動の中からリーダーが育っている。チームワークがよい。
- ・ 多角的かつ総合的農業が実践されている。
- ・ 家族経営協定は家族内の公正な所得分配をもたらしている。
- ・ グループ活動や住民の自助努力を促すためのアプローチをもっと知りたい。
- ・ マレーシアの農民の補助金依存体質をどのように改善できるだろうか。

3) 起業化について

- ・ 地域資源の利活用のための創造性が高い。
- ・ 小規模起業化により雇用機会が促進されている。
- ・ 世界市場も視野に入れた高い品質，包装，ラベルの工夫がされている。
- ・ 住民が起業化を計画する機会を与えられている。
- ・ 直売所などでは農産物の販売価格を農家が決めている。
- ・ ニッチ・マーケティングの戦略を知りたい。

4) その他

- ・ 今回見た各訪問機関のビデオが欲しい。
- ・ 英訳した資料が欲しい。
- ・ 専門分野の用語が分かる通訳を配置して欲しい。

5. 全体に関する所感および今後の外国人受け入れ研修に関する提案

研修同行中および7月5日に行った研修員とのディスカッションを通して気付いたことと，今後の農村開発・生活改善に関する研修員受け入れに対する提案をまとめる。

1) 研修内容に関して

(1) 一村一品運動と県行政・農協・住民の関わりについて

マレーシアのマハティール首相が注目し，サバ州でも取り組みが始まっているだけに，非常に関心が高かった。大分県が一村一品運動のビジョンを掲げるに至った経緯や，事業立ち上げまでの苦労話など，成功してからの話よりも参考になるようであった。一村一品運動による収入の向上や，女性の積極的な活動に，研修生はただただ感嘆していたようである。農協の運営方法や，住民を巻き込んだボトム・アップ・アプローチの促進方法など，具体的なノウハウに関する情報をもっと提供されればよかった。ただ，これらを短期的な研修で伝授するのは難しいし，それぞれの実情に合わせたコンサ

ルティングが必要と思われるので、組合運営に関する専門家を現地に派遣することの方が有効だと思われた。

(2) 農産物の商品化と流通について

農村女性の起業化支援は、現在サバ州で実施されている開発調査のプロジェクトの一つなので、研修生にとっては大きな課題である。今回いくつかの女性起業グループを視察した中で、マーケティング、商品開発、商品化、パッケージと品質管理、ラベルの工夫による販売戦略や行政の支援、収入の分配方法などについての質問が多かった。直売所など農家が価格を決めて販売する方式にも興味が集まった。

地域に元からある農産物なら、何らかの加工技術が存在するはずで、その技術のよいところを高め、付加価値を付けて商品化するのが、今回視察したグループの一般的な戦略のようだ。このような女性の小規模農産物加工の起業が成功しているのは、日本の一般住民に購買力があるからだと思われ、研修員は分析し、住民の購買力があまり望めないサバ州の農村で起業しても成功するのは難しいのでは、という感想があった。

大分県の一村一品運動では、過疎地の村が地域の特産品を日本一の品質に高めることで地域産品を確立し、成功した話の概要を聞いた。今後は、例えばこの村を事例として詳しく話を聞き、関係者と研修員がディスカッションできるような時間を設定すれば議論が深められるように思う。

(3) 一村一品運動、生活改善運動に対する行政の支援について

概して日本の行政はその機能を果たしており、JA その他の団体と協調しながら住民側の主体性を支援する体制が確立され、また、住民も行政を信頼しているという印象を研修員は受けたようである。サバ州では政党と行政が分離されておらず、2年ごとの政権交替により行政官も入れ替わるという体制では、住民との長期的な信頼関係は築けないという意見があった。また、公務員の業務執行能力とモチベーションの高さ、責任感の強さに感嘆し、サバ州の「腰掛け行政」でそういった姿勢を望むことは難しいという反省があった。

また、日本の行政は地域ごとに特色を出した地域対応型アプローチを柔軟に展開しているようだが、農林水産省など中央政府からの指示系統、事業ガイドラインなどはどのくらい統制力があるのか、また、それらとどのように折り合いをつけるのか、そのバランスなどについて具体的な質問があった。

農民の補助金への依存という面ではサバ州でも同じ問題を抱えているため、一村一品運動が企画された経緯には共感したようだが、では、実際サバ州ではどのようにすればよいかと考えあう機会となった。

サバ州でも農業普及にはグループ・アプローチを取り入れているが、グループ形成から、グループでプロジェクトを開始するまでを補助金でサポートし、プロジェクトが走り出してから補助金をストップする方法をとっているようだ。これはグループ形成に一切補助金はなく、グループ活動がある程度まで高まってから加工施設の建設費などの支援を受けている日本の場合と全く逆である。例えば、大潮田舎の店の場合は補助金による加工施設整備の前に、13年間にわたる自助努力による活動があった。このため、多額を投資する行政側としても住民による継続的な活動を期待できる。一方、サバ州方式ではグループはたくさんできて、実際に活動を展開する時点、つまり補助金による支援が終わる時点でグループが消滅してしまう。この違いを意識しながら、補助金はどのような形で、いつ、誰に支給されるのが有効か検討する必要があるだろう。日本の中でも生活改善実行グループ、農業委員会、農協など、それぞれの補助金制度とその活用方法、効果などを比較検討することも有用だろう。

とはいえ今回訪問した加工施設などはいずれも立派な設備が整っており、現状だけを見れば日本の行政も、ドナーがハードの支援をする「箱物援助」的だという印象はぬぐえない気もした。けれども女性たちの活動に補助金を一切つけずに（実際には予算が配分されなかったためのようだが）当初の10年間で様々な効果をあげた生活改善普及事業は、日本でも例外的存在ではあるが、少ない予算でも事業は成立したという事実には言及しておく必要があると思う。生活改善普及事業に関しては、戦後復興期（補助金制度未整備時代）、高度成長期（補助金制度活用時代）、現在（補助金縮小時代）の取り組みはそれぞれ特色があるため、その推移について「補助金の効用」といった視点から説明するための事例としても活用できると思われる。

（4）普及手法について

今回の視察を通じ、農家の主婦達が生き生きと活動している様子を見て、普及員はどのような手法を用いているかに強い関心を持ったようである。山口県の研修所でその質問が出たが、課題解決学習法や三層五段階思考法、考える農民の育成など、日本の普及手法の専門用語を通訳の方が理解できなかったようで、分かりやすい「plan-do-see-check」の部分しか訳さなかった。それらについて詳しい者による補足が必要であった。グループ・アプローチなどの具体的な方法や事例を例にあげ、説明するのが効果的だろう。

2）研修全般に関して

（1）協議の進め方について

研修生は意識が高く質問したいことがたくさんあったようで、講義よりもディスカッションを多く取り入れた方が研修生のスタイルに合ったようだ。受け入れ側としても相手が何に関心を持っているのか分かるので、質疑応答の形式の方がやりやすいようだった。

（2）ビデオについて

帰国後職場関係者を集めて、研修生が研修報告会を行う時に、ストーリー性のあるビデオは写真よりも説得力を持つだろう。また、今後研修生が本研修の報告会やセミナーなど開く時にも活用できる。ビデオをダビングして研修終了時に研修員が持って帰ることができるよう取り計らうことができるとよいと思う。今回の視察を通して特に有用だと思われるのは、次のようなビデオである。

大分県大山町農協作成「瞳は未来へ」英語版、43分、最新版（大山農協は昭和30年から6年おきくらいに2000万円かけてプロモーションビデオを製作しているそうなので、このどれかが手に入ればよい。昭和30年代のものからその変遷を追うのも一考である）。

一村一品、生活改善に関する一般的なインフォメーションビデオ。

農山魚村女性・生活活動支援協作成「Promoting the Family-Management Agreement in Japan（家族経営協定）」。

日本の農協に関する一般的なインフォメーションビデオ（IDACA：アジア農業協同組合振興機関作成のものなど）。

（3）資料について

各機関のパンフレットや一村一料理マップ、朝市ガイドなどのような写真付きで見れば分かるような資料は、文字が理解できなくても、そのレイアウトやアイデア自体が参考になるようで、それらの作り方も教わりたいという意見がでたほど喜ばれた。

一方、日本語の文章のみの資料も各機関で人数分ご用意頂いたため、受け入れ先の負担ではと気が

かりだった。研修員にとっても内容が分からず、持って帰っても利用できるかどうか分からないし、荷物にもなると取り扱いに困っていた。文章の資料は予め一部用意して頂くことができれば、通訳担当が前もって翻訳し、準備しておくことができれば、当日の時間的ロスも少なく、より効果的であろう。

(4) 現地視察について

研修員にとっては日本で見るもの、聞くものすべてが新しいため、場当たりの的を射ない質問も飛び出すことになる。例えば初日にバラ農園を視察した時は、美しいバラを目の前にどういバラが売れるのか、どうい香りが好まれるのかなど、質問は多くあったが、視察の目的と多少ずれているような気がした。短時間の視察を有効に使うためには、予めなぜそこが視察に選ばれたのか、見るポイント、知るべきポイントなど予め研修員と話し合っておくと、現場でそれらに集中できるのではないだろうか。

(5) 通訳について

発表者と通訳の時間配分についてある程度打合せしておく必要がある。1時間発表、1時間ディスカッションの予定を、発表者の言葉を一字一句逐語訳するだけで2時間15分かかってしまい、ディスカッションの時間が取れないということがあった。質疑の時間は必ず取れるような時間配分が必要である。

(6) 受け入れ先とのアレンジについて

受け入れ先はどこも食事の準備に気を配ったようだ。何を食べ、食べないか、緑茶は飲めるか、和食がいいか洋食がいいか、お箸は使えるか、フォークとナイフの準備は必要かなど事前に情報を流し、受け入れ側の負担や不安を増やさないよう配慮すべきであろう。

長崎県国内調査報告

1. 調査期間：2003年7月25日～27日（3日間）

2. 対象地：長崎県

3. 調査団員：

担当	氏名	所属先/職名	業務内容
団長/総括	佐藤 寛	アジア経済研究所 主任研究員	インタビューおよび取りまとめ
団員/臨時会計役	太田美帆	レディング大学大学院 博士課程	業務費の管理および総括補佐
団員/記録係	山崎照美	NHK	インタビュー内容の書き取り等 記録
団員/記録係	山本敬子	JICA 国際協力総合研修所 国際協力専門員	インタビュー内容の書き取り等 記録
団員/記録係	山下優子	神戸大学大学院 博士課程	インタビュー内容の書き取り等 記録

4. 調査の目的：

- ・ 長崎県における生活改良普及事業の変遷を調べる。
- ・ 昭和 20～ 40 年代に活動した生活改良普及員および専門技術員の活動内容と普及方法を具体的に明らかにする。
- ・ 生活改善実行グループの昭和 20～ 40 年代の活動内容と、それに対する現時点での評価を分析する。
- ・ 昭和 20～ 40 年代に作られた簡易水道を視察し、関係者に対し建設経緯と運営方法を聞取る。

5. 調査方法：聴取調査，現場視察

6. 調査日程：

日時	時間	行程	場所	宿泊先
8/5(火)		羽田発 長崎着 (太田:10:20-12:10 JAS553) (佐藤:7:50-19:40 JAS559) (山下:神戸発 長崎着夕方)		長崎 市内
8/6(水)	9:30 13:30 14:30 17:00	長崎県農政 生改事業についての聞取り 生活改良普及員 インタビュー 生改実践グループ インタビュー 県庁着	長崎県庁農林部農業経営課(担当 寺島氏) 対応者：N-K氏，N-L氏，N-J 氏 長崎農業改良普及センター久松普 及員 浅井氏宅 対応者：元タチバナグループ	
8/7(木)	7:40 9:05	長崎着 福江市		福江 市内

	10:00	N-O氏インタビュー		
	13:00	N-P氏 訪問		
8/8(金)		台風のためフェリー欠航。予定を変更して帰京		

【長崎15-1】

日 時：平成15年7月26日（土）

場 所：N-D氏の叔母の自宅（長崎県北松浦郡）

お話を伺った方：N-A氏，N-B氏，N-C氏（元婦人会関係者）

同行者：N-D氏（三菱重工業長崎造船所保健師）

同席者：N-D氏の父親と叔母（父親の姉）

調査者：佐藤寛，山崎照美

議事録担当者：山崎照美

1) 調査対象の略歴

N-A氏：北松浦郡小値賀。大正13年生まれ。昭和16年に平戸の女学校を卒業して、代用教員を平戸でしていた。男の先生は次々と招集されていった。女学校は父が平戸にいたので、そこから通った。

N-B氏：北松浦郡小値賀。昭和3年生まれ。食生活改善推進員。松葉会会長。松葉会が長い。佐世保の女学校卒。終戦の時は学徒動員で川棚にいた。平戸。川棚町。川棚海軍工廠へ学徒動員で行っていた。女学校へは寄宿舎。賄いがついていた。食糧難で辛い思い出ばかり。22歳の時。終戦後すぐ引き上げてきて、食糧エイダン（今のエイダンの前身。相浦食糧エイダン）に1年弱勤めた後に、結婚させられた。親戚だったから。夫は引きあげてから漁協に勤めていたが、その後、昭和25年から役場に勤めた（役場に勤めているということは、地元ではエリート）。

N-C氏：北松浦郡小値賀。昭和6年生まれ。食生活改善推進員。終戦の時は佐世保の女学校2年だった。女学校では被服部だった。学徒動員があった。五島小学校卒。女学校は汽車通学。叔母の家から。結婚は27歳の時。エイダンにも少し勤めていた。夫は役場の人。

*全員小値賀（おぢか）の町部生まれ、小値賀育ち。地域内での結婚。

2) 生活改善運動について

N-A氏：生活改善のことなら農家の人の方が私たちよりも詳しいのに。婦人会で何か生活改善のようなことはしたかなあ。

N-B氏：平成3年から食生活改善をしている。いや平成2年からだと思う。その前は栄養改善で同じ松葉会でやった。栄養教室というのがあった。

N-C氏：栄養教室は今もある。

3) 電気

N-A氏：町部では戦前からあった。私が子供のころから。9時くらいになると消える。

父：あるにはあったが全然タイプが違う。今は九州電力が有川に大きな発電所を構えて、そこから海底線を通して「このしま」も、隣の「くしま」まで通っている。その頃は、最初は自家発電。小さいディーゼルエンジンを回して。日暮れから9時頃まで電気があるけれども、9時になると「さあ、電気が消えるけん」と知らせがあって消える。電球も豆球、裸電球。ラジオを聞くだけで一生懸命。20Wくらいだった。それから九電が発電所を各島に据えた。その頃は電気事情がだいぶよかった。朝から夜中まで。それから九電が海底線を作って、有川から送るようになった。トラブルもなくなった。その頃は、配線が悪いから停電ばかり。ディーゼル発電だったのはいつ頃までかは誰も覚えてい

ない(戦時中?)

N-B氏, N-C氏: 嫁に来た頃には電気が当たり前にあった。

4) 夜9時に電気が消えた後はどうしていた?

N-A氏: ランプ。

N-C氏: 寝てしまう。ランプに芯を入れて。

N-B氏: 燃料は石油。灯油。

5) 食糧難の時はどのようにして食糧を確保したのか?

N-C氏: 農家の人に分けてもらって。「かんころ(干しイモ)」や「イモ」などを食べていた。

N-B氏, N-C氏: 畑は町部の人は持っていない。

6) 水はどうしていた?

N-B氏, N-C氏: 水に関しては井戸。自分の家に井戸があるわけではなく、もらい水をしていた。

N-B氏: オシブチの奥さんの時に水道を引こうか、それを婦人会でやろうといった。「おおばんげなオナゴで」と男に陰で非難された。

N-B氏: 水道も婦人会が いい出した。その度に男から「おおばんげな女だてらに」といわれた。

N-A氏: 何をするにも婦人会が中心。

N-B氏: 男も手伝ってくれるが。目論みを婦人会がするものだから、男の面子があったのかよく批判された。

N-A氏: 水道の頃は婦人会支部長ではなかった。水源は、町部では井戸で水がある所を「ばん岳」という一番高い山へ上げる。ポンプで水を井戸から上げて。そこからずっと通す。前方地区は水のあるところだからタンクを作った。浜津は赤尾の水。塩が入るから脱塩装置が付いた。

N-B氏: それは後から役場が付けてくれた。水が塩辛いことは自分では気がつかないが、町から帰ってきた子供が麦茶を飲んで塩辛いといった。私たちは慣れっこで分からないけれど。その水道は簡易水道。役場のお金を使った。いい出したのは婦人会。

7) 愛情道路について

N-B氏: 婦人会の力で。また、「愛情道路」というものを子供のために作った。通学道路。

N-A氏: 当時は、雨が降ると道路がぬかるみになって。そこで、道路の中央にコンクリートの歩道を付けた。その資金を作るために、婦人会で演芸会をした。

N-B氏: それをするために演芸会をしたりして。

N-C氏: 漁船の船団から寄付をもらって。漁船が一杯入っていた。また、普通の人からは演芸会の入場料をとった。

N-A氏: 婦人会の委員で歌舞伎をした。

N-C氏: 雨が降ると服も靴も汚れてしまって、学校に着くと洗い流さなければいけないほどだった(小, 中, 高校は丘の上にある)。

N-B氏: 水道よりも愛情道路が先。愛情道路を作ったのは、昭和26年くらい? 道路の真ん中にコンクリートの歩道を付けたのだが、次第に車が通るようになると、子供は道のはじを通るようになり、

意味がなくなってしまった。愛情道路を作ろうといったのは婦人会。その時の婦人会の役員は、オシブチの奥さんだった。その他にオサダイ先生。クウヤのお母さん（アベさん、ヒブチ先生など？）
N-A氏：当時私は役員だった。舞台の写真がどこかにあったと思う。長男が生まれた頃、婦人会に入ってもなく支部長になった。婦人会に関わるようになったのは教員を辞めてすぐ。婦人会の「ふ」の字も知らなかったのに。

N-C氏：婦人会の役員は学校に行っていなくてもなることはあった。みんなに選ばれてなるものだった。一つの部落を支部という。

N-B氏，N-C氏：支部は12か13あった。笛吹の町方だけで（笛吹＝町方というのは漁港と商店街を含んだ地域。一番大きい所）

N-C氏：当時の婦人会活動日誌は、役場にあると思う。

N-B氏：昭和46年のノートを持っている。よく婦人会の役は持っていた。主人が役場だから、外に出られるだろうと睨まれて役になった。

8) 愛情道路について、誰がいい出し、どのようにして資金を作ったか？

N-C氏：みんなが道路を作ってくれればねと、そういう声があった。

N-B氏：オシブチの役員会に話が出た。そこでお金のことで役場へ交渉に行った。婦人会のお金だけでは足りないから。いくらかは役場からお金がきた。足りない分を賄うために演芸会をやることになった。演芸会は婦人会で計画して、練習して。私は歌を歌いに出ました。

N-A氏：何日間か開かれました。

N-B氏：女相撲もやりました。会員の中から何人かがやった。シャツを上下着て、回しを締めて。演芸会は昭和25、6年だと思う。

N-A氏：27年じゃないかなあ。26年に生まれた子供がいた記憶がある。セメントを運んだり、砂利を運んだりした。重たくて抱え切れなくて。こんな重いものとは知らなかった、と役に立たなかった。

9) 婦人会

N-B氏：その時は婦人会の会員数も多かった。何百人といた。25歳から60歳くらいまで。全員が会員。結婚したら、全員参加することになっていた。婦人会費は、笛吹では月600円集めて、そのうち400円が笛吹に入り、残りの200円は「連協」に納めることになっていた。連絡協議会にも会長がいた。小値賀連絡協議会は小値賀町全体。連絡協議会に加盟していたのは、笛吹（大村、中村はここに含まれる）、前方、柳、浜津（ここまでが本島）、野崎、斑、納島、藪路木、大島（ここまで離島）。六島はこない。ちゃっかりしている性格で、時間厳守励行の気風を持つ。もちろん婦人会はあったけれど、こなかった。

N-B氏：六島が時間厳守励行になった理由には逸話がある。潮が荒い所で、坊さんを迎えにきていた。お坊さんを待っていたら、潮にまかれて遭難した。だから迎えに来てても時間に来なかったら置いて帰った。その事故から時間を守るようになったといわれている。六島は、今は20人くらい。7世帯が住む島で、子供たちはみな外へ行ってしまった。年寄りばかり。

10) 簡易水道

N-A氏，N-B氏：各戸に水道をつけた。

父：お金はそれぞれの家がいくらか出した。出せない人は町の方で予算の枠をとっていたと思う。水道で記憶しているのは小西町長が話したことで、「水が悪いので目が悪い子供が多い（トラコーマ）、水道をなんとかしないとこの島は大変なことになる。水を取れば生活のリズムも変わってくる。トラコーマがたくさんいた。私もかかった。

N-A氏：私もかかった。小学校の医務室で何度か目薬をさしてもらうなどということがあった。小学校のトイレもトラコーマ専用のトイレがあった。うつるから。貧乏だからかかるということではなかった。しかし、家庭ではみんなで一つのタオルを使うような生活だから、家族の中で感染が広がっていた。

父：トラコーマは水が問題だと聞いていた。水道がない時は、水は井戸から。井戸は考えられないような、塩水に近いような水だった。

N-A氏：雨が降ると泥水になるような井戸だった。雨水は使わなかった。

N-B氏：「女のくせに、大それたことを」といわれた。今の駐車場の所に「オシブチ病院」があり、その奥さんが婦人会の会長だった。私も支部長だった。オシブチの奥さんは島の人ではなく、外人だった。

11) 婦人会長は？

N-B氏：婦人会の会長は先生あがりが多い。オサダ先生でも山崎さんでも。マツニヤさんも。樋口さんは先生あがりじゃないけど。他は全部先生あがり。

N-A氏：その頃は任期が長かった。名誉職だった。選挙では「　　さんに入れて下さい」と選挙運動する人もいた。連合婦人会から連協に変化。連協の代表には笛吹の会長になることが多かった。一番大きかったの。連合婦人会は別にあった、別の選挙もあった。その時は笛吹から出すのだ、前方から出すのだということで選挙が盛んだった。木村先生なんかの。連合会長の選挙運動をした。国防婦人会もあった。戦後すぐ解散して、終戦すぐそのまま婦人会に変化した。N-A氏、N-B氏、N-C氏はその時にはこの島にはいなかった。

父：戦後は食事も十分ではなかった。イモとかかんころ（干しイモ）とか。

12) 娘時代のカマドは？

N-A氏：カマドだった。タイル張り。

N-C氏：セメントで塗って、釜を置いて、下から炊くやつだった。

N-A氏：二口だった。農家の人は土間に大きなカマドを作っていたけど。ここは半農半漁。町場と農家のカマドは違う。農家は大雑把に取ってきたものを適当に燃料にしていた。しかし、町場では売りに来た薪をきちんと切ってもらって使っていた。まとまった薪だった。農家は自分の山で切ってきたものをそのまま燃やしていた。だから大きな釜だった。

N-B氏、N-A氏：薪は売りにきた。五島の方から（つまり下五島、五島は島津藩。小値賀は自分たちの島を五島とはいわない。ここは松浦藩、平戸の文化圏）売りに来た。それを切ってもらって使っていた。農家の人は近くでとってきたものを何でも燃料として入れていた。

N-A氏：五島から来た薪を秤に掛けて買っていた。そっちの方が山深いから。

父：その頃は帆をかける船で運んできていた。この辺りでも薪を買えた人たちは金があった。買った薪があると、その人の家の資産が分かるようなものだ。

N-C氏：風呂も薪だった。

父：三本の柱，真ん中に紐，杵を下に作って，秤には金の錘が使われていた。薪は海岸で買った。

N-A氏：それを引いてきて，家に持ってきてもらって，特別な人に割ってもらう。

N-B氏：薪を割ってくれる人がいた。こちらはお金を出して割ってもらった。

N-A氏：薪を割るのは知恵遅れのおじさんとか。田中屋さん，金丸おんさん（おじさん）やよしおんさんなど。

父：山の中から木を切って海岸まで運んで，昔は岸壁もないから，潮のよい時に船で運んできたのだと思う。そういうことを扱う問屋さんがあった。安川さん。場所はあるけど今はもういない。木炭も五島から買っていた。

13) 風呂

N-A氏：燃料は薪。風呂は五右衛門風呂。柳の近藤タツヨさんのお宅にはまだそれが残っている。風呂は毎日入った。水は井戸で汲んでいたのが問題はなかった。

14) カマドからガスへ

嫁に来た時は娘の時と同じようなカマドを使っていた。カマドの次はガス。

N-C氏：コンロを薪で炊くという時期もあった。

N-B氏：婦人会でも扱って売ったことがある。「さくらカマド」。持ち運びができるタイプ。業者から買って，使い方の講習もあった。山崎会長の時。それは昭和20年代後半のことだったと思う。

N-C氏：嫁にきたのが27年だから，27年か28年ではないか。くど（カマド）からさくらカマドになって，それからガスではないか。

父：ガスになったのは，消防法も影響を与えたのではないか。昔はガスを家の中に入れていた。危ないということで，それを外に出すように命じる内容だった。消防団の仕事だった（父は消防団に所属していたこともある）。

N-C氏：ご飯は薪でも（さくらカマド）ガスは台所の近くに置いた。ガスがきてもご飯は薪で炊かなきゃいけなかった。ガス釜にならなかったのだから，ご飯は薪で炊かなければいけなかった。町場では台を置いて，一段高いところにくど（カマド）があって，その下に薪をしまっけて置けるような構造になっていた。

N-A氏，N-B氏，N-C氏：ガスコンロはガス屋から購入した。

父：今まで灯油を売っていたところ「大黒さん」が扱っていた。その人の家が一番ガスコンロの導入が早かった。漁協もガスを扱った。他にもその後にはコツジさんも扱った。

父：農協はあるが，農協はガスを扱わなかった。ガソリンはあったが。

15) 農協と漁協はどちらが強いのか？

父：漁協かな？漁協は単独で活動しているけれども，農協は合併してしまった。農協も力があつた。

16) 農業普及所はあつたか？

父：農業普及所の出先はあつた。今は県の方で，・・・。

N-B氏：農業改良普及所があつた。そこから先生がきて料理講習などもあつた。モリシメ先生。料理

の本も出していた。先生は県庁から来たのではないか。佐世保の改良普及所。

父：県北の事務所から来たのではないか。県北がここの担当だったから。農家にもいっていたから、月に何回先生がきていたかというようなことは農家の人が詳しいと思う。

N-B氏：町場でも料理講習会などがあった。浜田先生、中神先生の時だから・・・。離島開発総合センター（公民館の大きいようなもの）の3階で料理講習はあった。それは昭和50年代だと思う。N-A氏、N-C氏はこの講習会に関しては知らない。

N-B氏：スミレさんが会長だった時にあった。

父：歴代の婦人会会長、その在任期間などは公民会においてあるかもしれない（昭和17年に大日本婦人会ができた。町史より）。

17) 婦人学級

N-C氏：婦人学級もあった。勉強会。暮らしの学級。読書会グループもあった。

N-B氏：婦人会で計画を出して、上に提出しないといけない。上というのは教育委員会。

N-C氏：読書は10人で1グループ。県から一人一冊本を借りて読む。同じ本が10冊くる。

N-A氏：いろいろな本を読んだ。「こぎ家の人々」なんて今でも覚えています。

N-B氏：こういうふうに名簿を作って（57年）、教育委員会に出していたのですよ。公民館の方に。大黒さんの時に作った名簿。

N-C氏：一月一冊の割合。本は県がリストを寄こすので、そこから選ぶ。婦人会は社会教育委員会に報告した。

N-A氏：父も弟も教育長を勤めた。父は小値賀の校長をしていた。弟も。婦人学級の予算は1万円。

N-B氏：民謡や和裁、体操などいろいろなことをした。

N-A氏：お茶。お花もやった。NHKラジオが読書グループの取材にきた。

18) 県の婦人会の連盟、総会に出る時などの経費はどのように捻出していたのか？

N-A氏：あちこちで総会は行われた。全国大会には行ったことはない。県の大会には出た。

N-C氏：県大会への参加費は、役場から少し出た。婦人会からも。

父：公民館の活動予算に枠があった。

N-B氏：昭和46年に、「栄養教室開設困難の理由」ということで、婦人会の中の議事録が残っている。

「時間の問題。午前と午後にかかり、一日かかる。夜間なら働いている人も勉強できるのではないか」という意見がある。栄養教室という名目ではなく、松葉会定例会、および講習会として生徒を募集する。この頃から生徒を募集した。

19) 松葉会はどういうグループ？

N-B氏：松葉会は笛吹婦人会の下の各支部から募集した。「保健所より保健婦さん（石橋さん）来聴。教育委員会において栄養教室打ち合わせ会あり。その時、保健婦さん来聴。」とノートに書いてあり、その時に、「栄養教室開設困難の理由」も話し合いをしている。

佐藤：教育委員会が婦人会に集まってもらって、そこに保健所から保健婦さんと呼んで、栄養教室開設の話をしたということか？

N-B氏：料理を作って、栄養教室であっちこっち持って行っていた。スミレさんの時に、朝が早いか

ら前日作らないといけない料理ばかりということで、小値賀は脱退した。食中毒対策が心配だったため。調理室で作って持って行った。各地区から参加する品評会のようなもの。それぞれの地区が持ちまわりだったが、五島の若松町にある有川保健所の管内に行ったのが最後。料理を持ち寄り、先生の審査があるという。その時は、栄養教室だった、松葉会じゃなくて。その後にヒグチカズさんが会長の時、松葉会。募集してやっていた。

20) その頃の写真

父：国会議事堂に愛情道路の写真が貼られていたという記憶がある。道路は粘土質の土で、学校入り口の洗い場で落とすという有様。しかし落ちない。婦人会が海岸の砂を運ぶなどした。

N-A氏：昭和26年9月以降のことだと思う。

父：その後、それぞれの東西南北の部落から同じような道路が学校に向けて引かれたが、笛吹が最初だった。

N-C氏：他の部落の話は知らない。笛吹だけだと思っていた。

N-D氏：愛情道路は昭和28年のこと。幅2m。当時の西岡知事より「愛情道路」と命名された。町史446頁参照。

21) 最初の車は？

N-C氏：エイダン（食料品店）、農協、マツノヤだと思う。エイダン食料の支店。本当の名前は、相浦（あいのうら）食糧事務所という名前で、「あいしょく」とも呼ばれた。コメの配給をしていたところ。佐世保に本拠があった。エイダンは配給を島中にしていた。船で他の島に運んだり、サツマイモの配給をしたり。配給を受けるためにみんなエイダンへ行った。現在、笛吹以外のところにも食料品店はある。車に関しては町史447頁参照。昭和25年、エイダンが持ち込んだものが最初。

N-A氏：島ではコメも取れたけれども、コメだけのご飯は祭りや正月にしか食べなかった。主食はコメにムギを混ぜたものだった。農家はムギが主食だったと思う。ムギといっても丸ムギ。町は押ムギをコメに混ぜて食べていた。

22) 空襲について

N-C氏：空襲は海で。船がやられた。何回かあった。

父：カラミ崎に空襲があった。久島でも。下から見ていて操縦士が見えるようだった。グラマンという飛行機は早かった。

N-A氏：原爆が落とされた数日後、平戸の瀬戸を渡ってしまった時、貨物船を機銃掃射しているのを見た。

父：私は平戸駅で。終戦は、初めは三菱にいた。7月29日の夜行で川棚に移った。三菱の工場は全部防空壕に入ってしまった。川棚では防空壕を掘らされた。

N-A氏：私の弟も三菱兵器のところで防空壕を掘らされた、被爆して。

N-B氏：12号の宿舎じゃなくて、小串郷の宿舎でしょ、学徒動員の男子は。私たちは川棚で、小串郷の13号宿舎だった。12号が挺身隊。川棚は爆撃があまりなかった。大村に来たり、佐世保に来たりはしたけど。

父：長崎は造船所があるので、爆撃がひどかった。

N-C氏：佐世保の海軍工廠はやられた。終戦の日に行った。敵機がきてね。丁度お昼が玉音放送だということ。

電気に関しては町史 452 頁参照，水道に関しては町史 174 頁参照，農業改良委員会に関しては町史 157 頁参照，有線放送局に関する記述あり。

23) 結婚式は？

N-B氏：普通の着物をきて、かどいれのみ（そこのかどから）。昭和 22 年だから。

N-C氏：叔母の家から歩いてきた。行列作って。

N-A氏：浜津から歩いてきた。30 分くらいかけて。昭和 25 年のこと。家でやった。たいてい家でやった。

N-C氏：結婚式の料理はお婿さんの所で用意している。親戚が集まって手伝う。

N-B氏：総会のたびに冠婚葬祭、「生活の合理化」の話はよくでた。真っ先に。しかし、実行する人がいないから、議論するだけ無駄だということになった。

父：今の公民館で結婚式をするとすると、140 人くらい入る。そういう結婚式はだめだから、それを 100 人くらいにしろという話があった。でも誰も守らない。町役場の人自身が大きな結婚式をしていたから。

24) 誰が生活の合理化をいい出すのか？

N-B氏：支部員の中から。

父：公民館の審議員の中からも。

N-B氏：けちだから（大きな式をしないのだ）、といわれるから大きな式をやるしかない。

父：このあたりは料理だけを仕出しで取り、それ以外の配膳、飲み物を冷やすなどのことは全部自分たちで準備するので大変。

N-A氏：うちはお菓子屋だからもろに被害が出た。「お菓子をつけてはいかん」ということになって。それが何年か続いた。

N-B氏：成人式の振袖の話がでた。振袖を廃止しよう。しかし、あるお母さんが「うちの娘はそれを楽しみにして、毎月積み立てをして働いている。それを作るのに働いているから、その子供の夢までをつぶすことはできないと私は実行しません」といった。8 月 15 日の終戦記念日にすれば、振袖を着なくてもいいから、その日にしてはどうかという話もでた。それも実現しなかった。

25) 保育所，託児所

N-A氏：当初，双葉学園（幼稚園）は婦人会が運営していた。会長さんが園長先生。オシブチさんが会長だった時で、彼女が園長をした。古い役場の跡があった。婦人会が初めて運営した。

N-C氏：カトリック幼稚園がなかった頃。保育園も必要だということになって。昭和 24 年から。なぜなら 23 年の長女の時はなかったから。笛吹だけじゃなくて、「在」からもきた。前方や柳，浜津からも。前方にも託児所ができた。それも婦人会が作った。

父：（カトリック幼稚園について）教会がしていた。カトリックは少ないから。小西町長が「そういう教育を入れなきゃいかん」ということをいって、カトリック幼稚園が始まった。町長の奥さんが熱心な教徒だったという。親よりも園長さんが子供のことを知っていた。施設はすべて無償で建てられた。

年に3人くらいシスターがやってきた。ただ、無償ではいけないということで、町長の指示で町の役員が年に4000円くらい支払っていた。向こうはいらなというが。今は町営の幼稚園がある。

N-B氏：カトリック幼稚園は高値の花だった。漁師なんかは双葉幼稚園だった。

N-D氏：3歳から行った。守山先生とかいた。守山先生が孤児院とかいった。

26) 産児制限は保健所からきたか？

N-B氏：産児制限は奨励されていたのか？あまり聞かなかった。生活の苦しい人は中絶したりしていたと聞いていた。町場では受胎調節の話は聞かなかった。講習会などもなかった。タモト先生が家族計画のことで個人的に指導していたという話は聞いていた。田舎の方で。

N-D氏：タモト先生が昭和30年代にここで活動したと電話で聞いた。

27) 病院について

今は診療所がある。

N-A氏：前は個人。オシブチ先生。その他にも浦、田口、荏原、ザイゼン先生などがいた。

N-B氏：私が子供の時は、近藤先生、横山先生。

N-A氏：離島の人はこちらまで診察に来ていた。斑には一人先生(遠山先生)がいた。戦争中に従軍医師(戦場の病院?)をしていた人が帰ってきて、少し診察をしていたこともあった。他にもここには上里先生などがいた。

28) 消毒

N-C氏：消毒は町(ちょう)で行った。

父：機械を仕入れるのが町は大変だった。機械を使いきらない。町の方では匂いが残るので嫌だといわれた。最初は消毒がよかったが、次からはだめ。そこで溝を中心にして消毒するようになった。家やるのはほんのわずか。今でも年に1回やっている。

29) その他：お返し廃止のノート配布。

【長崎15 - 2】

日 時：平成15年7月27日（日）9:50～12:10

場 所：N-E氏自宅 諫早市山川町

お話を伺った方：N-E氏（元生改，現長崎県友会諫早支部役員，長崎県緑友会役員，長崎県友会結婚相談委員委員長）

調査者：佐藤寛，大石和代（長崎大学），長岡清子（三菱重工），太田美帆

議事録担当者：太田美帆

内 容：昭和30～40年代の長崎における生活改良普及員の活動状況

1) インタビュー形式

県庁の現生改松田キミさんの紹介。N-E氏の自宅洋間にて，日本茶と季節の果物のゼリーをいただく。インタビューに選ばれたことを大変恐縮され，何度も「調査をした時の数字などはみな忘れてしまった。私なんかでいいのかしら」といわれた。庭木，鉢植えの植物の手入れが行き届いた家。客間の中心に配偶者の仏壇。

2) インタビュー時入手資料

昭和58年，新聞記事切り抜き「わが道ひたすら農村めぐり苦節21年」

3) インタビュー内容

(1) N-E氏プロフィール

大正13年12月生まれ（あと10日間お腹にいれば昭和生まれだった）。昭和20年に父の本家がある熊本に東京から疎開してきた。それまでは東京他で育つ。戸井田女学校から本科の短大（現東京家政学院？）に進み，昭和20年3月に卒業。後援師団（？）として槍演習もした。卒業後は徴集されるのを避けるため，すぐに銀行に入った。花嫁学校だったので，まさか田舎に来て仕事するなど思ってもいなかった。「人生七転び八起きだと思わ。」東京から熊本に来てびっくりした。暮らし方も言葉もまるで違う。父が本家に土地を持っていたのを頼りに，着の身着のまま疎開してきた。東京・大森の家は焼けてしまっていたので，帰る所もないが，毎日東京の方を向いては泣いていた。コメ，ムギ，トウモロコシの配給。着物も丈を短くして着た。「みんなそうだから仕方ない」と楽観的に考えるようにした。

昭和20年の「娘時代」に熊本で「珠算の運動会」があり，一等賞をとった。すぐに農協からお誘いがあり，本渡の農協で働くことになった。職場では回りが話していることが分からず，みな笑っていても笑えずにいたら「なんで笑わないのか」といわれたので，意味が分からなくても一緒に笑うようにした。1年目は言葉がさっぱり分からなかったが，2年して大体分かるようになった。この農協の中には農改も生改もいた。農改の中に言葉が分からなくて困っていると助けてくれる優しい人がいた。3年目にその人が県庁に戻ってしまったが，毎日手紙を出し合っていた。一緒になりたくて昭和26年ついに結婚。寿退職し，当時の？（現岐宿？）の落葉果実試験場（場長？）勤務のご主人の許に移る。

農家のことは何も分からなかったから何でも新しかった。ご主人は真面目な方で，職員や農家に対し思いやりを持って接する人だったので「私もそうしなければ」と思った。夏休みやお盆は職員を帰省

させ、自分が宿直をするような人だった。彼の仕事や仕事振りはこういうものだと思っただけで、お重を作って宿直している彼に差し入れたりした。土日もなく、人のために尽くす人だった。そういう主人に尽くし、充実した結婚生活だった。

結婚7年目、ご主人が急逝。1年前に父を亡くし、またお腹には9ヵ月の第2子がいた。実家に戻ってお産をした。県庁からすぐに生改試験を受けないかという話があり、産後1年して普及所に行き、農改の話聞いた。子どもを育てなければという思いと、主人の半分でもいいから世間のお役に立ちたい、農家を何とかしてあげたいという思いがあったので、受験することにした。「皆さんのお陰で受かったと思う」。

試験に受かるとすぐ長崎に行かないかといわれた。当時長崎の生改は不足していた。ご主人の先輩で本場の試験場長（ミカンの専門）をしていた人（家族ぐるみの付き合いがあった）が、長崎県庁特産課長をしていたので相談した。長崎では親代わりになってあげるから、すぐ来なさいといわれたので決心した。南高では、島原か吾妻の2普及所が空いていたが、先輩が吾妻の方が人間関係がよいことから、吾妻に配属された。「これも主人の導き、主人への恩返しと思いながら仕事を始めた」。

（2）生改略歴

昭和37年 中地区制、吾妻農業普及所配属、吾妻・愛野・瑞穂担当

大地区制になり吾妻、平、島原の三つの普及所が統合され、島原農業振興局となった。島原、有江も担当。9年間吾妻勤務。生活改善グループ協議会を作った。

昭和46年 諫早普及所に5年。

昭和52年 五島福江普及所に3年。

昭和55年 西彼に3年。

昭和58年 農業経営大学校教師を2年。

昭和60年 退職後、県友会（県庁退職者の会）と緑友会（普及員のOB会）に入会。

（3）吾妻農業普及所時代（昭和37～45年）

最初は友達づくりから。「何にも分からないから教えてね。何でもいってね」といって村に入っていた。直に婦人会長から講演を頼まれてやってみたが、緊張のあまり何をしゃべったかは覚えていない。この婦人会の人たちは、今でも年1回お茶飲み会を開いてくれる。「分からないから教えてね」という入り方をしたので、みなとてもよくしてくれた。

「何でも当たり年だった」生改1年目に自分の担当村が生活環境整備事業のモデルとなり、他の生改、専技、保健所の人に助けをもらいながら仕事を進めた。山間部の恵まれない地域がこの事業にふさわしいといわれて吾妻町の川床集落に事業を入れた。

当時の様子：

トイレは納屋に箆が下がっていて、一間以上の穴に丸太が5、6本通してあるだけ。「見ただけでトイレはしたくなくなった。後で考えれば農家にとって人糞は大切なものだったのだ」。

土間に土べっつい（カマド）があった。「これは何とかしなくちゃ。少しでも改善してあげなくちゃ」と思った。風呂は外にあり箆で隠すこともなく、外で裸にならなくてはいけない。「これでは若い娘さんが入りづらいじゃない？冬は大変じゃない？雨の時はどうしているの？」と問いかけた。農家の人は「そうそう、不便だとずっと思っていた」と反応してくれたので「トイレも風呂も外では冬、雨の日や病気の時は不便でしょう？外のトイレは肥料用に必要でしょうから残して、お風呂も今のものはそのままいいから、外に出られない日のために、家の中にもトイレと風呂を作りましょう」とい

って農家を説得した。そうすると農家は「いやもうそがんでくれんねー。頼むばい」とこちらを向いてくれた。「じゃあそうしようね」といって、決して命令はしなかった。

食は健康とセットにして、一人ではできないので農協婦人部長にお願いして一緒に村に入ってもらった。「食事は？何を食べているの？」と聞いて回り、ご飯と味噌汁だけを日に3食摂っていることがわかった。「一品作ろうばい」といって共同献立を作り、共同購入を奨励した。農協とのタイアップ。

カマドは赤レンガ作りの煙が家の中に入ってくるタイプで、農協とタイアップしてガスコンロを入れてもらった。この資金は役場から。

農協、役場と普及所で生活改善協議会を設立し、月に一度は町長も呼んで進捗状況を報告した。まさに町ぐるみで生活改善に取り組んだ。「全部の関係機関によくしてもらった」、「至らないから手伝ってもらった。みんないい人だったからやってこられた。少しでも人に喜んでもらいたかった。私が何も知らないのをみんなが知っていたからかえってよかった。みんなが助けてくれた」(この時の活動については、試験場で実績発表の時に集めた資料があったが、40年も経っているのもういらないと思い「なげちゃった」。諫早の試験場には残っているかもしれない。現在場長をしているのは農改で長田地区を一緒に担当した人)。

住居改善資金は10万円で10年間無利子。農協、役場とタイアップした。トイレ、台所、風呂などそれぞれの家でやりたい所から始めた。台所改善ではそれぞれの家の間取りに合わせて設計してあげた。「ここに窓・棚を置くといいですね。手の届くところに棚を置いたらどう？」と問いかけ、農家が「それはいいですね」と納得してから取り掛かれるようにした。

昭和37年頃は歩きだった。普及所には緑のバイクがあるので、川床の山の中に行く時は農改さんの後ろに乗せてもらった。発車の時によく掴まっていなくて、何度も落とされたことがある。

吾妻では台所、健康のことなど農家生活の調査をしたが、昼は田畑に出ている人たちなので、夜でないと聞き取りができない。昼間訪問する時は一人で行ったが、夜間の訪問は帰りが怖いからとお願いして農協の生活指導員と一緒に来てもらった。いつも快く協力してくれた。夜道を女二人で借りた提灯の灯りを頼りに歩き、とても心細かった。山の中に電気はなく、人も通らない。狸か何かの糞で動いたのを見て驚いて提灯を投げ出し、二人で夢中で駆け出し、人家に飛び込んだこともある。農家の人は大笑いしたが、町まで送ってくれた。

農家に泊めてもらうことはしなかった。「泊めてとはいえなかった。」

町長もみんなよくしてくれた。異動の度にまず町長、農協長、役場の農林部には必ず挨拶に行った。島原では保健所にも協力してもらった。小学生とその親の健康診断や講演会もしてもらった。

試験場に麹菌の研究をしている加工専門の先生がいた。手作り味噌は塩辛いので減塩味噌を開発した。農家での味噌づくり実習は、農家からの要請があったので試験場の「大先生」に付いてきてもらい泊り込みで、七輪を小屋の中に入れて温度を上げ、夜中の2時頃見に行ったりした。減塩味噌講習は愛野、吾妻、瑞穂でやった。晩でも日曜でも農家に頼まれれば行った。この「吾妻味噌」は後に農協でやるようになり、商品化され、今でも長崎市内から買いに来るほど人気である。

長田の農協長はやかましい人だった。「生改も農改ももうよかばい」、普及所はもういらないといわれた。長田地区で活動する時は必ず伺いを立て、厳しければ厳しいほど毎回通って理解してもらおうようにした結果、逆にかわいがってもらえるようになった。

(4) 五島福江普及所時代(昭和52~55年)

五島の福江には3年いた。五島では養蚕もしていた。自分の足跡を3年で作りたかった。農協の部

長レベルに参加してもらい生活改善協議会を作った。役場の補助金で公民館の建て直しをした時に食品加工の研修室を作り、味噌づくりのための機械を入れた。月に一度は公民館での研修の日とし、その日だけは畑に出なくてもよいし、いろいろ習い、家庭でも美味しいものが食べられるので、誰からも人気だった。

離島経験は福江と上五島。役場の課長や町長と仲良くなるのがまず大切だった。「今日は　　で来ました。　　したいけど協力してもらえますか？」と必ず訪問した。新人生改と一緒に三井楽にも公民館を建てた。

畜産関係の全国大会で秋田に行き、牛乳を使った生活改善について発表したことがある。五島普及所にいた時はリーダー一人を連れて東京の発表会に寝台車で行ったことがある。その時に東京九段の母校東京家政学院を訪ね、とても懐かしく思った。

車の免許は取るタイミングを失って結局未だに持っていない。「他の人のように仕事しながら教習所に通うなんて器用なことはできなかった。免許用の勉強をする時間があれば、少しでも農家の人のためになる勉強をしたかった。」福江にいた時、普及所の目の前が教習所なので、みんなのように通おうと思ったけど、ついにできなかった。

(5) 西彼時代（昭和 55～58 年）

西彼の時はウリや小さいスイカの漬物、味噌づくりを指導した。リーダー宅で余剰産物のトマトでトマトジュースづくりもした。個人宅では不便なので、じきに「公民館つくりましょうや」という話になった。公民館は2軒建てた。生改グループも作った。公舎住まいだった。体を壊し、辞めたいといったが定年までのあと2年がんばれといわれ、農業経営大学校に赴任した。

(6) 農業経営大学校時代（昭和 58～60 年）

昭和 58 年に体を壊し、退職しようとしたが、退職まで後2年は頭を使わない仕事だからと農業経営大学校の教師をするよういわれた。初めて子供・学生の教育に携わった。吾妻普及所でグループ員さんだったおばあちゃん達の孫が6人ほどいてつながりを感じた。その子達が家から味噌や梅干を持って来てくれるので、「私一人が貰ったわけじゃないから」と給食係の人に渡し、みんなで分け合った。今でもあの時はよかったですねと同僚達と話すことがある。

(7) 退職後のこと

昭和 60 年に退職する時に丁度県友会ができ、緑友会と両方に入った。また、茶飲みだからと保健婦5人、生改1人のグループに誘われて結婚相談も引き受けることになってしまった。結婚相談は女の最後の世間への奉公と思っている（集団見合いの話、仲間もめの話は省略）。

(8) 研修について

六本木の研修には新任の昭和 39 年くらいと、広域になってからの2度行った。衣食住家庭管理をそれぞれ各技術の先生に習った。一人ずつ発表してみんなで意見をいい合った。ロールプレイも1回した。昭和 40 年頃に長崎にも研修館を作って（県の出資。農業経営大学校の隣）1週間の生改グループリーダー研修をした。この時にロールプレイを取り入れ、普段の暮らしを振り返らせた。参加者は「今日はお父さんばい」と威張って見せたりして、楽しんでた。1週間でも畑仕事から解放されるのは彼女たちにとって大きな息抜きのようなだった。家族関係の見直しに役立った。後は献立を作って調理実習をしたりした。リーダーは1週間、部落の人には3日間の研修をした。「よか旅行だったばい」、「お父さんに聞かせんといかん」。

また、研修館には炊事場もあったので、食生活改善のための保存食の実習もした。作ったものは必

ず持ち帰ってもらい、リーダーは地区研修もしてもらった。この研修館では専技から生改が学ぶこともある。

(9) その他

直接農家の役に立ちたいという思いがあったので、専技試験を受けるよう進められたが受験はしなかった。試験を受けるからには勉強しなくてはいけない。農家の人を放っておいて自分の勉強はできなかった。

自分の足跡としては吾妻の味噌、瑞穂の味噌、そして公民館。

キッチンカーの活動はあまりしなかった。農協の婦人部と生活改善の仕事を仲良くやった。共同購入や共同献立、宅配など。生活改善の仕事をするには、必ず農協長、町長、農協の指導員に理解してもらわなくてはならない。転勤の度にまず挨拶回り。指導員と一緒に現場に出る時は、必ず農協長にきちんと「指導員の方をお借りしたい」と伺いを立てるよう気をつけた。

N-H専技は怖いけどいろいろ教えてくれる人で、鍛えられた。分からなかったら考えなさいといわれた。

生改にとって関連機関との連携が一番大事である。「何でも人に教えられた。そうじゃないとこういう仕事はできない。」

農家の生活を見て「こんなにしていたらかわいそうだ。なんとかしてあげたい」という気持ちが常にあった。農家を全く知らないからかえってよかった。今でも当時のお母さん達からお手紙を貰う。生改は一生の仕事。

命令してはいけない。これは自然に身についた。いわれたことに対して相談に乗る。

嫁と姑のグループを別々に作り、嫁グループには「(姑には)ハイハイと喋っていなさい」と諭し、姑のグループではサツマイモで現金収入を増やす指導をし、みんな仲良くしましょうと話した。

【長崎15 - 3】

日 時：平成15年7月27日（日）午後1時～3時半

場 所：長崎県国見町，茶寮六三郎

お話を伺った方：N-F氏（昭和9年生まれ）元生改（N-Dさんが島原の保健士さんから生改のN-Gさんを紹介して貰い，そのN-Gさんからの紹介でN-Fさんの名前があがった。）

調査者：佐藤寛，太田美帆，大石和代（長崎大学），長岡清子（三菱重工）

議事録担当者：佐藤寛

1) インタビューの状況

あまり乗り気でなかったN-Fさんを昼食に誘い，食事をしながら「1時間ほど」ということでお願いした。レストランなのでやや騒がしい中であつたが，整然と，次から次へと話してくれた。

生改になったきっかけ

戦争末期，昭和20年に父の里の愛野に疎開してきた（小6）。それまでは長崎市内，原爆の2ヵ月前であつた。父が戦死したので定時制高校に通つた。その時に生改（佐世保にいた初代の森シメさん？後に南米にも行った？）がやってきた。生改になるか，先生になるか考えていた。赴任してきた教師が大和学園の出身者で熱心な人であつたので，大和学園に進学することにした。

大和学園⁵⁾

昭和29年に神奈川の大和学園（2年制の専門学校）に進学。全寮制2年間であつた。朝から夜まですべてが教育。共同で行う炊事も単位に含まれる。当時は大和農芸家政短期大学だつた。学長（小田急の創設者の娘，南林間に幼稚園から短大まである広大な敷地あり）が生改の養成を目指していた。N-Fさんは家政科に進学。全寮制で同級生は20人以下。農林省の補助金などを得て運営していたようだ。大学（N-Fさんは大学というが短大のこと）の先生は，長野県の生改と農改の資格を持っていた（男性）。N-Fさんは昭和31年3月に卒業。当時生改の試験が難しいといわれていたのは長野と神奈川。

卒業後は東京に半年いた。料亭吉宗（よしそう）で働いていた。長崎に帰っても吉宗で働いていた。生改の採用がないので。ようやく生改の採用が再開され，昭和32年卒で採用になった。同期に大和学園の後輩が二人入つた。

長崎県は「赤字再建中」であり，初期の生改の後しばらく生改の採用がなかつた。初期の生改は教員あがりか未亡人がほとんどであつた。N-Fさんの少し前に採用が解禁となり，N-Fさんは昭和33年3月（昭和32年度末）に採用された（同期にあと2名）。その10ヵ月後に5，6名の採用があつた。

熊本，鹿児島は生活改善の先進県であり，長崎は遅れていた。

当時，なんこう（南高来郡のこと？島原半島は南高来郡）に6普及所。国見・有明を担当するのは国見普及所など。研修などなく，いきなり現場に配置された。それまで生改は12人，島原半島に1人であつた（佐賀の人・元教師？）。農業会時代からの普及員はいた。瑞穂の岡田さんなど。当時の普及所は役場に併設。N-Fさんは有家普及所に，後輩の森山さんは小浜普及所に配置。これで，島原半島

⁵⁾ 現在は聖セシール（正しくは聖セシリア女子短期大学・参考資料参照）になっており，幼児教育中心。学長の娘が学長になっている。自分たちが卒業した後に海外に行く人用に研修などの教育もしたようだ（昭和37年3月 大和女子海外拓殖学校併設のことか？）。最近北海道で同窓会があつた。

の生改は3人になった。一時期は長崎の生改の1/3が「大和学園」の卒業生だった。

職歴

昭和33年から。有家(3年) 国見 諫早(昭和45年から5年。減反が始まった時) 大村(6年。ここで退職。50歳。昭和57年3月。離島赴任の話もあったので)。2年休んで口説かれて食生活改善推進員をしている(専技にはなっていないが、専技からはN-Fさんに教えるものは何もないといわれた)。

昭和33年3月にアリエ(南高来郡有家町)に配置、ここに3年、その後国見に転勤。どちらも家を借りて自炊した。夫になる人は国見町の役場で社会教育主事であった(ここで見初められて結婚)。当時の長崎の生改は鹿児島・熊本に比べて雲泥の差。N-H氏(専技)が鹿児島から乗り込んできた(後に長崎で専技と結婚)。それまでは食の専技(和田さん)しかいなかったが、N-H氏は普及方法の専技でしごかれた。泣かされた人もいる。問いかけられ、わからないと「考えなさい」といわれた。

当時からN-Fさんは「独身者と既婚者の壁」を感じている。結婚していないと生改は農家の主婦の心を掴めないという信念を持っている。有家にいた時にわからなかったことが、結婚してわかるようになった。

島原半島

長崎の農業は島原半島。それ以外は零細農家なので、長崎の農政は島原が中心。

生産額は島原(北)2/3,加津佐(南)1/3(ニンジン,ジャガイモなど)。オノ(山手)の方は養豚。タチバナ は野菜。

道の駅は島原にある。「みずなし本陣ふかえ」(商業化しすぎだと思う:担当者注)

稲作は諫早が中心だが、機械化も一番進んだので、土日のみの農業で足りる。兼業化(長崎の三菱重工などに兼業)。

漁家担当

漁家担当生改も一時あった(生改定員増員のための口実)。N-Fさんの九つ下の人が採用になった。島原で一緒だった。その人は現在も働いている。

ご主人のこと

ご主人は国見町の役場で教育委員会の仕事をしていた。旧制師範学校まで通ったが、肺炎で退学した経緯もあり、教育に熱心である。役場には教育担当が二人いて、一人は社会教育担当で婦人会も管轄、ご主人は学校教育の担当。ある年の忘年会に教育長がN-Fさんをお呼びしてくれて、知り合った。

国見の4Hクラブはご主人が担当した。4Hクラブは一般に普及所が受け持つが、技術面は普及所だが、「精神・教養面は俺が引き受ける」と自ら申し出た。青年リーダーを先進地視察にも連れて行った。「世羅幸水園」の担当生改とも知り合いだったので世羅幸水園にも連れていった(共同化に苦労した。犠牲者も出た。生改も関わった・世羅幸水園のこと?)。

ご主人は青年リーダーに書類の作り方もちゃんと教えた。普通は補助金などの申請は農協,普及所,役場の産業課などが代わりにやってしまうが、それでは本人達の身に付かない。教育課の人間がこのようなことをするのは珍しい。

質疑応答(Q:質問, A:回答)

Q - 当初,問題がある時は誰に相談したのか?

A - 主に相手探しの相談をした(エントリーとして誰に働きかければいいのか)。農改,教育委員会/社会教育主事等がメイン。農協はまだ生活指導員がいなかったので、頼りにならなかった。

家計簿

ほんの少しだけした。自家生産物を貨幣換算してみると大きな額になることに驚いた。

農業・家庭菜園

小浜に配属になった後輩は農家だが、自分は農業などやったことがなかった。しかし、大和学園では2年間実習などをしたので、ある程度わかった。長崎の生改の試験では農業が必須科目だったので、大和学園の卒業生は強い。一時期は長崎の生改の1/3が大和学園の卒業生だった。「一粒の種から大きくなる」ということに魅力を感じている。

きちんとしたものを食べる。自分で食べるものを作ることが大切。

家庭菜園の提案（自分もしている）先年、農協婦人部（N-Fさんも参加している）の家庭菜園コンクールで優秀賞を取った。23~25種類の野菜などを植えている。

学園にいた時に初めて小松菜を知った。成長が早い。ホウレン草と違って漬け物などに加工できる。これを導入した。成長が早いので一度に植えると処置に困る。しかし、農家には時期をずらすという考えはない。料理をしない農改にもない、収穫期をずらして自分で食べるという発想。これを指導した。

栄養士との関係

味をしめれば人はやる。普及所と保健所は対象が違う。栄養士も栄養改善するが、店にあるもので献立する。農家の主婦は喜ばない。「あんなの作ってみたが美味しくなかった」。家にあるもので作る = 家庭菜園。生改グループで作れるもののアイデアを栄養士に教えた。

キッチンカーも栄養士と一緒に乗った。向こうは伝えるべき相手を知らないの。生改と一緒に乗ると、相手が親しみを持ってくれる。

一方、新しい栄養改訂ができれば真っ先に貰う（ギブアンド・テイク：担当者注）

N-Iさんとのつながり

広域合併で一緒に普及所になった。諫早でも、自分の後からN-Iさんがきた。行政監査を島原でもN-Iさん、N-Fさんで受け、転勤したら諫早でもN-Iさん、N-Fさんが行政監査を受けた。

生改の得意技

N-Iさんは「奥様」タイプ。N-Fさんの得意は「加工」。学園にいた時には、長野の人はホームスパン、南の人は農業加工、というような出身地域の背景に応じた得意があったようだ。

加工

味噌は調味料であり食品でもある。有家にいたところに、丁度諫早の農業試験場で全県の味噌の調査があった。その結果を踏まえて国見に来てから味噌の改良に取り組んだ。

国見で成功したのは農業加工。器材は王冠締めなどを普及所の金で、ジューサーミキサーは買ってもらえなかったの、家庭用の一番強力なものを自分で買って運んで使った。

味噌の中に、いろいろな野菜などを放り込んでしまうと味噌が悪くなる。漬け物をなくさないとも美味しい味噌にならない。漬け瓜などは水分が多いので味噌が痛んでしまう。ショウジョウバエが湧く。別の加工の方法を提案。「奈良漬けにしよう」と奨めた。

米麴（コウジ）は値段が高いが、多比良の太田酒屋から酒粕を買ってきて造り始めた。口コミで奈良漬けが普及していった。コウジは臭いがするので、密造酒と間違われた。北有馬は密造が盛んだったので。

現在では味噌を造る人がいない。農協が造ってしまうので（3通りのパターン。サイズを持ち込み、

塩ぎり、コウジなどを整えて返す。最後まで作る。初めから買う。

最近の若い人は味噌を造らない。味噌づくりに3日間かかる。

N-Fさんも自分の部落で味噌づくり。義母も造っていたが、N-Fさんを見て「おれやめた」とギブアップした。味噌、醤油づくりは種麹の種類で決まる。

共同炊事

国見に水田は多くない。多いのは諫早。ユイがある。ユイの家の主婦が賄いをするので、共同炊事はしなかった。大村では共同炊事をした。昭和50年代にイチゴ農家で。

交通機関

主として歩くかバス。当時は雲仙の上の方まで比較的バスが通っていた（1日5往復/ヒジク口：土黒？・多比良）。普及所に自転車はあったが、全普及員の分はない。バイクは普及所に1台。広域になってからは自動車。長崎には「キッチン・ポート」があった。

離島・ローテーション

長崎の生改30名。県の1/3が離島。10年は離島勤務すべきという計算。「一番の農業地帯（＝島原）に生改がないのはおかしい」と主張して離島には行かなかった。

質疑応答（Q：質問，A：回答）

Q - 離島で地元生改の採用はなかったのか？

A - 上五島の人がある程度年輩になってから生改の資格を取って五島にいた例はある。立石ヤエさん。対馬には現職でそういう人がいる。離島勤務には「地域手当」があった。五島出身の久保知事時代は「優秀な公務員（生改・教育長など）を離島に送りたい」という思想から、昇級3ヵ月短縮（通常1年）というインセンティブをつけた。この結果、長崎県の人件費が高くなり、国から怒られた。

最初の入り方

婦人会から料理講習を頼まれる。これが主力の入り方。親しくなってから、数人の人のグループの所に講習に行く（4，5人）。農改さんから「行ってやってくれ」と頼まれることもある。

ニンジンの加工

皮を剥いたものと、剥かないもので比較して見せる。剥くのは手間がかかって重さが減るが色がよい。剥かなければ手間がいらず、目方も減らないが色は黒ずんでしまう。これを見せて「後はどうするかは、農家が決める」

冷凍加工

冷凍食品の研修をしたが、農協婦人部長は反対した。しかし、その半年後には農協の店に冷凍食品が並ぶようになった。カボチャの冷凍を教えたら、「孫の離乳食に助かった」と感謝された。

その他の加工

畜産100億，ミカン100万（？）。ミカンの屑をジュースに加工。

カマドについて

昭和33年段階で、もうカマドには手をつけなかった。農家が必要性を感じ、金さえあれば改善する流れが既にあったので。

井戸のポンプも既に始まっていた。相談されればどのようなメリットがあるかというアドバイスはしたし、水質検査などは保健所につないだりした。

普及方法

N-H氏(専技)にしごかれた。後に退職してから食生活改良推進員のトレーニングを受けた時に「普

及と同じ」と思った。一緒に受けた元教員の人は「教育と同じ」とっていた。

投げかけ

実物を見せて、「投げかけ」する。農改も実物を見せる = 先進地視察。

専技が千々石（ちぢわ・南高来郡千々石町・雲仙の西）で味噌づくりしていたので、これを先進地視察で見せに行った。

リーダーの発掘

素質のある人を見つけるのは普及員の仕事。大村では良いリーダーがいた。

国立病院（元々サナトリウム、今は筋ジストロフィーの病院）の看護婦で、農協にも入っていた。その人を育てた。

グループ

味噌づくりなどは共同でなくても、個人が5人くらいでも同時進行で進めばグループ。グループが壊れかけた時には、生改が仲介もする。グループの段階の見極め。手放してもいい段階のものと、援助が必要なものの見極め。それに応じて対処の計画を作る。生改が代わっても、そのグループが持っている「このところを伸ばしたい」という期待を次の生改に引き継ぐ。

イチゴ

国見ではイチゴ栽培1年で、公務員の一生分の所得を稼ぐ。イチゴ御殿がたくさん建つ。30~40aで。ビニールハウスづくりには金もかかるが補助金もある。自分のハウスづくり労働もコストに入れて補助金をもらう。兄弟でも兄がイチゴで弟が役場勤めだったりすると「話ができん。桁が違う」という。

労働衛生

最初の頃は生活技術のみ。その後生活環境に。最初は農薬公害（稲作のホリドール、ミカンの農薬）農家の健康事業。「疲れない作業姿勢」も大村でやった。諫早時代に基礎カロリーの計算もした。大学の先生と1ヵ月に1回調査に行き、2年間続けた。基礎カロリーの計算し直し。機械化によって基準となる労働が違ってきたので。3~7日間の生活記録もした。小野地区ではN-Fさんがやった。

生改グループに対する反対

農協のトップからの反対が強かった。地域によって違う。吾妻農協は生改をうまく利用した（N-I氏）。当時の農協は購買担当職員しかいなかった。生改と上手につながった。既に農協に生活指導員がいるところでは、行けばその指導員から感謝された。「生改に来てもらうと女性活動が活発化する」と農協組合長に進言して呼んでくれたりした。波佐見（東彼杵郡波佐見町・佐世保の東）では、前任生改が若く、婦人部長のいいなりであったが、N-Fさんが赴任して「それはおかしい」などといったので怒り、突き飛ばされた。

研修

冷蔵庫の出始めの頃、県内の生改の研修（片山専技の時）で、「加工もいつまでも同じではなく、冷凍技術の研修をすべきではないか。瓶詰めはもういい。瓶は一度あけたら使い切らなければならないし」と提言。研修カリキュラムをその場で変更させた。

普及員のOB会

いつも9月に開催されるが、味噌づくり（自分でやっている）の一番いい時期と重なるので出席できない。

共稼ぎ・子育て

先輩専技はすべて未亡人。共稼ぎはN-Fさんが初めて。農改からの風当たりが強かった。N-H氏も当初独身。娘二人（下の娘・かよさん4年間活水で自炊）。姑，3歳までは人に預けていた（人に恵まれた・自分も子どもを育てた人）。3歳からは保育所。

東京研修

毎年県から一人，県庁で決める。N-H氏はN-Fさんを派遣しようとしていたが，いつもタイミングが悪く，N-H氏から文句をいわれていた。計2回行った。1回目は1ヵ月。まだ乳が張っていた。研修内容に疑問を持った。なぜこれをするのか，実生活で役に立つのか。2回目は1回目のあとすぐ。広域主任の研修だった。現在県庁は農政課の中に普及班と専技班がある。

実績発表会

自分で連れて行ったことはない。学生の時（大和学園）に見に行ったことはある（カリキュラムにあった）。4Hの全国大会を聞きに行ったこともある。

加工室

大村で加工室を作った。県の農政事業で，グループ活動が進んでいるところは，この事業を使って施設を作れた。農家のみなさんは技術を持っている。

振り返って

「普及に育てられた」。最初の頃，先輩から「農民は，いかに無知でも一国一城の主なのでおろそかにしてはいけない」と教わった。」

農改の中には，台風の時に夜中に農民のビニールハウスが飛んでいないか見回って歩いた人もいた（島原時代の所長の大町さん）。農改のいうことは，農民は金儲けにつながるので振り向く。

初めの頃苦しかったこと。理解してもらうのに苦労した。生活技術の科学的な知識対おばあさん生改のやり方。若い世代の最初だったので矢面に立たされた。市町村のバックアップが必要なので会議に出る。「女に何ができるんか」という目で見られる（生意気）。試される。しゃべらされる。県内全域に生改が入るようになってから，そうしたことはいわれなくなった。

生改は高学歴になっても現場を知らないと役に立ちません。家の中を見ないと，農家が何を望んでいるのかは本当に分からない。ファックスやアンケートでは分からない。生活改善のため動線を短くするアドバイスをした。

退職後

吾妻の普及員で，退職して農協の指導員になり，普及員ではできないことをした人もいる。＝商業行為。新農政で加工室の設置が可能になった（自家消費用なので保健所の検査などはない）。

三和カマド（さんわ）

西彼杵郡三和町（長崎の南）から？

【参考資料】

聖セシリア女子短期大学 <http://www.cecilia-wjc.ac.jp/page002.html>

〒242-0003 神奈川県大和市林間2-6-11 TEL：046-274-8564 / FAX：046-275-7453

学長 伊東千鶴子

沿革（キリスト教・カトリックの精神）

昭和4年5月 大和学園女学校創立

昭和5年3月 大和学園高等女学校創立

昭和 7 年 11 月 大和学園小学校併設
昭和 10 年 9 月 大和学園喜多見幼稚園開設
昭和 20 年 3 月 大和学園農芸女子専門学校開設
昭和 22 年 4 月 大和学園中学校設置
昭和 23 年 3 月 学制改革により大和学園高等女学校を大和学園女子高等学校に改称
昭和 25 年 3 月 学制改革により大和農芸女子専門学校を大和農芸家政短期大学に改称
昭和 28 年 3 月 大和学園幼稚園開設
昭和 37 年 3 月 大和女子海外拓殖学校併設
昭和 48 年 4 月 大和農芸家政短期大学を大和学園女子短期大学に改称
昭和 53 年 4 月 モニカ保育園開設
昭和 55 年 5 月 大和学園幼・小・女子中・女子高を聖セシリア幼・小・女子中・女子高に改称
昭和 59 年 4 月 大和学園女子短期大学を聖セシリア女子短期大学に改称(現在は幼児教育学科のみ)

【長崎15 - 4】

日 時：平成15年8月6日午前9時半～午後12時10分

場 所：長崎県庁

お話を伺った方：N-J氏（生改，現長崎県農林部農業経営課専門技術員班参事）

N-K氏（元生改，現家の光講師）

N-L氏（元生改，元消費者生活相談センター相談員）

調査者：山下優子，太田美帆，佐藤寛（途中参加）

議事録担当者：太田美帆

内 容：昭和20～40年代の長崎における生活改良普及員の活動状況

1) インタビュー形式

まず，農林部農業経営課にて江頭正治課長，寺島正彦課長補佐にご挨拶。場所を移して国際交流課会議室にてN-J氏，N-K氏より話を伺う。10時半N-L氏到着，11時佐藤調査員到着。

2) インタビュー時入手資料

長崎県農業改良普及事業20周年誌

長崎県農業改良普及事業30周年誌

グループ

アルバム4冊

3) お話を伺った方の略歴

N-L氏略歴

満州生まれ，北京育ち。終戦とともに西海町に引きあげ。諫早出身。県立短期大学家政科被服専攻卒。生改資格取得。昭和31長崎県下初の新卒採用。21歳。同期4人（一人は28歳の再就職者，二人は新卒採用）。先輩生改の7人はみな元教師や戦争未亡人など母親世代だった。県庁経営課で1年間事務。昭和32年5月江迎町普及所。江迎は炭鉱の町だが，その農村部分を担当。町の雰囲気は暗く，戦場に行くような気がした。昭和35年産休。昭和36年長崎普及所（6年）28歳。N-J氏が新規で採用され，一緒に活動した。昭和42年県庁（1年）。（生改歴計11年）二人目の子供が生まれ，異動の多い生活は続けられないと思って退職。子育てが一段落してから請われて県の消費者生活相談センターの相談員を26年務めた。

N-K氏略歴

昭和35年採用。岐宿普及所（3年）。香川県出身。香川県生改養成所卒。山口県の藤井氏は1期先輩。生改にどうしてもなりたくて募集のあった長崎県を受験。香川県からは一人のみ。未知なる所への憧れもあり，また数年したら戻るつもりにしていたので特に深く考えず長崎にやってきた。後に畜産関係のご主人と知り合い結婚。離島への赴任は夫婦揃って出してくれたので別居することはなかった（離島勤務の辞令が下ると退職する人も少なくなかったので，県も夫婦揃っての離島勤務くらいの都合はつけてくれた）。壱岐勝本普及所（3年），西海町普及所（6年），農業大学校研修部（2年），県庁農政課専技（3年），諫早普及所（2年），県庁専技普及方法（7年），西彼普及所（4年），壱岐全島（3年），島原普及所（3年），長崎普及所（2年）退職，県の農業振興公社（1年10ヵ月，諫早

の干拓地の売買をするところ。県庁農林部の下請け), JICA 短期専門家としてインドネシアに赴任(3 ヶ月) 酪農プロジェクト。

N-J 氏略歴

昭和 39 年採用, 長崎普及所(6 年), 昭和 45 年大村普及所(4 年), 昭和 49 年島原普及所(3 年), 昭和 52 年吉野普及所(3 年), 昭和 55 年諫早普及所(4 年), 昭和 59 年島原普及所(3 年), 昭和 62 年県庁専技(6 年), 平成 5 年大村普及所(1 年), 平成 6 年上県対馬普及所(3 年), 平成 9 年大村普及所(2 年), 平成 11 年千綿女子高等学校(県立の女子農業後継者育成のための高等学校。中卒女子の受け入れ。3 年間の全寮制。全国でも数校しかない。57 年間続いたが, 今年 3 月廃校), 平成 15 年 4 月~現職。

4) N-L 氏の活動

江迎普及所時代(昭和 32~35 年)

江迎普及所初代生改。こんな若い娘が一人で赴任してくるなんて初めてで外人が来たように珍しがられ, かわいがられた。着任早々有線放送で挨拶するようにいわれ, とても緊張して何をしゃべったのか覚えていない。有線放送は各戸にあったのでその後活用した。漁村の生活は初めてで, 魚のさばき方や蒲鉾の作り方などを習うことは大きかった。

農改さんはほぼ各町村に住み込んでいた。10 歳年上の保健婦と一緒に 3 ヶ村の戸別訪問から始めた。移動は「テクシー」(歩き)。

父は農業試験場に勤めていたが, 自分は農村で生活したことがない。農家の生活に飛び込みたくて, いろいろ習った。イネ刈りもここで初めて習った。農村に入った時はウナギとヘビ, キャベツと菜の花を間違えるようなありさまだった。

その頃の農家は納戸に子を寝かせて農作業に出る。布団は引きっぱなしの万年床。若夫婦の部屋が物置のような納戸だった。生活が軽視されていると思った。一番ショックだったのは箱膳。食卓の引出しの中にそれぞれの茶碗があり, ご飯の度にそれを使う。皿を洗わないのかと聞いたら「忙しくてそんな暇はない! いちいち洗ってられない」という返事だった。水に困っているわけではなかった(当時の食事には油ものはないし, ご飯と味噌汁と酢の物くらい。最後にお茶漬けにして茶碗をすすぎながら食べるのが作法。それほど汚いわけではない。N-K 氏注)。

布団を干そう, 顔を洗おう, 2 週間にいっぺんは風呂に入ろうなど, 衛生思想の指導から入った。フライパン運動, 台所を明るくしよう, 布団を干そうなどが主な活動。

協力者

お世話になったのは社会教育主事, 保健婦さん, 他地域の生改の先輩, 役場の人。

先輩生改たちは 35~40 歳くらいがほとんどで, 20 歳の自分とは一回り上の世代だった。江迎の時代, ジャムづくり, 瓶詰めなど農産加工は佐世保の先輩に習いに行き覚えた。泊めてもらったり娘のようにかわいがってもらったり, 大変お世話になった。

産児制限をするのに, 10 人くらい子どもがいて当たり前と聞いてびっくりした。また, 梅毒の患者は家の中で軟禁状態にされていることも分かった。梅毒などは知識として知らなかったもので, 保健婦さんにいろいろ教えてもらった。

グループ活動は一人でしたが, 他は保健婦や開拓保健婦(年上の先輩。ササダノリコ氏。生改と保健婦の両方の資格を持ち, 両方の仕事に理解のある人だった。現純心大の先生) と一緒に活動した。

女性で仕事をしている人は少なかったからみんなで力を合わせた（県の保健婦は3歳児検診など事業で入ってくる。町村の保健婦や開拓保健婦は毎日の生活を見ている。N-K氏注）

保健婦と一緒に江迎で農繁期の共同保育をし、青年部の農業をしない男性が手伝ってくれた。保健婦と二人で保母役をした。子供たちの昼食は母たちがおにぎりを持たせる。定期的に乳を飲ませることが子どもの発育上大切なことだと教えた。若嫁たちは農作業の合間を縫って保育所に来て乳を飲ませる。大きな顔をして休めると若嫁は喜んだ。家事は男が休んでいる間にするのが当たり前とされていて、女が休む時間はなかった。

質疑応答（Q：質問，A：回答）

Q - 共同保育は保健婦と生改どちらがいい出したのか？

A - 保健婦さんが先輩だったから、保健婦さんだったかな。でもほとんど一緒に行動していたから、一緒に歩きながら考えたのかも。田植えの時は毎日村に通った。

グループ活動

社会教育主事に婦人学級の講師として招かれたり、婦人会の総会で話をするよういわれたりした。生改グループを作ろうとしたら地域婦人会の反対にあったが、社会教育主事や元教師などがみんなで交流すればみんなの利益になると説得してくれた。江迎では田平、鹿町などほとんどの部落に社教主事と入っていった。

グループづくりをしようとはいわずに、定例会・講習会を持つと入っていった。（料理）講座をすれば人はいつも集まった。油炒めはよくした。ピーマンが珍しがられた。ワラ布団、余ったトマトでトマトケチャップ、ソース、皿うどん、チキンライスなどを教えた。集まりはよかった。公民館のピンポン台をテーブルに使った。ほとんどが専業農家で生活時間が同じなので昼間集まるのに問題はなかった。味噌づくりは夜にした。

中央研修

昭和32～33年頃、六本木の指導者研修に出た。山本課長は厳しかった。リーダーなら下着は毎日替えなさい、突っ掛けを履かず靴を履くように、洋服は袖と襟のあるきちんとした格好をするようにいわれた。当番で炊事をし、全てを記録した。基本的な生活のあり方を叩き込まれた。「そんなことまで！」と思うこともあったが、リーダーとして人前に立つならそこまですべきなのかと納得した。こういう指導を受けてきちんとすることは大切だろう。新鮮だった。グループ活動や味噌づくりで忙しい研修だった。ロールプレイもした。

長崎普及所時代

長崎普及所時代、専業農家の多かった川平地区を濃密指導地域に選び、200戸を1日に5、6軒ずつ回り、1ヵ月かけて地図に落としながら生活環境調査を実施した。この時、新任で赴任したのがN-J氏。一緒に調査に回った。アンケートを作り、主婦と友達になりながら楽しく調査した。水場、流し、カマド、火、動線、作業姿勢などをチェックした。土間の台所が多く、家庭井戸や湧き水がある家もあった。

実績発表会の全国大会には昭和39年の冬に、川平の平リーダーと二人で九段会館まで行ったことがある。1歳の子供を置いて行くのが辛かった。活動は家計簿記帳。急速な宅地化時代で土地を売り、俄か土地成金は家を大きくしたり、物を買っただり、派手な生活をしてきた。以前、大浦にいた時もイモ畑を団地に売り、大きなお金が入ると生活が途端に変わることを見てきた。川平でも同じになると思ったので、「今お金があるからといって無計画な使い方をして2、3年後に困るようではいけな

い。無駄な出費は止め、250 円でできる晩ご飯を」などと指導した。

5) N-K 氏の活動

五島時代

N-L 氏の同期の一人が五島の福江に配属された（昭和 33 年）が、親元に呼び戻され 1 年で生改を辞めてしまい、異動のない農協長崎中央会の指導員になった。N-K 氏は生改としてはその人の次の二人目として昭和 35 年に岐宿に赴任した。

五島では生改は自分一人だけだった。町長や地域のお偉方も娘のように大事にしてくれた。生産組合長会議では町長の横に座らせられ、鰯の一番いいところを食べさせてくれた。

農協はあったが技術指導しかしておらず、経営指導はまだなかった。婦人部もまだなかった。

岐宿では何でも珍しく、楽しく、寂しくはなかった。漁家では魚を貰ったり、農家に花を貰ったり。「技術職としての触れ合い」があり、事務職よりずっと楽しい仕事をしているという自負があった。普及員は人相手の仕事。人的財産をたくさん貰っている。苦労と楽しみは裏表。

長崎では県外出身者は離島回りをさせられるようで、いつ本土に赴任できるのか分からなかった。昭和 50 年後半に離島の任期が 3 年、長崎の 1/3 は離島だから、普及員は平等に勤務年数の 1/3 を離島で過ごすような通達が出た。

生改不要論と闘う

昭和 48 年の地方行政改革の時、県庁で専技をしていた。生改の大事な仕事は農村のリーダーづくりである、農業生産増大という農改、農協の活動を支援するために生改が必要であると主張した。生改不要論を説く若い男性から「N-K のばばあ」といわれた。「女性がしっかりしなければ、あなたのような立派な人はできないのよ」と諭した。

自分は人と直ぐに喧嘩をしてしまう。N-M 氏が福祉課長の時、自分の活動を散々反対された。「西海町のおなごをどうするつもりか！」といったことがある。町長になる頃からは、女性票稼ぎのためか、提案は何でも通るようになった。今はなんでもいえるようになった。町政にどう入って行くかは活動を左右する。

国（農林省？）からの監査が N-K 氏のところに入った。活動方法を説明し、地区も見せたら「他県に比べて理論がしっかりしている。しかし、こんなに事務をしっかりとやっていて現場に行く時間があるのか？」といやみをいわれた。普及は教育であり、ソフトの事業。成果が目に見えないからこそ理論として残しておくべきというのが、N-K 氏の立場だったのだろう。生活改善はなかなか評価されない。昭和 48~50 年の生改不要論の時も矢面に立たされた。生活改善実行グループ員が 4400 人もいて地域づくりに貢献しているというのに。

（社）農村生活総合研究センターを作る時に、水上元子氏から一緒にやらないかと声をかけてもらったことがあるが、その時は都合がつかず断ってしまった。

インドネシアでの活動

5 年間続いた JICA 農業開発協力部畜産園芸課所管の「酪農技術改善計画」に 2000 年 1 月から 4 月まで赴任。昭和 35 年頃の日本での活動と同じだと思った。朝 4 時から夜 9 時まで労働する女性。「人間は機械じゃない。今に日本と同じになるよ！人を大切にする農業をしよう！」普及も普及員も大事にされていない農政中心の農業は日本と同じと感じた。丁度この頃州政府に農政課がなくなり、日本の悪いところばかり真似していると思った。「普及員の手引き」をインドネシア語・日本語の 2 言語で

作った。一緒に派遣されたのは獣医さんの専門家たちで、技術はお持ちでも普及方法についてあまり知らないようだから教えてあげたら喜ばれた。

男性は研修に出ても妻には教えないから、両方にしなくてはならないと思い、農協の婦人部に対する研修を始めた。今も定期的に続けているはず。

生活改善事業はいつでもどこでも、農業の付帯事業として始まり、財政が厳しくなるとすぐに切られる。しかし、刺激を与えると弾けることもある。農協長に活動のうまく行っているところを紹介してもらい、農協長とともにそこを訪問し、女性を集めて「何をしたいか、何を習いたいか」議論させた。普段しゃべれないようなことでも場を作ってあげてメスを入れれば動きだす。「研修はなぜ男にしかないのか」という意見があがり、これを聞いた農協長は後に女性への研修を事業化した。いったことが認められ、すぐに実現できるからインドネシアの活動はとても遣り甲斐があった。本当は半年いる予定だったが(JICA側の?)事情で3ヵ月になった。他の専門家はもっと長くいて羨ましかった。

6) グループづくりについて

指導者ぶらないことが大切。一人よりもみんなでやりましょうと声をかけ、段々仲間が増えるのを待つ。仲間が増えるとそれぞれの時間がぶつかるから、じゃあ定例会にしましょうか、という風になる(N-J氏)

当時の若妻会は今でも続いている。新しいやり方で生活して行く気心が根付いたようだ。天皇賞を取った?(N-L氏)

女性のグループについて、賛同する人はいいが反対も多かった。目立つことをすると異端視された。余分なことをするな、女が外を出歩くようになる、生活が悪くなる、平和な村を揺るがすな、(活動費として)嫁が金を使うことが多くなるなどの不満が男性からあった(N-K氏)

地域にいかに溶け込むか。この術は現場で自然に学ぶ(N-L氏)

旅行が好きで今でも友達とよく出かけるが、旅先でも出合った人とスキンシップを取るので「相手の中にいつの間にか入っている」と同行者にいわれる。町の奥様にはできないこと(N-K氏)

7) 他組織との連携

農協婦人部などと連携して活動することが大事。指導員さんと一緒に行けるところは行った。(受け皿としての)農家は一つである。ミカンの増産時代には男女合同の研修をし、女性には料理講習もした(N-J氏)

普及所と農協との縄張り争いは佐世保であったようだ。

8) 共同炊事

共同炊事は小野平野の大型農家の間で昭和30年代後半から40年代前半頃に盛んだった(N-J氏)

西彼のミカン農家では出荷時期の1ヵ月だけ専属調理人を一人雇い、補助を二人グループ員から交替で出した。忙しい農繁期はどこもろくなものを食べていないし、買うことも多いので出費が高む。そのお金で共同炊事をするようにした。共同炊事場所は間取り、土地、お金の問題は部落長を始め村全体で話し合い、女性が話し合う問題、町長と話し合う問題などに分け、農改さんと一緒に2年間話し合いを続けた。県単の新農政事業(負担:県1/3,町1/3,部落1/3)が西海町伊勢崎に入ることになり、受け皿として組織をつくり、部落の分を労働提供、柱や瓦の持ちよりで補い、地元の左官

屋さんに頼み、半年がかりで建てた（N-K氏）

9) 給料について

江迎時代、普及員は県職員だが役場の農林課に机を貰い、当時給料は6000円で部屋代に3000円払っていた。昭和39年から普及手当がつくようになった。泊り込みの仕事も多かったが、超勤手当など考えたこともなかった。婦人学級に講師として呼ばれれば、2000～3000円ほど用意してくれる町もあった。「給料を貰っているから結構です」と断ることもあったが臨時収入が色々あり、生活には困らなかった（N-L氏）

初任給は8700円だった。講師謝礼を貰うことはあった。壱岐にはそのような習慣はなかったようだ（N-J氏）

生改グループとして集まるのに「婦人学級」と2枚看板にして、講師謝礼を捻出してくれる町もあった（N-K氏）

10) 九州各県生改事業概観（主にN-K氏が専技をしていた昭和40～50年代、中域から広域に変わる頃に感じたこと。）

甲-1 鹿児島県。絶対的に優位にあった。県庁内に生活改善係があり、専技も全種二人ずつ揃っている県は他になかった。「さちさんはドンだった。後輩をうまく育てたから後半さちさんの要求は何でも通った。」

甲-2 熊本県。係と専技全種あり。

乙-1 大分県。係あり。専技一部のみ。

乙-2 宮崎県。細々とだが係あり。専技一部のみ。

丙 佐賀県、福岡県、長崎県。係は農協担当と兼務。専技は2、3人。

常に鹿児島、熊本が進んでいたため、先進県から改良防除着などが回ってきて参考にした。「あそこがしているのだから、うちでもしよう！」といつもいっていた。九州ブロックの結びつきは強く、専技や普及員の研修などでいいところを学びあうようにしていた。

長崎県は常に農業優先で、生活改善など付け足し程度。「作物ができなければ売れない、売なければ生活できない」、「農業あつての生活」、「生活改善すると生産が下がる」が主流の意見。専技として県庁にいた頃、いいことだと分かっているにもかかわらず実行できないのが歯痒かった。農産物の無人販売をお母さんたちで始めたが、「出荷できないようなボロを作っていると思われる、面子がつぶれる」と農改さんから文句をいわれ、「うちの物が売れなくなるからやめろ」と農協からもクレームが来た。お母さんの小遣い稼ぎ、ひいては女性の自立のためなど、到底理解してもらえなかった（N-K氏）

11) 普及方法、専技について

長崎初代の専技は和田恒子（食）氏、文学少女のような人だった。

N-H氏は、屋久島で生改をしていた人で、昭和35年に普及方法の専技として長崎に来た。N-H氏が来るまでの生改の活動は戸別訪問と定例会が主で、グループ活動はN-H氏が導入した。パワーのある人でタバコも吸っていたので「新しい女性とはこういうものか」とショックだった（N-L氏）。昭和48年に長崎県生活改善実行グループ連絡協議会を結成して退職し、消費者生活センターに勤めた。

普及方法の三羽鳥 岩手の桑原氏、長崎のN-H氏、熊本の某氏。この3人がN-N氏の直弟子

だった。これを継いだのが愛媛の高岡氏，宮崎の湯浅氏，それに長崎のN-K氏。

チェック項目は「実態調査法」として研修で習った。観察の仕方や聞き取り方法も。国の事業として農林省から降りてくることもあったし，専技が指導することもあった（N-K氏）。

「実施計画」はとても役立つ。問題把握 課題設定 計画づくり 実施 見届け。岩本専技は厳しかったが彼女が指導した「濃密指導」や「グループづくり」は後々役立った。しかし，何事もピシッとしすぎて，理論的・体系的方法を徹底させようとしたので，現場の生改は農改とも違い，普及所の中でも孤立してしまうことがあった。普及所長から「方法論的に面倒くさいことをする」といわれたこともある（N-K氏）。

長崎県にも生活研修館ができた。1泊2日の農家研修の時は，ロールプレイでお風呂に入る順番を変えてみるなど，民主的な家族のあり方について考えさせた。20年くらいやったと思う（N-K氏）。

12) 活動の足

ほとんどテクシー（徒歩）農改さんのスクーターに跨って記念写真を撮り母親に送ったら「女の子がバイクに乗るなんて！仕事辞めなさい!!!」といわれたことがある（N-L氏）。

福江時代に自動二輪の免許を取った。110人受けて合格したのは10人で女性は一人。五島は坂道が多いから125ccのパンドラを配車された。五島でバイクに乗る女は一人だけなので目立った（N-K氏）。既に車の時代。公務で免許を取り，公用車に乗っている（N-J氏）。

【長崎15 - 5】

日 時：平成15年8月7日午前9時45分～12時

場 所：福江市木場町248-3 バス本通り，福江薬局と五島修理工場との中間地あたり

お話を伺った方：N-O氏（元保健婦）

調査者：佐藤寛，太田美帆，山下優子

議事録担当者：山下優子（補助：佐藤寛）

面会者に関するインフォメーション等：元五島保健所保健婦

1) 保健婦としての職歴

昭和26年12月（上の子が4歳，下の子が2歳の時に働き始めた。それまでは家庭にいた）で福江保健所（五島保健所・現在？福江の市役所の前）に勤務。当時は上五島（5町），下五島（1市5町）両方を管轄していた。上五島は昭和39年に保健所ができる。それで担当地域は半分になった。それまでに一度（昭和22年頃？），保健所（福江？詳しくは，「私生活（2）」で後述）に保健婦として勤務していた。

勤務は月～金で，土曜日は半ドンだが，午後は女子職員の日直があった。この時間は仕事ははかどった。

県職として転勤はあるはずだが，希望は出さず，県としても離島地域にいてもらえると助かるので転勤は少なかった。

大村保健所に2度勤務（昭和53～55，昭和61～平成元年で退職。いずれも単身赴任）それ以外は福江。

昭和26年保健所に入った当時はとにかく結核だった。終戦後，5，6年経っていた。もの凄く蔓延していた。結核疾患の業務に関わったのが大半。当時，上五島保健所（現在もある）は下五島保健所と一緒だった。昭和39年だったか，上五島に（別に？）保健所ができる。それまでは，上下（かみしも）を福江保健所が担当していた。

入った時は結核検診，レントゲン検診が大半だった。

はと丸というレントゲン船（船員さん4名）で，上下（かみしも）を回った。つまり，1年のうち約半年間は，はと丸で勤務していた。

はと丸では，丁度15日間の泊まりこみをする。昭和26年，勤務し始めた時，婦長を入れて4人の勤務体制だった（看護婦は一人いた）。しかし，一人が産休に入る，一人が結核で療養に入り，勤務3ヵ月後に，婦長と二人になった。その中，15日間，N-Oさんと事務の方が15日交代でレントゲン船に乗り込んだ。

上を回る時は旅館のないところでは，船の中で寝泊り，食事をした。船員さんが食事を作ってくれた。晩には「カ」が出てくるので，蚊取り線香を焚いてベッドに休んだ。

一日に平均して1200人，学童検診と一般住民検診をした。寝言でも「はい，息を吸い込んで」といっていたほどの激務だった。

2) 私生活（1）引き上げ

昭和4年，北朝鮮生まれ。北朝鮮から引きあげてきた。引きあげに当たっては，避難民生活をした（その時に父，母，姉，姪を亡くした）。

昭和 20 年 3 月 ラナン (羅南?) 高等女学校卒。父は校長をしていた。ラナンには師団司令部があった。卒業とともに 30 人くらいの女子学生が「女子通信隊」として動員され、航空信号(?)を伝える任務に就いた。ソ連が攻めてくるという情報で避難命令が出た。家族は民間人とともに南に逃げた。N-Oさんは軍隊とともに北に向かった。父は避難の時に学校にご真影を取りに戻ったために、一家は最終列車に乗り遅れた。

その後、途中のハクガンで終戦となり、兵隊は白旗をあげた。兵隊は捕虜になったが、女子学生の一団は放置された。それから一行は各自軍の背嚢を背負って南に逃げた。昼は危険なので山中に身を隠し、夜移動した。漢口で船を渡してもらって対岸に着き、友人と家を借りていた。旦那さんのお父さん(お舅さん)の友人が迎えに来てくれた。姉が銀行に勤めていて、訪ねてくれた(?)。両親が
にいと知らされ、汽車で両親のところに行った(1時間半くらいかかったところ)。汽車の中で唯一の持ち物であった背嚢を盗まれてしまった(たいしたモノは入っていなかったが、野宿する布団や写真などがあつた)。家族と合流した。

しかし、2ヵ月後に発疹チフス(再起熱)が流行。1945年12月に父(有川の出身)が、翌年1月に母(福江の出身)が、3月に姉が死んだ。当時は死者が多かったので、お棺ではなく筵にくるむだけ。親戚で寮を借りて住んでいたが、筵を出しておく世話役が共同墓地に埋葬してくれた(火葬はできない)。

その後、兄夫婦、姉、私の4人で引き上げてきた。

3) 私生活(2) 就職・子育て

引きあげ後、就職する必要があつた。朝鮮の女学校では従軍看護婦用の教練があつたので、3年卒と同時に看護婦の資格が取れた。免許は無くしていたが、医師会長に証明してもらい看護婦として採用。五島病院で看護婦として働き、資格を取った(昭和22年?)。

父の友人が保健所長であり、保健婦の資格を取れといったので、勉強して資格を取った(18,19歳)。そして保健所に勤めた(半年ほど。当時、保健婦の給料は公立五島病院の看護婦の給料の半分だった)。それから五島病院に勤め、その後結婚し退職。それから、声がかかって保健所に勤め始める。

昭和26年12月(下の子が2歳、それまでは家庭にいた)に五島保健所に勤務開始。お姑さんはそれと同時に岐宿からきてくれて、子供の面倒を見るからがんばりなさいと励ましてくれた。

昭和31年に第3子出産。7ヵ月経つと外泊の勤務再開。母乳で育てていたので外泊の時は乳が張った。姑が赤ん坊を背負って保健所まで乳を飲ませに来てくれた(歩いて30分以上。1日2回)。昭和36年に第4子出産。子供4人はすべて女の子。子供の面倒は姑(現在96歳、介護が必要で、毎日デイケアセンターで入浴させてもらっている)が見ていた。上の二人は2歳まで育てた。二人目の子が2歳の時に保健所に勤務開始。下の子二人の産前産後休は42日のみ。4人とも自宅分娩(この家で)。二人は看護婦(三女、四女)。次女?が保健センターの福祉施設に勤務。三女は精神障害者の作業所の指導員。

4) はと丸

県の「はと丸」というレントゲン検診船に乗って検診に回った(五島と対馬で交互に使っていた。退職する2年まで「はと丸」は健在だった。昭和53年まで使っていた。今はレントゲン車がメインで、小離島では船が使われている。奈留島、椀島、大島、赤島、久賀島など)。当時の活動は結核検診がほ

とんどだった。

当初は上五島も担当地域。上五島まで片道6時間。しけのため、奈良尾で引き返したこともある。

上五島保健所ができてからは下だけを回った。それで半分くらいになった。下だけでも3~4ヵ月かかった。

船員4人(検診の際には学童を誘導してくれた。また、注射針?の殺菌消毒で乾燥させる際なども手伝ってくれた)。レントゲンを積んでいる。1回の航海で15日間。泊まり込みで検診。

就職当時の福江保健所は、婦長を入れて4人の保健婦がいた。しかし、一人が産休に入り、一人は結核になってしまった。そこで、婦長と交代で船に乗ることになる。事務の人も一人乗り込んだ。医師、レントゲン技師も乗り込む。

巡回では、多い時には1日1200枚のレントゲンを撮った。学童検診(小、中、高校生)、一般住民検診(町内会で集合をかけた)ともに。防着も無しに撮影したが、今では考えられないこと。

最初は全員に間接撮影。宿に持って帰って現像する。これが乾く間に休憩。器具の洗浄など。乾いたら医師がついてきて読影する。

翌日朝一番に養護教諭にきてもらい、陽性の疑いのある生徒を連れてきてもらう。

船の中で血沈検査(1時間値、2時間値)。血沈棒で2ccの血を採るが、これも洗って何度でも使う。直接撮影の現像、読影。データを保健所に戻して、各学校へ結果を送る。

当日の間にすべてを済ませてしまうのは、そうでないと結果が本人に明らかになるのが遅くなるのと、15日間の仕事を抱えて帰ってきたら大変。学童に陽性はあまり出なかったが、1日に40~50人出た、記憶が定かではない。一般の人の検診は町内会経由で集めてもらう。各町の受診率の比較などした。結核は発見されるのが恐いので、疑いのある人ほど検診に出てこない。衛生教育が必要。早期発見・早期治療を訴える。当時はストマイ⁶⁾もなく、死ぬ病気の恐怖があった。

5) 家庭訪問

結核と判明した後は、家庭訪問をする、家庭訪問の前に全町に衛生教育に回る。結核患者の状況を住民に知ってもらい、少しでも感染を予防する、早期発見、早期治療をした。その頃、昼はみんな仕事でいないから、夜に出かけて行って衛生教育をした。

上五島も担当している頃は、1週間泊り込みで行く、1週間の間に乳児、妊婦、家族計画、結核の衛生教育、家庭訪問、それを1週間、月曜から土曜日に帰ってきた。午前中は訪問、午後は乳児相談、午前中は訪問、午後は妊婦相談、夜はその合間を見て家族計画、それが終われば受診率を高めるために結核検診のPR。その当時、結核は死ぬ病気だったから、検査を受けて知りたくない、症状が少しでもあったら受けない。それで頑張った。役場の衛生課の衛生主任を通して受診率を各町村に知らせて役場にもここが悪いから協力して下さいといていた。

五島は1市5町。

⁶⁾ ストレプトマイシン。「Streptomycin (strep-to-mi'sin). 土中にある放線菌の一種、ストレプトミセス・グリセウスから得られる抗生物質。結核および多数のグラム陽性・陰性菌に対して抗菌力を持つ。」『ステッドマン医学大辞典 第4版』メジカルビュー社、1997年。また、昭和25年、ストマイ国内製造、パス使用許可。「薬事法第四十九条第一項の規定に基づき厚生労働大臣の指定する医薬品(昭和三十六年二月一日)」として指定される。

6) 結核陽性者に対して

結核患者が出たら家庭訪問をする。ただし治療は診療所（民間含む） 地元の医療機関・関係者との連携が大切。

現地では、各町の「衛生主任」を通して訪問。道が悪いので衛生主任のバイクの後ろに乗って行く。ただし、家の前では止まらない。離れたところに止まって、歩いて家に行く（周りの人にわかってしまうので）

「保健所からきました」というと、戸を「ぴしゃっ」と閉められる。「きて欲しくない」、「周囲にわかったら困る」、「こられること自体が迷惑」= 当時、特定疾患の訪問というのはなかった。保健所の訪問といえば「結核」だった。隣近所も薄々感づいているが、保健婦が来れば「確証」になってしまう。

主たる目的は「治癒」よりも「家族の感染予防」。布団の日光消毒、患者の喀痰の始末（新聞紙を折って箱を作り、これを風呂の焚き物と一緒に燃やすように指導した）の指導。

納戸にメリケン袋を開いたものをシーツ代わりに敷いて寝させられている。家族は感染を恐れて納戸に入らず、食事も襖口から出し入れする。

今は 35 条（結核予防法）⁷⁾ があって、無料で入院できるが、当時はなかったので、納戸でメリケン袋を開いたものをシーツ代わりに敷いて寝かされていた。

家族は感染するのが怖い。助かることがない時代だったから。

N-Oさん自身は結核患者を訪問し、患者が喀痰をされる中で話をしていた。そのような業務をして家庭へ帰ると小さな子供がいる。そのため、自分の子供にはツベルクリン反応⁸⁾を徹底して受けさせたとのこと。

⁷⁾ 結核予防法（昭和二十六年三月三十一日公布，法律第九十六号）第十回通常国会・第三次吉田内閣

第35条とは「従業禁止，命令入所患者の医療」について定めたもの。なお，本法律は昭和29年4月1日から施行されるが，第三十四条および第三十五条の規定については，同年10月1日から施行された。

「第三十五条 都道府県は，都道府県知事が第二十八条の規定により従業を禁止し，又は第二十九条の規定により結核療養所に入所し若しくは入所させることを命じた場合において，当該患者又はその保護者から申請があつたときは，当該患者が指定医療機関において受ける第一号から第五号までに掲げる医療に要する費用及びその医療を受けるために必要な第六号に掲げるものに要する費用を負担する。ただし，第六号に掲げるものに要する費用については，都道府県知事が必要と認める場合に限る。

- 一 診察
- 二 薬剤又は治療材料の支給
- 三 医学的処置，手術及びその他の治療
- 四 居宅における療養上の管理及びその療養に伴う世話その他の看護
- 五 病院又は診療所への入院及びその療養に伴う世話その他の看護
- 六 移送

2 都道府県は，前項に規定する患者が戦傷病者特別援護法の規定によつて医療を受けることができるとき，又は当該患者若しくはその配偶者若しくは民法（明治二十九年法律第八十九号）第八百七十七条第一項に定める扶養義務者が前項の費用の全部若しくは一部を負担することができるものと認められるときは，同項の規定にかかわらず，その限度において，同項の規定による負担をすることを要しない。

3 第一項の申請は，当該患者の居住地を管轄する保健所長を経由し，都道府県知事に対してしなければならない。（昭三六法九四・全改，昭三八法一六八・平六法五六・一部改正）

（指定医療機関）」

⁸⁾ 体が結核菌またはBCG（ウシの結核菌の毒性を弱くした「ワクチン」効果は10～15年持続し，特に乳幼児の結核予防に効果がある）を認識している（結核に対する免疫がある）と，ツベルクリンを注射したところが赤く腫れる（陽性）。感染後6週間以上経過して反応が出る。発赤の直径が10ミリ以上であると，胸部X線検査を受け，影ありと診断されれば，発病していると考えられ，治療が必要となる。2002エイズ・感染症特別委員会『結核HANDBOOK 2002』国立大学等保健管理施設協議会 エイズ・感染症特別委員会 平成14年3月。

7) 民生委員など

当時は町内会長、民政委員に頼らなければ活動できない。地域の状況（妊婦などの状況も）を一番よく分かっているので、妊婦さん訪問には同伴してもらった。

結核予防婦人会は無く、民生委員が頼りだった。

民生委員は部落の世話役のような人が選ばれる。奉仕の精神が無いとできない。農業、漁業などの人。部落内の各世帯のことを知っている。平均的には1部落あたり24~25世帯。

8) 粉ミルク

市町村役場の保健婦から栄養不良の子供向けに配布されていた。ユニセフではない。保健所はタッチしていない。

9) 衛生教育・健康教育

全町の衛生教育に回った。相手の都合に合わせて夜間に出かけて行くこともある。漁師町などでは、特に行事などを調べていかないといけない。例えば、漁師町には「つきま（月待?）」という漁に出ない日があり、この日を狙って行く。民生委員と相談して日取りを決める。回覧板を回して通知してもらおう（上五島の有川は比較的うまく行った）

衛生教育はできるだけ「夫婦同伴で」。

上五島を担当する時は1週間（月曜から土曜まで）かけて巡業する。乳児、妊婦、家族計画、結核対策それぞれの衛生教育をした。1日目の昼に乳児相談、夜は衛生教育。2日目の昼に妊婦検診、合間に家庭訪問という具合。

「幻灯」を持って行ったこともある。幻灯は娯楽の少なかった当時、「人寄せ」になる。映写機は各役場にある。フィルムを県から借りる。内容＝結核ならレントゲンの様子（科学性）、治った人の様子など。家族計画なら幸せな家庭を作りましょうというメッセージ。バース・スペーシング、荻野式のこと、基礎体温の計り方練習。このような話を夫も真剣に聞いていた。

10) 検診など

町村から通知を出してもらおう。公民館などが完備されていなかったの、場所は町内会長さんの家などを借りて行った。

家族計画の実地は納戸でした。納戸でペッサリーの挿入指導をしたりした（希望者のみ、希望者は結構いた。夫、姑も認めている。衛生教育の時にできるだけ同伴でくるようにいう。納得の上で行う。昭和26年当時）

11) 診療所

診療所はあった。結核の治療は診療所です。医療機関との連携もあった、一緒に食事をしたりして交流を図っていた。

12) 交通

上五島まで渡海船で片道6時間かかった（しけの時は奈良尾まで行って引き返したこともあった）。「奈留」までは福江島から渡海船で1時間（今は35分）。用事のある時は朝一番（8:00）の渡海船で

直接奈留に行く（月曜に？）午後5時20分のタイコ丸（島々を巡っている船）に乗って帰ってくる（土曜に？）

遠いところは結核患者の管理表を持って1週間泊まり込みで訪問する。しかし、海辺の集落のみ。町村役場に車はあるが、崖っ縁の道が多く、ガードレールも無いので恐くて使えない。てくてく歩いて回ることになる。

港の旅館（行商人や行政の人が泊まる）に宿を取る。早朝出て、歩いて目的地まで行く。

各部落は中心部落を真ん中に星状にしか道がないので、いちいち中心部落に戻らなければならない。

旅館で朝早くに食事をさせてもらって出て行った。1日に5、6軒回った。夕方涼しくなってから歩いて戻る。その後、その日の内に訪問記録をつけてしまう（夜12時くらいまでかかって）。帰ってから婦長に見せるため。その日の内にしなければ、後でやる暇がない。出張手当（安かった）はあったが、残業手当などは考えたこともなかった。だから、奉仕の性格が強かった。

昼食はその辺りでパンなどを買って、店でお茶をもらってすます。民生委員が協力的なところだと「ご飯と味噌汁だけでもいいじゃない」といって、昼食を家でごちそうしてくれた。

虱（シラミ）が多くいた（奈留の事？）シラミについては学校で対応しており、保健所ではしていなかった。

13) カネミ油症事件

昭和47～48年、行商人がカネミ製の油を売って回っていたのが原因。行商人の回った奈留、玉之浦の2ヵ所に患者が集中していた。

問題が発覚して、保健所の調査「油を食べたか」と聞いても、周囲の目を恐れて「食べません」、「買っていません」と答える。

その後、医療費の無料保証が認定されると、「食べた」ということをいうようになった。患者認定されると補助などがつくようになると、申請が増えた。しかし、一旦認定されると検診への足が遠のく。

14) 町保健婦との同伴訪問

保健所の保健婦と町村の保健婦が同伴訪問した。市町村の保健婦の方が実際的な技術は上である。保健所の保健婦は新卒だし、経験がない。机上の仕事が多いので同伴は意味がある。

保健所の保健婦は特定医疾患（精神病、結核など）と（未熟児？）が管轄、それ以外は市町村の担当。現在は母子関係も市町村に移管された。

15) 駐在

市町村に保健婦さんが設置されていない時代が長かった。設置されるまで、県が市町村に保健婦さんを駐在させていた。しかし、結婚、出産問題などもあり、ずっと駐在させる事は難しかった。

16) 奈留駐在保健婦（県の職員）

スミダさんという県の保健婦が3、4年駐在していたことがある。N-Oさんが大村に転勤する4、5年前。その後、町の保健婦に移行した。

17) 母子センター

母子センターは短い期間であった。すぐに個人病院に移行。五島では富江、奈留のみ（玉之浦、三井楽にもあった）。富江では乳児相談をしていたので、そのために行っていた。

18) 愛育班

五島でも試みたが、あまりうまく行かなかった。

都会では相談相手がいないということで若いお母さん達にとっては貴重な情報源として良かったのだろう。しかし、田舎は元々ばあちゃんと一緒に住んでいるし、部落内も親戚付き合いなので、敢えて班を作る必要もない。田舎へ行けば行くほど抵抗があった。班員になって家庭訪問などするとかえって「偉そうに」といわれてしまう。

また、町だと上の方の人（寺の奥さん、婦人会長など）しか班員にならないので、そういう人が保健所の食生活改善推進員（食改）から講習を受けても（栄養士から指導を受けても）、下の人に広がらない。下の方は「上の方がやっているもの」と思ってしまうと、生活形態が違うので「そんな贅沢な食事はできない」と思いこんでしまう。自分たちは生活形態、経済状態が違うから、贅沢な食事はできない（実際はそんなに贅沢な食事ではない）、といい、入り込みにくい。

食改は栄養士の仕事なので、保健婦は関与していない。キッチン・ポートも確かにあったが、乗ってはいない。

五島での愛育班の経緯：昭和50年頃厚生省から「田舎ほど愛育班が必要」といわれた。東京から恩賜財団母子愛育会の人（保健婦さん）が長崎にきたので、福江保健所の婦長が五島まで招いた。保健婦を集めて説明会をしてもらった。その時に「モデル部落」づくりを勧められた。婦長がやってみようかといって「せっかく東京からきてもらったのだから、一つくらいしなければ・・・」という合意となった。福江保健所管内は早く取り組んだ。N-Oさんが当時奈留担当で、同地域は比較的民生委員、町内会も協力的だったのでここで「モデル活動」をしようということになった。そしてやったが奈留全体はできなかった。奈留で2部落（フナマワリ？とナガバイ？）はできた。他の町村ではとても取り組めないと思った。初めは乳幼児健診がありますよ、妊婦相談がありますよという「通知の持ち回り」から入ったがなかなか機能しない。子供の相談が目的で訪問するのだが、世間話で終わってしまう。班員も愛育班活動を引き受けたものの「何であんたからそんなこといわれるのか」といわれるのが嫌でなかなか話し出せなく、悩んでいた。

19) アルコール依存症・精神障害

漁村では、漁が終わると朝から飲んでいるので、アルコール依存者が多かった。自宅を訪問する時は、もしものことに備えて戸口を開け放したままにして訪問していた。この時、民生委員の方に同伴してもらったが、一番力になってもらったのが民生委員さんだった。

奈留では精神障害者衛生で家族会を作った。当時の奈留は人口5000人。今は3000人。今も町の検診にはアルバイトでついて行く。5泊6日の検診。行くと「懐かしい」といわれる。長崎大学の医療団が奈留と富江に定期的にくる。これに合わせて検診に行く。

20) 急患

離島の人は自分で船を持っているので、自分で急患を運んでくることができる（離島の山間地の人

はいないのか？)。今はヘリコプターが飛ぶが、手続きに時間がかかるのでせっかくの機動性が活かせない。

21) 奈留の産婆さん

宿輪(しゅくわ)さんという産婆さん(助産婦さん)がいて、偉い人だった。島内をバイクで回っていた。夜中でも電話がかかってくるから行っていた。協力的であった。後には、町で雇いあげて、母子相談や妊婦相談も手伝ってもらった。

22) 福江の産婆さん

出産介護料は助産婦会で料金を一定に決めている。福江に6人くらい産婆さんがいた。「障子の棧が見えなくなるまでがんばれ」といいますよね」(山本敬子談)

生ワクチンが開発された時(昭和36年)に丁度第4子の出産時期だった。しかし、これを普及するために産前の休暇が取れなかったこともある。

23) 赤痢

奈留、三井楽は水不足が深刻だった。三井楽では赤痢が流行 保健所の仕事として、検便をした。町立病院から赤痢患者発生の連絡があると検便に駆けつけ、学校の校舎を隔離病舎のようにしたこともある。

24) 研修

年に2回ほど長崎での研修へ行った(研修自体はたくさんあるが、交代で行くので個人としては年2回ほど)。その時に県内の他の保健婦とも会う。「転勤希望を出してくれるな」といわれる。本土の人は離島に転勤したくないので。

研修で習うのは、疾病ごとの対処技術。「家庭訪問の入り込み方」などは研修で習うのではなく、経験で身につけるもの。面接技術は保健婦の実習の時に先輩と「同伴訪問」する程度。

25) 方言

保健婦になって一番悩んだのは方言。自分は北朝鮮育ちなので五島の方言が分からない。方言を自分のモノにするのが最初の課題だと思った。N-Oさんは幸いにもお姑さんと一緒に住んでいたので習うことができた(例:ハンズは水瓶のこと)

26) 仕事を支えたもの

「使命感しかない」。「私たちの時代が一番地域の人々に認めてもらえた」。「地域の人と一番密着して仕事できた」。「父は自分がいたから引きあげ遅れた。死んでしまった。その時の苦勞が支えとなってがんばれた」。

27) 生活条件

電気、水道は既にあった。

水不足は深刻だった(計画断水、水がくる時に一斉に使うので水の出が悪い)。まともな生活になっ

てきたのは昭和 35, 36 年頃から。三井楽では水が原因で赤痢になった。検便をする。町立病院から報告があれば、家族の検便、生徒であれば学校の検便。三井楽の場合はひどかったので、学校を隔離病舎みたいにして収容した。

テレビは昭和 33 年に買った。かなり早い方。みんなが見にきたので食事どころでは無かった。テレビを買った理由は、子供が欲しかったので。洗濯機は後の方。手でおむつ洗いをした。

28) 簡易水道

福江保健所の衛生課の人が知っている。

29) 転勤

N-Oさんの入所当初はまだ保健所には地元の人がいたが、後に保健所の職員はほとんどが転勤族になった。衛生課、予防課はほとんど転勤族。

県の職員は大体 2 年ごとに転勤をするが、2 年ではようやく地理を覚えるぐらいが精一杯である。もう少ししないと仕事ができないが、県の保健婦は離島勤務をしたがらないということもあり、それでよかったのかも、仕方なかったのかもしれない。「長くいるとマンネリになる」といわれるが、「保健婦の仕事にマンネリはない」。「私の時は 7 人中 3 人が地元の人だった。」

30) 五島の行政

下五島の人口は 1 市 5 町で 5 万人。合併して「五島市」になる予定。これは保健行政にはマイナス。合併後はこれまでの各市町村での保健婦が「支所」扱いになるのだろうか。

31) 福祉と保健

姑の看護で福祉の領域を知ることとなったが、まだまだ福祉と保健は一体ではないことが分かった。これまで安易に「福祉に相談しなさい」などといっていたが。

32) 現在の保健婦配置

場 所	保健婦	栄養士
市役所(福江)	4	2
富 江	3	1
玉之浦	2	0
三井楽	3	1
岐 宿	3	0
奈 留	3*	1

*うち 2 名は外人

33) 五島保健所における検診

原爆 2 回 / 年, 油症 1 回 / 年, 職場検診 1 ? (? 回 / 年), 進学健康診断 1 ? (? 回 / 年), 健康相談 1 ? (? 回 / 年), 3 歳児検診, 乳児検診 (など ?)

【長崎15 - 6】

日 時：平成15年8月7日（木）午前2時15分～午後4時15分

場 所：長崎県福江市富江町（自宅にて）

お話を伺った方：N-P氏（元助産婦）

調査者：佐藤寛，太田美帆，山下優子

議事録担当者：山下優子

お話を伺った方に関するインフォメーション等：元富江町保健婦，また助産婦としても活動された。

1) 職歴

昭和16年から，富江町で助産婦として伯母さんと一緒に活動。昭和20年から富江町保健婦として勤務。国保の事務や終戦後には配給の事務，乳幼児の関係の仕事をする。町から来た粉ミルク（日本製のものだと思う）の配給もした。町の保健婦として勤務すると同時に助産婦の仕事も続ける。

その後，27歳（昭和24年？）で結婚し，しばらくしてから保健婦を辞める。そして，助産婦として伯母さんと一緒に活躍。

昭和42年に富江町に母子健康センターが開設され，町に復職。保健婦と助産婦とを兼任する。「保健婦と助産婦の二つの職務を同時にするのは大変だった。助産婦として，晩に当直で泊まって，また翌朝出勤しないといけないということがあった。」しかし，その中でも「働くという事は，素晴らしいこと。プロだということをいつもよく考えないといけない」と思っていた。その後，母子健康センターでの助産業務が休止し，保健婦としてだけ勤務するようになる。

60歳の時（昭和57年？）に町保健婦を退職。

2) 学校・研修

昭和10年4月，五島高等女学校（4年間）入学（福江にあった），13歳？

昭和14年3月，五島高等女学校卒業，17歳？

昭和14年4月，福岡の助産婦学校（2年間）入学，17歳？

昭和16年4月，助産婦学校卒業，19歳？

昭和20年に保健婦養成所（長崎の出島にあった。役場からの要請で行った。6ヵ月）卒業，23歳？

3) N-P氏の歴史

大正11年（1921年）生まれ，富江町出身。小中学校まで富江で過ごす。

27歳で結婚，子供は3人，長女（N-Pさんが定年される頃に亡くなる），次女（東京に在住），長男（ご近所に在住）。

保健婦養成所は長崎県の出島にあった（出島に昔，検疫所があった）。その時に，原爆を経験することになった。爆心地から遠かったのでひどくはなかったが，それでもレンガが壊れた。そして富江町に帰ってきた。帰るのに船がなくて，波止場に行って輸送船に乗せてもらって帰ってきた。終戦まで兵隊さんと一緒に一般の人に対する包帯の巻き方の講習もした。

4) 保健婦として

保健婦の仕事は，国保事務と家庭訪問もした。家庭訪問（低体重児の乳児，リスクのある子どもの

ところへ)が主な仕事だった。昼間、訪問、乳児検診、妊婦検診、母親学級等の仕事をして、夜は母子健康センターの助産婦として泊まったりしていた。

役場で予防接種もしていたので、その時はついて行っていた。

結核は町の保健婦はしなかった。保健所の方がやってくれた。

夜、起こされるのが一番辛かった。夜電話がかかってきて、車を呼んで急行していた。センターに行くようになってからは車で行くようになった。車のない頃、歩いてばかりの頃は大変だった。

保健婦としての活動に、愛育班というのもあったけど、あまりタッチしていない。

母子健康センターの助産業務休業後は、定年になるまで保健婦として働いた。保健婦だけをするようになってからは、研修会にもよく行き、勉強をした。昔、習ったものと違ったから。

60歳定年で辞める時には、後任の方を町長が決めてきてくれた。

今は町に保健婦が3人、看護婦、それに栄養士がいる。昔は一人だった。

5) N-Qさん

N-Pさんのお母さんのお姉さんで、N-Pさんにとっての育ての母。このN-Qさんは富江町でも最初の免許を持った助産婦さんだったと思われる(それまでは「取上げ婆さん」という方はいた)。明治21年生まれ。五島病院で助産婦の研修をされたらしい。先生は大阪の人だった。

伯母さんは70歳までずっと助産婦さんをされていて、どこへでも歩いて行って足で稼がれた。旦那さんが「腹、痛かよ。来て下さい」と駆けてくる、という状態だった。

伯母の仕事小さい頃から見て育った。学校に行ってからはずっと同伴していた。身なり、手なりで分かるから、すべて憶えて行った。

N-Qさんがよくしてくれた、と町の人がみんないってくれた。N-Qさんは70歳まで働かれた。今考えればもっとでるのにねと考える。母子センターができるのと同時に辞められた。昭和42年に母子センターができたが、その頃には助産婦さんも富江町に6、7人いた。各地区の大きい部落にいた。それによって叔母もだいぶ楽になったと思う。初めは富江町でN-Qさん一人だった。昔は「取上げ婆さん」もいたけれど。

6) お産について(母子健康センター開設以前、N-Qさんと助産婦をされていたころ)

戦争の時は大変だったけど、お陰でそんなにひどいことはなかった。食生活は、結局自給自足できたから、そんなにひどく困っているということはないと思う。しかし、衛生面の方でお産の時には脱脂綿が無いとか衛生材料(?)が無いということがあった。そんな時には結局オムツを使ったり、破れたものを使ったりした。

昭和20年以後(N-Pさんが働き始めた頃)のお産の数は、月20~30件くらいあったと思う。

1日に無い時もあれば、2、3人の時もあった。

妊娠したら、妊婦さんが診察に来る。みんな助産婦さんにかかっていた。ちゃんと診てもらって、あんたいついつ頃よと予定日を教える。妊娠が分かってから、月に1回は診察するからきなさいということはいっていた。こられない時には必ず伯母が行ったりした。

お産は、田舎で農家が多かったから、行くと家族がおらず、妊婦が一人でいるということがままあった。そんな時でもN-Qさんは行って、お湯を率先して沸かしたりした。

前置胎盤などがあった時は、すぐに福江の伯母の囑託医がいる病院に電話して、産婦人科の先生に

来て頂いた。しかし、減多になかった。伯母は大方自分で、どんな逆子でも上手に介助した。

生まれたら沐浴のため1週間毎日行く。ヘソの緒がとれるまでは措置もしてやらないといけない。

お産の料金は、1週間の沐浴などの分も入れて現金を頂いた。しかし、物で頂いた場合もあった。

農家が多かったので、納戸でお産することが多かった。納戸は暗かったが、電気が早くからあったから、ひっぱってきたりしていた。水道は簡易水道があったし、田舎には井戸もあった。

当時、産湯はカマド（泥で作ったカマド）で薪を炊いて沸かした。

N-Pさんが長女を産んだ時（昭和24年）も、カマドで産湯を沸かした。囲炉裏でミルクのお湯を沸かした。

7) 母子健康センター

母子健康センターができて、N-Qさんは助産婦業務を辞めた。もう高齢だったし、N-Pさんが一人前にできるようになったからといって。町の助産婦の中で、1番若いのがN-Pさんだった。

母子健康センターには、若い者から二人だけ入れようということで、母子センターから役場に入った。でも、全町村から妊婦はくるから、二人では対応し切れなかった。富江、三井楽、岐宿、玉之浦（これらの地域には母子センターはない）からも妊婦はきた。

その時、二人分の予算しかとっていなかったが、それでもあと二人雇って欲しいと懇願した。給料が安くてもいいから、4人とも雇ってくれないかといって。そうでなければ、開業の人は収入が得られず、食べて行くこともできない。何度も何度も足を運んでお願いした。叔母は先になって話を運んでくれた。そして、それがやっと認められて4人で運営した。けれども、そのかわり給料は減った。半分ずつだった。4人で分けたから給料なんていうのは本当に少なかった。けれど、それからだんだん是正されて、組合ができてからはよくなった。それまでは本当にサービスだった。

母子健康センターの建物は現存し、現在は歯科医院が入っている。母子健康センターを運営していた頃、町に歯医者さんがいないので、歯科医院に母子センターを貸して欲しいという話がきた。それは（お産をするところで人の出入りがあると、女性は落ち着かないので）嫌だったけれど、センターの指導室を一間でいいから貸して欲しいということだった。そして歯医者さんが入った。その頃から、母子センターを利用する妊婦も減って行った。その頃、丁度病院のお産が多くなり、それが重なってきた。

母子センターの利用が一番多かった頃で、月の分娩数は30以上だったと思う。大忙しだった。各市町村からくるし、二人で当番をしないと行けない。お産は一人ではできないから、だれか付き添って行けないといけない。先生は何かあれば呼んだ。隣に当番のお医者さんがいたから（母子健康センターの横は病院だった）。だから、血管確保などはすぐできた。出血の時などすぐ看護婦さんと呼ばれた。

夜は泊まらないといけない。交代で呼べるようにしとかなないといけない。お産がきたよ、きて、といつてもう一人の助産婦さんと呼んだ。

産婦も母子健康センターで出産後は泊まった。給食は隣の病院から頂戴した。朝、昼、晩と、こちらからとりに行って、また下げに行った。掃除は自分たちがした。センターは本当に4人の助産婦さんだけで運営した。事務員は一人だけ役場から雇って、いつもきていた。

当時、既に妊婦は車できていた。他の町からくる場合、母子健康センターまで40分くらいはかかる。何人目かの時は玄関や、車の中でお産をしたこともある。運転手さんに明かりをつけてもらっていて。運転手さんも慣れていて「よかよか、つけといてやる」といつてくれた。協力が無ければ何もできな

い。

三井楽や玉之浦，岐宿からくる妊婦には助産婦がついてくる（町役場で雇用されていたのではないかと思う）。施設は富江のセンターを利用する。その人の担当にして，1週間はちゃんとついていた。

8) 家族計画について

受胎調節の指導もした。表彰状ももらった。家族計画の教育をした。ペッサリーは使いにくいのであまり使わなかった。コンドームが一番よく使われた。女性を対象として講習していた。コンドームはそれぞれが薬店で買っていたが，買いたくないよという人には，センターで家族計画センター（家族計画協会？）に注文してとったりした。使い方の説明も教えた。

家族計画の指導は母子健康センターの指導室で行った。母子健康センターができる前は，あまりしなかった。主に，センターができてからするようになった。助産婦としては家族計画のことはやっていた。講習などがあり，指導者（実地指導員？）としての免許証を頂いた。

9) 栄養指導について

栄養の面は雪印とか，森永とかの業者から栄養士さんにきて頂いた。センターができてからは専らそうだった。ミルクのサンプルを持ってくるので，それを一つずつ，お母さんたちが帰る時にお土産としてあげた。

乳幼児の健診よ，相談よという日にはちゃんときてくれた。離乳食などの食べ物の指導もしてくれた。

10) 婦人会長として

勤めながら，連合会の婦人会長（富江町 33 部落の連合婦人会長）もしていた。結局，やるものがないなかったので，公的な職にあるものは本当はやってはいけなけれど，町長さんをお願いして，やる人がいないから土曜と日曜だけは許して下さいとやってやった。丁度，定年になるころまでやった。40 年間あまり（会長として？）婦人会に携わった。初めは部落の支部長から始めた。婦人会のメンバーは 30 人くらいで，小さい部落は 20 人くらいのところもある。

連合婦人会では，愛育班みたいなことはしていないが母子推進はした，これが愛育班につながるのかもしれない。乳児や子供の世話もやっていた。

婦人会で生活改良普及員さんと呼んで？料理講習会をした。グループはできていなかったけれど，婦人会としてやった。

婦人会の支部長会（毎月）では，役場からの連絡や，明るい選挙運動，社会を明るくする運動，そういうものに参加した。社会を明るくする運動は掃除など。カとハエをなくす運動はなかった。

埋め立てでゴミを捨てたのでその掃除を婦人会でよくした。

婦人会をしていて楽しかったのは，研修会などで県外に出ることだった。東京へも行った。北海道にも北方領土返還で長崎県の代表で行った。中国へは友好の翼で，昭和 54 年に婦人会から行った。

婦人会の集まりは公民館（町民センター）でやっていた（これはだいが早くに建った）。それまでは，個人のうちや学校を借りてやった。

リーダー研修では，リーダーとはどのようなことをやるか，ということを婦人会長や教育委員会の指導主事（？）が話してくれた。主催は，昔は教育委員会がよくやってくれた。家計簿づくりも教育

委員会でやった。敬老会のお手伝い，体育祭のお手伝い，団体のお手伝いなど，何でもした。

11) 生活改善グループについて

生活改善グループはここでも今，活躍している。7，8人くらいのメンバーがいる。だいぶ募集するけどなかなか集まらない。生活改善グループができたのはそんなに昔のことではない。

12) 富江町について

戦後は1万人足らず，8000人くらいの人口だった。富江町は農業が主。戦後は漁業も増えてきた。半農半漁。商業がちょっとあるだけ。富江は本土に船はつながっていない。昔はあった。福江からでているからそれでよい。富江では，おコメは自分たちが食べる分はとれる。でも，後継者がいなくなっている。

【長崎15-7】

日時：平成15年8月6日（午後）

場所：長崎県西彼杵郡長与町（長崎市から30分、大村湾を一望できる美しい所）

お話を伺った方：N-Q氏「橘会」元リーダー

同行者：N-J氏（長崎県庁農林部農業経営課専門技術員）

N-K氏（元生活改良普及員，後に専門技術員）

W-E氏（長崎農業改良普及センター生活改良普及員）

N-Qさんは生活改善の実践グループ「橘会」のリーダーだった。最初は柑橘同志会婦人部。昭和40年4月に橘グループを設立した。昭和39年，ミカンの継ぎ木など男の仕事だったが私たちが女で初めてやり出した。そして買った山を開いて「母ちゃんの蜜柑園」を作った。選定から施肥まで自分たちでやった。それを売って稼いでそのお金を使った。苗木はN-Qさんの畑で作った。1回目は苗木を売って資金にした。2回目はグループの人たちに分けてそれぞれが作った。グループは14名。岡郷一本松は14家族が住んでいた。共同作業は楽しかった。公民館が無かったので家を建てた。そこで料理教室を毎月実施した。先生は生改さんだった。男性の普及員も来た。福本さんが学校を出てすぐに生改さんとしてきた。ミカンの最盛期には人夫を5，6人雇い，家で寝泊りするし，食事を出すので1週間分の献立を生改さんと一緒に作った。買出しには半日かかった。献立を決めて材料を集計して一括して店に注文し，袋で配達してもらった。農作業から帰ってすぐ料理に取りかかった。突然魚などもらった日は注文品を断ることもできた。ミカン採りは11月から12月20日まで続いた。料理の味は人夫に比較されたが献立を統一してから無くなった。人夫は五島等からきて住み込みだった。

水が無かった。生活用水は下の大川から汲み上げていた。そこで簡易水道を作った。タンクに貯めて配った。農業改良資金で簡易水道を作った。外風呂で主婦が水汲みをした。

私は昭和8年に20歳でお嫁にきた（大正4年生まれ）。実家（佐瀬）は農家ではなかった。高等2年まで進んだ。隠れて女学校の試験を受けたが親は役場に勤めており，生活が苦しいから反対されて断念した。船で嫁入りした。お金は舅が管理していた。PTAに出る時もいつ許しをもらうか考えた。主人は大人しく何もいわない人。子供は7人（昭和10，12，15，17，20，22，25年）。全部家で産んだ（お産婆さん）。台所つき集会所を作り，そこで麴を作った。昭和48年は良いグループが最盛期だった。橘会と婦人会は別組織。長与町朝市連合会も生活改善グループで作った。昭和55年，個人記録を新聞に発表（毎日新聞）。昭和57年12月21日に研究発表会があり，農林水産大臣賞を受賞。5日農休日に集まる。共同味噌加工（筥に菌がついている），納豆づくり，醤油づくりもした。生改さんは改良味噌を始めた。N-Qさん宅で料理講習をしたので持ち出しが多かった。キッチンカーもきて，出汁の取り方などを教わった。

カマドは生活改善運動の前から改良カマドだった。生活改善ではガスになった。

ミカン畑は山なので荷物の運びが大変だった。

上の開拓地域？は開拓保健婦，開拓指導員

伊木カミカンは有名。普通2町のミカン畑。三浦8町（7人共同）

防除機械を共同で使い，採果作業も大村の人々に頼んだ。

昭和38年にミカン畑の推進で全部ミカン畑にし，野菜畑も無い。そこで町の土地を借り共同で野菜を作って配った。4月に活動計画を立てた。忙しいが楽しかった。梅90kg，ラッキョウ40kg？

「橘会のあゆみ」 - 長崎県西彼杵郡長与町岡郷一本松

「水汲みの苦勞から開放されたい」昭和 35 年部落で資金を借り簡易水道を作った。これがきっかけで昭和 36 年 4 月果樹研究同志会婦人部が発足（N-Q 氏）。

簡易水道国内調査報告

【簡易水道15-1】

日 時：平成15年8月6～7日

場 所：長崎県長崎市・長与町・福江市・富江町

お話を伺った方：W-A氏（長崎県県民生活環境部水資源政策室課長補佐）

N-Q氏（元生活改善グループ橋会会長）

W-C氏（工務係長）

W-D氏（福江市小泊町）

調査者：山本敬子

議事録担当者：山本敬子

内 容：長崎県離島簡易水道調査（その1）

1) 調査目的（簡易水道関連）:

- (1) 長崎県における簡易水道事業の実態・歴史を調べる
- (2) 昭和20～40年代に活動した生活改良普及員の活動内容，特に簡易水道に関連した活動を具体的に明らかにする。
- (3) 生活改善実行グループの昭和20～40年代の活動内容，特に簡易水道に関連した活動について調べる。
- (4) 昭和20～40年代に作られた簡易水道を視察し，関係者に対し設立経緯と運営方法を聞き取る。
- (5) 簡易水道設立にあたって住民と役所，民間業者の役割等を明らかにする。

2) 調査方法：聴取調査，現場視察（レンタカー利用）

3) 日 程

月 日	時 間	訪問先	宿泊先
8/6(水)	11:00	長崎県庁水資源対策室(W-A氏)	長崎プリンスホテル
	13:30	長崎農業改良普及センター(W-E氏)	
	14:30	N-Q氏宅訪問	
8/7(木)	10:00	福江市N-O氏宅(元長崎県保健婦)	コンカナ王国鬼岳温泉
	13:00	福江市水道局(W-C氏)	
	15:00	W-D氏訪問	
8/8(金)		帰 京	

4) 調査概要（簡易水道関連）:

(1) 長崎県県民生活環境部水資源政策室

福江市水道の訪問に関する調整をしてもらう。長崎県に簡易水道は300カ所ある。市町村営(288カ所)と組合営(11カ所)がある(資料:全国簡易水道統計平成13年度参照)。

組合営について:簡易水道組合規約があり,設立は県に認可申請を出す。規約の中には水道料金や水質検査などの項目がある。水質については大体が水質センターに依頼する。年1回全項目,月1回

10 項目、毎日検査は残塩、色、濁度（管末）、技術者を置く。自治会長が中心になり、市町村の同意を得る。組合単独で補助は得にくい。

膜処理などの高度処理：長崎では採用していない。組合があるところは地下水が豊富なところが多く、維持管理は簡単。組合運営については諫早市に集中しているので諫早市水道局の管理課中村参事に聞くこと。

(2) N-Oさん訪問（福江市）

離島管轄の保健婦の戦後から今までの活動について。簡易水道に関する話しは特になし。

(3) 福江市水道局と施設現場（W-C氏、水道技術管理者）

福江市水道局：局長 1、設計課 2（設計から入札、業者選定まで）、事務課 6（料金徴収、検針・委託、住民サービス）、工務課 9（浄水場管理、配水施設管理）、計 18 名の職員。

市水道の中に簡易水道が 12 ヶ所ある。施設は市のものだが管理は住民が行っている。問題が発生して市に連絡があれば職員が出かけて行って対応する（表 1 参照）。

離島には管理人を委託、町内会長などが受けている。現在 7 名。仕事内容は緩速濾過の管理、砂の漉き取り、塩素注入（次亜塩素酸ナトリウム）希釈して注入、夜に止める場合にはタイマー設置。濾過速度は 4 ~ 5 m / 日、この速度が落ちてきたら砂を漉き取る。地下水は鉄・マンガンが高い地域がある。毎月やる水質の詳細項目は長崎市の業者に委託。毎日試験は残塩、濁・色度。

福江市は人口 2 万 8000 人、給水人口は 2 万 6700 人、給水栓数は 1 万 2000。平均水道料金は 170 円 / m³、月 18m³使くと 3000 円。濾過砂は福岡市から購入、砂補充は緩速濾過の方が多い。

生活環境課の管轄で飲用水供給事業（100 人以下の給水）というものがあり、実質 10 人規模のシステムである。

指定工事店は 35 ある。

下水道は個別合併浄化槽と簡易水洗付き汲み取り式。下水道計画がある。

(4) 大浜簡易水道の歴史の聞き取り調査（W-D氏宅訪問、W-C氏同行、W-C氏の近隣者）

大正 4 年生まれの 88 歳、高等小学校卒、昨年まで漁師をしていた。奥さんと二人暮らし。昭和 30 年大浜村の頃、村の役員をしていて古牧水（砂防ダム）を水源に簡易水道設置に参加した。それまで住民は井戸や湧水を使っていたが湧水期には枯れた。部落の 2 ヶ所に井戸があった。1 番遠い人で 500 ~ 600m、井戸から水を運んだ。朝の 5 時から水汲みをしていた。森村長を筆頭に職員が連名で簡易水道を要請し、補助金を貰った。地元負担金は五島鉱山に村の山を貸していたのでその借地料でパイプを買った。パイプは石綿管を使った（口径 100mm, 75mm 使用）。また労働提供（区役？）でパイプを布設するための溝を手掘りで 4 m 深く掘った。コンクリート製の貯水タンクも業者の指導で村人が作った。消火栓もつけた。工事は 6 ヶ月くらいかかった。

部落の中で 10 軒は水があるといって入らなかったが、200 軒が入った。後で全員入った。水道料金は 500 円取った（昭和 52 年）。メーターは昭和 57 年につけた。

pH が低く 5.6 だった。工事費は 5000 万円くらい？

簡易水道は上流の川の水（古牧水？）を引いて、海拔 40m のところにタンク（60m³）を設け、そこから海岸の大浜地区に配っていた。大浜簡易水道の碑が貯水タンク（現在減圧タンク）横にあり、昭和 31、32 年度で設置したことと簡易水道設置に奔走した人たちの名前が刻まれている。その後、平成 7 年、大浜黒蔵簡易水道として長崎水道協会委託、理水化学受注施工、地下水（300m³ / d）を海拔 90 m のタンクまで上げて重力で海拔 40m 近辺の人へ配り、海岸の人へは以前使っていたタンクを減圧タ

ンクとして使い，そこから海岸に配っている。

五島鉦山は蠟石を掘っている。蠟石は耐火煉瓦や化粧水の原料になる。当時 98 人の従業員がいたが今では 15 人。

表 3 福江市水道施設一覧表

水道名	水 源	濾過法	能 力 m ³ /d	世 帯	人 口	完 成 年月日	備 考
上水道	湧 水 表流水 地下水	緩速濾過	9,800	9,948	23,012	S46	S36 年設立 S46 年改修
簡易水道							
増田	表流水	緩 速	65 (20)	68	119	S54.3.25	S29 年設立
大浜黒蔵	地下水	急 速	505 (340)	486	1,191	H7.3.6	S30 年設立
奥浦	表流水	緩 速	260 (160)	296	576	H5.3.25	S31 年設立 S47 年改修
樫之浦	表流水	緩 速	105 (150)	250	750	S63.2.29	S40 年設立
南河原	地下水	急 速	43 (26)	62	132	S63.3.31	
田ノ浦	表流水	緩 速	68 (7)	19	21	H2.3.20	S30 年設立 S56 年改修
蕨	表流水	緩 速	60 (29)	68	133	H5.12.27	S30 年設立 S43 年改修
猪之木	表流水	緩 速	54 (15)	30	66	S32.3.31	
久賀	表流水	緩 速	70 (50)	63	129	H2.3.15	S33 年設立
伊福貴	表流水	緩 速	200 (42)	101	172	H3.3.20	S31 年設立
本窯	表流水	緩 速	42 (19)	62	79	H2.3.15	S31 年設立
坂ノ上	地下水	急 速	600 (340)	237	552	H9.3.28	
小 計			2,072	1,742	3,920		
合 計			11,872	11,690	26,932		

* () 内は実配水量 m³/日， は離島，伊福貴と本窯は一人で管理。

出典：福江市水道局資料提供

位・流量・残塩を本局に送る。雷で時々狂う。給水栓数 - 68, 給水人口 - 133 人, 昭和 30 年設立, 昭和 43 年改修, 平成 5 年改修, 維持管理は W-C 氏が半農半漁の傍ら 20 数年続けている。

(3) 久賀簡易水道: 水源 - 表流水 (1 km 先の山から導水している), 能力 - 70m³/日, 実配水量 - 50 m³/日, 自然流下方式, 施設 - 取水堰, 緩速濾過池 2 地標高 40m (落ち葉の進入防止網設置), 洗砂施設, 消毒設備 (次亜塩素酸ナトリウム), 配水池 2, 戸別給水, 給水栓数 - 63, 給水人口 - 129 人, 昭和 33 年設立, 平成 2 年改修, 維持管理は町内会長。

(4) 猪之木簡易水道: 水源 - 表流水 (1 km 先の山から導水している), 能力 - 54m³/日, 実配水量 - 15m³/日, 自然流下方式, 施設 - 取水堰, 緩速濾過池 2, 洗砂施設, 消毒設備 (次亜塩素酸ナトリウム), 配水池 2, 戸別給水, 給水栓数 - 30, 給水人口 - 66 人, 昭和 32 年設立, 平成 15 年福江市水道局直営で配管等の改修, 維持管理は町内会長。

(5) 維持管理内容: 毎日の施設点検。毎日の家での水質検査と記録 (濁度 - 異常あるなし, 色度 - 異常あるなし, 残塩 - 比色法)。毎日の記録をまとめた月報を水道局に月末に郵送。緩速濾過池の砂の漉き取り (夏場は 1 ヶ月に 1 回, 冬場は 2 ヶ月に 1 回 1 cm 程度漉き取る), 漉き取った砂は洗って補充。新しい砂は 5 年から 10 年に 1 回補充。

塩素注入装置は NK 液中ピストンポンプ (西原商事)。20kg パックで運ばれてきた次亜塩素酸ナトリウム (有効塩素 12%, 高杉製薬株, 1 個 1000 円程度) を 10:1 くらいに希釈し, タンクに補充。残塩濃度を見て注入量の調節 (ほとんど変化なし)。夜間使用量が少なく塩素濃度が高くなりすぎるため, 夜 8 時から朝 6 時まで塩素注入はタイマーでストップ。塩素は月に 10ℓ 程度消費。以前は点滴注入をしていたが, 夜は絞込みできなかった。また, 配水池の残塩自動測定により塩素注入量が自動的に変化する方法も電極部分の管理が悪く, 誤作動が多くてうまく行かなかった。

濾過量を見て流入バルブを開く (全開になったら砂の漉き取り)

維持管理費は水道料金で賄うが, マイナスは上水道の方から補填。例えば田ノ浦簡易水道は 1 日 7 m³の水量, 平均水道料金は 180 円/m³, 1 日の収入が 1260 円, 月に 3 万 7800 円, 管理人の給料は月平均 5 万円なので完全な赤字。

(6) 簡易水道設立時の状況 (蕨町): 簡易水道が整備される前は村の三つの公共湧水から 200m くらいの距離を天秤で 1 日 2, 3 回運んでいた。台所には 80ℓ くらいの水瓶が据え付けられていた。5 軒に 1 軒くらいの割合で母屋の横に風呂場があったので, 風呂のある家は毎日水を運んで沸かして入った。その後, 近所の人勝手に入りきた。ぬるくなれば自分で薪をくべ, 熱ければ自分で水を汲んできてぬるくした。

簡易水道は町の夢だったので, 昭和 30 年, 町内会で村役場に陳情し補助金がついた。住民は各家から女も男も出て石や砂を運び, 穴を掘るなどの賦役をした。当時の農村生活改善運動は婦人会などが慶弔金等の簡素化などに取り組んでいた。生活改良普及員が活動していた記憶はない (W-G さん)。

昭和 43 年, 水源の湧き水が近所の水田利用で足りなくなり, 2 km 先の山の溪流に取水を移し, 濾過池も移した。

昭和 47 年 12 月 31 日に大火があり, ほとんどの人が焼け出された。

(7) W-F 氏について: 大正 15 年, 蕨生まれ。18 歳で兵隊に志願, 鹿児島鹿屋航空隊に配属。戦後農業で水稻やイモを作り, 合間に漁に出た。蕨出身の悦子さんと結婚。娘二人, 蕨地区は昭和 47 年 12 月 31 日午後 7 時に大火があり, 多くの人々が焼け出された。当時部落の副会長を依頼されていた。その時に簡易水道の管理を頼まれ現在まで続いている。その後, 消防の分団長や農協の運営委員にな

った。

(8) 福江市水道局のサポート：1年に1回配水池の清掃，月1回50項目の水質分析を佐世保市にある理研テクノ(株)に委託して実施。年2回保健所が配水池の水質チェック。大きな事故の時などは連絡を受けて水道局職員が対応することになっている。これまで1回だけ，5年前くらいに湯水になり川の水がなくなって，職員がポンプを持ってきて配水池に揚水した経験のみで特に問題はない。

5) 所感：今回の調査対象地区は五島列島の福江島からさらに船で渡る離島で公共交通手段も無い地域で市役所の支所に2名の職員が配置されている久賀島で実施した。市水道局職員による維持管理が大変なことと，原水水質がよく，施設が単純なことから4カ所の簡易水道の維持管理を住民に委託している。施設は開発途上国でよく見かけるエネルギーをほとんど使わない自然流下方式，緩速濾過，堰式流量計で塩素注入のところだけがコンパクトな注入ポンプを使って日本らしい所であった。したがって，管理も簡単ですべての作業を一人の管理人がやっていた。水質チェックも簡単で，慣れれば誰でもできそうであった。

ある程度の几帳面さは求められるが，開発途上国の農村でも適任者は見つけられそうで，開発途上国への応用が可能と思われた。昭和30年の簡易水道設立時には部落が村に陳情し，石や土運搬，穴掘りの労働提供を各家から人を出して実施し，簡易水道を引いたという。ここに住民参加型プロジェクトの原型が見られる。

過疎が進んで高齢者が多い島であるが，78歳という管理人の農作業，漁業の合間に水道の維持管理をしている姿は大変印象に残った。また，昨年8月に引き続き福江市水道局のW-C氏には簡易施設めぐりのレンタカー運転と案内，海上タクシーの予約から昼食まで大変お世話になった。

【簡易水道 15 - 3】

日 時：平成 16 年 2 月 5 日 13:40 ~ 15:00

場 所：上野公園文化会館内 レストラン精養軒

お話を伺った方：K-A 氏（熊本県元生活改良普及員）

調査者：山本敬子，市川智子

議事録担当者：山本敬子

内 容：生活改善運動と簡易水道

1) 背景：2 月 6 日に JICA 筑波国際センターで実施中の研修で講義するために熊本より上京された K-A さんをお願いしてつくばへ行く途中，上野下車で話を伺った。

2) 調査内容

(1) 普及員第 1 号

昭和 24 年に生活改良普及員の第 1 号となった。5 月 30 日付け採用。最初に鹿児島県で実施された研修会に参加した。農林省本庁から山本松代課長が見えて，生活改良普及員の仕事を説明する時に配ったリーフレットには農村の女性が水汲みのために歩く距離を 1 日何 m，生涯で何 km と計算してその大変さを示す事例が書かれていた。

(2) 水汲みの改善

最初の担当地域が山間部の御船というところで，昭和 24 年から 32 年まで普及活動をした。その地域は水汲みに遠くの井戸まで通っていた。まず，井戸は何処ですかと聞いて一緒に歩いて距離を測った。次に 28 歳から 68 歳まで毎日水汲みをするどれくらいの距離になるかを計算して見せるとみんな驚いた。そこでどうやって改善しようかと考えた結果，近くの山に生えている竹を割って，井戸から家までつなげて設置し，井戸で汲んだ水を竹筒に流した。家では子供などが金物のバケツや桶で受けて台所の水瓶に入れた。年寄りは今までずっと水汲みをしてきたのだから贅沢だといったが，若い嫁は何とか水を家の近くで汲みたいと思っていた。それから井戸にハンドポンプを付けて水を汲みあげ，竹筒に流した。次に，家にコンクリートの水瓶を作った。作業は男性が協力し，改善資金は少ない費用でも「生活改善講」を作り，順々に無利子で落とした。最初の頃はそういう活動をしていた。

(3) 風呂の状況

風呂は母屋から離れた暗いところにあった。お風呂は毎日入ったが，五右衛門風呂で洗い場はなかったから，みんなお風呂の中で手拭いを入れて体を洗った。石鹸は使わなかった。男が先で，近所の人も入った後の最後に嫁が入るが，水はどろどろで，次の日は風呂の水が汚いほど畑の良い肥やしになるといわれた。嫁にとっては汚いので農家に嫁にきたくないという話もあった。風呂の排水は排水口から自然に畑に流れるようになっていた。そこで，台所改善と風呂の改善が始められた。風呂は室内で洗い場もあるようにした。風呂釜が改善され薪も少なくてすむようになった。

(4) 活動の拠点

最初は婦人会に行き，誰がリーダーで皆に信頼されているかを見極める。次にその人とその地区の問題点などについて話し合う。最初の活動の時，おやつで胃がもたれて胃の悪い人がたくさんいたので，田植えの時におやつ調べをした（焼き団子が多かった）。その結果，64%の人は田植えが終わってから胃が悪くなったという結果が出た。そこでパンづくりを指導した。女学校では家政科の先生と

してパンづくりを教えていた。そのうち夫達も協力的で熱心に食事の改善をする農家が出てきて、そこを実証農家として他の家のモデルにした。度々指導を続けて行くうちに毎月きてくれといわれるようになった。そのうちに婦人会の中でも熱心な人たちでグループができて生活改善グループになった。当初、婦人会ともめたこともあったが、理解を深めるよう努めたので協力されるようになった。これは日本で最初のグループ「ひまわり会」で、場所は御船町清水地区だった。

(5) 科学的根拠

活動を平坦地区に移し(昭和39年⁹⁾)、32カ所の農家の労働時間調査を実施した。その結果、女性の平均は15時間だった。これをラジオ放送で聞いた人から「自分たちは20時間以上働いている。町の娘に分かるものか」という投書が来た。いかに女性の労働が過重であるかが分かった。

次に水の問題について、有明海に面した飽田町の生活改善グループの例会の席でお茶を飲んだ時、変な臭いと塩味がした。どうしてかと聞くと「この地域はどこでもこんな水だ」ということだった。井戸を見せてもらおうと水位が高く、すぐそこに水が見えた。海の干満と一緒に井戸水も上下することだった。そこで近くのグループの井戸も皆で見て回り、同じ状態だと分かり、水質の検査を受けようということになり、2グループで水質の検査を受けることになった。その結果は飲用不適が83%もあり、一同驚いた(資料)。この結果を点地図(汚染井戸を地図に落とし、汚染の場所と数が一目で分かる)で現して、あらゆる機会に発表を続けてもらった。これが町長に届き、甲島、乙島地区に簡易水道ができた。水道が引かれる前は甲畠、乙畠の住民の歯が他地域と異なっていたが、水道設置後普通になり、大変喜ばれた。飽田町は水源が無いために熊本市より水をもらい、簡易水道が設置された。水道の設置に関しては全て町役場で推進された。普及員の果たした役割としては地域の実態を調査し、その問題点を住民自ら理解し、改善へ動きだす助言ができたということである。この結果分かったことは、有明海より3km以内は昔海で、干拓地だったために海水の影響を受けた井戸水が利用されていたということが判明した。

(6) 資金

台所、子供部屋、浴室の改善などは農林省からは生活改善資金を借りることができた。住宅改善は住宅金融公庫の改良資金から借りた。住宅の改善講習会を開いて借り方と返還方法について講義した。特に金を借りた人には家計簿をつけることを奨め、また、生産を上げる方法などの相談にのった。これらの資金利用により台所、子供部屋、風呂場、水の問題が解決できた。

(7) 高齢者事業

⁹⁾ 飽田地区は熊本市の南西にあたり、西は有明海に接し漁業兼農家が多く、東部では施設園芸農家地帯でナス、トマト、近郊野菜が生産される地帯でした。当時(1964年)は生産優先で健康面、家庭生活面等に問題が山積みしていました。それらに対して具体的な対応は何らなされていない実情でした。そこで、グループ活動や集団指導の中で聴取した要望は次の5項目にまとめて普及活動を展開しました。

- ゴミが海岸に投棄されていて漁業(ノリ業)に困っている……………何とかならぬか?
- 井戸水が塩からく、濁り、飲み水に困っている……………どうしたらよいか?
- ビニールハウス作業で疲れがひどく、頭痛、耳鳴り等で困っている……………どうしたらよいか?
- 高齢となり、後継者と意見が合わず家庭内がうまく行かない……………どうしたらよいか?
- 町としても諸問題を解決するための係が無い……………どうしたらよいか?

資料(W-Hさん提供資料より一部編集)

昭和45年からは高齢者パイロット事業を援助した。これは高齢者が若い人の新しい農業経営について行けなくなっているのを新しい経営について理解を深めるためと、生きがいや園芸などを取り上げた。全集落に推進員を置き、町全体で高齢者大学（経営教室、園芸教室、伝承教室など）の活動が展開された。

(8) K-Aさんのこと

当時の家庭は封建的で父親が威張っていて苦しんでいる母親のようにはなりたくないと考えていた。女学校の先生になっていた頃、農村生活改良普及員の資格試験があったので、農村女性の生活の改善、地位向上の仕事を一生かけてやりたいと思い、すぐ申し込み、生活改良普及員第1号となった。夫も協力してくれる人を選んだ。夫は農業改良普及員で非常に協力的だった。K-Aさんは各地に出張が多いのでお手伝いさんを雇っていた。お子さんは息子一人娘二人、一人は薬剤師で母親の意思を継いでいる。定年まで6地区異動になった。定年後は公民館で講師をして月2回1年コースの家庭料理を教えていた。昨年やめて現在は夫と二人暮らしで、普段は家庭菜園で野菜を作っているが生活向上のための講演等も多い。

長い間の活動で目指したものは次のことである。

モデル農家を作る（実証する人、農家を育てる）

活動には科学的裏づけをとる

農家の信用を得る

婦人の地位向上を図る

人間関係の改善、明るい家庭を目指す

【参 考】

(2004年2月5日、農村生活改善に関する参加型研修コース(つくば)でのK-Aさんの講義原稿より引用)

飽田町水質検査結果のまとめ

調査地：飽田町甲畠，波建，白石地区

調査サンプル*：生活改善グループ31戸の井戸

年月日：昭和46年5月24日～26日

	水質項目*	検査基準	結果表(異常の率*)
1	色および清濁	無色透明であること	混濁(100%)
2	臭味	異常臭味がしないこと	異常臭味あり(100%)
3	沈渣	無し	あり(100%)
4	反応(pH*)	5.8~8.0	pH8以上(7%)
5	アンモニア性窒素	出てはいけない	出ている(41%)
6	塩素イオン	30ppmを超えない	30ppmを超えている(48%)
7	亜硝酸性窒素	出てはいけない	出ている(14%)
8	過マンガン酸カリ消費量	10ppmを超えない	10ppmを超えている(48%)
9	一般細菌数	1ml中100まで	一般細菌が100以上(34%)
10	大腸菌	陰性であること	大腸菌あり(21%)
飲用適・不適の結果			飲用不適(83%)

*山本が付け加えた。

水質検査までの経過

- (1) 甲畠グループ例会で井戸の現状を見て周り、共通の問題となる水質検査の必要性を他のグループに伝え、同じく巡回検討会を各地でも実施して普及所、グループ員代表で役場に検査依頼（地図化して持参）。
- (2) 役場保険所より 46 年 5 月 24 日検査実施 31 戸（8 グループ）。
- (3) 結果が思いのほか悪く（全戸飲用不適となる）、再度確認の検査（他地区）の結果は同じく不適となる。
- (4) 町内全域の検査の結果は同じく不適が多く、有明海より 3 km までは全地域不適となり、3 年後に水道施設が完成した。

あとかき（水道ができて）

- (1) 今まで塩辛い、臭いがする、濁りのある水を使用していて、綺麗な水を安心して利用できて大変喜ばれ、健康上も良くなった。
- (2) 水質悪化の原因として干拓地であること（100 年以上前）、海拔が最も高いところで 1 m と低いために満潮の時と干潮の時の井戸水が上下していたこと等と分析されている。

北海道国内調査報告

1．調査期間：2003年8月21日～26日（6日間）

2．対象地：北海道

3．調査団員：

担当	氏名	所属先／職名	業務内容
団長／総括	水野正己	農林水産省 農林水産政策研究所 政策研究調整官	取りまとめ
団員／臨時会計役	太田美帆	レディング大学大学院 博士課程	業務費の管理および総括補佐
団員／記録係	佐藤 寛	アジア経済研究所 主任研究員	インタビュー内容の書き取り等記録
団員／記録係	渡辺雅夫	JICA 農林水産開発調査部 計画課	インタビュー内容の書き取り等記録
団員／記録係	山下優子	神戸大学大学院 博士課程	インタビュー内容の書き取り等記録

4．調査の目的：

- ・北海道における生活改良普及事業の変遷を明らかにする。
- ・昭和20～40年代に活動した生活改良普及員および専門技術員，開拓保健婦の活動内容と普及方法を収集する。
- ・開拓保健婦，保健婦，助産婦など生活改良普及事業に携わった専門職の活動内容と生活改良普及員との協働関係を理解する。
- ・北海道における住民参加型国際協力の実態を調査し，生活改善協力についての調査団側からのプレゼンテーションおよび意見交換を行う。

5．調査方法： 聴取調査，現場視察

6．調査日程：別紙参照

【北海道15 - 1 / 予備調査記録】

日時：2003年3月3日

場所：北海道庁農政部農業改良課

お話を伺った方：H-A氏（総括専門技術員，生活経営）

調査者：水野正己

議事録担当者：水野正己

1) 北海道関係の農業改良記念誌

『北海道の普及事業』（10年誌）北海道農業改良課，昭和34年刊

『北海道の普及事業』（15年誌）北海道農業改良課，昭和39年刊

『北海道の普及事業』（20年誌）北海道農業改良課，昭和44年刊

『北海道の普及事業』（25年誌）北海道農業改良普及協会，昭和49年刊

『普及の風雪30年』（25年誌）北海道農業改良普及協会，昭和54年刊

『北を拓く』北海道改良普及職員協議会，昭和63年刊

『21世紀に翔く』北海道改良普及職員協議会，平成10年刊

2) 普及職員のOB組織

北海道農業改良緑友会（北海道改良普及協会に事務局あり）

土屋馨（緑友会事務局，北海道酪農畜産協会非常勤，恵庭市在住，札幌ではコンタクト困難）

山田直治（緑友会石狩支部事務局，この人は北海道改良普及協会内に机があり，札幌でコンタクト可能）

北海道農業改良緑友会の会員名簿のコピーを入手した。OB/OGの照会は，事務局に頼めばよいのはということであった。

H-Aさんは現在59歳で，来年（2004年）の3月に定年を迎える。夫は農業改良普及員という。H-Aさんの子供の一人（女性）はJOCVのネパール医療協力隊員で派遣中，もう一人（男性）は同じくJOCVのシリア農業隊員であった。そのため，我々の研究にも関心を示された。

3) H-Aさんの生活改良普及員時代

昭和39年に生活改良普及員に採用される。札幌で研修を受けた。東京まで研修を受けに行ったのは，専門技術員になってからのこと。

最初に活動した場所は苫前だった。そこがモデル地区の指定を受け，集団に重点指導を行う。濃密指導地域の時代のことだった。この当時，農協婦人部に対しては，一般指導を行っていた。活動の中心は「バツカリ食」の改善で，保存食，食品の保存法を指導した。家庭菜園を作り，野菜，果樹を植えてビタミンを摂るように指導。離島の天売島，焼尻島へも船で渡り，泊まりがけで普及活動に行った。当時は，苫前から船が出ていたので，普及対象地区に入っていた。

苫前の元町長の久保田（トクジツ）氏は，社会教育主事の出身。社会教育では，文化生活の講習をやっていた。

他に，生活改良普及員として優れた人に，天塩町の藤井ハチエさん（保健活動と生活改良の両方に取り組んだ人），留萌支庁の浦田ミツコさんがいた。

普及の活動は、各組織から「この地域をどうするか」という地域の課題を出し合い、アンブレラ組織として協議会を作り、そこで課題の解決を分担し合うようにしてきた（協議会は町内の各種組織を網羅的に結集する仕掛けである。・・・水野付記）。

開拓地には、開拓営農指導員が置かれていた。昭和45年までのことだ。

4) 北海道における生活改善事業浸透の特徴

北海道では、町村ごとに農協が組織され、全戸加入になっている。農協の中に婦人部会、青年部会、若妻部会が設けられてきた。また、集落ごとに農協支部が置かれている。JA婦人部会（当時、現在は女性部）が生活改善グループの立ち上げに関与してきた場合が多い。したがって、生活改善の研究では、JA婦人部会（女性部会）の活動を追う必要がある。

5) 収集資料

JICA一般研修資料(農民参加による農業農村開発コース)生活改善事業と農村女性の役割資料(JICAセンター)

「新時代の農家と農村づくりを支援する農家経営担当普及員と専門技術員の役割」（農政部農業改良課総括専門技術員H-A）

開拓保健婦訪問記

日 時：2003年3月3日

場 所：北海道早来町北進

お話を伺った方：H-B氏（元保健婦）64歳

調査者：水野正己

議事録担当者：水野正己

1) 略歴

H-B氏は、開拓保健婦に1年間だけ就任。夫は北海道大学名誉教授（農学部で動物生態学を専攻、イワナの研究を手がけた）。開拓保健婦のOG組織「わらび会」事務局を担当中。

2) 紹介者

ホクレン生産振興部 北海道農政部農業改良課（専技・H-Aさん） H-Aさんの夫が農業改良普及員をしていた地区で、H-Bさんが活動していたことから、H-Bさんの存在が判明し、紹介を受ける。3月3日に電話して自宅訪問することになった。千歳空港からバスで早来駅まで行き、そこへ車で迎えに来て頂いた。

3) H-Bさんの母親

H-Bさんの母親は、昭和16年静岡県から北海道に入植。父親は農業。したがって、家業は農業+助産婦だった。大正6年に「開拓産婆」の制度ができた。母親は、北海道の開拓保健婦の最初期の人で、現在の存命者中で最高齢。昭和22年、釧路に在住。標茶町で緊急開拓が始まり、「開拓産婆」として就任した。開拓入植者の助産、救急治療、生活改善を合わせた仕事が始まる。勤務地は自宅で、開拓地から必要な時に、徒歩あるいは馬に乗って呼びに来た。開拓者といっても農業経験がないので、生活は大変だった。駆虫薬や救急薬品を開拓農家にあてがっていた。ともかく食べるのが開拓地の課題だった。アイヌネギを春先に食べて吐血する人もいた（急性胃潰瘍？）。開拓地では、山菜、ヘビも食べた。子供に食べ物を確保することが大変だった。

現在、H-Bさん自身で母親の活動記録、資料の保存を心がけているとのこと。しかし、高齢のため、聞き取りが困難になってきたという。H-Bさんは、母親の職業の心意気に教育され、自らも保健婦の職を選んだ。

電気が来たのは昭和29年で、H-Bさんが中学2年生の時だった。

4) H-Bさんの保健婦時代

昭和36年保健婦、翌年に開拓保健婦として着任。集会所で食生活改善に取り組む。根室支庁管内の標津町に置かれていた開拓営農指導所（農協の2階）に3年勤務した。北標津、西北標津が担当地区。後に市町村保健婦に変わり、道西部に移動した（夫の北大就職に伴う引っ越し）。油を使う料理講習もやった。フライパン運動、タンパク質の摂取、農繁期の保存食づくりもした。仕事は、生活改良普及員も、農業改良普及員も、開拓保健婦も、開拓営農指導所を拠点に一緒になって取り組んだ。昭和38年に産児制限が緩和された。

自分は、母親のような熱意を持って保健婦活動に打ち込んできたか、疑問と反省をしている。

昭和36年に旧農業基本法が制定され、農業近代化の名の下に、開拓営農指導所では農家を階層区分（A～D）し、離農促進農家の選別を行っていた。

5) 開拓保健婦活動の記録、資料の保存を目指す人々

北見赤十字大学看護学部助教授 大西先生

北海道立衛生学院保健婦課長 小関さん

旭川高等看護学院図書館 高橋さん

～ はそれぞれに開拓保健婦活動の聞き取りを実施している。関連資料を の図書館などに収集中。また、 は学生に開拓保健婦の聞き取りを課して、レポートを提出させている。講義でも開拓保健婦について取り上げているとのこと。

6) 「わらび会」

わらび会は、開拓保健婦の活動を次世代に継承することを目的に設立された。年に1回会合を持っており、今年は9月6日に札幌で開催の予定である。

開拓保健婦に対する世の中の評価は不十分であるという。制度が終焉を迎えた当時、開拓保健婦の職務（生活改善を支える公衆衛生活動）の評価が低く、保健所保健婦への切り替え、年金問題などで不利益を被りそうになり、処遇改善運動が行われた。

H-Bさんは、平成11年に市町村保健婦を退職し、事務局を引き受けた。全国に自治体で働く保健婦の集いがある。全国の保健婦から学ぶ会だ。全国開拓保健婦会もあるという。東京の三会堂ビルに、開拓保健婦関係の資料がたくさんある（と、H-Bさんは語った）。

7) 開拓保健婦の本

古谷（公衆衛生学）「開発保健婦」、『労働衛生』。

荘田智彦「保健婦」家の光協会、2001年。

大西若稲「最果ての原野に生まれて - 開拓保健婦の記録」日本看護協会出版会。

標津町生活改善の記録「土田トモエさんの開拓地を歩いた三十年」1996年刊（連絡先：釧路町遠矢6-6-2、三栖達夫（ミスタツオ、社会教育）。

「公衆衛生の灯をともしつづけて11人が綴る保健婦の軌跡」（公衆衛生実践シリーズ 11、[別冊] 1992年）。

【北海道15 - 2】

日 時：平成15年8月21日（木）午後1時30分～午後3時10分

場 所：北海道勇払郡早来町（自宅にて）

お話を伺った方：H-B氏（元保健婦）

調査者：水野，山下

議事録担当者：山下優子

面会者に関するインフォメーション等：開拓保健婦として2年間，また，市町村保健婦として長く勤務された。開拓保健婦・H-Cさんの長女。

1) H-Bさんの歴史

1957年 北海道大学医学部付属看護学校入学（3年間）

1960年 道立保健婦学院（8ヵ月間）。第9期生で保健学院最後の年だった。翌年から，道立衛生学院に名称が変わり，養成期間も1年間になった。8ヵ月間の養成期間修了後，10日間ほどの受胎調節実地指導員の講習を受け，資格を取得する。12月に結婚。

1961年 中標津保健所・保健婦として勤務（1年間）

1962年 標津営農開拓指導所・開拓保健婦として勤務（2年間）

1964年 広島村・町村保健婦として勤務（7年間）

1972年 （？）夕張郡栗山町・町村保健婦として勤務（2年間）

1974年 苫小牧市・市町村保健婦として勤務（5年間）

1979年 早来町・町村保健婦として勤務（25年間）

現在は町会議員。子供は3人。すでに孫もいる。

2) 開拓保健婦について

開拓保健婦は昭和22年から任命されているが，昭和35年になってようやく道の職員として認められた。

昭和35年までは，開拓者に駆虫剤（虫下し），風邪薬，避妊の器具を配る，開拓者文化厚生事業費というのがあり，その事業費の中から，開拓保健婦への給料が支払われていた。

昭和45年に開拓保健婦制度がなくなったが，それから28年間働かないと，年金が貰えないとなっていた。

そこで大西若菜さんが「わらび会」という開拓保健婦の会を作って，今までこういう働きをしたのだから，本当に働き始めた時からの計算で，開拓保健婦に年金を認めるようにという活動をされ，その要望は厚生省まで行った。そしてまた，開拓保健婦全国協議会も作られた。開拓保健婦の人数は北海道が1番多かった。

開拓保健婦は9時から5時までなどという観念のない人ばかりだった。皆が24時間勤務という感じだった。H-Bさん母親だけでなく，みんなそうだったとのこと。診療所（別に診療していた分けてもなく，医師もいない開拓診療所にいて人がたくさんいる。稚内・勇知で話を伺った須藤和子さんも豊富で開拓診療所に住み，仕事をしていた：山下付記）に，24時間鍵をかけずに寝ていたのではないか。いつでも相談があったら出向く体制をしていたと思う。

3) 母・拓殖産婆さんであり、開拓保健婦さんであったH-Cさんについて

昭和17年から拓殖産婆さん。自分も開拓もしながら、地域の中で周りの人のお産がある時にお産を扱ってよといわれて、やっていた。

昭和22年に開拓保健婦として任命される。しかし、昭和35年になるまで、道の職員として認められていなかった。

母は夜でも迎えが来たら、出かけて行った。

拓殖産婆だったから、家から遠く3里、4里離れた。標茶に入った開拓者のところへでも行った。当時、市町村合併の前で太田村(?)という所へは、10kmもあったそうだ。5里歩いたといっていた。

看護婦の免許を静岡で取得し(当時、試験の本を1冊丸暗記されて、甲種看護婦の試験に合格された¹⁰⁾)。よって助産婦、保健婦の試験を受ける資格があった?)、助産婦と保健婦については北海道に来てから取得。

助産費についての料金は決める事ができた。例えば、1円何十銭など。お金でなくても、何か他のものでもらったりもした。

地域の人たちは母の事を「産婆さん」と呼ぶ。

お産に1度出かけたなら、いつ戻るか分からなく、冬は特に心配だった。

交通手段は、歩いたり、馬に乗っていたり。昭和28年か29年には、母に自転車が支給された。そうしたら弟たちが喜んで、あいている時は三角乗りをして遊んでいた。

ひたすらよく歩いていた。自分の乳飲み子をおぶって、夜でも夜中でも呼びに来たら出かけた。

4) 保健所について

昭和24年に保健所法ができた¹¹⁾、標茶には保健所ができた。いわゆる性病診療所などが保健所になった。保健所法に決められて道立45、というのができた。だけど、保健婦の仕事については、保健所は保健所、開拓は開拓という感じだった。

保健所と開拓では指揮系統が異なる。例えば、開拓保健婦の場合は、北海道農地開拓部拓殖課から釧路支庁の拓殖課へと命令・指揮は下りてくる。ただ、保健所法の中に、「保健所長の仕事として、管内の保健婦の仕事を管理指導する」というような、保健所長の役割があるので、保健所が(開拓保健婦の業務についても)管理するという感じになって、なかなか上手く行かないところがあったと思う。

例えば、会議があるからこいといわれても、お産が始まったから行けない、というようになると、研修会にもこないとかいうことになる。片方では、お産は大事というように、現地に密着している方は現地の人を優先するから。そういう中でなかなか上手く連携が取れなかったようだ。開拓保健婦が働いている現場に理解を持つ保健所の係長もいたし、そうでない人もいたと思う。色々だったと思う。

5) H-Bさん自身について

(1) 幼少期について

たまにお産があつて、母さんが出かけて行く。そして、父親と家の回りの開拓をして、弟や妹の面

¹⁰⁾ 当時、甲種看護婦、乙種看護婦と区分があった。それぞれ、現在でいうところの正看護婦、准看護婦に相当する。

¹¹⁾ 「保健所法施行令」(政令第七十七号)、昭和二十三年四月二日公布・施行。平六年改称され「地域保健法施行令」となる」。

倒を見ながら暮らすという生活をしていた。

その頃は、H-Bさんにはまだ仕事は無く、父親が根っ子を掘る周りで、弟たちと遊んでいた。

(2) 高校について

高校は自宅から12km離れた標茶の高校へ行った。H-Bさんは第1子で長女だったので、高校へ行かせてやるということが決まっていたような感じではあったが、12kmもあるので、冬は交通の面が厳しく、車も通っていないような所だから、冬は寮に入らないといけなかった。それに加え、制服を作るのにもお金がかかり大変だった。家族会議をその都度して決めた。奨学金をもらって行った。

しかし、二つ違いの妹は高校に行けず、妹に悪いなと思いながら行った。妹は准看護学校へ行って釧路へ出た。看護学校は当時、お金がかからなかった。

(3) 看護学校について

1957年、高校卒業後、北大医学部付属看護学校へ3年間行った。看護学校の学費は無料だった。

できることなら大学へ行きたかったが、それは無理と分かっていた。

それに、進路を考えるにあたって、農家を誰が継ぐのかという問題があった。本当をいえば、父親の体があまり丈夫でなかったし、母親が出ているので、家の農作業は子供たちみんなの手伝っていた。夏休みに集中して仕事を残したりしていたし、1番草終わるまで、学校を三日間休んだりしていた。兄弟4人で並んで草を取ると取れた。下の弟は3番目と4番目だけど、3番目の方は体がとても弱かった（今はとても元気。北京大学で教員をされている？本多土建の先生？）。そのような中で農業を継ぐのには、自分が「家を出てもいいのかな」という迷いがまずあった。

しかし、母親から大学は行けないというのが決まりといわれ（それは初めから分かっていたこと）、奨学資金ももらえる子だけが進学できるという中で、「女は腕に技術をつけた方がいい」と、自分のことをいったのだと思うけれど、そうだった。

それもそうだと思う、看護学校へ行くまでは母親の仕事の事はあまり考えず、「そうだそうだ、行かしてくれるなら札幌行こうか」といって、弟たちに「いいかい？」と聞いたら、弟たちも「いい」といってくれて、それで札幌へ行った。夜行の急行になる前の「まりも」に乗って、札幌へ行き、看護学校へ通った。

当時、正看護婦を養成する学校というのは、道内に四つしかなかった。北大、札幌医大、国立札幌病院、北見赤十字看護学校（現在：日赤看護学校）の四つだった。

北大医学部付属看護学校へ3年間行ったが、とにかくそこは医学部だから医師を養成するのが第一義だった。看護学校の先生方は先生方で一生懸命してくれるし、医師たちもしてくれたが、実習の現場へ行ったら、医師と看護婦との関係というのに疑問を持った。

実習は、医者育てるための現場のように感じた。そういう中で、何かが違うと思った。母親が自由に裁量して現場で働き、地域の人々の生活に密着して、色んなことを自分の判断でやっているのに比べたら、看護は医師と両輪なのだけれども、言葉と実体は違うな、と思った。

臨床講座では、医学部の学生が講義を受ける場所に当時、生活保護で入院している患者さんを見せていた。学生が100人もいるような、階段のある教室で教授が講義している横にストレッチャーで連れて行かれて、胸なんか出したりしていた。そういうことをするのに、本人の了解を得てはいるけれど、その人たちは断れないのではないかな？などと思い、憤る事が多くあった。

そして、大学病院の看護婦といえば、当時、なんとなく道内で何年か経ったら婦長になって行くというような感じもあり、そういうのも嫌だったので、大学病院の看護婦にはならないでおこうと思っ

た。そして、保健婦養成学校へ行く事とした。

(4) 道立保健婦学院（現・道立衛生学院）について

1960年に道立保健婦学院に入学。8ヵ月間通う。H-Bさんは第9期生で保健学院最後の年だった。翌年から道立衛生学院になり、養成期間も1年になった。また、道立衛生学院になると同時に看護婦、衛生検査技師、レントゲン技師、歯科衛生士やX線技師も養成されるようになった。

保健婦になるには、保健婦のための奨学資金を出す道の制度があるという事がわかった。

当時、昭和33、34年頃には、道は積極的に保健婦を養成していた。昭和35年には国民健康保険法ができた。その中に、保健施設活動というのがあり、「予防活動をする保健婦を設置する事ができる」という文言があったので。保健婦を設置しないといけないという法律は今までに一度もないが、設置する事ができるというようになり、保健婦をたくさん養成しないといけないという道の意向があった。

その奨学金と、看護学校時代に手につけないでおいたお金で、親に仕送りしてもらわなくとも保健婦学院へ通う事ができた。

保健婦学院へ行った1960年の頃は安保の年で、影響を受けながら勉強もし、活動もした。「民主主義を地域の中で実践できるようにしなくっちゃ」とかいいながら、皆、僻地へ僻地へと就職して行った。

保健婦学院修了後、10日間ほどの受胎調節実地指導員の講習を受け、資格を取る。僻地へ行く人は特に必要とされていた。そして12月に、当時大学院生だった旦那様と結婚される。

(5) 職歴：1961年～1962年（1年間）中標津保健所

初めに勤めた保健所は、今ならできる事が一杯あると思うけど、当時はそうは考えられず1年で退職した。1年の間、主に結核患者の訪問を羅臼（知床半島）まで、3日間ほどの泊まりで（旅館に泊まる）、ビジブルノートを持ってシグナルが間違っていないかを確認しながら訪問したが、たった1度の訪問で終わってしまうものだった。1年の間で、住民の方に受け入れられるという経験をしなかった。卒業したてであんなこともしたい、こんなこともしたいと思って就職したのに、現実は全く違った。

結核指導

昭和35年に、結核予防法が変わり、登録制度というのができたり、公費負担制度というのが充実されたりした。来る日も来る日も中標津保健所管内にあるカードを整理して、管理カードに書き直し、そして、その人がどういう暮らしをしているか、シグナルをつけて併せて訪問をした。結核患者のところへは羅臼まで回った。

初対面でビジブルカードを片手にシグナル（カードに何結核、例えば開放性結核だとか、活動性だとか、活動性だけど安定しているとか、非活動性だとか経過観察だとか、クリップが止めてある。カードが縦に並べてあって、それらが分かるようになっている）が間違っていないかとか、困っている事は無いかとかを聞きに訪問した。

結核の患者さんの生活向上のために、せっかく改正された法律をフルに活用するために、今だったらそう思うが「調査だけじゃないか」と当時は思った。1回の訪問では、患者に寄り添えなかった。羅臼、別海、浜別海、標津、全部を回るのには1年くらいかかってしまう。その間には、結核検診にも出ないといけなかった。

訪問した際には、検診をとにかく受けなさいといった。36年頃は、ストマイは注射だから使えなかった、パスは飲んだけれど。結核の特効薬としてストマイ、ストレプトマイシンが昭和27、28年にで

きた。それはもの凄く高かったが、結核にもの凄く効いた。結核は健康保険が適用されたので、飲み薬は飲むけど、注射は経済的にも高いし、遠い人は通えなかった。「放置しないで行きましょう。」と伝えた。

訪問先は事前に決まっており、結核予防法に基づいて、その診断した医師が保健所に届け出ていた。レントゲン検診で診断をして、その後、病院での受診を指導するが、そこで病院から診断した事が上がってきていない人は放置なので、受診をお勧めしますということを指導に行く。当時、訪問した患者の様子は、家で咳をしたりしているけれども、寝たきりになったような人を訪問した事は1度もなかった。

「治るのだ」という事を教えた。 当時はまだ、治らないと思っていた人も多かったけれども、治るのよということと、制度があるということと、法何条にすれば、無料で治療できるかもしれないとか。しかし、従業停止とか、入所命令¹²⁾とか、そういう言葉があったから、そういうのになると「子どもを置いて入院できない」とか、お母さんだったらそういうこともあった。

訪問は一人で行った。訪問から帰ってきたら、役場には、この人とこの人は訪問してきたというようなことをいった。しかし、当時、羅臼町には保健婦がいなかった。開拓保健婦がこの付け根の辺り（知床半島の？）に一人いたので、その開拓保健婦さんのところへ行ったりした。結核のことも対応してくれた。

開拓保健婦の担当地域だけは彼女がちゃんと見ていた。保健所はそういう仕事している中で、開拓保健婦は生活全般を見ていた。1年間、あの時、800枚ほどのビジブルカードをチェックしていた。

保健所でただその整理をしていて、1年経つ前に「辞めたい」と思い、それで、開拓保健婦になりたいといって開拓保健婦になった。

(6) 職歴：1962年～1964年（2年間）標津開拓営農指導所開拓保健婦時代

開拓民の人たちはH-Bさんのことを受け入れてくれた。

また、母親くらいの年齢の開拓保健婦さんたちが、H-Bさんのことを「新卒（新制度で卒業した）の保健婦さん」といって可愛がってくれ、細かい事まで教えてくれた。

標津、根室にはたくさん開拓保健婦がいて、12人くらいいたと思う。標津に1番近く、それまで開拓保健婦を置いていなかった標津川北・営農指導所というところに赴任した。H-Bさんのために設置してくれたようなものだった。

標津開拓営農指導所というところへ行っただ。それは昭和36年の事で、開拓制度を終わりにしようという国が考えていた頃だった。

開拓農業に適するだけの農地を開拓者に与えなかった。戦後の経済成長がもの凄い勢いで発展し始めて、町にどんどん工場ができ始めていた頃で、町に労働者が足りなかった時代。そして営農成績の振るわない人は、苦勞して15年間耕した土地を借金の形に、ほとんど無一文みたいな形で出て、町（釧路など）の工員になって行くというパターンだった。

営農成績の振るわない人というのは体が弱かったり、家族の誰かが病気をしたり、子どもが大勢いてお金がかかったり、育児に手をとられたりするという、誰にでもあるアクシデントによるものだった。営農意欲のない農民は整理するというけれども、営農意欲だけではなかった。

¹²⁾ 改正結核予防法，第35条。

当時、開拓者を4段階に区分けしていた。A階層、B階層、C階層、D階層というように。D階層というのは借金も一杯あり、返済もできなく、本当に目処がない、ここで農業は難しいと思うような方たちがD階層だった。そういう方たちは、ぼつぼつ出て行っていた。

階層区分というのを開拓営農指導所はしていた。開拓指導員の方たちは辛い仕事をしていました。

当時、同じ事務所の中に、開拓営農指導所と農業改良普及所と両方あった。農業改良普及所は普及員といって、営農指導を一生懸命やっていたのだが、開拓営農指導員というのは、H-Bさんの感じでは、営農指導をする暇はなかったのではないかと。負債の整理をどうするかとか、そういった指導はするが、営農指導をどのくらいしていたか分からない。ただ、面接に行っても辛い仕事を彼らはしているということを、たった2年しかいなかったけどわかる。

生改さんとの仕事について

標津開拓営農指導所では、開拓営農指導員と農業改良普及員はいたが、生活改良普及員というのは当時まだいなかった。いる所といない所とあった。根室標津の開拓営農指導所には、生活改良普及員さんという、ほとんどの方が栄養士の資格持った方だったが、その方々はまだいなかった(H-Bさんが昭和39年に広島村の国保の保健婦として入った時には、広島の農業改良普及所には生改さんがいた。詳しくは後述)。

赴任して1番初めの経験

農協の2階にいたのだが(農協の2階を借りて、開拓営農指導所と農業普及所とがあった)、赴任してちょっと経ったら、開拓者ではないのだけれど、遠い山の麓から、55、56歳位の祖父に見えた人が、「嫁が産気づいたから来てくれ、迎えにきた」といってきた。「私は助産婦の資格がありません」といったら「助産しなくていい」、「取りあげなくていい。傍にいていいのだ」といった。所長も「行ってやってくれ」というので行った。そうしたら、その息子は出稼ぎに行っていて不在で「息子のいないところで60前の舅が取りあげるわけにいかん」と。だから取りあげなくていい、傍にいてくれるだけでいいのだといわれた。実際には、行ったらもう生まれていた。お嫁さんは「じいちゃんのない間に生まれてよかった」といっていた。2月に赴任して、その時、馬ソリ(馬が1頭で、後ろにソリがある)で迎えにきた。

開拓者の多い地域を見ているという形で、家庭訪問を個別にしたが、子供や病人が多かった。

開拓婦人会というところで料理講習をした。先輩に教えてもらって、保存食の作り方を講習した。「1日1回フライパン運動」なんていうプログラムが支庁からきた。それは食用油をたくさん使おうということだった。「きんぴらごぼう」を作った。保存食では「サンマを揚げてから醤油に漬けておこう」だとか、そういうのをみんなで一緒に作った。

避妊指導について

開拓保健婦として最も力を入れて行ったのは、避妊指導だった。指導は具体的だった。女性だけを対象にしていた(今なら、絶対男性も入れる)。

コンドームは道から配布されていて、絶えず持っていて、無料で配布した。そして使い方を指導した。先輩の保健婦さんから同じ部屋に大勢寝ている所で、舅さんや子供も寝ている開拓の部屋で、ちゃんと気付かれないで使う方法を教えるようにいわれた。それは凄く切実な指導だったのだそうだ。一部屋に大勢で寝ている中で、夫婦生活があり、それで避妊をするという事はどれだけ大変かという事だった。

それで、ペッサリーを随分多くの人に普及した(保健婦学院卒業後、全員ではないが、残って受胎

調節実地指導員の資格を取った。それは僻地へ行く人は必要といわれた。卒業して10日間ほどの講習，筆記やペッサリーの測定の仕方などの試験を受けた）。

あの頃は，基礎体温計，「ベーベーター」（BBT：Basal Body Temperature / 基礎体温？）はまだなかったと思う。それで，オギノ式だけれども，それは理解できる人とできない人とした。

オギノ式の計算と，コンドームとペッサリーの三つを合わせて，同時にはないけれど，使い方をマスターするという指導をしていた。

コンドームに対して精神的なアレルギーがある男性はとても多かった。今どころではない。絶対に嫌だという人がいた。ただ，子どもが5人，6人と増えて，大変になって初めて理解が得られるのだが。

講習会だけでなく，必ず個別指導をした。講習会をやって，家族計画はどうして必要なのだろうかということの説明した。

当時，非常に微妙な時で，戦後の経済成長が右肩上がり激しく，工場という話をしたが，労働者不足だという実態もあった。もう一つは，戦後の団塊の世代というのが，外地から帰って来た人とか，引きあげてきた人，復員してきた兵隊さんがいて，昭和22，23年頃の出生率というのが戦後，最高だった。それで，「掻爬（そうは）」といったが，墮胎というのがもの凄く多かった。昭和27，28年後，売春防止法などができたからとかいうが，昭和27，28年頃はもの凄く避妊指導に力を入れてきていた。それで開拓地でも，昭和36，37年頃はある程度，成果が出てきていた。

「一姫二太郎（イチヒメニタロウ），三三C（サンサンシー）」という標語のようなものを持って回っていた。それはどういう意味かといったら，1番初めに女の子を産んで，2番目に男の子を産んで，サンサンシーというのは「CCC」というコンドーム，Cが三つ書かれているコンドームがあって，「子供を二人産んだらコンドームを使いなさい」という意味だった。CCCコンドームを持って回った。1個50円くらいのを，道から支給されていた。

コンドームを配布すると「あそのうちはもらうのが多い」とか，「少ない」とか，そんなことまでいうので，みんなの中では渡せないといって，個別に家を訪問してあげた。

あげるのは平等に，1個ずつあげるけど，それだけでは足りない人にはまたあげなくてはいけないというようなことを配慮した。

それから，昭和36年には，また児童手当法というのができた。工場に労働者が足りないということで，子供は二人しか産ませないとかいっておきながら，3人目を産んだら5000円だったかを支給するとした。国は都合がよくて，国の都合で産ませたり，制限させたりするものじゃないよと思う。しかし，それは後に思ったことで，その当時，みんな産みたくないものだと思って，産まない指導ばかりしていた様に思う。そういう配慮が開拓保健婦の時，できなかったことが悔やまれる。

避妊は，本当に家庭の中に入って，そのままの事をいってもらわないと指導できないと思う。それは本当に身をもって思った。その後の広島村でも，早来町でもそうだった。苫小牧市では避妊指導はしなかったが。

乳児健診など

乳児健診を受けてない方の発育のチェックを訪問して行っていた。股関節脱臼を見つけるために，股関節のこわい制限(?)をやったりした。

それから，斜頸，筋性斜頸のチェックなどもした。当時は，筋性斜頸の治療の方針として，揉み解してもらうために，通えといっていた。

離乳食。それから、乳の出ない人には、今のようにミルクは(粉ミルク)無いし、それに高いので、牛乳を水で割って飲ませる仕方を指導した。ミルクの配給はなかった。

(7) 職歴：1964～1971年(7年間) 広島村町村保健婦として

生改さんと共同で

昭和39年から昭和46年まで、広島村に7年間、町村保健婦として赴任した。

昭和39年に広島村の国保の保健婦として入った時には、広島農業改良普及所には普及員(生改さん)がいた。その方と一緒に活動をした。

パンを共同で焼くパン釜づくりだとかの時に、H-Bさんは健康相談して、普及員さんはパンの作り方を教えていて、セットで行っていた。場所は、部落にそれぞれ集会所があってそこにパン釜を作ったりしていた。パン釜のところは、広島村の開拓村ではなくて、旧の明治の初めからおられる地域だった。

開拓保健婦さんと共同で

広島村の開拓地では、300戸くらいの地域を開拓保健婦が担当していた。非常に面白いのは、H-Bさんは開拓保健婦から国保の保健婦に入ったが、広島村にいた開拓保健婦は稚内の市役所にいた保健婦さんだったので、お互いに理解しあえて、とてもよかった。

その開拓保健婦さんは、役場の中にも開拓保健婦の机を置いておられて、一緒に仕事をしていた。彼女の机は開拓営農指導所にもあった。それは彼女の選択だった。町の保健婦と共同で仕事をする、乳児健診などには一緒に出て頂くとか、予防注射には彼女の地域(開拓村)には、彼女は行くけれど村の保健婦も行く、というように調整をしていた。

それまで、村の保健婦と生改さんの連携というのはあまりなかったみたいだが、その開拓保健婦さんは、稚内では市を担当していた人だったので、広い目で見ることができただった。稚内にいた頃、開拓営農指導所へ行ったら、開拓保健婦さんがいるというので、一緒にされていたとか。「これは開拓地だけの問題じゃない」と、いうことで、村の保健婦もそれぞれ自分が担当している地域へ、そして普及員さん(生改さん)も一緒に、という架け橋を彼女がしてくれたと思う。

人口が1万人いるとすれば、その当時2500戸くらい。そのうちの300戸くらいの開拓地では、健診で入る以外は開拓保健婦さんが担当していた。その他の2000戸以上は、二人の村の保健婦が担当していた。

その頃の主な業務としては、予防接種、乳児健診、それから乳児で心配な方たちの家庭を個別訪問。

それから、精神障害で家に閉じ込められたりしている方たちの活動を地域活動としてやっていた。それはとても珍しかった。精神の分担をするのは道の保健所の仕事だったから。確かに道に責任があるが、私たちは地域の中にいて、この人の問題は道の責任だからといって除外はしませんといていた。

昭和42年だったかに、精神衛生法が改正になり、市町村の保健婦も共にやるということになった時に、事例発表や取り組み発表を、保健婦の研修会に求められた。その考えはとてもいいと思い、最終的にはその問題は、道が責任を持つとしても、難病は保健所、精神は保健所、母子は町村と分ける事の矛盾を、地域の中で援助活動しているととてもやれない問題だということ、最後まで発言した。それは最後まで、法律はどうあれ、私はやるよということで、私が定年になるまで、早来の町でもやった。地域全体をサポートする事が大事。それは、標津での仕事の時に、1回だけの訪問をしていた時にこれではだめだと身にしみていた。

(8) 職歴：1972(?) ~ 1973年(2年間) 夕張郡栗山町にて町村保健婦

昭和47年から48年までの2年間、夕張郡、栗山町にて市町村保健婦。

(9) 職歴：1974年 ~ 1978年(5年間) 苫小牧市にて市町村保健婦

昭和49年から53年までの5年間、苫小牧市にて市町村保健婦。旦那様が、中川演習林(中川郡音威子府村?にあった)から、苫小牧演習林に変わったのでH-Bさんも転勤された。

(10) 職歴：1979年 ~ 2003年まで(25年間) 早来町にて町村保健婦

昭和54年(39歳)から平成15年3月まで(?)の25年間、早来町にて町村保健婦(師)。39歳の時に赴任し、48歳で係長、57歳の時に課長補佐になられて、発言力をもたれるようになる。

39歳で一番いい時に来たと思う。色んな所を経験し、自分でものを考えてきて、40歳というところまで発言力が出てくる。しかし、実際は48歳で係長になるまで発言力がなかった。

男女雇用機会均等法が、H-Bさんが丁度48歳の時にできた。町長が、私を係長にした。48歳になって、もっと発言力が強くなりました。係長でなくても発言力はあるけれど、予算の面では重要だった。事業化する時の予算で、予算の町長査定に顔を出せるのは係長以上だった。57歳になって課長補佐待遇になった。保健衛生と環境衛生と両方担当というセクションになった。57歳で、主幹職も切られるようになって、平成9年(?)には、福祉担当の課長職になった、定年まで課長職で仕事をした。

(11) 転勤する事・住民として保健婦活動をする事

自分自身が、開拓保健婦であろうと、町村保健婦であろうと、住民として暮らしながら保健婦をするのと、転勤族として保健婦をするのでは、こちらの受入の気持ちも違う。

(12) 愛育班活動について

愛育班活動は北海道ではあまりなかった。

(13) 開拓保健婦に関する資料について

道立旭川看護学院の図書室：初めて公的な場所に開拓保健婦の資料を集める事になった。各人が所有する資料をここで保管する。

訪問した日に頂いた資料(『開拓だより、第19号、釧路支庁・釧路地方開拓事業促進協議会』)は齊藤房子さん(9月24日にお会いした元開拓保健婦さん)が送ってくれたもの。H-Bさんがそれをコピーしてくれた。

(14) B型肝炎感染の訴訟について

予防接種でB型肝炎が蔓延したと、訴訟が行われている。保健婦は皆、昭和20~30年代の半ばまで、連続接種を1本の針でした。そういうことがあったということに、衝撃を受けた。原告の人たちはそういう体制を責めているのであって、保健婦さんを責めているのではない、といわれるけれど、保健婦としてやった自分としては責任を感じている。簡易訴訟を支える会の会員になり、また、原告側の証人として証言したりしている。

現在は、早来町町会議員。

【北海道15 - 3】

日 時：2003年8月22日（金）午後1時30分～午後3時30分

（H-Dさんへのインタビューは実質午後2時20分頃に始めた）

場 所：北海道稚内市勇知，JA勇知支所2階にて

お話を伺った方：H-D氏（元保健婦）

調査者：山下優子

議事録担当者：山下優子

面会者に関するインフォメーション等：元開拓保健婦（豊富町/浜頓別町担当）

1) H-Dさんの歴史と開拓保健婦になった経緯

- ・ 昭和2年生まれ。北海道の浜頓別町の出身。
- ・ 保健婦と看護婦の資格は北海道で取得した。十勝で保健婦（事務的な仕事で1年間）などをして、その後写真だけのお見合いをして結婚、浦和に住んでいた。しかし、結婚してすぐにご主人が死去。その時H-Dさんは29歳。幼い娘が二人いた。
- ・ その時は、自分に資格があったことも忘れて、どうやって子どもを育てて行くかなど、絶望的な気持ちだった。そして、実家の浜頓別町に戻ってきた。父親が漁業をしていたので、子どもを見ながらその手伝いをしていたが、最終的には資格を活かして職に就きたいと考えていた。
- ・ たまたま豊富町というところでは開拓保健婦が不在になって2年間経っていて、それ以上経ってしまうと道からの枠がなくなってしまうということで、教頭先生がH-Dさんが免許を持っていることを知っていて、役場へ話をしたのがきっかけ。
- ・ 役場の方（課長から係長まで）が何度も足を運んで頼みにきた。
- ・ 開拓の開の字も知らなかったし、保健婦も結婚前に1年ほど事務所の保健婦を十勝でしただけだった。自分は、保健婦活動もしたことがなかったが、生活のために仕事をする必要はあり、実際に話があったのだけれど電気もなければバスもない、そんな所へ果たして子どもを連れて行って働けるかなと悩んだ。その時、父親が「行ってやってみないか」といい、「じゃあ、まあ、やってみようか」ということになった。それが豊富町だった。
- ・ それが昭和31年の7月だった。それから開拓保健婦という名称の下に仕事を始めた。本当に西も東も分からなく、自転車も子どもの頃に乗ったきりで乗ったことがないような状況で始めた（豊富町で13年間）。
- ・ 駐在する事になった地域は本当に片田舎で、（実家から？）だいたい16km離れている部落だった。そこには将来的に開拓診療所というものができるという計画だったようだ。そこに当時3歳と1歳の娘を連れて駐在した。
- ・ 実家からは遠く、バスは1日1往復あっただけ。豊富町の豊徳地区という所に入った。電気もバスもない所だったが、とにかく生活が第一だから、どんな所でも働けるのであればということで、子どもを連れて入った。これが、開拓保健婦としての第一歩だった。
- ・ 大西若稲さんとは深いお付き合いをされていた。『最果ての原野に生きて』の初めの写真ページ、「宝冠章受賞祝賀会」の写真に写っている大西さんの着ておられる洋服はH-Dさんの娘が手作りしれたもの（この日、H-Dさんはどうしても抜けられない用事があるって駆けつけることができず残念だった）。また、H-Dさんは大西さんの最期を看取られた。

- ・縁あって再婚され、二人の男子が生まれる。2番目の娘は看護婦になった。4人の子どものお母さん。現在は孫もいる。

2) 着任した頃の豊富町豊徳地区の様子、豊富町での開拓保健婦活動など

- ・ 入った地域が、非常に広大な地域だった。その頃、山形県の庄内団地の方たちの一団地（山形県の次男・三男坊対策で）があった。それから満蒙開拓といって、満州から引き上げてきた人たちの団地。それから既存の方々の入植者と色々雑多に入っていた。開拓といっても色々だったが、人間であることには変わらない。樺太引き上げ者もいて、海と浜と、つまり漁と牛飼いをしている地域もあった。そういう所へぼんと入植者の健康管理ということで入った。
- ・ 開拓小屋の戸は筵だった。1枚めくるとすぐ茶の間だった。もっと開拓地へ、小さい筵を漕ぎながら家の前まで行くと、筵の戸が下がっていた。隣から隣までの家屋は、1kmも1km半もあった。
- ・ どこに誰が住んでいるというのは、地域ごとに表はきちんとあった。1日にできる活動は戸別だったら知れていた。それからだんだん進んできて、生活が良くなってきてから集団的に物事を進めたが、それまでは1対1だった。
- ・ 電気はなかった。水は井戸水をポンプで上げていた。電気がないからランプ生活。
- ・ 豊富町は開拓地だけで7地区くらいあった。豊徳地区の中心になっている家に電話がひかれた。それがH-Dさんの住んでいた開拓診療所につながっていて、緊急時などにはH-Dさんに連絡ができるようになっていた。そうすると、子どもが発熱したとか、色々電話が入って、いつ寝て、いつ起きたのかも分からない生活だった。
- ・ 開拓者の方たちは、お世話になった時でも払うお金がないから、生きた鶏を持ってきたり、カボチャを持って来てくれたり、タマゴを持って来てくれたり、トウモロコシができたからといって持って来てくれた。「心配しなくていいから、お金に換えなさい」といった。
- ・ 大西さんから「入ったら、その米櫃を見なさい」とよくいわれた。どういう生活をしているか、それを見るということ。子どもなんか靴をはいていなかった(?)。金銭面では苦勞していた。
- ・ 当時、大西若稲さんが勇知で活躍されていた。昭和25、26年頃から勇知におられたと思う。H-Dさんが入ったのが昭和31年。大西さんを師として勉強させてもらった。
- ・ 住宅は、地域の小学校が側にあっただけで、その教員住宅の空き家を役場で貸してもらった。子供が二人いたのでお手伝いさんを探してもらって(その方のことを「お姉ちゃん」と呼んでいた)、仕事をしだした。何からやっていいか、分からず本当に大変だった。
- ・ 豊富町では13年間勤めた。その13年間の中に、入って3年後くらいに開拓診療所ができたが、医師不在の開拓診療所だった。H-Dさんが簡単な応急処置をするだけのものだった。建物は建ったけど、何にもなかった。教員住宅からH-Dさんが、開拓診療所へ引っ越した。居住する場所も作ってくれたので、開拓診療所の中に親子で入った。合計13年間、豊富町にいたが、やがて開拓診療所も幻のようになり、住まいを町へ引き上げた。しかし、持っている担当地域は辺鄙な「ザイ(「田舎」というほどの意味ということだった。「ザイ」に行ってくるね。などというそう)」だった。
- ・ 13年間のうち、初めの3年は教員宿舎に住み、あとの4年間ほどは開拓診療所に住んだ、その後は町に出て豊富町を担当した。
- ・ 町に出てからは自転車にも乗るようになった(見るに見かねて自転車を買ってくれた)。婦人用車を買ってもらった。次に50ccのオートバイ(昭和35年に免許取得)に乗り、次に125ccのオートバ

イに乗った（しかし、女性が125ccのオートバイに乗るのはあまり格好がよくなかったので、少しの間乗ってやめた）。その後、道から90ccのラビットというスクーターがきた。そして4輪車になり、42歳で車の免許をとった。

- ・ 開拓保健婦とはなんだろうと思うくらい雑多な仕事をした。健康管理ばかりでなくて、私は保健婦ですからといって上座に座っているようなことではなくて、子どもの鼻をかんでやったりしながら、そんなことを全部やってあげての開拓保健婦だった。
- ・ 13年間の豊富町での勤務で初めの7、8年が最も大変だった。
- ・ 昭和37、38年に豊富村から豊富町に変わった。

3) H-Dさんの開拓保健婦活動スタイル：戸別訪問

- ・ 豊徳地区へ入ってから最初にした事は、開拓民の人たちがどういう生活状況で暮らしているのかを見るために、1軒1軒、全家庭を回った。全戸回るのに数ヶ月間を要した。H-Dさんは組織を作るより先に、1軒1軒の訪問をされた。
- ・ 家族構成を把握することが大切だと思い、1軒1軒の名簿を作った。
- ・ 実態を知るための戸別訪問では、350世帯回った。一つの地域に入ったら、近くても8km、10kmを徒歩で行った。自転車も道が悪くて乗れなかった時代である。
- ・ 未熟児が生まれたら、湯たんぼの入れすぎとか、厚着をさせていないかとかを見るために1週間、びっしり通った。
- ・ 夏も冬も、1年くらい歩いて行った戸別健康調査の結果、貧困が最初にあがってきた。生活保護を受けないといけないような人が沢山いることが分かった。そういう問題を役場に持って行ってもなかなか取り合ってくれず、係長、課長と必死に交渉した（人様と争いを起こすような性格ではないけれど、生活実態を見て苦しさが分かっていたので、そうしないわけにはいかなかった）。
- ・ 豊富町の開拓村の所を全戸回った。既存の所は回らなかった。しかし、駐在した所は、既存も開拓も混在していたので、開拓だけ見るというわけにはいかなかったから、既存の方も診た。
- ・ そこは非常に貧困な状態だった。何から手をつけていいのか分からなかったほどだった。湿疹はひどいし、回虫を持つ子供が一杯いる。そのような生活実態で想像もつかなかった。自分自身、看護学校を出て、町で暮らしたので、片田舎というか、入ったところは片田舎というよりはもっと悲惨な状況だった。引揚者という一つのハンディを背負った方たちは、子供を亡くし、熟年の夫婦だけになったりした人たちも多かった。そういう中で、組織づくりというよりも、健康管理に私は走った。だから、家に子供を置きながら、家に帰ったら夜7時、8時だった。その間は子守に頼んで、一緒に泊まってもらったが、子供たちにはかわいそうな事をした。
- ・ 大西さんのような大きな組織づくりはしなかったけれど、地域の組織は作った。

4) 生活改善普及員さんと一緒に活動した事

- ・ 豊富町で、開拓保健婦活動を始めた当時は1対1の指導をしていたけれども、学校の校長先生とのつながりを持ち、大西さんのように立派な育成はできなかったけれども、徐々に部落の中で婦人部のような集会を持てるようになっていた。生活改良普及員さんと手を組んで、そして進めて行った。婦人部もだんだん組織的にできてきた。
- ・ 昭和30年代の終わり頃、生活改良普及員さんも活発になってきて、生改さんと一緒に行動した。H

- Dさんが衛生教育のこと，生活改良普及員さんが生活改善のことをした。20kmも25kmもあるところを冬道だったら歩かないといけなかった。スキーは思いをしてから乗れなかった。

- ・ 昭和40年近くなつてからは，生改さんと対になって歩いたので寂しくなかった。生改さんと一緒に仕事をするようになったきっかけは，役場の方へ行くようになってから。役場の近くに農業改良普及所の事務所があった。
- ・ ずっと「ザイ」に駐在している時はつながりがなかった。
- ・ 生改さんとの活動は，季節を問わず，年間計画を立てて行った。開拓村内の婦人部へ行った。事務長に日時を伝えてみんなを集めて頂戴ねとっておいた。そうすると，集まれる人はみんな集まった。集まれるのを楽しみにしてきていた。そのようにして，集まる以前も，故郷を偲んでお茶を飲むというようなことはあったみたいだ。
- ・ この時にしていた衛生教育というのは，当時，貧困で受胎調節の話とかもした。ある地域では，学童に湿疹が物凄く多くて，衛生のアンケートを取ったりした。それは不衛生によるものだった（お風呂に1週間，10日入らないのは普通だった）。そこで，学校の校長先生に，手洗いはしっかりするようにお願いしたりした。
- ・ 婦人部でも血圧，成人病，テレビが無かった時代，駆虫剤を飲ませて回虫をなくそうとやってた。痩せこけている子がいたら「虫下しを飲みなさい」といった。栄養不良で顔が青白い子など，回虫がいるのではないかなと思うと，放っておけなかった。
- ・ 衛生教育の中で受胎調節の話もした。個別相談もした。受胎調節実地指導員の免許は札幌にあった衛生学院へ講習を受けに行った（10日間ほど）。
- ・ コンドーム，ペッサリー，オギノ式としていたが，最も受け入れられていたのはコンドームだった。有料だった。使い方は教えるけれども，買うのは薬局などで，自分たちで買うように指導した。

5) 開拓地で女性が妊娠すること，出産すること，そしてお産に出会うこと

- ・ 開拓保健婦をしていて一番困ったことは，助産婦の資格を持っていなかったこと。早くとおけばよかったと思った。
- ・ お金がない中で，開拓民の方はお産をしても助産婦さんやお医者さんと呼ぶ事ができない。助産婦さんは町に一人しかいなかった。そういう中で，私は涙ながらに，たった1枚の紙が無いために，資格が無いために非常に苦しんだ。
- ・ お医者さんと呼ぶといっても16km，20km離れているのは普通だった。きて下さいといっても，簡単にはこられない。
- ・ 山形県の団地は，全部若夫婦だった。子どもを連れている人はほとんどいなくて，これからお産をするという人たちばかりだった。併せて初妊婦だから，H-Dさんが資格を持っていれば見てあげることでも可能だけれど，やはり助産婦さんに毎月かかれたいのであれば，せめて出産の時期が近くなったら里へ帰って欲しいと，山形へ帰って欲しいと，その部落の団長さんに交渉した。特に初産だから，経産婦になればまた別だけれど，初妊婦でかわいそうだから実家へ帰ってあげて欲しいということをした。そして帰省してもらった。そうすると，やっぱり何組かは異常出産だった，というのを後で聞かされて，胸をなでた。
- ・ 昔，地域に取り上げ婆さんという方がいた。既存の所には，取り上げ婆さんがいた。満蒙開拓の所だと年配の人がいたから，取り上げ婆さんもいた。

6) 開拓保健婦をしながらの子育て

- ・ 初めの1年間ほどは1日30kmほど歩いていた。それだけ歩くと、夜はくたくたで子どもの面倒を見る余裕がなく、かわいそうだった。子守に来てもらって預けていた。
- ・ 1番辛かったのが、下の子供が1歳半くらいの時に、夏風邪を引いて熱を出した時。その時、どうしてもやらないといけない仕事があったので子供を置いて行かざるを得なかった。子供が熱を出そうが、怪我しようが休んだ事は1度もない。辛い目をさせた。
- ・ 「おかあちゃん、今日も行くの？」と朝出て行く時に子供がいていた。「お仕事だから、我慢してよ」といって、後ろ髪を引かれながら出たことが何度もある。
- ・ 開拓診療所というものができたら、近くの開拓者にとっては、やっぱり集まりの場所でもあった。用事がなくても訪ねてくる。H-Dさんがいなくても、あがってお茶を飲んでいった。子供にはいつもお揃いのものを着せていて、開拓者の人たちにもかわいがってもらった。

7) 豊富町勤務の後

- ・ 昭和31年から13年間、昭和43年まで豊富町に勤め、転勤して浜頓別へ移った。
- ・ 豊富町での13年間の苦労は、浜頓別では味わえなかったものだった。浜頓別に移った時、既に生活状況がよくなっていた。
- ・ 昭和45年で保健所と合併になった。開拓保健婦制度がなくなる2年前(昭和43年)に、実家のある浜頓別町に開拓保健婦として転勤した。その2年後には合併をしたので、それからは道の衛生部の保健婦をした。よって、昭和45年から3年間は衛生部勤務(衛生部での仕事の方が時間的には長い)。
- ・ 昭和48年から稚内保健所の勤務になった(町村を担当した、宗谷管内の歌登町、豊富町、中頓別所を。週に3泊4日はしていた)。昭和63年の退職まで稚内保健所に勤務した。

8) インタビューの終わりに

- ・ 開拓保健婦を辞めたいと思う余裕はなかった。人に乞われるということは大切なことだと思っていた。
- ・ 開拓民の家を訪問して、夜遅くなると、当時はランプで、雪明りで歩くから、道に迷いやすくなる。そういう時は、開拓者の所に泊めてもらった。「帰ってこない時は泊めてもらったと思いなさい」とお姉ちゃん(子守に来ていた方)にいていた。

【北海道15-4】

日時：2003年8月22日（金）

場所：北海道稚内市勇知，JA勇知支所会議室にて

お話を伺った方：H-E氏（昭和7年生），H-F氏（大正13年生），H-G氏（大正14年生），H-H氏（昭和4年生），H-I氏（昭和4年生），H-D（元開拓保健婦）

調査者：渡辺雅夫，山下優子，水野正己

議事録担当者：水野正己

面接の経過：ホクレン稚内支所畜産生産課長の清水氏を通じて，JA稚内勇知支所に大西若稲さんの指導を受けて活動してきた経験を持つ農家女性に集まってもらった。H-Dさんもこの場にきてもらうことになった。その結果，先方6人，当方3人が机を挟んでインタビューすることになった。最初に訪問の目的の説明と自己紹介を行い，次第に小グループに分かれて聞き取りした。聞き取りの分担は，以下の通り。

（ 渡辺：H-Hさん，H-Iさん
山下：H-Dさん
水野：H-Eさん，H-Fさん，H-Gさん ）

1) 開拓

開拓時代は，山形県（兜沼には，山形団体があつた），茨城県，岐阜県から開拓団が入つた。

開墾は馬で抜根し，プラウで開墾した。トラクタはまず農協に入つた。それで作業をした。構造改善によってグループで購入するようになった。農業機械銀行から，やがて（個別に機械を買うようになり）機械貧乏になつた。今の50代の農家女性は，機械を運転する。

2) 農業経営

元は，畑作を中心に経営していた。ジャガイモが中心だつた。燕麦（オートムギ）も栽培した。

綿羊（ヒツジ）も飼つた。冬の間は畜舎に入れた。羊毛で子供の服を編んだ。男も編んだ。

酪農はH-Eさんの所でやっていた。馬が2頭に，牛が1頭。その後，鶏を小遣い稼ぎに取り入れた。その後に豚を入れた。ジャガイモのクズイモで飼つた。ビートの葉のサイレージも与えた。これらは煮て食べさせた。

酪農に本格的に取り組んだのは，昭和30年を過ぎてからだつた。

鶏農家で卵担（たまごかつぎ）もしたことがある。農家から駅までは男に運んでもらい，女がそこから稚内まで汽車で卵を運んだ。稚内の菓子店に卸した。卵貯金まではしなかつたが，卵買いで得たお金を200円，300円ずつ貯金した。貯金日を決めて貯金したのが，女の小遣いになつた。H-Eさんは5人のグループを作って取り組んだ。その後，このグループが班になつた。

3) 農村婦人の組織

婦人会は昭和33年に設立した。大西参事が世話をされた。大西若稲さんのご主人にあたる。その勧めがあり，健康預金を始めた。これは牛乳の出荷代金の1%を農家婦人の名義で貯金するもので，婦人が努めて暮らしをよくすることが狙いだつた。

農協婦人部は月に1回，役員会を開いている。理事5人，監事3人。支部が五つある。役員会には，

かつては徒歩できたり，馬で送ってもらったりしてきた。

農協婦人部の全道大会で研修旅行に行き，洞爺温泉，定山溪，層雲峡へ行った。

上勇知が人数は1番多い。大西さんが料理講習をやってくれた。

勇知婦人部（今は女性部）は12人。花壇づくり，料理講習（普及所から講師が来てくれる），温泉旅行，野菜品評会，研修旅行が主な活動。

- 農協婦人部でやる生活改善運動実施基準は生活の簡素化。こうしたものがあることは知らなかった。勇知は遅かった。葬式の簡素化はよいことだ。若い嫁の時代に決めたことだ。

4) 開拓保健婦・生活改良普及員の活動

大西さんの世話で健康診断をするようになった。健康診断には聖路加病院から医師がきた。農協婦人部に全員（戸）加入し，健康診断を受けた。大西さんが常時世話をしてくれた。H-Eさんの娘も協力した。梅津シゲさんも協力（今はホームに入っているがしっかりしている）。

開拓保健婦は大変だった。勇知のおかあちゃんだった。誰にでもよくしてくれた。各家庭を回って歩いた。

1年に1回，ミニドックの検診をやっている。勇知では5月初めにやることにしている。

生改さんは昭和40年頃にやってきてくれた。小グループを作って話し合いをした。家の掃除の仕方を習った。

5) 食生活

食べ物には気をつけるようにした。タケノコ，ワラビ，フキ，ウド，シイタケを塩漬けにした。事故の牛の肉を煮付けては瓶詰めにした。アイヌネギは，昔は植えている人もいたが，最近は出なくなった。今は，キツネやシカにトウモロコシを食われている。

農協の総会の時に講演会を開いて油を食べるといわれたが，その当時は食用油を買って食べることはなかった。お金が無いので病院にも行けなかった。そこで積み立てをすることになったが，あれは良かった。農協総会でいろいろ説得して，乳代の1%を貯金し，家族みんなで使うようにした。農協では，これで生乳の系統出荷が行なえるようになった。市内に乳を出していた人は，自分で乳代を積み立てた。

牛乳を飲むことは，なかなかやれなかった。牛乳を沸かして飲ませるようにした。冷蔵庫も無かった時代のこと。

大豆で味噌も作った。

6) 光熱水道・耐久消費財

薪ストーブを年中焚いていたので，カマド（改善）は（問題になら）なかった。薪は自家労働で山から切ってきた。国有林を払い下げてもらっていた。やがて燃料が石炭に替わり，その後にガスと石油（灯油）に移った。今は，ガスと電気と石油（灯油）になっている。大西さん（の住まい）は，台所が無く，小さいストーブを置いていた。

（生活用水は）井戸だった。そこから，4斗の瓶に天秤棒で水を汲んだ。やがて手押しポンプになり，電気のモーターになった。

風呂は3日に1回。雪でうめた（ぬるくした）。

洗濯機は昭和37年頃に入った。テレビよりも洗濯機が農家には重要だった。(野良)仕事が終わってから洗濯するのだから。電気は昭和25,26年に農村電化で中央地区に入り,昭和36年には全地区に通った。

車が入ったのは昭和40年代。昭和37,38年頃から乳牛の頭数が増え,子牛も3万円ぐらいになった。しかし,安い時には全くお金にならないが。

7) 娯楽

正月と盆が過ぎれば,女同士が当番制でご馳走を作り,話をする機会を持った。宿(集まる家)を替えて集まり,百人一首もした。神様を祀っている家には,その祭祀の日に集まった。とても面白かった。

会合に出るのが楽しみだった。仕事を片づけてから出たものだった。歩くことはなんとも思わなかった。

昭和42年に札幌へ行った。道の博覧会だった。50~60人だった。根本の母さんが迷子になった。上湧別に急行が止まってくれた。

老人は「手毬の会」や「老人クラブ」に入っている。「手毬の会」は,上勇知の部落の人で組織している会で,月例会を開いている。誰でも入れるので,給料取りの人も加入している。月会費は500円。弁当を若い人が作ってくれる。集まりは町内会館。「老人クラブ」ではカラオケや花札をして楽しんでいる。

8) 嫁問題

若い人にお嫁さんが居ないのが問題だ。お嫁さんをもらうのが,農家にとって大事業だ。仲人がいないことが問題だ。昔は,富山の薬屋さんの斡旋もあった。

9) 北海道の農村家族

北海道の農村では,内地の農村と比べて姑のことを嫁が何でも聞くという習慣はなかった。間違いは間違いといえるのが北海道(の農村のよいところ)だ。

【北海道15 - 5】

日 時：2003年8月22日（金）13：30～15：30

場 所：北海道稚内市勇知，JA勇知支所会議室にて

お話を伺った方：H-H氏（昭和4年生），H-I氏（昭和4年生）。両名とも開拓農民（勇知15線という集落の住人）

調査者：渡辺雅夫

議事録担当者：渡辺雅夫

1) 大西保健婦について

大西さんのことを「おかあちゃん」と呼んでいた。大西さんは稚内に住んでいて、農家の惨状を見かねてやってきた。「勇知の人は笑いが無い」といって、集まって歌を歌っていた。歌が上手な人で、音楽のテープを聞かせてくれた。

大西さんは60歳で免許を取って車の運転をしていた。それまでは歩いていたと思う。バイクに乗っていたり、自転車に乗っていたりという姿を見たことはない。

健康相談所に住民が集まって、血圧を測ってもらっていた。健康はそれまで気を遣っていなかったけど、大西さんがやってきて血圧を測ってくれたりしたら、気になりだした。

聖路加医院から先生を連れてきてミニドックをやっていた。

料理講習は生改さんもやったけど、ここでは大西さんが主にやった。「牛レバーを食べたら体に良いのだよ」といって勧められた。でも、「イモの皮に栄養があるから」といって一緒に食べさせたら、「豚の餌みたいなものを食べさせるのか？」と怒る人もいた。

大西さんは編物も教えてくれた。何でもできる人だった。

大西さんは女性だけでなく、男性からも評判が良かった。

2) 婦人部について

昭和33年に婦人部が始まった。農協婦人部というのは今でもあることはあるが、婦人部長になり手がいない、若い人が入らない、ということから衰退している。車の運転ができる人ではないと、実質的に長は勤まらない。

3) その他

昔は食べるものがなく、ムギを臼でついて食べたり、ジャガイモを凍らせて干して粉にして「馬鈴薯粉」にして食べたりした。

20年前に宗谷支庁から生改さんがやってきて、菊づくりを教えてくれた。今も菊を品評会に出している。

大西さんの提案で週に1回、稚内に行って野菜を売っていた。15:00～16:00に売って17:00に帰宅したが、16:30頃に牛が牛舎に行くので時間が合わない。一度牛が逃げてしまってからやらなくなってしまった。酪農をやっていないで、野菜だけを作っている人は今でも売りに行っている。

【北海道15 - 6】

日時：2003年8月23日（土）午前10時～午後1時

場所：野幌駅前の料理屋さんの2階にて

お話を伺った方：H-J氏さん（大正13年生まれ，79歳）

調査者：佐藤，太田

議事録担当者：佐藤寛

職歴：標茶に昭和29～38年（『日本残酷物語5 近代の暗黒』pp.189-244「監獄部屋の人々」, pp.223-244 集治監物語に標茶などが出てくる）。追分町2年，大滝村人口2000人，北見沢温泉～開拓保健婦10年，江別保健所11年。夕張の炭坑育ち。苫小牧に実家（？）。昭和18～22年，札幌市立病院看護婦・助産婦養成所（？）に4年。

戦中：空襲があった。市立病院の隣の通信省。防空壕から覗いているとB29からパイロットがニヤニヤして手を振っているのが見えた。石油港なので空襲があり，トラックで負傷兵が山積みになってくる。半分は死んでいる。

戦後：進駐軍がやってくると「女はアメリカのお妾になる」とのうわさが広まった。各自が1本ずつモルヒネを隠し持ち，そのような時になったら「お互いに注射をしあおう」という合意であった。

進駐軍がきて，夜は恐くて歩けなかった。嫌がる日本女性を電信柱から引きはがしてジープで連れて行く光景なども何度か見たが，どうすることもできない（これは一体どう理解していたのだろう。自分たちも南京でしたことだから何もできなかったのか？佐藤付記）

市内の外科病院の院長はアメリカに媚を売っていた。毎夜アメリカ兵を招いてダンスパーティー。「アメリカさんの送別会なので一晩だけ娘さんを貸して」といって連れ去られ，何日も帰ってこず，数日後，ボロボロになって病院の前に倒れていた（その娘さんは死んでしまった）。

アメリカ人から病院で英語を習っている保健婦もいたが，自分はとてもそんな気持ちにならなかった。

卒業して看護婦・助産婦・保健婦の資格を得た。指示にしたがって動くだけの仕事に反発。田舎で困っている人のところに行きたいと願っていた。

早来町（札幌の近く）の国保保健婦になったが，1年でやめた（写真あり）。黒い箱をぶら下げて自転車に載る写真。箱の中にはぶら下げ式の体重計，体温計など。当時の主な活動は結核患者。

昭和23年秋・厚真町（あづま）にいたおばさんの紹介で帝国石油の保健婦（衛生管理者）になった。5年働いたが会社がつぶれた。

厚真町の国保保健婦になった。

昭和29年に結婚して，主人の実家がやっていた下宿屋のために弟子屈（てしかが）に行く。姑と小姑二人がいた。苦勞するなら自分で働いて苦勞したい。家を出て，標茶町の開拓保健婦に。

虹別¹³⁾に赴任（標茶から20km）。ご主人も一緒に。

¹³⁾ 虹別の開拓 戦前開拓 200戸，戦後開拓（昭和26～27年）150戸。

前任者は標茶町の保健所に移った。助産婦資格がないので、あまり部落の人の受けが良くない。気まずくなってやめた。H-Jさんはお産にこき使われた。

昭和30年長女誕生（予定日は7月20日だったが、なかなか生まれないので、入院したが院長が酒飲み。妊婦なのに手が足りないので手伝わされた。いつまでも待てないので帝王切開を依頼した。院長はその時だけは酒を飲まずに手術した。ヘソの緒が4回り首に巻き付いていたが、8月1日に無事に生まれた）。「マンボ」と名づけるといわれた。

産後すぐに働いた（使われる）ので、癒着を起こした。流産しかかった。手術し直した。4年後に男の子を産んだ。

虹別から12kmで西新別（？），冬は陸の孤島。

毎晩のようにお産，病人で起こされるので苦労した。

オート3輪で迎えに来た。家族で一組しか布団がない。お産する時はさすがに妊婦専用。奥を見ると、藁の中に子供が寝ていた。学校に行く時も藁が体に付いているので笑われたりする。

開拓の人が迎えにくる。呼ばれなくても戸別訪問する。1日5，6軒がせいぜい。赤ちゃんがいる，妊婦がいる，病人がいるという状況を把握。

イモさえできず，ソバくらいしかできない。牛を飼っているが安定していない。

本州からきて農業経験のない人も多い。台湾で警察官だった人，元教員など。漬物の漬け方も知らない。

入植人数は釧路が一番多い。そのうちで標茶には1200～1300戸が来た。

いやさか部落は満州開拓団帰りなので，さすがに強者。成功した。

保健所からは「医療行為をするな」といわれて悩んだ。

開拓医・開拓産婆制度はあった。12km離れた久根別に開拓医（開業医に囑託）がいた。

「かまわん」，「何でもしなさい，私が責任を取るから」といつてくれた。しかし，それでは根拠がないので一筆書いてもらった。「熱を出したらペニシリン」とか。

取り上げ婆さんはいた。取り上げ婆さんの手に余る時には迎えにくる。

町の助産婦は有料だが，開拓保健婦はなかなか金を取ることができない。謝礼を持ってきた人はいた。その場合はもらってもいい。町の助産婦からは「取って頂戴」といわれた（民業圧迫となる。貧困者は町の助産婦にかかれないので開拓保健婦を呼びにくる：佐藤付記）。

農林省からは「生活指導50%，衛生指導50%」といわれていた。「第一歩は，殺さないで，逃がさないで」ということ（これは生存戦略支援：佐藤付記）。

移動の足

道が悪かった。最初は「スズモベツト」50cc。雨が降るとエンジンがかからない。次はホンダ90cc。エンジンがなかなかかからない。調子がいい時で30回くらいキックしてやっとかかる。欠陥車だった。最後に4輪の「白鳥号」1000cc。大滝村で。保健所長があてがってくれた。

標茶の役場で

昭和31年，標茶に移る。標茶役場の中に事務所。虹別には後任のH-Kさんが赴任。

開拓保健婦+開拓首農指導員，生改+農改が役場の一部屋で机を並べていた。

生改は「土田のおばちゃん」（参考文献参照）。女は二人のみ。「土田さんは良く歩いた」。部落

から部落へ「てこてこ、てこてこ歩いていた」。

弟子屈から釧路に向かうバスが日に1本。これに乗って活動していた。

土田さんのご主人は高校で牛の世話をして生徒を指導する人。毎日牛乳缶を提げて家の前を歩いていった。子供がなかったのもらい子した。

「おばちゃんは食生活改善，私は衛生」。

H-Jさんは中御卒別（なかおそべつ），上御卒別，磯分内（いそぶんない）を主に担当。H-Cさんの担当地域を除いた所。

標茶は開拓の条件が悪かった。まず柱のない「拝み小屋」，それから土台のない「掘っ建て小屋」になる。H-Jさんはこの時期あたりから開拓保健婦として入っていった。

トイレを借りることはできない。穴を掘っているだけなので。これをみて「ゴザをかけたら」と提案したが、「家族だけなら構わない」といわれた。

冬は個別で回れないので，婦人会を活用。さらに，婦人会は，自分たちで活動をやるようになった（つまり，最初は保健婦さんの都合によって集まったが，後に自分たちのために集まるようになったということか：佐藤付記）。

中御卒別（なかおそべつ）は昭和27，28年入植で100戸くらい。割り当てられた土地（1軒当たり15町）の条件には運，不運がある。中御卒別は山坂が多い。クジで分けた。図面だけの情報。平地が当たった人はよいが，谷だとだめ。これが不満で村人が集まると酒を飲んでケンカする。標茶は立地条件が悪い。残っていた山や谷に戦後入植。

虹別は陸の孤島だがまだ平ら。機械が入る。中御卒別は条件が悪く，初めは立木の伐採をして炭焼きから始まった。子供が炭焼き釜に落ちて死んだりした。

「開拓婦人ホーム」を作って欲しいと運動したりした（農林省農地開拓部の補助金予算）。北海道に数カ所。女性が集まれる場所を考えて欲しいと陳情。当時は学校しかない。それだと学校が休みの日か，夜しか使えない。そこで，標茶町長に陳情に行かせた（婦人会を）。

町長は「中御卒別はだめ。少し金があると焼酎飲んでケンカしているので，面倒を見られない」といった。

当時，町村が貸す「低位生産性」の貸し付けスキームがあった。しかし，これを安易にくれなかったのは町の「親心」だったのかもしれない（H-Kさん）。

H-Jさんは，婦人会に「あんた達悔しくないのか，こういわれる大元はあんた方にあるのよ」とハッパをかけた。

同時に自分も町役場に陳情に行った。「そんなこといっていたら，いつまで経っても中御卒別は立ち直れない」。営農指導所の所長も一緒に「私も責任を取るから何とかしてくれ」。子豚を貸してもらった。豚の飼育に婦人会が責任持って取り組み，成功した。標茶町内の共進会で，この豚が3等賞を取った。割烹着の商品をもらって大喜びした。

資金が少しかつたので，「冷害対策トウモロコシ」，「共同耕作」に取り組みはじめた。

町長が「考えてもいい」といいたした。こうして町長が道から「婦人ホーム」を取ってきてくれた（全道に2カ所のみ）。

この場所を利用して昭和36年には季節保育所を実施した。共同労働でブランコ，砂場を作った。こ

うして中御卒別はケンカをしなくなった。

中御卒別は昭和57年に70周年記念。H-Jさんを捜し当てて招待してくれた。前泊して、H-Cさんの家に泊まり、連合婦人会長だった高橋さんの家に連れて行ってもらった。

冷害凶作の時(いつ?)には、東京の母親大会に訴えに行った。

西標茶・平和

平和開拓地17戸。受け持った時には既に13戸に減っていた。磯分内まで12~16km。小学校でも下宿しなければならぬ。中学生も冬は休ませるような不便なところ。

「農休日を作りましょう」と働きかけ、毎月15日を農休日とした。

釧路市長から拓殖課長の小野さんが視察にきた。たかじょう(地下足袋)を履いてきた。係長の飯田さんもいい人だった。婦人会を作り、問題点を聞くと「子供を学校にやれない」という。「分校でもいいので欲しい」との声。これを課長に相談した。すると「下からの盛り上がりが上を動かすのだぞ」、「下から盛り上げれ」といわれた。「内緒だけど、陳情してはどうか」とアドバイス。

そこで、13人の婦人に加えて3人。全部で16人の陳情を作って町長に持って行った。町長は「平和」部落がどこにあるかも知らなかった。町長が教育庁と視察にきた。その後、町から支庁、そして道へと話が上がり「平和小学校」ができてしまった。親は大喜びで、運動会でも共同作業をした(今は既になくなっている。集落自体が全員離農)。

婦人会づくり

リーダーになりそうな人を見つけて「落とす」。部落の12~15人くらいの集団を作って行く。「リーダーを見つけるのはゆるくない。旦那の理解を取るのもゆるくない」。

開拓の人

開拓は既存の農家と比べると「みんな頭がいい」、「既存より教育レベルが高い」。新しいことに飛びつく。「やってみない?」というのと、すぐする。

厚生(中御卒別?)

近藤さん(集落の婦人会長)は次から次に子供を作る人。旦那が協力的で偉かった。戦後の入植で立地条件の悪い谷間のような所。現在半分くらいが残っている。

初めは農業経営簿つけ。少数の人しかやっていなかった。婦人会ができて家計簿が加わり、夫婦が背中合わせでつけるようになった。

近藤さんが研修会に行き、部落に帰ってきてみんなに教える。

各地区の10~15人くらいの単位で婦人会を組織した。「交替でもいいからやりましょう」といって促す。近藤さんはいつも背中に赤ん坊を背負っていた。

どこでもご主人は文句をいうものだが、近藤さんの旦那さんはH-Jさんが「奥さん貸してね」というと嫌な顔せずに許可してくれた。

近藤さんの集落は6割方は残っている。

冬の移動には軌道バスを利用(よく脱線する)。もともと牛乳運搬用。朝6:00発、夕方5:00発。標茶から中御卒別まで12km。

夏はバイクを利用する。自分で運転。郵便配達と間違えられる。冬はたくさん着て歩くので熊と間違われる。

営農指導員はスキーが達者。歩くと6km, スキーだと近道できて4km(H-Jさんは, 場所をいう時に必ずどこそこから何kmということを確認にいう)。

土田のおばちゃんは既存農家が対象。月例日を設けていた。これを見て, 自分も慣れてきたら婦人会づくりを勧めた。そうすればいちいち各戸を回らなくても良い。

冬の農閑期に様々な活動。当時は家族計画¹⁴⁾がやかましくいわれていたもので, そうした啓蒙活動もしたが, なかなか実践できない。

「今度きた保健婦は生意気だ。よけいなことを女に教えている」といわれた。沢ごとに10~12件の女性集団を作る。

婦人科医の集まりの時に説明。墮胎すると体が悪くなる。カーテンで仕切って一人ずつ挿入の実技をした。開拓民はコンドーム, ペッサリーは無料。それでも失敗する人はいる。

標茶から24kmの中久著呂

バイクで行くとお尻が痛くなる。毎月集まる時に「ああ, 橋本さん, また失敗したな」と思った。まだ開墾途中なのに上に二人いる。「誰かもらってくれないか」と相談された。なるべく手放さないように説得。一週間後に「炭焼きさんにもらってもらおう約束した」が, 旦那に断われた。「本当に覚悟がある」という。H-Jさんは児童相談所などにも行った。

お姉さんが釧路にいて世話好き。「海上保安庁の人で欲しい人がいる」という話を持ってきた。H-Jさんが本人に会いに行ったところ「実子として育てる」, 「日赤から出産証明も母子手帳ももらってくる」, 「男でも女でも良い」という。

ただし, 「誰から誰に渡されたかは名乗らない」という条件で。「生まれた」との情報で, 釧路に電話した。

一週間後にH-Jさんの家に連れてきた。父親が朝4時に起きて, 布団の下から抜き取って連れてきた。途中から軌道に乗って。上の子には「赤ちゃんは余所にあげる」といってあったが「やらないで」と泣いた。軌道の終点の駅で, 奥さんのおっぱいももらったという。連れてきたら, 相手方から届いていた酒を飲んで, 父親は寝てしまった。これは辛かったのだろうが, H-Jさんはこれを見て腹立たしかった。H-Jさんが抱いて駅まで送って行った。

3ヵ月後に見に行った。大事に育てられ, 母子手帳も実子として作成され, 産前検診の助産婦の証明までついていた。「写真を1枚だけもらいたい」と元の親からいわれていたが, 「返せ」といわれたら嫌だということで, 納得して写真はもらわなかった。

やった方の親は, これまで子供を予防接種に連れてきたことがなかったが, 来るようになった。もらわれた子の様子が知りたかったのだろう。H-Jさんの話を聞いたが「私たちは諦めているが, おばあちゃんが一目見たいといっている」というので, H-Jさんは怒った。納得して, しょぼしょぼ帰って行った。

3ヵ月後に知らない男の人が家の前に立っていた。受け取り先の主人だった。「保健婦さんの家で

¹⁴⁾ 実地指導員=3, 4日間の実技と講義で資格を取らされた。札幌医科大学で。ペッサリーの挿入ができるのはこの資格を持っている人。

すね」といって、「根室の海保に転勤する」という。となり近所の人が「急に赤ん坊ができたのはおかしい」といいだしているの、戸籍から何からすべて実子で作ったのに、それが見破られたら困るので、みんなが行きたがらない根室に転勤。その子は、今44、45歳くらいだろう。

中久著呂で、栄養失調で死んだ子がいた。小学校3年生の男の子。家庭訪問調査に行ったら、父親は地区の役員で丸々太っていた。街に出ては自分だけ美味しい物を食べていたらしい。

昭和32年12月1日にアンケートした。

徳川のりこ開拓婦人連盟会長がきた時には、森林組合の車をハイヤーにした。

厚生(こうせい)部落(=標茶から行くと御卒別の手前)の婦人会が熱心。高橋会長(折り詰め作り写真一番手前、現在91、92歳)がとても良いリーダーだった。

「牛3頭飼えば家族全員食べられる」といわれた時代。

赤ん坊を取りあげている写真あり。

「私がいなくなっても考えるようになって欲しい」と思っていた。

昭和38年、追分(2年)

写真・胆振地区代表として全道の発表会：昭和39年10月。豊富部落の婦人会長が報告した(写真中央)・中野キクさん。右端が農協の参事。開拓から報告事例が出たのは初めてということでお祝い。

「誰かやりませんか」と呼びかけた。元々この集落ならと思っていたが、中野さんがやってくれるといった。試験的にやってみた。その後はどうなったか分からない(2年でやめたので)。

この地区はコメの作れる開拓農家で、その点で心に余裕がある(余裕がなければやはりカイゼンは無理か?：佐藤付記)

大滝村、人口2000人(胆振支庁)

昭和45年に身分切り替えがあったが、そのまま「室蘭保健所大滝駐在」という形で仕事を続けた。

開拓地としては恵まれている地区。条件のいいところに入った人は儲けた。中御卒別は山坂、こちらは平地が多い。割り当ては大滝10町、中御卒別15町(千歳空港の用地買収で土地成金もいる)。

開拓者は満州帰り、戦災で焼け出された人、農家の次三男。

その地域には保健婦が不在。村の保健婦がいなかった。

巡回診療(国保の医者)について回る。結核の検診率が低かった。各部落に検診に行くが受診に出てくる人が少ない。そこで「受診表」を作った(保健所の保健婦にも手伝ってもらった)。この結果受診率が90%にあがった。ただし、結核がたくさん見つかってしまった。成人病の受診表も作った。

料理講習もした。「食べることが手っ取り早い」。大滝村の産業課長が「農政の話をしたいのだが、人を集める手だてはないか」と相談。「料理講習がいいわ」といって、料理講習会を開催。食材は町村の負担。午前中に料理講習会をし、午後は課長が農政の話をした。女の人がしっかりしているところはうまく行く。

婦人会活動(H-Jさん自身も活動)

新日鐵の工場があり、それを中心とした婦人会。

古着を各自が持ち寄る。これを開拓保健婦(H-Jさん)と営農指導員で「あの家には小学生がいる」、

「この家には中学生がいる」と仕分けする。ひどいモノもあるが、良いモノもある。

既存と開拓

開拓の入植者の入った土地は、既存の入植が手に余って残したところなので「いずれあの人達は出て行く」という目で見ています。「開拓の子は汚いから遊んではだめ」という所もあった。

離農

ご主人は開協（開拓農協）に勤めていた。

夜逃げをする人もいた。牛を千歳で馬喰に売って、岩手に逃げて行った人もいた。その前日、たまたまH-Jさんはその家（2軒並んでいるうちの1軒）を訪れると「百合の根を持って行きなさい」、「いくらでも持って行って」といわれた。家に帰ってご主人に「怪しい」といったが、案の定翌日逃げた。ご主人は開協の借金精算のために岩手まで行ったこともある。

クマ騒動

大滝の清原部落ではクマが出た。トウモロコシ畑、ニンジン畑をクマが荒らし、足跡が付いている。ハッパだけ残して食べ散らかす。

牛と人間が同居している。1階に牛、2階に人間。ある夜、牛がおかしな鳴き方をするので下を覗くと、クマが牛を殴りつけている。牛は気丈で立ったまま殴られているが、クマの爪で肉が抉り取られている。バケツなどを打ち鳴らしてクマを追い払ったが、被害が続く。

営農指導員について見に行ったこともある。バイクの後ろに10kmほど、とことこついて行った。東京などからもクマ打ちが来たが捕まらない。結局10数戸がすべて離農した。離農した場合は、近隣の農家が買い取って土地を増やす場合もある。

開拓保健婦の仕事

女性が相談する唯一の相手としての開拓保健婦。土日も休みではない。向こうから訪ねてくる。「いると思って」。姑は嫁の悪口いいに、嫁は姑の悪口いいに。

学生の実習生を毎年受け入れていた（毎年3人くらいずつ）。農村が気に入るが「開拓保健婦にはなりたくない」という。なぜなら「日曜も部落に行く」のはイヤだから。

今の人には、休みは休みとして欲しい。しかし、人間関係が1番なので自分たちはそのようにしてきた。

保健婦試験の面接で、「世のため、人のため」、「農村の貧しい人のために」とまじめに答えて、札幌中央保健所の所長にからかわれた。

医療施設では先生のいいなりが「良い看護婦」。自分もそのように振る舞っていたが、赤ちゃんのクル病や、結核などを見るとこれに対して何とかしたくなった。

保健婦取るには5年必要だが、検定試験で資格を取った。

永住したいくらいいい所だった。

主人は役場に勤めていたが、体が弱かった（戦争で肺を悪くした）。

子供も大きくなり、学校の便が悪いので転勤願いを出して、江別保健所になった。

当時は牛飼いだった人が、今は牛を飼う体力がなくなって長イモづくりをしている。その人が今で

も長イモを送ってくれる。

農業の多角化～メロン（夕張の隣，同じようなメロンができるが知名度が低い）。

拓殖課

拓殖課は力があつた。金も持っていた。年度末になると「視察旅行に行つてこないか」，「どこでもいいぞ（道内）」といわれたものだ。先進地視察で大沼の駒ヶ岳等にも行った。

拓殖保健婦の身分

昭和34年までは人間扱いでない。モノ扱い。2ヵ月に1回施設費として手当がくるが健保なし，ボーナスなし。釧路市庁から2ヵ月に1回2万6000円（結構良いのでは？町村保健婦と比べてどうだったのだろう：佐藤付記）。ご主人の給料（役場）が月に8500～9000円（厚真では，その施設費を村に入れて，村から職員として給料をもらった。ボーナスもあつた）。しかし，開拓地の惨めな生活を見ていると，贅沢はいつていられないと思つた。

昭和34年12月に準道職員となる。農林省が「身分を安定させないと補助金を出さない」と道に圧力をかけた結果。昭和30年くらいから，年に10人ずつ正職員化（未亡人など優先）。

昭和38年に胆振支庁にきた。「任官していないのか？」と問われて何のことが分からなかつた（医療職としての登録のことか？）。任官したら二号棒給料があがつた。給料表が違う。追分から大滝に移つたら，僻地手当も出た。

農改と開拓営農指導員

農改は専門性が高い。職種別に配置される。米作なら十勝，酪農なら標茶という具合。開拓営農指導員でも農改の資格を持っている人もいる。教育も農業研修所など似たような所。

成功検査

開墾補助金を支出するに当たっては，いつまでに何町歩の開拓，というような計画がある。それが実現できたかどうかを審査し，成功と認められると補助金が出る。

開拓農家は直接行政とのパイプが繋がっている。既存農家にはない。

開墾補助金は開協（開拓農業協同組合）を通じて支給される（開墾補助金，住宅補助金）。開協の組合費は，補助金の一定額が天引き（農家自身が出すわけではない：佐藤付記）。開協は開拓民の生活を支え，開拓民と行政の仲立ちをする（今は，一般農協と一本化）。できあがつた耕地を営農指導員，市町村の人が認定する（検討検査）。計画通りにできたかどうかの成功検査。結果に対して補助金の下りる。

その他

開拓職員の同窓会がある。最近が開拓地も舗装されている。かつては移動が大変だった。

現在は道立衛生学院で講義。今年で3年目。ほとんどは女性だが，最近は男性もいる。去年は95人が女性で5人は男性。卒業した男性は3人。

現在の脱サラ入植。金と健康がなければ生きていけない。

【北海道15 - 7】

日 時：2003年8月24日（日）午前

場 所：標茶駅からの車中にて

お話を伺った方：H-C氏（元開拓保健婦87歳）

調査者：佐藤，太田

議事録担当者：佐藤寛

午前9時前，標茶駅前，お嫁さんに連れられてH-Cさんが到着（83歳までは自分で運転していた）。同じく自分で車を運転してきたH-Lさんと合流。佐藤・太田はレンタカーで，水野，渡辺，山下は列車で稚内から到着。H-Lさんの車に水野，渡辺，レンタカーにH-Cさん，佐藤，太田，山下が分乗。

標茶駅前 いやさか（弥栄）小学校，高松たいとく先生 多和平（たわだいら） 厚生集落高橋さん 中御卒別 鶴居町役場に12時半着

車中でのインタビュー

地名 標茶 中御卒別 茶安別（厚岸郡大田村茶安別）久著呂

コスモスは標茶の花。街路のコンテスト。審査の日までは一生懸命手入れする。

（まず，車で標茶駅から弥栄小学校へ）

途中で日本一大きい標茶高校を通る

・いやさか（弥栄）小学校

元々標茶には「軍馬補充部」があり，この辺り一帯はその牧場であった。柵ではなく土累が巡らされていた。小学校の敷地にも土累跡がある。

土累。磯分内の篠原というおじいさんが日誌を残している。賃金働きしていた。

この辺りの開拓は大正7年に開始。昭和21年から戦後開拓。満州の弥栄村（昭和7年入植の武装移民・試験移民第1号・吉林省樺川県チャムス南方50kmの永豊鎮）からの帰国者がこの辺りに入植。高松たいとく先生という校長。

70戸が入植した。今はだいぶ抜けた。組合長も亡くなった。弥栄から引き上げてきた人には東京出身者が多かった。同じ開拓婦人部でも標茶でも「筋金入りだ」といっていたが，今はH-Nさん一人になってしまった。児玉さんもぼけてしまった。馬場さんもいなくなるし。最初は開拓地がばらばらしていて，なかなか集まれない。4，5軒集まるようになり，そのうち部落の全体が集まるようになった。役場の人，学校の先生の助けを借りた。カドヤ町長にもお世話になった。私たちは何にも分からないので。

・昔は馬を放していた。今はこんなに立派になった。「戦争は恐ろしいと思いますね」。

小学校は入植と同時にできた。開拓の共同小屋（2家族が住んでいた）が自分たちの家を建てて空いたので，跡を学校に利用。初めは標茶小学校分校として。後に弥栄小学校になる。

開拓学校は大抵そうだった。H-Cさんの方も，開拓者の家が一間空いていると借りていた。横綱大鵬の母親が再婚した相手が校長先生。奥さんが女先生。焼酎の一斗樽を横に置いて焼酎を飲みながら教えていた。大鵬が横綱になった時には既に再離婚していたが。子供が2，3人では通えない。途中で熊が出るし。

ライフヒストリー

静岡県の生まれ。安倍川の長田区。とくがん寺の下。

小学校の先生が結婚して男の子が生まれた。その初節句のお祝いに先生の家に行った時、ご主人に会う。先生が「人柄は保証する」という。

H-Cさんは、満州開拓の宣伝映画を見て「行きたい」と思っていた。反対されたが、決心して結婚を決めた。

ご主人

夫の家は有数の家柄。「従兄弟会」をする時には菩提寺に集まる。

夫の父は結核で、兄弟は感染しないようにばらばらに育てられた。三郎は叔父に育てられた。夫は静岡中学の野球部に所属し甲子園で優勝した。あまり人付き合いの好きな人ではない。肺病を病んで、猪ヶ谷千春の父のやっていた旅館に逗留して療養していた。

農業を志し、満州に行って綿羊をしようと訓練のために北海道の北見にきていた。義母や義姉が北海道にきて同居していた時には、夫は「かあさま」、「ねえさま」と呼びかける。

昭和11年2月26日(2.26事件の日)の朝に東京を発って、夫を頼ってきた。

夫は、最初は女満別の綿羊の大きな「バン」牧場に農林省の研究生として入っていた。勉強するために。満州の「セキレイ」に綿羊牧場を作る計画のため。主人の方の人が朝日新聞に勤めていて論説を書いていたが、朝日の情報で満州はもうだめだと分かって方針を転換。女満別の綿羊牧場に農場があり、畑になっているのを10町歩ばかり畑を買って、家も建てて農家をやるとことにした(マメなど)が、嫁がこないで困っていた。

父親が早くになくなったので、静岡で育てられた人。

北見で農家を始めた時には、空知農学校を出た友人が、「H-Cさんがやるなら一緒にやろう」と3人でやっていたが、その人は召集されてしまった。近所の農家の人は、私が朝尿意で起きるともう畑を起こしている。主人も中学の時は静高の野球部、新しい甲子園の第1回の優勝。親戚従兄弟は、みんな東大とか、中学をでて1年浪人したら大丈夫と思っていたが結核になった。赤城山の麓で、伊賀屋さんの父が旅館。ぶらぶらしていられないので北海道に。東京百姓と笑われる。北見の方で、標茶では今満州開拓で牛馬を飼う土地を成功検査通って売りに出ている。家もついている。ということで、今の所に来た。それが昭和15年。

昭和16年に宣戦布告、大東亜戦争。男がどんどん取られる。

昭和19年、釧路も爆撃を受ける。釧路の早い戦災で焼け出された人が私たちの回りに入った。

昭和20年に500戸、600戸とに入った。軍馬補充部も解放された。ただ帳面だけで割り振り、後に見にきたら「良くこんな所に入ったものだ、入るモノも入ったが、入れるモノも入れたものだ」。水がない。がんがん(四角い一斗缶)を担いで水汲み。H-Cさんもした。そのうちに井戸を掘るようになった。みんなが銘々に掘った。なかなか掘っても出ない人もいる。業者に頼んでメーターいくらで。

弟子屈の「にた」というところは、水の出が悪くて離農した。

ここは離農した人の分は町が買い上げて、育成牧場。牛を放して、料金を払う。

(多和平の休憩所で)

ご主人が北海道に行くことに決めた。裸一つで行って北海道で牛馬と暮らすのだ。親戚や家柄なん

か気にしなくていいといわれた。私はそれをいい気にしてきた。静岡からきて、覚えている人はいない（H-Lさんの甥は静岡）。何でもかんでも報告していた先生の最初の息子が、校長先生を定年退職した。先生の書物を整理してお父さんの自分史をまとめたら、何でもかんでも先生に報告していたので、私たちの事も一杯書いてあり自分史ができてしまった。嬉しかった。書かなきゃと思っていたが、なかなか書けないのに。

北海道新聞の「私の歴史」にも掲載された（今日持ってきている）。

自分史に野球のバットとボール。

夫が育てられた叔父（父親は結核だったので、五つの時に亡くなった）その叔父さんは加藤さんのお婿さんになった、その財産を静岡中学の野球部につぶした。

新村出は母親の兄、朝永振一郎、などの中に育っている。

私は静岡の貧乏の農家の出。夫は91で亡くなるまで尊敬できる人。子供達にはいつも本を読んで聞かせた。売るほどの農業もできない。少し綿羊飼っていた。牛を飼う金もない。外に出るのはいや。大田村では村議員などという誘いもあったが、「俺は俺のいうことが通用するまでは人前に出るのは嫌だ」といっていた。私は出てばかり歩いた。子供達が煮炊きした。父親に育てられた。

角谷さんが衛生係でおむつを持って一緒に山の中に入ったりした。

昭和30年に大田村が分離。

昭和30年の町村合併の時に、厚岸（あつけし）は大田村に、治安別は標茶に分割された（H-Lさんの小学校時代は、高等科は茶安別になかったので、釧路の学区だが、同級生は標茶の高等科にきていた）。運動会でも出て行った。行政的には向こうだが。

保健行政

昭和21年。標茶に保健所ができたので医者がいるし、嬉しくて挨拶に行った（開拓産婆として）。当時のH-M氏が「ここは標茶で、茶安別（ちゃんべつ）は釧路保健所の管内です」と事務的に対応された。釧路行くには標茶から汽車に乗らなければならない。それ以来行かなくなった。名婦長といわれていたが。茶安別は行政的には中途半端。

標茶保健所は標茶町、弟子屈町、別海、中標津なども当初は含まれた。後には中標津保健所ができた。30年に標茶に統合されてほっとした。

医療・福祉などという言葉などなかった。茶安別で病気になったら死ぬもの。生きている内に一度脈を持ってもらえば、死亡診断書を書いてもらえる。

医者は死ぬときに診てもらう

死亡診断書を書くために、死人を町（標茶・厚岸）まで連れて行かなければならない。

死にそうな病人がいる時には「先生、往診のついでがあったら脈を診ておいて」と頼む。そうすれば、死んだ時に死亡診断書を書いてもらえる。

医者は「開拓保健婦の「ついで」や「ちょっと、そこはとんでもない」といっていたが。

医療には期待できないので「具合が悪くなれば、死ぬもの」と覚悟。

出産も自分でするもの。山中でお産した人もいる。

（H-Lさん）「茶安別の山を越えようとして、山でお産した人がいて、その子供という人に会ったことがある。」

職歴エピソード

開拓産婆時代

・呼ばれて行ったら痙攣を起こしていた。炭運びのトラックが入っていたので大急ぎで炭を下ろしてもらい、笹を茹でて敷き詰めてもらい、その上に産婦を寝かせて標茶まで運んで間に合ったこともある。痙攣を起こしてもお産だけは進む。お産は自分でするもの。

北見・女満別にも助産婦はいなかった。綿羊牧場のおばあちゃんが取りあげていた。

こっちへは、産婆と看護婦の資格持っているということになっていたのだから、人々は期待していた。

着いてしばらくは中標茶の駅テイの小屋に何ヶ月かいたが、35円で建てたという（かなり立派）村山さんの家を買ってもらうことになり、12月30日に移った。開拓小屋で、南と北に4枚ガラスが二つずつあるのみ。あまり窓が多いと寒いので。丸太の柱に三部板を張って、新聞紙を張ってあり、煤で真っ黒。その時、3歳、2歳、1歳の子供がいた。

産婆、保健婦の資格を持っているものはそれまでいなかったのだから、村の人たちは心待ちにしていた。

家に入ってランプを吊し、ストーブを焚いてようやく温まりはじめた頃に早くも迎えが来た。平野敦さんの父親が変なものを飲んだので来てくれ。当時、焼酎は配給。焼酎と間違えて希塩酸を飲んで苦しんでいる。牛乳を無理やり飲ませた。最初は飲んで吐いていたが、飲めなくなったので口を開いて飲ませた。これが最初の患者。駅テイの玄関のところで配給された焼酎の置き忘れだと思って飲んだ。

・お産は自分で産むものと思っている。みんな座産。梁から縄を吊してしがみつく。かかとで肛門を押さえられるから楽。たまに座産でない人は燕麦殻の中に寝かせて寝床にする。静岡ならどんな貧乏でも自分では産まない。

自分で麻縄をなべて、ヘソの緒を処理。「短く切ると寝小便する」といういい伝えがあり、人々は長く切りたがる。長く切ったヘソの緒はカラカラ干からびて邪魔。

・「熊の腸で腹を縛るとお産が軽い」というので、熊の腸を持っている人から借りて巻いていた。熊の腸のある家は知れている。最初「これ何」と聞いた。だけどみんなあそこの嫁は大きな子を産んだ、と喜んで話していたら、後産に出血で死んだりした。阿歴内でもずいぶん死んだ産婦がいた。産後に死んだ人も多い。

医者は標茶に一人だけ。コネコネ道を歩かなければならない。迎えに行くのも大変。馬も簡単にはない（少しいよいよどむ）。昔の話をするのがイヤ。（医療法違反で）悪いこととして、自分の手柄みたいというのはいやだから。医者に行けといっても金もない、着て行くものもない、子供を連れて行かなければならぬ。交通の便もひどい。いよいよとなって、病院で下げるとなっても大変。

・入院させるためには戸板で運ぶ。そのための人数が必要。4人で良さそうに思うが、16人もの人手を集めなければならない。入院のための布団を運ぶ人、鍋、味噌、醤油を運ぶ人、交代要員も必要。背の高さも揃わないと運びにくい。

・村立病院に佐藤先生、軍馬補充部には軍医がいた。先生が標茶に来る時は必ず挨拶しておいた。婦人科でなくても挨拶。製糖工場には耳鼻科のおじいさんの先生がいた。私がお願いする時は困る時ですからお願いします。顔だけ見れば大丈夫ですから。脈を取ると死亡証明を書いてもらえるので。

・ジフテリアの子供

鶴居の土建の社長になっている。標茶から婿に行った、その息子。（村上さんの子が婿に行った所）夫婦でおぶってきた。真っ白くなった子供を連れてきた。H-Cさんはうつるといけないので自分の子

供を外に出した。

母親に自分のモンペを履かせ、私のありあわせの小金を与えた。とにかく標茶まで出た。軍馬補充部に行った。「これは僕にはどうにもできない」といわれ、泊まらせてもらい、乾パンをもらって、翌日一番の列車で釧路に行った。釧路の隔離病院（こはん病院）に入院。不思議に助かった。昔はニンクがいいというのでニンクの下ろし汁をつけて行った。その子は助かって、今は建設会社の社長になっている。12人もいるから一人くらい死んでよいといていたが、助かった。「H-Cさんにあの時にモンペ出してもらって、お金もらって助かった」。

・死亡診断のための解剖

おばあさんが餓死した。そのすぐ後で、部落内に結核で亡くなった人がでた。死んだので軍馬補充部の軍医（獣医）に診断書を書いてくれというと、「解剖する」といつてきかない。

「結核患者は息を引き取るときに菌を出す」といわれていた。そこで、死にそうになると家族の者が感染を恐れてクレゾールを口の中に詰め込んだ。まだ、体温があるのでただれてしまう。それを不審に思って解剖ということになった。結核の兆候があつてぶらぶらしていたのに、しおじの上の高台で、雪があつたのでむしろを敷いて解剖。若い獣医で融通が利かなかつた。

・注射

H-Cさんは注射をしたこともある。料金は請求しない。5円くらい包んでくれればいい方。当時の農民は現金を持っていない。給料取りは先生と郵便局のみ。

注射針は何度も使って、研ぐのが仕事だった。今だったら、ほんとに一本一本使い捨て。今の医療に対してはいいたいこともあるがいえぬ。介護の問題も矛盾がある。

中御祖別で集団赤痢が出た。部落で赤痢が出るのが恐かつた。川の水なので、上で一つおかしな事になると流行る。何人か死んだ。そういう時には学校に隔離する。

とにかく、トイレにしてもちゃんとしたトイレなどあるわけない。外で穴を掘ってあればいい方。穴掘っていない所もある。そこらにしてある。気をつけなければ踏んでしまう。冬は穴掘って板渡して、エン麦殻で囲う。そば殻やエン麦殻で囲うことを見て覚えた。棒を建てて縄で縛る。手伝うから囲うだけ囲おうよ、とって保健婦の仕事。

お嫁さんの世話、内地から来た人などは世話をした。町長のところに行く。

見合いさせる時は、酒一升だけ心配しておいて。昼と酒の肴は重箱を心配したもの。ご祝儀といつても、隣近所の人を呼んでやった。道に出す月報に「花嫁斡旋」と大いばりで書いて出した。自分でもおかしくなる話。酒が好きで独り者がいた。その人に嫁さんを世話した時の話だが。

朝鮮人の炭焼きと結婚していたが、旦那が亡くなった（なぜ朝鮮人がいたのだろう？佐藤付記）ので子供を連れて自分の実家に帰ってきた女性がいた、母親も既になくなって、子供とおじいさんで炭焼きしている家だった。

（先ほどの話の続き）その実家は、布団もろくにない家。エン麦藁や麦藁を敷き詰めて布団代わり。その家の子供は学校くるのに「エン麦殻を背負ってくる」といわれた。その家に酒好きの男を見合いに連れて行った。酒を持って行かせ、H-Cさんが重箱を用意して。向こうの家も酒好きで、焼酎や酒を飲んで夜になった。3時になると酔っぱらってふらふらになる。これでは部落には返せない。

H-Cさんが二人を呼んだら「いい」というので、「としちゃんの布団に風邪を引かないように寝かして頂戴」、「今日飲んだ酒を決まり酒にして祝儀にきなさい」といつた。

炭焼きなので、親方のところでお金などの面倒を見てもらう。「明日帰りに標茶でお土産を買って

きて挨拶しなさい」といった。

本人は翌日にここにきて嫁さんを連れて帰ってきた。

部落では「ナベは嫁さん見合いに行くといっていたが、一晩経ったら嫁さんを連れてきた」と評判になった。その後子供できたが、名前をつけてくれ。自分は学がなくて難しいことは分からない。「一と書いてはじめならいいでしょ」といって名前をつけた。朝鮮の人には女の子一人あった。その後男の子が一人できた。一生懸命炭焼きしていたが、男の人はくも膜下出血で死んだ。山の中に女一人置くわけに行かないので役場が心配した。役場の掃除婦にした。数年前に定年退職した。最近ではいい着物をよく作っているという。今まで金がなくて我慢していたが、今は子供が独立したので、いい着物が買えるようになった。

何もかも時代が変わった。今は見合いなどしない。

昔は病気になれば、交通手段もないし、隣近所が頼りだった。今は乗用車を持っているから、病気になっても隣に知らせずにどこでも行ける。健康保険ができてよくなった。最初は部落のボスは反対だった。ありがたい。私はみんなも本当に困っているところへ、自分も困って入ってきた。とにかく、自分の生活に責任を持たなければならない。

ささやかな給料取りだったら、今のように部落の人と接することができなかつただろう。開拓保健婦で、自分自身も開拓という人は多くない。旦那と開拓という人は少ない。

自分が食べるだけとはとにかく確保。イモなど自給。主人は商売気がない。晴耕雨読でよく本を読んでいた。自分が土地の中に出ていくのはイヤ。

H-Cさんの活動を支えるには一番良い伴侶だったといえるだろう（佐藤付記）。

子供がばたばたできたので。子供が一人くらいだったら離婚したかも知れない。人間的に尊敬できる主人だった。

給料は、最初は3ヵ月に1回くらい役場から。月に6000円くらい役場からきた。役場の職員になって役場の給料をもらったこともあった。

身分保障などということは知らなかった。

途中で開拓保健婦の会ができた。若い保健婦が「これだけやって身分保障がないということはない。行政の方との交渉は組織でなければならない」と演説（大西若稲さん等）。立派なことというなあと思った。

拓殖産婆の時には17円、嬉しかった。そのうち35円もらったことも覚えている。35円あればなんとか生きて行けた。自分のところで食べるくらいは自給。今夜魚を天ぷらにしてあげるから魚とってと、子供達が前の川でヤマメなどを釣ってくる。ウサギを罠で捕った。タンパク源。めったにないが、牛や馬が事故で死ぬと、部落中の人みんなで庖丁を持って皮を剥いで食べたりした。食事を買って食べることはない。

今は、後継者がいなくても、5、6戸で共同経営を始めるようになった。

この辺りもみな開拓者が入っていた所。いなくなればいつの間にか自然に木が生えてもどる。

とにかく最初の家は歩いて、たまに馬や馬ソリで。馬ソリで迎えにくると良かったと思った。裸馬に乗るとお尻が痛い。馬、スキー、終戦になって6000円で自転車が買えて嬉しかった。山坂なので下りはいいが大変。自転車に乗れるのは夏の間だけ。秋になると霜が降りる。泥んこになる。輪が回らない。棒を持って歩いた。

そうこうしているうちにスクーターが当たった。低いので泥の小道ではだめ。終戦になって道路が

良くなる。オートバイ250ccが当たって、嬉しかった。道 市庁 町に下がって、「H-Cに」といわれてくるので「当たった」という。直接くるのではない、順番にくる。スクーターが来たのは昭和40年頃。その時の免許は標茶の町の警察で取った。

農林省から保健所に移管の時には車が当たった。まさか自分が車に乗るとは思わなかったので、夢にも思わなかった。びっくりした。

農林省から、嫁にやる娘をよろしくということ。朝自転車で駅まで行って、釧路まで一時間くらい列車に乗る。釧路に免許を取りに行った。83歳まで運転した。人様に迷惑かけてはとやめた。やめたら不便。今では農家でも一人1台ずつ持っている。

・退職してすぐに町立病院（4年間）

先生が中標津に開業することになり、町立病院の産科がつぶれた。町立病院でお産をする人少もなくなっていた。

・その後、釧路の足立産婦人科で勤めた。H-Cさんが移ったとたんに標茶や弟子屈の人が足立病院に産みにきて、日赤病院と出産数を競うようになった。このころが出産数のピーク。

10年勤めて73歳で退職。その後、標茶の町立病院でお産があると手伝いに行ったりした。今は、週に1回老人センターに行く。陶芸、ゲートボールなどもしている。

標茶の町では知らない人はいない。弟子屈でも知っている人が多い。

息子は東京で高校教師（鷺宮高校）。荒れていたが熱血教師で立て直し「本多土建」というマークの入ったイスなどを作った。「日本の先生10人」に選ばれた。定年前に退職して、現在北京大学で教えている。

H-Cさんは、「知らないうちに87。不思議だね」。70代の時にはそうでもないが、会う人が、「H-Cさん90になった」と聞かれるようになった。「私は90に見えるようになったのかしら」と思う。

・標茶町役場

初代町長高島先生。2代目カドヤ町長。

3代目の選挙の時にH-Lさんが選ばれると思われていたが、保革の政治状況が変わって、今一步で落選（H-Cさんがしきりに悔やんでいる）。

磯分内。この辺りは馬の牧場だった。終戦前に開拓者はいない。軍馬補充部だったので。その頃は馬がたくさん。補充部で買い上げというと、みんなが馬をたくさん出した。売買ではなく、みんな軍馬の方に出した。

この辺りで牧場をしている人は、戦後放出されてから、入植者が入った。この辺りは比較的条件がよいが、私たちの茶安別は山坂で、炭焼きだけが入っていた所で一番条件が良くない。

（育成牧場の敷地に入る）。上に登ると地球が丸く見える。天気がいいと根室、国後が見える。今はみんな舗装になったが、とにかくコネコネ道だった。

（綿羊がいる）これを肉にする。綿羊飼っている牧夫さんは役場の職人。

テントを張っているキャンプ場がある（多和平着）。

H-Cさんは2、3日前にも来た。中に入って休憩所で牛乳を飲む。

・町立育成牧場

離農してしまった土地を町が買い入れて、共同牧場としている。綿羊がいる。他には飼っていることはない。今年は天気が悪くて牧草が伸びない。不足している。

・（H-Lさん）これから御卒別通って行く。離農のあとを牧野にしている。

以前平林大二郎という人の開拓で、「平林教習所」があった後に「朝鮮牧場」となり、不在地主であったのでこの土地が戦後開拓になる＝中御卒別の牧野になった。

その辺りは朝鮮の偉い人が持っていた朝鮮牧場があったところ。平林大二郎の教習所もあった。不在地主化していたので開拓。戦後開拓は農地、不在地主の土地を対象にした。

(中御卒別通過)左折 - これが中御卒別。問題のある部落でごたごたもめていた。仲の悪いゴモクソ部落といわれていた。半分以上が離農した。今は小学校で炭焼きの釜など作っている。いまでも仲のいい部落と悪い部落もある。婦人会も。どこから来たかは関係ない。長く住んでいれば人柄のいい人もいるし、悪い人もいる。

・厚生(11:24)

厚生の高橋(明)牧場＝成功している 仙台からおじいさんが入植。嫁(おばあちゃん)をH-Cさんが世話した。昭和20年代は30戸くらいあったが、今は12, 3戸程度。

・炭子(炭焼き集団)

炭焼きの一団が炭焼きをしながら移動していた。炭焼きの入ったあとの原野だと

【8月24日・昼～午後】

場 所：鶴居町役場・鶴居町グリーンパーク

お話を伺った方：H-Oさん(鶴居町担当), H-Nさん(釧路市庁勤務), H-Cさん(標茶町担当)
H-Lさん, H-Pさん(鶴居の開拓婦人), H-Qさん(鶴居町助役) 婦人会の奥さん二人(二人とも食改さん) トウモロコシ, ジャガイモ, ヤマメの唐揚げなど

・拓殖産婆の給料

17円だった。後に35円に。

H-Oさんは札幌で第1回の生改講習を受けたことがある。

鶴居(ここも開拓)にもキッチンカーがきたことがある。婦人会の集まりに出かけた。「モホロロ」で集団栄養失調があり、冷凍食の取り組みなど食生活改善推進員の取り組みが早かった。「軌道バス」は国の補助で作ったが、村営。

・牛乳の出荷

牛乳缶を集荷場(トラックに乗せるので荷台の高さに台が付いていてそこに載せる)に運んで行く。集荷場は共同で数件に一つ。牛乳缶には識別番号がついている。それ以前は二日に1回馬ソリで運んだ。雪印の工場に。学校に行く前に牛乳缶を集荷台に乗せてからくる子もいた。

鶴居町はかつて赤字再建団体。今は、補助金獲得日本一で様々な施設を建設。節約精神がある。職員が少ない。介護保険の自己負担率は日本一高い。しかし、農繁期に老人が入院できる(必要な時に面倒を見てもらえる)ので、文句をいう人はいない。

街路整備は婦人会(自治会婦人部)。花を植え替える。こうした活動は、住民がやり始めると行政が金をつけてくれる。「金をやるからやりなさい」ではない。

数人の個人がゴミ箱整備を始めた 村の事業になった 道に相談して財源を見つけてもらう 宝くじの財源を見つけた

・婦人会活動

綿羊の羊毛サークルがある。70歳以上のパワフルな人たち。綿羊を個人で飼っている人はもういない。多和平の標茶町子育て農場のみ。昔は雑草を食べてくれるので重宝した。

・鶴居の歴史ビデオ鑑賞

久著呂原野

雪裡原野

幌呂原野

【H-Cさん】

日 時：8月24日午後4時～

場 所：グリーンパーク休憩室にて

昭和19年から標茶では釧路の戦災被災者の入植が始まっていた。

・ライフヒストリー（2）

静岡生まれ。母親が胃痙攣持ちで、看護婦さんが往診にきて注射を打ってくれるとぴたりと止めてくれる。そのことと、白衣にも憧れた。

女学校卒（女学校に進んだのは部落で一人）。早く働きたかったので、看護学校に自分で転校した。

看護学校を出たら、医院に就職。看護婦、女中、子守兼用。同時に助産学校に通った。「使命感」、
「自分は自分で資格を持ちたい」。

小学校の先生の仲立ちで主人と知り合う。「主人のお陰」。

昭和16年、拓殖産婆になる。医者住宅、産婆住宅は用意されたがなり手がいなかった。3km離れたところに土地10町歩の売りがでた。掘っ建て小屋付き（当時は開拓して「成功検査」通れば売っても良かった。こうした利益目当ての開拓者も少なくなかった）。売値が1300円。その前に買いたい人がいたが、700円しか出せないといい、売り手は900円でなければ売らないといていた。その後、H-Cが1300円で買ったので、地元では「今度の人はたいした金持ちだ」と噂になっていたという。東京にいる兄弟が資金を出してくれた。

その時、3歳と1歳の二人の子がいた。子供は7人産んで、6人が育った。

そこは拓殖産婆の指定地だが、いなかったので申請した（自主的に申請したのだろう。収入の道を確保するため？佐藤付記）。

北海道に来る時に勤めていた静岡の開業医の先生が「赤本」をくれた。『家庭における実際看護の手引き』（実際にH-Cさんが使ったのはボロボロになったので後に買い換えた。1609版）。「この本のお陰で道義的責任を果たすことができた」。

ペニシリンができる前の衛生知識。お灸のツボも書いてある。薬草についても書いてある。よく効いた。今の医療制度ではできないことも多い。薬草なども活用。薬草は採れる時にとっておいて小屋の中に置いておく。必要な薬は、姉が薬局をしていたので回してもらったり、釧路の開業医が死んだ時に奥さんが「H-Cさん使って」と薬棚ごとくれたりした。

釧路の耳鼻科の先生が戦災で避難してきた。役場が「使え」というので薬をそのまま使った（もちろん、正確には違法だろうが。佐藤付記）。

標茶にいる医師と連絡できないことも多い なくてはならないこと。「中国の裸足の医者と同じ」。

開拓保健婦になってからは 消毒薬、ピオフェルミンなどは配給された。回虫検査のための200倍の顕微鏡もきた。

家族計画では生殖模型（「住民参加による保健活動」にでてくる）もきた。道から Condom、ペッサリーの無償配布もあった。

家族計画では男性にも話をする。荻野式などは女性では理解しにくいので。男の仕事が終わった夜に泊まりがけで出かけて行く。説明だけではだめ。しかし、男は家族計画に反対。焼酎片手に迎え撃つ態勢。「人生はこれのために働いているのだ」、「これをするなどいわれたら困る」と息巻いている。楽しみは他にないし、寒いし。子供が10人以上生まれれば子宝表彰された価値観からの転換。

自分で墮胎するためにいろいろなことをしていた。裸馬に乗る、ヨモギの根を膣に入れる、灰汁を飲む、釧路の町まで出てお金を出せばおろしてくれる（開拓民にはお金がない）。

男性が理解すると、朝早く旦那がH-Cさんの家の前にきて「あれ下さい」といつてくる。

- ・働くこと

月夜の晩には月明かりで木を切っている。炭を焼いて在に売る。棒で穴を掘って種を播く（杉山さん）。生きて行くためのお金がない。

- ・出稼ぎ

「金の卵」といわれる時代になって出稼ぎに出た。昭和30年代。都会、炭坑（夕張など道内が多い）等へ出て行く。残った人は羨ましがった。

- ・注射針

使い捨てなどできないので、針を研ぐのが暇な時の仕事。どうしても血管が細いなどで注射を打つにくい人のために、新品を一つだけは隠し持っておく。

- ・嫁探し

相談を受けることはしょっちゅう。嫁探しは保健婦の仕事だとみんなが思っている。開拓者は親戚から切り離されているのでつてがない。村長に相談に行くと「H-Cさんに聞け」といわれてくる。仲人は組合長などに頼んで顔を立てるが、お膳立てはH-Cさんがずいぶんした。

見合いには、男側に「酒一升用意しておいて」といい、重箱はH-Cさんが用意して持っていく。

- ・もらい子

子供をもらって欲しいという人は多かった。今でも、「誰それは誰それの子」というメモを持っている。私が死んだらすべて分からなくなってしまう。今でも、付き合いだけはしている。親戚のような付き合いをしていて「山のおばあちゃん」と呼んでくれる人もいる。さやかちゃんが「山のおばあちゃんの甲辞を読む」といつてくれている。

「子供のいない人はH-Cさんに相談」、「子供欲しい人はH-Cさんに相談」とみんなが知っている。

受け渡しには様々なパターンがある。21日お乳を飲ませてから渡すこともあれば、産後1時間で渡すこともある。

「小川宏ショー」で放映されたこともある。「山の女神」というタイトルで取材することになっていた。部落の婦人会の時にセッティングして、放送局がきた。その時にお産の迎えがきた。放送局はこれについてきた。炭焼きのお産だったが、すぐには生まれそうになかったので「明日の朝でないか」といつたら、放送局の人は標茶に戻り、翌朝くることにした。家の回りを撮影していたら、姑が「どうしてそんな貧乏ばかりとるのか、うちにも内地に親戚がある」と怒った。実際には夜に生まれてしまったが、テレビでは朝生まれたことにして産湯を使うシーンなど撮った。実はこの子は、もらわれて行くことになっていた。テレビは渡すところも撮った。標茶の町で渡すところも撮って全国放送した。

放送局の人が「今日の予定は」というので、午後からは「嫁の紹介」というと、これも撮影するこ

とになった。自衛隊員の嫁探し。大田村厚岸の娘の家まで放送局のジープに乗って行った。帰りに自衛隊の人の所にも寄った。結婚したが、未亡人になってしまい、また再婚を世話した。

・貧乏な人

お金のない人は民生委員の顔も立てなければならない。医療保護を申請するためには、民生委員の紹介が必要。民生委員は支庁の管轄。民生委員の替わりに行ってあげることもある。

町立病院の院長（今は札幌にいる）に、病気で死にそうな人がいると「ついでの際に往診して」と依頼する。これは死んだ時の死亡診断書を書いてもらうため。病院の事務長は「あの家は、あの部落は何年来赤字だ」と渋い顔をする。

・料金

お金の請求はしない。ビタミン剤、カンフル剤など1本7円などするが。もし違法の医療行為で裁判などになったとしても、「金儲けではない」といえるし。そのことを自分は「誇りに思う」。自分自身も貧乏なので、お金を請求できなかった。相手もこちらを「貧乏」だと思うから、「月給取り」という目では見ない。

釧路の教会に出入りしていたので星薬局と取引があり、現金でなくても売ってくれた。ほとんどの人から代価はもらっていない。「金はなくて見てもらってありがたかった」といわれる。そのかわり「ソバ、マメ、麦などを持ってきてくれた」。うちは本格的な農業をしていないので、そうした食糧でも意味があった。現金の生活費はあまりかからないので、やっていけた。子供達は外部からもらう古着を着ていた。

給料は3ヵ月に1回6000円。身分保障がない。施設補助金名目できた。

開拓保健婦になって、初めての集まりが札幌であった。日大を出た若い保健婦が身分保障のことをいっていた。個人ではだめだから集団で組織交渉しよう、といっているのを聞き、感心した。

大西若稲さんが会長になった。農林省や道に掛け合った。一度には身分保障できないが、5人、10人ずつ徐々に保証。旦那のいない人から先に身分保障。H-Cさんは一番古いが、旦那持ちなので最後に保証された。

退職金も札幌でいろいろ交渉してくれた。それ聞いて札幌にお礼の電話をするのに大変な思いをした（必ずしも、こうした団体交渉・権利要求を全面的に支持しているわけではないようだ。佐藤付記。）

赤字だが、給料としてもらう6000円で何とか賄って行けた。

借金はしたくないと思っていた。6人の子供はどの子も公立学校に行った。上の子の働きで下の子の経費を賄った。女3人は看護学校。1番下の三男は高校を出て農業に就いた。「貧乏なお陰で子供はよい子に育った」。

給料は役場から郵便で届いたり、ついでがある時はチャンベツまで役場の人が持ってきたりしてくれる。

・仕事で出かける時

標茶に出る時には朝暗いうちに歩いて出る（歩いて3時間くらい）。

仕事に行くと、行った先に別のところから迎えがきたりするので、1週間くらい音信不通になり、大騒ぎになったことがある。捜索が出た。

冬の雪道は、歩いていると脛が凍ってしまう。しばらく目をつぶると溶けて、また歩き出す。歩いているとクマの足跡があたりした。恐いので歌を歌いながら森を歩いていたら、「H-Cさん何している」といわれた。クマ撃ちのためにそこで待機している猟師だった。

東京から豆腐屋さんのラッパを送ってもらい、歩いていてカーブなどではこれを吹いた。クマも驚くので、予め知らせてあげる。スズをつけて歩いている人もいた。

・男二人で迎えにくる

お産の迎えにくる時はたいい男が二人でくる。「大変なのに、一人でいいのに」というと、「チャンベツでは女を迎えに行くのに男が一人で行くわけにはいかない」という倫理観。

広島から兵隊がイヤで逃げてきたおじさんが隣にいた。90まで生きて「内地に行きたい」といっていたが、とうとう行かずに死んだ。子供は10数人いた。

その人は何でもできたので、鋸の歯の立て方なども習った。牛馬を殺すのも得意で、臓物も食べた。臓物を取り分けると、H-Cさんにくれた。義母は東京でフランス人にフランス料理を習ったような人なので牛タンの料理などした。

牛、豚の内臓もらってモツの食べ方を婦人会で教えた。豚の足は5円で売っていたが、肉屋はただでくれた。

隣のおじさんはいつも狐の皮を腰に巻いていた(冷えないように)。主人のモーニングをあげたら、「腰が冷えなくていい」といつも着ていた。釧路にもその格好で出かけていた。

小学校の先生の追悼集で、H-C夫婦について語られており、図らずも「自分史」ができた。「私の歩んだ歴史」北海道新聞に連載された物をまとめた物(安穴一夫著)。

ご主人が食事を作り、子供の世話をしてくれた。子供も小学校3年から5年くらいになると作るようになる。ご主人の母、姉も疎開してきた時は面倒を見てくれた。ご主人は「人のいい人」。役場などの仕事を斡旋されたこともあるが「俺はサラリーマンになるのなら北海道にはこなかった」といつて断った。従兄弟は名士が多い。ノーベル賞、文化勲章など。しかし、ご主人は威張らない。

この仕事は「みんなにありがたがられる」、「気持ちよく一生懸命できる」、「自分も生活に困るから」、「役に立つ」。

・生改は土田さん(土田のおばちゃん)

千島からの引き揚げ者。車に乗れないので、一緒には歩けなかった。

白鳥号がくる時に免許を受けに行った。「勤務内で行け」といわれたので釧路に列車で通った。「愛国自動車学校」。実技の先生がとても意地悪で、脛を蹴りながら指示する。すぐに泣いてしまう。10日目に「もうやめる」といって文句をいった。教官は標茶の人だった。

結局免許は取ったが、校長にも文句をいった。学科の先生にはビール下げてお礼に行った。55歳で免許を取った。83歳まで運転した。人身事故はない。バックが苦手なので、釧路の駐車場ではいつもおじさんにタバコをあげてバックしてもらっていた。

免許を取ると誰でも乗せてあげようとした。息子に「何かあったらどうする」と怒られた。

・ドブロク

みんな作っていた。秋田の人はコメでドブロクづくり。酒屋は標茶の町に一軒のみ。

・現在

焼き物をやっている。文化祭で毎年出展する。H-Cさんの作品が無いと寂しいので。焼くのは標茶の公民館。家で素焼きすることもある。スキー靴下も編んでいる(主人が猪ヶ谷千春の父の猪ヶ谷クニオの旅館で療養していた)。ゲートボールもしている。時々、老人ホームに訪問に行く。月に1回、釧路にインシュリンを打ち行く。幸い、今のところ合併症はない。北大の白菊会に献体の登録をしている。

・教会

主人の母，兄弟は熱心なクリスチャン。自分は余裕がないので入信していない。

標茶にも教会ができたが「行く余裕ができてから」と断っていた。開拓の人は「神様」なんてお祈りできない。本当の信者は3人しかいない。

釧路の薬局の人と教会で知り合った。

主人が急死。部落が集まって葬式の準備を始めた。洗礼も受けていないので，またお寺とのつきあいもあるので，仏式で葬式。

保健婦になったのは北海道で7番目。看護婦と助産婦の資格があると受験資格ができた。釧路の警察で試験を受けた（昭和17年，当時，保健は警察の管轄）。釧路での受験は一人だけ。その時の試験以降は，3～6カ月の実習が必要になった。

報徳部落は仲がいい。標茶はそうでもない(?)。

電気 - 昭和30年町村合併の時。

水道 - 自家水道。ポンプ。はねつるべ。今は阿寒の水を引いている。

がながん = 一斗缶。下から汲んで上がると半分は減っている。

・注射

予防接種でもなんでも，何度拭いても腕がきれいにならない。針を替えずに何人も打った。血管が出ずに打ちにくい人用に新品を一本だけ持っている。それ以外の人は針を研いで再利用。

・赤痢

厚岸で集団赤痢発生の際は，応援に行った。いつものように葬家で豆腐を作ったが，伝染を恐れて，H-Cさんが「この家で食べるな」といった。その結果「H-Cさんにいわれて，から葬式をだした」といわれた。

・火葬

路面で木を積んで火葬。死ぬと誰かが木を切って棺桶を作っていた。

・出産

山の根っこの影で産んだ者もいる。お産は自分でするもの。赤ん坊の産湯は八斗樽にお湯を入れて産湯を使わせることが多かった。

・税務署

ドブロクづくりの摘発。秋田の人はコメでドブロク。酒屋は標茶に一軒しかない。時々，税務署の人が摘発にくる。町で見知らぬ人を見かけると，「税務署」に見えるので，子供達が家に知らせに走る。このため，学校から子供がいなくなってしまう。

H-Cさんの家のドブロクは，ジャガイモから澱粉を取ってドブロクを作る。H-Cさんは温度計で測って作るの美味しい。2回くらい税務署に見つかった。「遊びに行きます」という電報もらって用意していた。作って入り口においてあったのを見つかった。

ヤマブドウを発酵したものも持って行くと罰金を取られる。お茶代わりにドブロクを出す。

おやつにかりんとうを作った。

【H-Cさん】

書かれた情報から

(三栖達夫編)『土田トモエさんの開拓地を歩いて三十年』に書いた「土田トモエさんを偲びつつ

入地六十年の軌跡をたどる」より，pp.36-50)

「後方食糧基地としての開拓計画が満州，北海道，樺太，千島と大々的に内地農村を宣伝して巡回。偶然その映画と説明を聞く機会があり，生まれて初めて北海道の大自然」に憧れる。

もともとの目的地であった満州の「赤嶺（セキレイ）は軍の情勢の険悪さにより中止することになり，北海道でも綿羊飼育は軍の都合で計画通りに行かず，第2期入植農者の跡地なる現在地に定住したのは昭和15年」。「厚岸郡大田村中茶安別。大田村は屯田村として有名なところ。役場のある本村まで27，8km」。「助産婦開業など考えたこともなく，空恐ろしささえ感じていたのに，僻地の現実を見てはどうすることもできず，指定地として住宅までありながら空白となっていた拓殖産婆を拝命した」（p.38）。

昭和17年4月，「医師不足，救急補給体制のためか，保健婦検定試験の施行により，当時看護婦・産婆の有資格者は受験可能となり，釧路警察署の事務室でたった一人筆記試験を受けました。向こう側の机では窃盗犯の取調中でそれが耳に入り困った」。「札幌での実地試験の合格者は15名だった」。「医療行為も医師法違反も承知した心苦しさはあっても，とにかく応急処置をし」（p.39）。

戦後「第2期拓殖計画は急遽戦後の緊急開拓事業と変わり・・・この行政の中の一規則として開拓保健婦が設置されることになり，現地駐在のまま嘱託されたのが昭和23年11月でした」（pp.41-42）。

昭和23年「辞令を受け，北海道農地開拓部（釧路市庁）保健係の指導により，隔月の研修会に釧路まで出て行くのが楽しみ（p.43）」。「営農指導員の営農現地指導にはオートバイの後ろに乗せられて同行するのも嬉しかった」。「こうしたつらい，苦しい生活に追い打ちをかけるように続いた冷凶作の中，営農と生活環境の改善解決のために，藁をも掴むような気持ちで発足した婦人会の努力は素晴らしいものでした」（p.43）。

「昭和30年，待望の町村合併，はれて標茶町中茶安別となり，町長に高島幸次先生を迎え，行政の方も新しい農業施策を次々と打ち出し，特に酪農地帯の環境整備は目覚しく，ほとんどの部落に大型車が入り，思いも寄らぬ赤電話が引かれ，優先的に私宅にもつけてもらった（昭和28年のこと）」。

「合併により・・・自分たちで柱を立て農村電気が引かれた夜，60Wの眩い輝きに子供達が興奮して部屋を駆け回ったものでした」（p.44）。

大田村まで木を切りに行き，電柱を自分たちで切り出す。

「標茶町立病院には，他町村に先駆けて標茶方式ともいわれたマイクロバスが患者輸送にあたるようになったのが昭和38年6月。・・・45年には長い間希望していた母子保健センターが開設され，自宅分娩がほとんど解消され，肩の荷が下りたような安堵感を得たことでした」（p.45）。

【北海道15 - 8】

日時：2003年8月24日（日）午前9時～

場所：車中（標茶駅～）

お話を伺った方：H-C氏

調査者：山下，佐藤，太田

議事録担当者：山下優子

概要：（質問：Q，回答：A）

ご主人は，10町の畑を買って家も建てたが，お嫁さんがいなかったの探しに来た。この辺（標茶）は終戦後から開拓した，戦時中は軍馬補充部だった。その頃は馬がたくさんいて，軍で買い上げなんという時にはみんなでたくさん出した。

Q - 馬は高く売れたか？安く売れたか？

A - とにかく，全部，軍馬の方へ。

Q - この辺で牧場をやっておられる方も，入植の方ですか？

A - そうです。全部，その軍馬補充部で戦争が終わってから放出したものだから，開拓者をたくさん入れた。

Q - じゃあ，そういう意味では条件は良かったのでは？

A - そうですね。だけど，私の地区「ちゃんべつ（茶安別）」というところは一番条件が悪いのですよ。私がね，北見で農家を始めていたけれど，うちと，もう一人，空知（？）農学校を出た人（友達）が，H-Cさんがそうやってやるなら，俺も一緒に働きたいということで，3人が共同でやっていたけれど，その人は召集されてしまった。そして今度，とにかく近所の農家の人なんかは，私が朝，おしっこに起きるともう畑を起こしているのですよね，とてもそんな，こちらは主人にしても何にもね。主人は，中学の時は静高の野球の選手で，新しい甲子園の時の第1回の優勝校。とにかく野球ばかりやっていて，親戚や従兄弟もみんな，当時は高校を出て，東大だのなんだのっていつていた。自分も中学出て，1年も浪人すれば大丈夫だなんて思っていたところが，結核になった。そして赤城山でスキーの猪ヶ谷千春のお父さんが「猪ヶ谷旅館」というのをやっていたので（インテリの人たちが良く来ていた？），そこへ行って療養しながら山の案内をしていた。だけどそうもしてられないから，北海道で農家をすることになった。だけど農家はなかなかで，「東京百姓」なんて近所の人に笑われたりした。一生懸命にやってもなかなかそんなにうまく行かない。そうこうしているうちに，標茶では満州開拓で牛，馬を飼う土地の斡旋をしているから，そこへ行けばいきなりでなくても，掘っ立て小屋ぐらいはついているって，週末は暢気に暮らす所へ行きたいと思って今の所へ来た。それが昭和15年。北見へ行ったのが昭和11年。16年に宣戦布告，大東亜戦争，そして男の人はどんどんとられ，昭和19年頃は釧路も急に爆撃を受けたりして，釧路は早い戦災で，焼け出された人たちが第1回の疎開先として標茶に入った。入植の前に。その人たちが入って，翌年，終戦になって，それと同時に500，600戸と入った。そして，ここの軍馬補充部が全部解放されて，そこへもどんどん入ってきた。みんなただ帳面の上でこうだから，少し土地が平らな所へ入れば，自分でわからないし。現地へ入った時に，「よくこんな所に入ったものだな」って「入る者も入る者だけど，入れた者も入れた者だな」なんて札幌からいらした道の方がそういつていた。本当に家の前から，それこそ沢の水汲み場が覗くような傾斜の所で，そこをみんなガンガン（四角い一斗缶）で水を汲むけど水が無いのですよ。そして今度は，川の水が流れていれ

ば、川の水からみんなでガンガンを担いだものです（H-Cさんもされた）。

そうこうしているうちに、今度は井戸を掘るようになって各自で掘った。なかなか掘っても出ない時もある。掘るのは業者に頼んで、1000mくらい。そして、水が出ないからって離農した部落もある。弟子屈ですけれど、弟子屈のミタ？という所は水の出が悪くてね。

（育成牧場を通過）ここは開拓者が皆、離農した所を町で買い上げて育成牧場に。町内の人が牛を放して1年くらいって。職員も町の職員がいて。綿羊や馬がいて、「地球が丸く見える」なんていって、観光地にもなっている。国後も見える。だけど今、こんな舗装になりましたけど、とにかくコネコネ道。あ！綿羊がいます！これを今度は肉にして。牧場は役場が経営している。

布団を取ったらハエが出てきて、若い時にお産で膀胱破裂して出流した。そしたら、若い頃はボコを干していたけれど、歳をとってからはいちいち始末ができなくなって、お臍の辺りからただれているの。聞いたら苦しんで、苦しんで、幾日目に医者に来て、医者を出してくれようとしたら「ポーン」と音がして、「シューッ」と一緒に赤ん坊が出ちゃって、それは膀胱破裂を起こして赤ん坊が飛び出たってことなのですよ。それも、臭いのひどいこと。あの、お臍の辺りからただれているの。若い時には自分で始末が出来ただけだけどね。それが山の中でね、死にそうだからっていって、迎えに（？）行って、初めて行った人ですけれどね、いやあかわいそうで、とにかく医者のいない所でね、とにかく病気や災難だけは大変だけど、誰かがやらなきゃいけないっていうのでね。今だったら、注射一本でもね、注射一本でもしたら大変なことですけどね。そしてね、今度注射だって、今、私、月に1回定期検診を受けに行っているんですけど、とにかく1回1回、針を新しいものに変えているのに、痛いだなんていっている人にね、ちょっと看護婦さん痛いなんていう人いるのねっていったら、「いますよ、痛いでしょ、だって針刺すんだから」って。だけど、私は痛いって思ったことないって。私たちの時代は暇があれば注射針を研いだものなのよって。注射針を研いで、今度、血管の出ない人なんかには、なんぼ研いだって痛いのは痛いからね、私はずるいけれども、いい針を1本か2本は大事にポケットに入れるなりなんなりしてね。そんなことしてH-Cさんずるいっていわれるかもしれないけど、そうしていたの。今は1本1本ね。だから、私はありがたくて、医療関係で申請などをする時には申し訳なくて、今の医療に対してできないの。

本当に今、昔のことを考えたりしたら、ありがたくて。

Q - 昔は妊娠中毒になられる産婦さんもいらっしゃいましたか？

A - そうですね、昔はとにかく産めよ、増やせよで。とにかく産め、産め、産めで。私たちは家族計画って模型を持ってね。やっぱり女性、奥さんたちはなかなか理解できないものだから、旦那と二人に説明しなければならぬのです。そうすると今度、昼間は男の人でも外で働きます。とにかくそういう時には、もう泊まりで行くのですよ。泊まりで行く、そうするとね、今度旦那によっては「おら、何のために働くかね、何のために働くか分かるべや？この楽しみまでだめだって止められるんなら、おら、働く甲斐ない」って、そしてね、結局、焼酎片手に一言文句いわなきゃ、なんて構えている旦那もいて、「いや、そうじゃないの。産みたい時に産んで、ちゃんと二人で相談して、一番いいと思う時に、無理のない時に産んでもらうのだからね、私、産むな、なんていわないよ。産むな、するな、なんていっていないのだから」なんていって。今ね、H-Cさんが無理なことを説明したから、今やこんなに子どもが少ないのだ、なんてね。ペッサリーだとか、 Condomだとかね、道の方から無料だったのですよ。本当に必要な人にはそうして指導して。使わない人にあげたって、子どもが風船の代わりに使ったなんてことになっても仕方ないから。

Q - じゃあ、H-Cさんが判断して使う人にはただであげるってこと？

A - そうそう。

Q - でも、ペッサリーが欲しいとか、コンドームが欲しいなんて人いたのですか？

A - もう、ずいぶん。そのお陰で腹切らなくてすんだとかね、だから、やっぱり指導っていうのも凄いものだなんて思いますよ。あれだけ子どもが生まれて困っていたのに、今これだけなくて困っているのだから。本当に。

Q - ペッサリーの入れ方とかは教えたの？

A - 結局ね、ペッサリーの入れ方のために模型を持って歩いて説明して、そしてこっちが入れて、あ、これが入ったと思えば、触らせて入ったという感じをね。そしてまた本人に入れさせてみて、こっちが見るっていうようにして。そこまでしなかったらあのペッサリーなんかは、ただ理屈だけでこうしてあーしてなんていったってね。

Q - それは旦那も一緒にやるの？

A - そうです。旦那もそばに一緒にいないとね。そして、旦那はやっぱりオギノ式なんかで排卵がいつで生存圏がいつでなんて、そういう勘定はする。やっぱり旦那の方がね。だから、旦那の方が「おい、お前、危険区域入るぞ」なんていってね。そんな風にね。

Q - コンドームは使ったの？あまり使わなかった？

A - いや、コンドームも使って。

Q - じゃあ、ただでいくらでもくれたわけ？

A - そうです。

Q - でも、既存の農家は訪ねてないのですよね？

A - 私は既存農家のところから進みだしましたからね。既存農家もね、あんた既存農家だからだめっていわないでね(既存農家も対象とした)。みんな生活で困っているのは一緒ですからね。今ではね、開拓者も既存も違いがなくなった、離農する人は離農しちゃったし。その点、後進国の人には気の毒だなと思う。日本は戦争中でも義務教育があった。だけど、戦争というのは、何とでも理屈がつけられる(恐ろしい)。

この辺は雪が少ない。その代わり土が凍る。5月になってもなかなか畑起こしができない。

北海道へ行くまで、静岡で勤めた個人病院はなんでも病院だったので、そこで経験を積んだ(坊ちゃんの送り迎えなどもした)。

看護婦学校へは通った(1年間)。当時、自分の部落から女学校へ行く人はいなく、気が重かった。親はどうも薬剤師にしたかったみたいだが、それは大変そうだったので(時間がかかる)、女学校の隣が看護学校だったので、自分でさっさと転校した。看護学校へ行きながら、夜学で産婆学校へ通った。

【北海道15 - 9】

日時：2003年8月24日（日）午後4時00分～午後5時30分

場所：北海道阿寒郡鶴居村・グリーンパーク

お話を伺った方：H-N氏（開拓保健婦）

調査者：山下優子

議事録担当者：山下優子

面会者に関するインフォメーション等：元・開拓保健婦（釧路管内遠矢地区担当）

[H-N氏の歴史]

- ・ 大正13年生まれ。
- ・ 昭和29～38年まで開拓保健婦をされ、その後、学校の養護教員になられた。
- ・ 開拓保健婦をされるまでは、小学校の教員をされていた。
- ・ 娘さんは現在、琉球大学医学部助手をしている。学生時代はウイルス学を専攻された。獣医さん（？）。トンガへJOCVで行かれ（その時、H-Cさんが娘さんを訪ねてトンガへ旅行した）、その後もJICAの仕事でラオスへ5年間（？）行っていた。

[開拓保健婦になられた経緯]

- ・ 小学校の教員をされている時（24～26歳頃まで？）、多くの子供が結核だとか、チフスとか回虫症だった。その様な中で、保健医療活動の重要性を感じて看護婦、助産婦、保健婦の資格を2年間かけて取得した。

[当時の様子と開拓保健婦として活動されたこと]

- ・ 当時は子供がどんどん生まれていて、赤ん坊をミルクの籠に入れておいてお母さんは働かないといけなような状況だった。ビタミンD不足でクル病の子もいた。「チョコラード」というビタミンD剤があり、これを飲むように指導した。
- ・ 本当に山奥の開拓民たち悩める人の中で、開拓保健婦はみんな、ずいぶん悩みながらやってきた。
- ・ 釧路村に戦後開拓村（50戸くらい）があり（何も無い所だった）、その地域を担当していた。
- ・ 開拓村を歩いていると、お産が始まっておろおろしている人がいたこともあった。当時、お産は助産婦さんが訪問で見ている。
- ・ 担当地域へは、釧路市から「遠矢」という所まで電車で行き、そこから歩いた。その後、自転車、バイクと変わり、昭和40年頃に車がでてきた（H-Nさんは養護教員を退職されてから免許を取られた）。
- ・ 開拓者の所へは泊りがけでも行った。行くのも大変だったけど、集まってくる人も大変だったと思う。婦人部の人にも集まってもらった。最初に営農指導員が営農の指導をして、次に保健婦が健康教育をしていた。
- ・ 講習会などへは営農指導員、生活改善普及員さんとも一緒に行った。あるものでの食事の作り方などを指導した。
- ・ 母乳の出ない人への栄養指導もした。当時、お母さんは働いてばかりで乳もでなくなる人がいた。その様な時に、お米のとぎ汁だとかを飲んでいたので、そんなことではなしに、牛乳を飲むように

いったりした。

- ・ 受胎調整の指導もした。模型を使い、男の人も集めて、避妊指導をした。 pessary の計り方などのために、受胎調節実地指導員の資格も取得した。保健所が計画して、産婦人科医師が講習にきていた事もあった。
- ・ コンドームは無料だった時もあった。予算の中でできた時もあった。
- ・ 戸別訪問の時は、畑まで行って「お～い」と呼んで、お母さんたちのお昼の休憩の時などを利用して話をした。みんなが保健婦を待っていた。
- ・ 年に1回くらいは研究発表会をやった。旅費についても予算の中から取るようにしていた。
- ・ 開拓保健婦として、やれてよかったと思うことは、当時の人々の葛藤、例えば、夫婦の葛藤の中に入って、会話をするきっかけを作れたことではないかと思う。夫婦で激しい喧嘩をしているところに入って行ったこともある。そのような気持ちも十分理解できた。知らない土地に色々な思いを持ってきているのに、上手く行かなくなれば、そのようにもなる。そんな時、何にもできないけどそこにいることによって夫婦で会話をするきっかけを作ったと思う。それができるだけでもよかった。付け加えて、開拓保健婦は健康面でのお話もできるけど、会話のきっかけを作ることによって、新しいことに取り組む原動力になれたのではないかと思う。
- ・ 開拓者の表彰式の時などには、「折(お弁当)」を開拓保健婦で作った。加えて、記念品としてジーンズカン鍋を贈っていた。折にもお肉を味付けして入れていた。羊が嫌いな人にも、羊をこのようにして食べるのだということを見せて食べさせた。それは、つまり食生活指導でもあった。営農指導員の人羊を肉にしてくれた。
- ・ カレーのルーも作った。ボールに羊の脂を入れて作った(羊の脂は固まりやすく、ルーの素になる)。営農指導員の中に獣医さんで食品関係専門の方がおられた。その方が作り方を教えてくれた。
- ・ 開拓保健婦で集まるという事は重要だった。集まる事に関しては、年間計画の中で予算をとって決めてある。みんな待ち焦がれてくる。みんなそれぞれ、自分の担当地域での悩みを持ってくる。そして、そこで話をし、聞いてもらい、励ましあって、互いにエネルギーをもらって帰って行った。
- ・ H-Nさんは釧路支庁にも勤務された。開拓保健婦と計画を立てたり、駐在している開拓保健婦の悩みを聞いたり、研修の場を設定したりした。集まりを2ヵ月に1度ほど持っていた。
- ・ 当時の仕事は目標がきちっとあった。大変だったというよりは楽しかった。

[婦人会について]

- ・ 奥むめおさんという議員が東京から釧路へ3, 4回来られた。婦人会を組織するように、ということで、開拓婦人の会をつくった。(婦人会館か、何か建物も建てられたか?)

【北海道15 - 10】

日 時：2003年8月24日（日）午後4時00分～午後5時30分

場 所：北海道阿寒郡鶴居村・グリーンパーク

お話を伺った方：H-O氏（開拓保健婦）

調査者：太田美帆

議事録担当者：太田美帆

内 容：鶴居村における開拓保健婦の活動状況

1) インタビュー形式

町立温泉センター内の畳のお休み処が会場となり、たくさんの方が周りにいて騒がしく落ち着かない様子だった。「集中できないから別室に行きたい」といっていたが、そのうち熱中してお話して下さった。

2) インタビュー時入手資料

8点 アジ研（「みんな必ず返すといって持って行くが、なかなか帰ってこない。貴重な資料が既にくいつかなくなってしまった」からと貸し渋っていたが、後に快く貸して下さった。）

3) インタビュー内容

(1) 開拓保健婦になるまで

昭和元年生まれ。昭和4年、3歳の時福岡県朝倉から入植。釧路の東、浜中町出身。小学校の6年は通った。小学校高等科の2年はほとんど行っていない。昭和15年頃、父が「これから戦争が始まる。戦争に負ければ男はみな兵隊として死に、勝ったら植民地に徴集されるだろうから、日本に男はいなくなるだろう。だから女でも職業を持って自立できるようにならなければならない」といった。当時女性の職業は看護婦か髪結いくらいだった。看護婦になった方がいいといって父が学校を探してくれた。当時ほとんどの看護学校の入学条件は4年制の高等女学校卒であったが、小樽市立病院付属養成所だけが入学を認めてくれた。一人で汽車に乗り小樽へ。16歳。

小樽の養成所の2年間は看護の実務中心で理論は少なかった。卒業後そのまま就職し、外科を中心に昭和22、23年頃まで勤めた。釧路に戻り、個人病院で働いた後、釧路鉄道病院に就職した。大病院での勤務を物足りなく感じていた時にGHQが日本の公衆衛生はレベルが低い（伝染病対策は監理警察が行っているとはとんでもない）からと昭和23年から保健婦（パブリック・ヘルス・ナース）の緊急養成を始めたこと、これを受けて北海道では札幌医大の養成所が、通常1年の保健婦養成コースを半年で実施しているという情報を入手した。鉄道病院にいたため汽車賃はただなので、札幌まで出かけて保健婦学校を受験した。受験者は600人でそのうち50人の合格者の一人になれた。当時、既に看護婦として働いていたので即戦力として期待されたのだろう。

鉄道病院の現職のまま、保健婦養成所に入学。半年のところが実習などを含めて結局8ヵ月くらいかかった。卒業作文には「故郷浜中の人たちのために働く立派な保健婦になる」と書いた（「よくまあ、すましていたねえ」）。昭和26年卒業、第5期生。

昭和26年に浜中町役場就職。住民課付け。予防注射などを行う衛生課は別にあった。保健婦としては2代目、同期は二人。もう一人は地元の子でそのまま町に勤め続けた。GHQが保健婦をといっていたって、

町役場の人は保健婦が何か知らないから、普通の事務職のように扱われた。仕事は住民の資料づくり、戸籍謄本の複写など。戸籍謄本を取りにきた人の戸籍を調べ、一字一句間違わないように丁寧に写して行くという地味な仕事。仕事は山ほどあったので仕方なくこなしていたが、馬の謄本を作るようにいわれ、さすがに頭にきた。「こんなことは保健婦の仕事ではない。こんなことはしてられない。村歩きをさせて欲しい」と頼んで支部に異動させてもらった。

昭和27年1月末から浜中町役場支部勤務。雪が深かったので6月になってようやく予防接種をしに村を回れるようになった。馬は昔から得意だった（実家で飼っていた馬の世話を子供の頃からしていた）ので馬に乗って村を回った。2ヵ月間で担当の全ての部落を回り、予防接種をし終えた。

だが、予防接種だけの仕事は物足りず、保健所に相談し、陸の孤島といわれる鶴居村が保健婦を探していることを知る。当時鶴居村へは4～11月はバスで2時間、冬は10人乗りの馬鉄で炬燵を囲んで座った。早速鶴居村役場まで出向き、給料の話などをした。これまで村には保健婦がおらず（実際は2代目？）、誰もやったことがないなら好きなことができると思い、鶴居で働くことを決めた。26歳。

（2）鶴居村役場開拓保健婦

昭和27年4月（？）、鶴居村役場の人はよくしてくれた。何をしてもいいといわれた。自転車を用意してくれたが、馬には乗れても自転車には乗れなかった。学校の運動場で転び転び練習した。

土地が分からないので、役場の土木の人が村歩きをするというのについて行った。これがとても参考になった。普及員も支庁から時々来たので積極的に利用した。

2、3年ただ部落を歩いて回った。部落に入ると見知らぬ若い娘が歩いているというので必ず声をかけられる。自分は保健婦だとは名乗らず「ここはどんなところ？どんな暮らしをしているの？病気で困ってない？」などいろいろな人に話を聞いた。まず、おばあちゃんの話聞き、部落のことを知る手がかりにした。2、3回足を運ぶと顔見知りもできてきて、「情報おばさん」が分かってくる。何でも人の話をよく聞いたので、お姑さんがよく迎えてくれた。日帰りできない部落では泊めてくれそうところを見つけ、泊まらせてもらった。

そのうち部落のお父ちゃんたちが農事組合などで町に出た時に、保健婦が村回りをしていると聞いてきて、「保健婦」という存在が知られるようになり、男性も興味を持つようになった。部落でも「お前が保健婦という人か？」と聞かれるようになったので「病気の相談にのっています」くらいはいうようにした。

初めのうちはひたすら村歩きをし、情報を集めた。役場の住民台帳もできてきたのでそれも見て村のことを把握した。基礎調査にこれほどの時間をかけられたのは、初代の保健婦だったからか。のんびりした時代でもあった。役場に戻ると必ずどんな話を聞いてきたか報告し、他の人はどんな情報もっているのか聞いて回った。

質 問 - なぜ始めから自分は保健婦だといって人集めをしなかったのか？

回 答 - 部落の状況がわからないうちは、何も始められない。第一何をしたいかわからない。わからないのに押し付けるのはいや。自分の持っている知恵をみんなが引き出してくれるのを待った。

（3）開拓保健婦活動開始

開拓部落の女性たちは入植以来部落から出たことがない人ばかりで、ただひたすら働くだけで生活に余裕はなかった。2年目の時（昭和28年か？）、岐阜出身の開拓農民が南向きの斜面にみごとな梅林を持っていて、この梅の花を部落のお母さん達と愛でたいと思った。知らないところに行く口実に「鶴居の中を知ろう」、「梅農家視察」などといって農協と役場を「せびって」15円集め、木炭運び

をしている人のトラックの荷台に乗せてもらって初の視察旅行に出かけた（写真あり）。

小学校に児童を集めて予防接種もした。今でも当時の子供たちには「おっかないおばさん」と呼ばれる。

開拓農協には婦人部があり、発足から昭和45年に手放すまで指導した。鶴居村には13～20戸くらいの部落が38部落あったが、隣の部落との交流はあまりなかった。ハウセイ、下幌路で12～18戸の女性を集め、グループづくりをした。

研修は支庁単位で月に一度くらいあった。開拓保健婦の会というのが年に一度あった。昭和34年、十勝市仙美里農業大学校での第1回北海道食生活改善推進員の研修に参加した。

活動がしやすくなったと感じたのは昭和36年頃から。市街地では東京オリンピックの年にテレビが普及したが、開拓部落ではそれより2、3年遅れた。

（4）学校づくり

下久著呂の山の中、16戸の部落は学校がなくて困っていた。4km先の小学校まで冬は通えないし、夏は熊が怖い。村に学校がないから離村する人もいた。農協婦人部4代目会長になった人がとても熱心な人で、1ヵ月くらいH-Oさん宅に泊まりこんで対策を練り、「せめて冬期分校だけでも」と役場に働きかけたところ、支庁から学校建設資金が下りた（住民の負担無し）。立派な学校ができたが部落で運営できず、結局7年しか続かなかったが（分校くらいならよかったのに、学校ができてしまったから、部落ではどうしようもなくなった）。

（5）食生活改善

昭和38～40年に時間調査や生活実態調査、食生活調査（ごはん調査）を実施した（生の記録、集計用の記録などの資料あり）。調査方法は自分で考えた。酪農家でも牛乳はコップ一杯分でも儲けたいから売ってしまい、自分たちで牛乳を飲んでいなかった。

支庁拓殖課の働きかけで綿羊の飼育が増えてきた。普及員は岩崎さん。幌路東の若妻グループを対象に綿羊料理講習会を開いた。講師に釧路から開拓保健婦のH-Nさんに来てもらった。肉の処理の仕方、塩漬け、ハム、燻製、ジャーキーなどいろいろな調理法を紹介し、折り詰めを200くらい用意して村の人に振舞った。肉の保存はバケツに入れて井戸の中で冷やしておく、深い室に入れておく、塩漬け、ハムやソーセージに加工するなど。

（6）離農資金

開拓者の暮らしは本当に悲惨なものだった、昭和35年にもなると、成果をあげている入植者と失敗している人の差が広がってきた。失敗している人の生活は見るに見かねた。そこで支庁研修の時に「人を見て開拓資金を貸し付ける」よう訴えた。農業に向いていない人もいる。資金を有効活用できない人に貸しても借金になるだけ。

厳しい話になるが、人を4段階で見極めることを提案した。

金儲け第一主義の人。家族よりも金が大事。

指導次第で能力を発揮できる人。

何度いってもだめな人。できる条件があるのにその意識のない人。

どうにもならない人。かわいそうな人（未亡人、病人、障害を持った人、一人ではどうにもできない人など）。

の人はほっておいてもできる。 の人を中心に指導する。 の人は生活保護しかないので民生委

員に任せ、農林省の管轄外とする。 の人には、営農指導員と一緒に相談にのる。

これを受けて支庁は昭和38年に離農資金ができ、 の人で相談の結果離農が決まれば、30万円の離農資金と借金の棒引きが制度化された。離農した人は親戚を頼って出て行ったり、釧路市に出て職を得たりした(いいことをしたのかどうかは今でも分からない)。

(7) その後

昭和45年、開拓保健婦制度がなくなって釧路市の保健婦になった。鶴居村に残りたいのは山々で、村の人も残りたいければ陳情してあげるといってくれたが、ちょうど第一子が高校に進学する年で子供の学校のことがあったので、結局市街地に移ることにした。

(8) その他

鶴居村は地方交付税、老人対策費日本一。現村長が国から色々な補助金を取ってきては村のインフラ整備(らくらく酪農館、みなくる資料館など)に投資している。また、この村から議員が出たので役場も立派になった。市町村合併をすると鶴居村は損をする(今の補助金がカットされる)ので、合併に反対している。

鶴居は情けないところもある。H-Pさんが自分の畑で取れたものを道路沿いで直売を始めたところ、「小遣い稼ぎなんてみっともない」と陰口されたり、スーパーから「うちのものが売れなくなる」と苦情をいわれたりしたそう。H-Pさんは自分で作った無農薬のおいしい野菜を他の人にも分けてあげたいと思っただけなのに。

第一子の息子は情報関係の企業に就職し、東南アジアの国で働いている。

4) 備考

(1) H-O保健婦にお世話になった鶴居村開拓農民H-Pさん談

- ・ 本当に何でも話をよく聞いてくれる人だったので、みんなが色々と相談した。うんうんと話を最後まで聞いてくれ、それから一言「私はね、・・・と思うよ」と静かにいうような人だった。
- ・ 旦那さんは獣医さんで、鶴居に大水があった時、夫婦ともども村のためにととてもよくしてくれた。
- ・ 今でも「保健婦さん!」と呼んでいる。鶴居に「保健婦」はH-Oさんしか存在しない。

(2) 太田所感

どうしてもなりたくてなった「保健婦」なのにそれを売りにせず、村の基礎調査に苦心し、婦人会活動を積極的に支援するなど、極めて生改的な地域活動をした人。H-Cさんのように医療行為などで頭を悩ませることはなかったようだ。ともかく「村の人のために村を歩く」ことを信条としていた。自分の信念は通すので「こわいおばさん」ともいわれていたらしい。「鶴居村の保健婦」としての自負が感じられた。

【北海道15 - 11】

日時：2003年8月24日（日）午後

場所：北海道阿寒郡鶴居村・グリーンパーク

お話を伺った方：H-L氏

調査者：水野正己

議事録担当者：水野正己

内容：釧路支庁管内聞き取り結果

【生い立ち】

- 親父が飲食店を営んでいた。私が小学校5年生の時に死んだ。
- 予科練を経て、昭和20～25年まで、亜麻工場で臨時作業員をしていた。
- 昭和26年に、標茶町役場の教育係に専任として配置された最初が私だった。
- 昭和37年7月、標茶町役場に移動し、社会教育主事に就任した。
- 役場を退職後、東邦コンサルタントに移って釧路支庁管内の農業関係資料の収集整理にあたっている（東邦コンサルタントは、釧路支庁を中心に、農業関係公共事業の調査、計画を主な業務とする地元企業。同社の社長は、元釧路支庁の農業土木技師で、退職後にコンサルタント会社を設立。会社の資料庫には、戦争直後からの釧路支庁管内で同社が請け負った公共事業対象地域の様々な農村の写真、測量関係資料をきめ細かく収集、蓄積している。こうした企業に、かつての農村生活に関する資料が抱負に蓄積されている事実に接し、記録者は大変驚いた）。

【公民館での活動】

- 昭和26年に木工所へ移る。しかし、同年9月に公民館に結核で休職の人が出たので、当時の高島校長に呼ばれて公民館の仕事に就くようにいわれた。高島校長は、議員や議長もやった人だ。10月25日からは分室にしてもらい、札幌のアメリカ文化センターから映写機を借り出してきて文化ニュース、東映映画などを上映して回った。三益愛子が出演した映画だ。16mmフィルムで、電源はガソリンの発電機で120Vの電気を起こした。虹別には水力発電があった。移動はオート三輪で行った。部落のお祭りの終わった後に上映した。入場料は、フィルムの借り出し料金が必要だったが、残りは青年会の活動資金集めにした。
- 榎本ケンジ劇団やわらび座の前身の劇団も呼んだ。人形劇は、札幌の学芸大学の学生の劇団だった。図書館では「巡回文庫」を実施した。青年自治講座を開いて、北大の技官や道職員が講師を務めた。青年学級も開催した。
- 公民館の全道大会にも参加した。

【公民館の広報活動】

- 戦後の昭和21年に標茶公民館が設立された。場所は、現在の図書館のある場所で、青年練成所、青年学校があった所。
- 「開拓だより」を編集して、釧路支庁管内の保健婦、農業改良普及員、農協に配布した。当時の支庁に小野課長がいた時代。便りは30号くらい続いた。
- 「標茶公民」を編集、刊行して、町内全戸に配布した。

○「公民館だより」の発行は、地元の子供に手伝わせて行った。町内の婦人会、老人会、青年団に配布した。

○「北海道開拓新聞（北海道開拓協会）も発行されていた。

【標茶町の戦後史】

○戦前は軍馬の産地だったので、戦後はその牧区の監視小屋を利用し、部落公民館を自力で建設した。農村婦人の家（ホーム）は、中オソベツなどにあった。地域の集会所として利用されていた。季節保育所にもなった。虹別、塘路、アレキナイ、久著呂には、生活改善センターがあった。

○戦後、標茶は動いた。保健所、高校（農業科から発展した）、標茶青少年活動連絡協議会、釧青連、婦人会の活動が活発化した。

○昭和28年、標茶駅前の大火があった。5月4日に数百戸が罹災した。地域婦人会、青年団、同年12月に地域振興会が設立された。

○明治18年に罪人を収容する施設ができて、開拓が進められた。戦後、昭和28年に罪人の碑が設置、翌昭和29年行幸。

【記録者のコメント】

○H-L氏は、標茶町公民館を拠点として社会教育に長年従事された経歴を持つ。その間、多くの広報活動に携われたことから広報資料、文献資料、印刷情報等に詳しく、そうした資料の収集に不可欠な人材と考えられる。

【北海道15 - 12】

日時：2003年8月24日（日）午後4時00分～午後5時30分

場所：北海道阿寒郡鶴居村・グリーンパーク

お話を伺った方：H-P氏（開拓農民二世）

調査者：渡辺雅夫

議事録担当者：渡辺雅夫

【H-P氏ご自身について】

81歳。お子さん4名。野菜畑を1反任されている。「これが私の仕事」。開拓農民二世。親は福島からやって大正元年に移民。夫は17年前に他界。「夫は牛嫌いで牛の面倒を見たのは私だった。」

【H-O保健婦について】

昭和27年に初めて鶴居にやってきた。迎えに出ることもできなかつたくらい忙しかった。

H-O保健婦が初めての保健婦で、「砂地に水がしみこむように」話を聞いた。当時は何もかも困っていた。

「H-O保健婦」なんて呼ぶ人はいなかった。男は「うちの保健婦」と呼んでいた。女性は「保健婦さん」、子供は「かあさん」と呼んでいた。

部落まで足を運んで皆の中に入ってためになる話をする人はH-Oさんの他にいなかった。

男からも子供達からも好かれて人気があった。例えば「経営を維持するにはどうしたらいいか？」というような根本の話をしてくれた。

軍馬が必要なくなって、牛を飼うことになった時に、行政から助成を受けるために奔走してくれた。

皆がいないと作業場まで探しに来た。朝昼晩関係なくやってきた。

聞いてもらえることが凄く嬉しかった。H-Oさんは聞きっぱなしということがなく、必ずアドバイスしてくれた。最初はうんうんと聞いてから「私はこうの方がいいと思うけどねえ」といつてくれた。

H-Oさんは部落の誰々が、どういうことが得意だということを皆知っていた。ある時敬老会をやることになり、普段炭焼きで山に入っていてあまり参加できないおじいさんと呼ぶことになった。そのおじいさんの大好物は餃子で、H-Oさんは中国から帰ってきた人で餃子づくりのうまい人を知っていたので、その人を講師にして、お年よりだけでなく若者も一緒になって餃子を作った。おじいさんにご馳走したら、それは大層喜んだ。

当時は麦にイモを入れてご飯の代わりにした。米は重病人しか食べられなかったが、H-Oさんが「ばっかり食い」じゃだめだからといって皆でニワトリを飼うことになった。

H-Oさんには自分の家を犠牲にさせてしまってすまないと思う。

【婦人部について】

婦人部ができたきっかけは、昭和28年に助成金で住宅ができたので皆で見に行ったことによる。

農協婦人部ができて今年で50年目になった。「傘寿会（さんじゅかい）」という名前で合計13名いる。

もう少し各自が生きがいを満たせるようなところじゃなきゃだめ。愚痴をいう場であって欲しくな

い。今の80代が総締めくくりなのだから、今頑張らなかつたらいつ頑張るのだと思う。猫も杓子もゲートボールをしているけど、私は畑仕事で手一杯。畑が生きがい。

【相互扶助について】

「手間買い」といって、皆で何でも手伝った。「今日はどこ、明日はどこ」といって、皆であちこちのサイロを踏み固めにいった。

同じ地域でケンカ一つしなかった。家族同然の付き合いだった。

四国、青森、秋田、福島、福井といろいろなところから開拓に来ていてスタートは一緒だった。

もしも誰かの家で事故があったら、許可なしでも皆で手伝った。ただし、乳絞りは特別で、これだけは牛によって癖があり、牛の持ち主と違った絞りで絞ると乳房炎になる場合もあったので、家主に許可を得ないと手伝えなかった。

【給食の始まり】

そもそものきっかけは子供に温かいものを食べさせてあげたいということから始まった。当時、子供は弁当を学校の薪ストーブの周りに積み上げて凍らないようにしていた。

お母さんたちが学校に早めに行って、味噌汁を作ってやることになった。校長先生が村長さんに掛け合って五右衛門風呂を三つ買ってもらい、一つはお湯沸かし、一つは味噌汁づくり、一つは後片付けに使った。お湯は朝早く校長先生の奥さんが沸かしてくれた。

【保育所の始まり】

農作業に出かける時、家に鍵をかけて子供が外に出られないようにしていた。これがあまりにかわいそうなので村長さんに何とかしてやりたいと相談したら、春・秋の農繁期だけでも何とかしてやりたいということになった。

これに対して、開拓者理事（鳥取の村長だった人）が1万円を融資してくれ、そのお金でおやつやレコードを買った。そして学校の離れに場所を作って、村長さんの奥さんが子供にレコードを聞かせたり、昔話を聞かせたりした。

【農協の営農普及員について】

皆昼働くから夜に普及所の指導員の家に行って養鶏などを習った。

普及所の指導員の奥さんは子供をそれまでに寝かしつけておかなければならなかった。陰で苦労されたと思う。

【その他】

開拓地で焼き払ったばかりの所は土地が肥えていて、一升播いて一俵の豆が取れたのでバカみたいにとれるということで「バカ豆」と呼んでいた。

親が建てた家を解体して馬車で運んでさらに奥の開拓地に建てた。2階建てだったので大水の時には2階に避難した。

綿羊が欲しくて36頭まで増やしたが、ある時に熊が出て全滅させられた。熊が小屋の戸板に穴を開けて、フーっと息を入れて綿羊が逃げ出し、皆湿地に入って毛が水を吸って動けなくなったところを

熊がなぶり殺しにした。熊が食べたのはそのうちの一頭だけだった。

農協も普及所も保健婦さんも，村長も校長も，皆一つのことに向かって一生懸命だった。

【北海道15 - 13】

<その他のメモ>

記録者：渡辺雅夫

1) H-Cさんより

(1) 弥栄小学校の前で

宮坂の国際交流センターは今でも満州地域と交流している(宮坂会 - 満州からの引揚者の集まり)。H-Cさんの息子さんが中国好きで、定年後北京大学に留学している関係で中国の学生がよく家にくる。

開拓婦人部の中でも弥栄の婦人部が最も活発だった。「筋金入りの婦人部」と呼んでいたが、斎藤さん一人になってしまった。

弥栄同志会と弥栄同窓会をまとめて「全国弥栄会」を作ってから今年で30年目。

H-Cさんの出身は静岡の向敷地(安倍川西岸)。徳願寺の下で生まれた。

かどや町長さんは目が悪くなったけど今でも元気。是非お会いしたい。

(2) 標茶の牧場で

H-Cさんは83歳まで車の運転をしていた。

夫のおじさん、おばさんが偉い人だった。おじさんは「広辞苑」の編集に携わった。

夫は子供達によく読み聞かせをしていた。子供達は男親が育てたようなもの。

夫は「売るだけの農家」ができなかった。

昭和27年に保健所ができた時にチャンベツに挨拶に行ったらここは行政的に釧路だからといわれた。

1度脈を医者にとってもらったら死んだ時に診断書をもらえる。死んだ後だったら馬ゾリで(医者に)連れていかなければならない。「先生ついでに死にそうな人がいるから診て下さい」というと、「H-Cさんのついでとはとんでもないついでだから」といわれていた。

典型的な開拓小屋は南北に4枚ガラスの窓が一つずつしかないので真っ暗だった。

昔は焼酎が配給で、焼酎のビンと希塩酸のビンを家の中に置いていたら、真っ暗なので来客が焼酎と間違えて希塩酸を飲んで苦しんでいた。仕方がないから牛乳を無理やり飲ませた。これが最初の患者だった。

H-Cさんに子供は3歳、2歳、1歳の3人いた。

皆、座産で、自分で産むのが前提だった。

ヘソの緒は麻縄を切って縛った。短く切ると寝小便をするということで長く残していた。

熊の腸で腹をしばるとお産が軽くなるといわれていた。

私は昔のことをしゃべるのに、して悪いことをして自分の手柄みたいに思われるのがイヤ。

病人を運ぶのに戸板を使って16人の男が必要だった。入院には布団、煮炊きする鍋、ミソ、醤油が必要だった。

軍馬補充部の軍医さんと製糖工場の耳鼻科のおじいさんの先生がきた時に挨拶に行った。「僕は耳鼻科だし、隠居できているのだからお産の手伝いなんてできないよ」といわれて、「いいえ、先生の顔を見ればみんなが安心するのだから」といった。

結核で死んだ人がいて「診断書を書いて下さい」といったら、若い医者が「解剖しなきゃだめだ」といってきかないので、筵を敷いて解剖をしたことがあった。「結核患者は息を引き取るときに菌を

移して死ぬ」といわれていたもので、家の人が体温のあるうちにクレゾールを口の中に入れてたしかめた。

2) H-Lさんより(移動中の車中で)

標茶の始まりは明治18年に監獄ができたことによる。

明治28年には囚人が1300人いた。

明治23年には太田に屯田兵がいた(道東にはここ以外に屯田兵がいたのは根室の和田村だけだった。屯田兵は空知と北見が多かった)。

炭を焼いて開墾した。

虹別 - 大正から昭和にかけて許可移民制度で入ってきた人々の町。奨励作物は豆類。

昭和7, 8, 9年は大冷害があってそれを契機に佐上知事が「酪農をやらんと駄目だろう」ということで酪農が始まった。

飼料用のカブを作らせていた。

「一番切ないのは後継者対策」

育成牧場があった。

昔、中御卒別には朝鮮牧場があって、平林大二郎という人が平林教習所という初等教育の学校を作っていた。

上磯分内で奨励作物としてビート、亜麻を作っていた。

標茶の開拓者は1200戸、既存農家は1800戸だった。

営農指導所、改良普及所、保健所、公民館が全て一緒に活動をしていた。片方は開拓農民対象、もう片方は既存対象ということはいっていらなかった。

「僕は農業基本調査とは別に開拓者だけの統計処理をしていて実測調査を手伝ったこともあるが、なぜ二通りのことをやらなければいけないのだろうと不思議に思ったことが記憶に残っている」。

10戸組合という作業組合が行政とコミュニケーションしていた。

「町史の中で、どこから開拓にきたという男の話は残っているけど、女性の生活の話は漏れているかもしれない」。

3) H-Nさんより(鶴居村役場で)

釧路町に勤務していた。

2ヵ月くらい集まって保健婦と生活改良普及員の指導をしていた。

町村では生改さんと一緒に訪問していた。

奥むめおさんがきて、開拓婦人会を組織した。

H-Nさんの娘さんは、昔JICAで働いていて、今は琉球大の医学部にいる。ウイルス学を専攻。

4) H-Oさんより(鶴居村役場で)

昔は末端まで予算分けするという事はなかった。

「農林省の行政は戦後まもなくの時は凄くよかった」。農林省は現場の対応をよく理解してくれた。

昭和45年に農林省から厚生省の管轄下に入った。中心になるのは医者だったが、それまでやっていたことのあら探しをされた。

一番有効的だと思ったのは寄生虫の駆除で顕微鏡を使ったこと。当時は99%の人には寄生虫がいて、便をとってそれを顕微鏡で見させた。いっぱいいるところには「虫下し」を置いて行った。

開拓保健婦の研修会は全道で年に1, 2回あった。この場で現場の保健婦が問題を訴えて、「することが必要である」と訴えれば、それが保健婦の業務として追加され、予算もつけてくれた。血圧計も買ってくれた。

一般保健婦の業務内容はこれに対して1, 2行しかなかった。厚生省の保健婦の基準に従うと何もできない。事務ばかりやっていた。厚生省の下に入ってから、精神科の仕事を密かに調べた。精神科の患者を調べるのは人権侵害だといわれていた。精神病患者に対してはほったらかしの状態だった。精神病患者に対しては何をいいたいか、したいか、聞き役に徹することが必要だ。聞いた結果「この人狂っているわ」と思うこともある。でも、そこですぐに「だけどね」と否定してしまうとだめ。しばらく聞き役に徹して待ってみて、信頼関係ができたなら意見をいうというタイミングが必要。合気道みたいなもの。

今の保健婦さんはまず説得力がない。コミュニケーション能力がない。嫌われそうだという理由で、訪ねていかない。

(国際協力の話が出た時)「最初はその人たち(開発途上国の人達)に合わせなきゃだめ。

「付き合いを始める時に最初に出てくるのはずさでしょう。物質的に得するために付き合うというのが先に出てくる」。「最終的にリーダーが勤まる人を見ぬいてあげなきゃだめ」。1000円のお金を皆にあげてみて、「これを一番得する使い方使え」といって、パチンコする人、たらふく飲む人、博打する人、ニワトリを飼って卵を産ませたい人と様々いる。

開拓農民にはお金が下りる(融資かどうかは確認していない)。農協が一律100万円とか渡していたが、「貸してもいい人、駄目な人、どうしても面倒みなきゃいけない人と分けてくれ!」と組合長とケンカした。

昭和40~43年に農協も人を選別しだした。離農資金(奨励金)として30万円を払った。その機会に生活保護に落とした人もいるし、離農した人もいる。

5) H-Oさん, H-Pさんより(乳製品工房にて)

昔は馬鉄というのがあった。運賃は25銭(当時米1俵が7円以上)。鶴居を夕方4時に出発して、釧路に朝の7時に着いた。

【北海道15-14】

日時：2003年8月25日 18:15～19:30

場所：JICA北海道センター（札幌）

講師：佐藤寛

参加者：外国籍研修員25名（男性20名，女性5名），JICA職員3名

使用言語：英語

内容：JICA北海道センター（札幌）でのセミナー

記録者：渡辺雅夫

【セミナー内容】

ビデオ上映「住民参加による保健活動」（18:15～18:40）

イントロダクション 中村三樹男（JICA北海道センター札幌所長）

講義 佐藤寛（18:45～19:15）

社会開発が経済開発に先行して行われたことが日本の開発にいかに関与したかの説明

生改さんの制度と普及方法の説明

カイゼンの思想の説明

質疑応答（19:15～19:30）

Q - 生改さんはどのようにして農村住民の動機づけを行ったのか？何がキーだったのか？

A - 村の中に入って聞いてまわった。女性の組織に働きかけ，ミーティングを開いて，集団活動による学びの場を作った。

Q - 誰が生改さんを組織したのか？

A - 県である。

Q - 生改さんは女性だけだったのか？男性は何をしていたのか？

A - （女性をターゲットとした活動であったこと，女性と男性の日常生活の説明）

Q - 女性はvoicelessであるという認識を変えさせたのにpolitical forceがどのような影響を与えたのか？

A - 婦人参政権が確立し，その他の女性の地位向上のための政治的な外圧を利用した。

【北海道15 - 15】

日 時：2003年8月26日（火）9:30～12:00

場 所：瀬棚郡北桧山町愛知 H-R建設 H-Rさんご自宅

お話を伺った方：H-R氏（元開拓保健婦，北桧山町駐在18年，元北桧山町保健婦）

調査者：水野正己，太田美帆

議事録担当者：太田美帆

内 容：北桧山町における開拓保健婦の活動状況

1) インタビュー形式

快晴。北桧山町に入って交番でH-Rさん宅を尋ねると「看護婦のH-Rさん」ですぐにわかった。

日の当たる応接間に通され，早速話が始まる。ご主人も同席，横を向いて新聞を読んでいるが，適宜相槌を打ち，フォローをする（約1時間）。

資料は別室にたくさん用意してあった。主な資料は北見赤十字大学の西先生が，開拓保健婦をドキュメントするといって持って行ってしまったきりで，ここに残っているのは「つまらないもの」ばかり。資料を広げて説明を受けながら話を聞く。資料は古くなったのでもう燃やしてしまおうかと思っていた（約1時間）。

昼食にと海と山の幸のご馳走が用意されていた。「海からの頂きもの」以外はすべてこのあたりで手に入るものを使っての料理（おにぎり一つでも本当においしかった。時間がなく，ほとんど手をつけられなかったのが残り）。隣の本家で栽培しているというメロンは絶品だった。ご主人曰く，「北桧山でも夕張メロンに負けにくいくらい上等なメロンがとれるのに，ここらは商売が下手だから・・・」。

次は泊りがけできて下さいといわれながら，時間に追われてばたばたと退去。お土産に庭でなっているアプリコットを頂く。

2) インタビュー時入手資料

16点 水野研（含写真15葉 太田）

3) インタビュー内容

(1) 北桧山付近の開拓地の様子

既存農家は明治時代の屯田兵。始めの頃の移民は農業ができなくても補助金で何とか生活できた。昭和20年頃には米作で生活はだいぶ良くなってきていた。戦後の開拓移民は，先の開拓者が手放した土地，条件が悪く諦めた土地などに昭和21年から入り始め23年，26年に多く入った。種イモよりできたイモの方が小さいくらい痩せた土地だった。開拓部落は町の端っこの方（周縁部，山の上）にできて行った。

既存農家の次男，三男も少しはいたが，入植者の多くは四国，東京から焼け出された人，樺太，満州からの引揚者，終戦で職を失った職業軍人だった。いろいろな人がいた。画家や社長，助役などいい生活をしてきた人が多く，鋤を初めて持つ人ばかりで開墾にはとても苦労していた。

土地は7～10町与えられ，平均7，8町だった。開墾しなければ補助金がもらえないのでみんな必死で開墾しようとしたが，このあたりは熊笹が多く，根っこが張っているのもそれはそれは大変だった。笹を刈って火を入れて，根株はばっこん馬で引っ張る。入植当初はみな元気があるが，直に持つ

てきたお金も使い果たしてしまい、慣れない仕事に苦勞していた。木のあるところに入植できた人は炭を焼いて現金収入を得ることができたので運がよかった。子供は学校へ行く暇などなかった。

昭和26年頃には既に開拓者と既存農家の生活水準の差は明らかになっていた。「開拓者だ！」と指を差され、開拓の子は汚い、臭いといわれていた。両者の交流は全くなかった。

若松地区には開拓が多かった。60戸くらい入って現在も残っているのは約半数。酪農を続けているのは1割くらいだろう。

(2) H-Rさんの生い立ち

昭和3年、北松山出身。75歳。祖父母の代に屯田兵として北海道へ開拓にくる。実家は町の中の商家、馬を扱っていた。ご主人方はお父様が6歳の時に小樽の共和町村を開拓。長万部の黒岩の後、北松山に落ち着く。ご主人は生まれた時から北松山。大正11年生まれで81歳。昭和25年頃結婚し、1年弱本家で嫁修行、農家の厳しさを知った。五右衛門風呂が外にあり、つるべで水汲みをした。本家には米や魚があったから暮しはよかった。傷痕軍人用の国立第一療養所(札幌)にて看護婦免許を取得。もう一年勉強すれば保健婦免許が取れるというので、免許は取得したが、就職はしなかった(「私は保健婦の資格を切り売りしているだけ」)。結婚して家にいたところ、松山支庁が開拓保健婦にならないかといってきた。開拓保健婦枠が増員になり、資格を持っている人を探していたようだ。嫁にきたばかりなので躊躇していたら、名前だけでいいから貸してくれといわれ、それならと名義貸しのつもりで辞令を受けた(昭和26年)。当時松山支庁には昭和21年頃から活動している開拓助産婦が一人いたが、いつの間にか辞めてしまっていた。ほとんど村を歩かなかったようで、彼女のことを記憶している人は少ない。

(3) 開拓保健婦としての活動

【初期】

名義を貸していただけたつもりが、数ヶ月たって支庁から月報を書くよういわれびっくりした。何から始めてよいか分からなかったが、「一軒一軒歩いていけば足跡くらいは残るかな」と思って村回りを始める。

保健婦の存在が知られるようになった頃、幾つかの山を越えてH-Rさんを訪ねてきた女性がいた。治療などどうすることもできず、ただ「お医者さんに診て頂いた方がいいですね」としかいえずその人を帰した。その様子を見ていた夫に「医者に行けないからあの方はここにきたのだ。考えて、何かしてあげられないのか？」といわれ、自分のしたことを恥ずかしく思った。それから夫のその一言を肝に銘じて「考えて、何でもいいから何かしてあげるようになる」と誓った。

部落を歩いているうちに開拓者の暮らしが分かってきた。農業を初めてする人が多かったので、畑で間引きすることも知らない。立ち話の途中に、「ここちょっと抜いた方がいいよ」とさりげなくいたり、なんでもいいから自分でできるアドバイスをしたりするようにした。歩いているだけではないと思うようになった。

【開拓婦人会の結成】

「何事にも耐えてきたけど、精神的にはもう耐えられない」とある主婦がいった。開拓部落は隣の家までも遠く、それぞれの家が孤立していた。また、どの家も旦那は強く、妻はいわれるままに働くだけであった。孤独な開拓者の主婦を見て「心」、「和」の大切さを思った。主婦達の心の拠り所を作りたいと思うようになった。

開拓農協の組合長は海軍にいた元職業軍人で、組合のことを真剣に考えている人だった。よく相談

に乗ってくれ、組織づくりにも理解があった。部落懇談会の時に「女性も月に1度は集まるようにしましょう」と声をかけてくれた。「そんな暇はない、女は働くだけでいいのだ」と反対する男性が多かったが、5軒でもいいから集まりやすい所に、まず集まろうと話をつけてくれた。

昭和30年開拓婦人会結成。それまでの4年間の村歩きで、個々人や地域のことは把握できていた。「婦人部」としなかったのは、農協の下請けグループにはしたくなかったから。「婦人会」として自分たちの自主性を強調したかった。開拓者には立派な人（地位の高い人？）が多かったが、人の上に人を作らないよう気を配った。

【村歩きエピソード】

村歩きをする時、本家の兄嫁がナスの味噌漬けが入っているようなおにぎりを二つ持たせてくれた。開拓の人はお米など食べていないのを知っていたので「私すいとんを食べたいわ」といってごちそうになり、「お礼に」といっておにぎりを置いてきた。おにぎりをただ「あげる」のではなく、すいとんと「交換」した。本家の母は村に行く時はキャラメルを持たせてくれた。「あげる」のではなく、何かの時に「差し上げて」きなさいと。

ある主婦から樟脳臭いお茶を頂いたことがある。お茶は開拓者にとって大層大事にしていたもの。筆筒の中にしまっていたのを出してくれたのだろう。その心を頂いた。

村に行く時は少し膝の出たようなズボンで、着古した服を着て行った。少しでも開拓の人に近づきたかった。

【活動状況】

栄養士や生活改良普及員はいた。道の農地開拓部から年に1度栄養士が開拓部落にもきた。保健所の保健婦は乳幼児相談などを開いていた。営農指導員とはよく一緒に歩いた。酪農協の職員とも密着した活動をした。

大学の先生の講習で勉強になるのがあった。自然の素材を使った治療法などを教えてくれた（例えば、白樺の葉にはビタミンがあるからお茶にして飲むといい。大根や人参の汁には栄養がある。湯通しすれば辛くなく食べられる）。

保健婦があって生活があるのではない。生活の中でみんなと一緒に考えて行くのが保健婦である。自分たちの生活に見合うことをみんなで考えるのが大事。生活に関することは実践しなければ意味がない。道から来る栄養士は子供の食事が大事だというのが、親だつてろくに食べていないのに子供用の食事をわざわざ作れるわけがない。栄養士はそれが分からない。

生活は文化である。習ったことは噛み砕いてでも理解し、実践しなければ役に立たない。自分の知識にならない。

【活動例】

集会に着て行く服がないという声があったので、毎月50円ずつ集め、お揃いの服を数年かけて冬用、夏用、間の物を作った。上っ張りは当時2000円くらいだった。これを着れば会合にも気楽に出でられるので喜ばれ、出席率が上がった。

栄養カルテ、家計簿記帳のお泊り講習会をお正月に1、2ヵ所のグループで実施した。無駄はないか、参加者は背中合わせで家計簿をつけた。結果、どの家も交際費が高いこと、嗜好品に随分出費していることがわかった。手土産は外のものを買わず、地域のものを使って喜ばれるものを作りしようと、筍の瓶詰めを教えた。タンパク質の摂取が少なく、また高価なので「おやつは飴よりソーセージ」を合言葉に、自家製ソーセージを作るようにした。ちょうどこの頃牛を飼い始めた家が多かった。

牛乳は一滴たりとも無駄にせず、一滴でも多く出荷するものであったから、酪農家でも牛乳は飲まない。しかし、どの家でも初乳は捨てていたので、栄養価の高いこの乳を利用するため、牛乳豆腐を波及させ、保存のための瓶詰めも指導した。

体の守るための工夫として、健康カレンダーを作った。

栄養三色運動。

【姉妹グループ活動】

年間計画を立てる時、雲内部落の一人が「八エのいないところで昼寝をしたい」といった。この声を、2年かけてようやく汲みあげることができた。役場、衛生課、教育委員会、婦人学級に働きかけ、「モデル地区」（カと八エのいない運動か？太田）の認定を受け、DDTを無料で散布してもらった。牛がいるので八エはどうしようもなかったが、カの発生源対策として水の衛生管理を始め、300軒の水質検査をした。開拓部落のこの取り組みは、既存農家にも「波及」（当時「普及」という言葉は使わなかった）し、既存農村環境美化活動も着手された。これは村から始め、市街地を取り囲んだ事例（町の保健婦になってからの活動か？太田）。

佐久病院の若月先生の八千穂村を公衆衛生のモデル地区として参考にした。公衆衛生の研修にでた時、その資料の手がかりが掴めたので、早速取り寄せて勉強した。

20～30戸の南若松地区で食生活調査をした。おかずに「踏、塩少々」としかない家庭があった。イモや麺類が主食で、ヨメ菜のばかり食だった。ここには分校か学校があり、校長先生の奥さんが栄養士の資格を持っていて手伝ってくれた。しかし、校長の奥さんをリーダーにはいけないと思った。2年で必ずリーダーは交代するようにした。

南若松と雲内の二つのグループを姉妹グループとし、実験地に選んだ。月に1度「衛生の日」を設定し、その日はみなが肥料の袋を旗にして目立つように掲げ、それを目印に村の清掃活動を協力して行った（村人全員か？グループ員のみか？）。

年に1度リーダーたちの研修「泊まりあい学級」を開催した。冬の病人用に布団を10組作り（掛け布団はいい綿を酪農協から安く買って入れ、敷布団にはボロ布を詰めた）、それにリーダー30人が寝た。イモは各自が持ち寄り、鱈を3本買い、刺身、あら汁、漬物、ご飯を作って食べた。ささやかであったが、普段の生活から少し離れることができるこの研修は、命の洗濯だとみな大変喜んだ。冬の薪出しの時期と重なるので、家族の了解を得ることが難しかったが、主婦が家を空けられるのは冬しかなかった。参加者の絆が生まれた。

【農林水産大臣賞受賞（副賞250万円）はいつ？何で？】

昭和44年、開拓保健婦制度廃止に伴い、北桧山町の保健婦になった。保健所に行くという話もあったが、保健所に行ってしまうとこんなに住民と近い仕事はできない。グループの方々が同じ一族のように大事にしてくれ、町付けとなるよう嘆願してくれた。こういった経緯で町の保健婦になったが、それでもグループ員は「役場にH-Rさんをとられた」ように感じたようで、その頃からグループで何か違う空気を感じるようになった。

町内にグループは13できた。このリーダーたちは現在保健推進員などになり、ネットワークが生かされている。

4) 備考

近所に写真を趣味とする人（道庁の役人をし、その後東京？に出てしまった）がいる。彼が度々帰

省し、H-Rさんに同行して開拓部落の写真を撮った。一週間で2000枚以上撮っていた。そのうちの何枚かが「 グラフ」に掲載された（昭和40年頃？）。H-Rさん宅にも写真がたくさん残っている。

資料多数。手紙でも何でもすべてダンボールに入れてとってある。「よいものは全て大西さんが持って行った。もう戻ってこないかも...」。

実績発表会などで用いた模造紙のポスター類は、太田のデジカメで撮影した。グループ活動の歴史、地域の活動の取り組みなど、参考になるものが多い。

以上、太田のメモ起こしまで。資料一式は水野研にあるため、参考にした文献無し。活動の年代等不明な点が多い。「農林水産大臣賞受賞」などいくつか受賞歴があり輝かしい経歴があるので、文章で残っているはず。要チェック。

【太田所感】

柔和で控えめなのに、凛として気高さを感じさせる人。色々なエピソードからご主人やその家族に支えられて活動してきたことがわかる。Noblesse obligeをわきまえたような人だが、人懐こい笑顔で「今度はぜひ泊まりにきてね」といって下さる、親しみやすい人でもある（私が風邪を引いていて、ひたすら涙をかみ続けていたので帰りのお土産袋にティッシュを忍ばせておいて下さる心遣いが嬉しかった）。

医療現場にいたことがないからか、保健婦というより生改さん。カとハエのいない運動や、環境美化活動、食生活改善などの活動が中心。地域に根を張って活動した。18年間も同じところに奉職し、地域住民とともに活動するというのは、開拓保健婦くらいか。生改でも3～5年ごとに異動があるからここまで地域と密着した活動はなかなかできない。彼女の場合は地元の名家（恐らく）としての義務もあり、逃げ場がなかっただけに、地域にいかに入っていくか、認めてもらうかは、何より大切だったろう（彼女の場合は、そんなことは意識せずとも、素で受け入れられた気がする）。開拓保健婦制度がなくなっても町に居続け、「地域があつての自分」というスタンスを貫いている。

長野県国内調査報告

1．調査期間：2003年11月3日～4日（2日間）

2．対象地：長野県長野農業改良普及センター（長野県長野市大字南長野字南県町 686-1）

3．調査団員：1名

担当	氏名	所属先/職名	業務内容
総括/臨時会計役/記録係	太田美帆	レディング大学大学院 博士課程	インタビューおよび取りまとめ ならびに業務費の管理

4．調査の目的：

(1) 長野県長野農業改良普及センターが受け入れている、インドネシアからの長期技術研修員の研修内容や状況を、研修担当者および研修員本人による聞き取り調査から調べ、海外からの長期研修員受入のあり方について考察する。

(2) 研修関連資料を収集する。

(3) 長野県における昭和20～40年代の生活改善普及事業関連資料を収集する。

5．調査方法：研修担当者および研修員本人に対する聴取調査

6．調査日程：

月日(曜)	時間	場所	内容	宿泊先
11/3(月)		ひたち野うしく発 長野着	移動 (長野新幹線あさま3号)	長野 市内
11/4(火)	8:00 13:30	農業改良普及センター 長野発 ひたち野うしく着	研修担当者および研修生本人 に対する聴取調査 移動 (長野新幹線あさま518号)	

【長野15-1】

日時：平成15年11月4日 8:30~13:30

場所：長野農業改良普及センター（長野県長野市大字南長野字南郷町）

被験者：NA-A氏

（長野農業改良普及センター技術普及課技術第一係課長補佐兼技術第一係長）

NA-B氏（インドネシア人長期技術研修員）

調査者：太田美帆

内容：農業改良普及センターにおける長期研修員の研修内容とその状況

1. インタビュー形式

普及センター全体のフロアが見渡せる会議テーブルで、資料を広げながら話を伺った。まず自己紹介、NA-A氏より研修の概況、問題点などの説明、それからNA-B氏と日本語、英語を混ぜて話し合いを持った。彼女は日本語にかなり慣れてきているようで、英語だけで話すよりも日本語を混ぜた方が分かるようだった。私とNA-A氏が話している間も、NA-B氏は黙って座っていたが、私とNA-B氏が話している間NA-A氏は退席していた。NA-B氏とはすっかり話し込んでしまい、途中昼食に誘ったがラマダン中ということでお茶もとらず、ひたすら話し続けた。

事前に昭和20年代からの資料を見せて頂きたいとお願いしてあったので、長野県の40周年誌と50周年誌のコピーを取らせて頂くことができた（持ち出し不可）。

2. インタビュー時入手資料

長野農業改良普及センター「平成15年度普及活動計画」（冊子）

長野農業改良普及センター「平成14年度普及活動実績集 普及のあゆみ」（冊子）

NA-B技術研修員研修計画書（プリント）

長野県庁受入技術研修員研修プログラム（プリント）

NA-B技術研修員背景調査書（プリント）

NGO「虹の会」パンフレット日本語版

長野県S63年『人・土・むらを築く 農業改良普及事業40周年記念誌』（部分コピー）

長野県H11年『豊饒 長野県協同農業普及事業50周年記念誌』（部分コピー）

3. インタビュー内容

1) NA-B氏略歴

28歳。女性。イスラム教徒。1999年大学卒業（土壌科学）と同時にインドネシアNGO「虹の会」¹⁵⁾

¹⁵⁾ NGO「虹の会」：1996年設立のローカルNGO。スタッフ13人。本部マカッサル市内。活動村はゴワ県バジェン郡タナバンカ村。農業技術指導、大豆料理・豆乳の配布による栄養改善、母子保健、図書館活動等を展開。村の小・中・高校生のための奨学金も募っている。9~14人の女性グループが12、メンバー総数は149人。2001年度に日本総領事館から草の根無償資金協力を受け、プログラム対象村に活動の拠点となる施設「KOMINKAN」を建設。2000年からJOCVを受け入れている。現在活動しているのは村落開発普及員と栄養士の二人。継続派遣を申請している。日本からの見学者は年間を通じて多い。

に勤務。勤務歴3年半。出身地でもある南スラウェシ・マカッサル市の事務所付け。実家から通勤していた。NGOによる栄養・健康ボランティア養成研修および栄養・健康教育トレーナー研修受講経験あり。海外渡航歴無し。母語はインドネシア語、英会話教室に1年間通ったことがあり、英会話は中級程度。研修開始前に1ヵ月の日本語研修を受けた。

現在の仕事は、ほとんど毎日のようにタナバンカ村の公民館にバスで通い、栄養士隊員、村落開発普及員とともに、女性グループに対して料理講習、公民館内の図書館で子供たちに読み聞かせたり、折り紙教室などを実施したりしている。農業用灌漑プロジェクトも始めたところだが、同僚に引き継いできた。村落開発普及員が実施するPRAと一緒にやることもある。これまでマッピングやシーズナルカレンダーを作った。マカッサル市内では保健ボランティアへのトレーニングを行ったり、USAIDが配布する小麦粉と大豆粉の混合粉を住民に配布したりしている。

2) 研修目的

「日本の公民館活動、公民館の運営・管理方法、公民館を軸とした地域づくり、農業改良普及員の活動、農業普及法・農村女性活動支援としての農作物加工等について学びたい」(背景調査)

NA-B氏本人が希望している研修項目は次の5点。 農業、公民館活動、図書館活動、女性のエンパワメント、PRA手法。

Q - 「虹の会」活動上の問題点は？

A - とにかく人が怠け者。タナバンカ村の女性も暇な時間があるのに、怠けていて働かない。公民館にくるようになっても、いい訳ばかりで積極的にこようとしない。それほど忙しそうでもないのに。料理講習をして、栄養価が高く家庭でもできるような料理を教えても、それを作らない。12グループ中1グループに豆乳加工の技術を教え、グループが作ったものを「虹の会」が買い上げ、公民館にくる子供たちに無料配布している。豆乳づくりをすれば現金になるのに、女性たちはそれほど積極的ではない。豆乳づくりに使うミキサーが公民館にしかないからできないというので、メンバーには無料貸し出しをすることにしたが、利用者がいない。村の人はチャンスをあげても働こうとしないのだから、怠け者だ。

3) 研修派遣先決定までの経緯

NA-C氏(「虹の会」付けのJOCV。H13年度1次隊村落開発普及員)が隊員カウンターパート研修に推薦。NA-C氏が出身県である長野県総務部国際課・地方事務所農政課に研修先に適した団体について事前に問い合わせたところ、県内飯田市公民館と、信濃町大豆加工生産者組合を指導している長野農業改良普及センターを紹介されたため、この2ヵ所を希望受入研修先に指定して応募。

飯田市公民館は活発な公民館活動で有名であり、海外研修生の受入実績もあるが、今回の受入には難色を示した。一方、長野農業改良普及センターでの受入は初めてなものの、県庁からこの打診があった時には受入係に適していると思われる生活担当普及員が2名いたため可能だと判断し、受け入れることとした。

4) 研修プログラム

(1) 県庁オリエンテーション

平成15年度長野県海外技術研修員受入はブラジル(医療系女性2名)、ウズベキスタン(男性1名)、

メキシコ(女性1名)とインドネシア(女性1名)の計5名。最初の10日間ほどで諸手続きや合同のオリエンテーション,銀行・図書館・バス等の利用方法,買い物,ゴミの出し方等の生活研修,日本語研修を受ける。

(2) 長野農業改良普及センター

- A. 農村女性グループ活動の方法(農村女性ネットワーク・マイスター協会活動支援)
- B. 農村加工技術の導入と加工方法(「てまえみそ講座」,商品PRによる販路拡大支援)
- C. 男女共同参画における学習方法(地域リーダーの育成)
- D. 農村女性起業活動の支援方法(農産物直売所の活性化支援)
- E. 公民館活動および運営方法
- F. 県外視察研修(関西)
- G. 異文化交流講座(世界各国の料理教室)
- H. 県内視察研修(スキー)
- I. 生活改善事業について
- J. 修了式および帰国報告会

5) 研修の現状と問題点(研修員担当者の不在と語学の問題)

受入決定当初,あてにしていた生活担当普及員が2名とも4月の人事で移動してしまい,代わりにやってきた生活担当普及員は課長レベルのため,付きっ切りでの指導が困難。関連職員で分担して研修にあたっている状況だが,計画を立てた時分に期待していた通りにはいっていない。「研修員の希望にも添えていないのではないかと申し訳なく思っている次第である(NA-A氏)」

NA-B氏の日本語能力の向上は目覚しく,日常会話における問題はほぼなくなったが,専門用語については英語も混ぜるようにしている。しかし,受入側が実際一番苦労しているのは語学である。研修プログラムもあるにはあるが,講義といった普及センター内での言葉による研修は不可能だと思われるので,現場指導や講習会などで外に出る改良普及員がいれば専門を問わず,付いて行ってもらっている。外に出る人がいない時は,自分の席で「レポート書き」(長野県の海外技術研修員は「修了証書」を貰うために日本語で最終報告書執筆の義務がある。CF.月例報告書の県庁への提出義務は研修受入側にある)。つまり誰も面倒を見る人がおらず,ほったらかしの状況のようである。

信濃町大豆加工生産者組合は,加工よりも生産中心で現在は栽培技術の指導を中心に行っているため,研修生の希望に合わないと思い,一度連れて行っただけ。代わりに大豆加工をしている他のグループの豆腐づくりや味噌づくりに参加してもらっている。おやきの生産販売をしている女性の起業グループの活動視察を半日お願いしたところ,当日はグループ員がその日作ったものは販売には回さないで練習用として無駄にしてもいいように「料理講習」のような形で準備してくれていた。「受入側の負担になっているのではと申し訳なく思った(NA-A氏)」

本人が公民館での研修も希望しているため,3ヵ月でも1ヵ月でも受け入れてもらえればと県庁や教育事務所に相談したが,飯田市への引越し,住居の問題等があり実現は不可能のようである。NA-A氏はこの決定に不服そうである。NA-B氏が踊りを習っている近隣の長野市中央公民館では受け入れてもらえないのか?「あまり活発に活動しているところではないので…」

6) 研修生の日常

長野県公務員宿舎アパートに独居，自炊。平日はお弁当を作り，自転車で 30 分の普及センターに 7:45 に出勤。改良普及員の誰かが外に出る時について行く以外は，席でレポート書き。5:15 まで。帰宅後は料理をしたり，テレビを見たり。毎週火曜日の夜 2 時間，長野市中央公民館で「日本の踊り」を習っている。受講生は年配の女性 11 人。この公民館では他にも習字，料理，社交ダンス(?)等のクラスがあり，料理教室には出てみたいのだが平日の昼間なので受講できないのは残念である。

週末は同じ宿舎に他の海外研修生もいるのでよく一緒に過ごしている。ブラジル人と買い物などに出かけることが多い。インドネシアの家族とは電話や E メールでやりとりしている。来年 1 月に N A - C 氏が帰国する予定なので心待ちにしている。

7) これまでの研修成果と活動への応用可能性

オカラのコロッケ:美味しかったし,オカラはいくらでも作れるので,早速村でも商品化できそう。

おやき:味噌や野沢菜・野菜などの中味を「テンペイ(大豆から作るインドネシア料理)」か何かに代えればできそう。

豆腐:大豆の栽培から始め,昨日収穫したところ。栽培方法では「にがり」を使うところがプロジェクトと違う(目新しいことはないよう)。

リンゴの剪定を覚えたが,リンゴはインドネシアでは育たない。

日本の農業:「勉強した」

藁細工:家の中のデコレーション用のものを習った。藁は手に入るのでプロジェクトでも導入して女性グループで展覧会などができそう。公民館に集まってくる子どもと一緒に作ったりもできそう。日本は行政の住民への関心が高く,手厚くいろいろなサポートをしているところはインドネシアと違う。農村でも農民でも行政サービスと繋がっている。インドネシア行政には期待できないので,NGO がそういった役割を担いたい。

8) 研修生へのアドバイス

N A - B 氏が研修を期待していたのに,未だに取り掛かれていない分野に関し,勝手ながら次のようなアドバイスをした。

(1) 公民館活動,図書館活動

現在通っている中央公民館/長野市図書館の運営スタッフがいる時間に,「虹の会」のパンフレットを持って訪問する。会の活動を紹介し,自分も公民館/読み聞かせ活動を行ってきたこと,これまでの成果や問題点などを簡単に話してみる。アポを取って行くと相手も構えてしまうかもしれないので,最初は何気なく行ってみる。通訳もつけず,まずは自分からしゃべりに行き,相談を持ちかえるような態勢を作る。相手の反応がよければ次にアポを取って正式に訪問する。その時は,自分が知りたい項目を整理して行く。

「虹の会」活動紹介の時間を作ってもらえないか相談する。会を設定してもらって講師として行くのではなく,会の企画から運営,人集めまでスタッフと一緒にやりながら学ぶ。「虹の会」賛同者も得られれば一石二鳥。

大人向け/子供向けの「国際理解/交流会」を月に一度,3 ヶ月の講座を海外研修生仲間数人でやりたいと企画を持ち込んでみる。

(2) 女性のエンパワメント

普及センターを通じて訪問できる女性の起業化活動を、エンパワメントのプロセスとして観察したり、普及員に仕掛け方・苦労話を聞いたり、女性の意識の変化などを聞いてみたりしては。料理技術だけに注目してはいけない。改良普及員は元気な農村女性を何人も知っているはずだから(例えば長野県では「マイスター制度」がある)紹介してもらおう。女性グループへの普及所のサポート状況、改良普及員はどういった働きかけをしているか、普及センターや役場は組織としてどういった役割を果たしているかを調べる。タナバンカ村の女性は、どのように変化して欲しいのか、そのために自分は何ができるかなど、具体的にイメージしてみる。

(3) PRA 手法

普及員が用いる普及技術には PRA と似たツールがあるから調べてみる。普及センターで「PRA」について知っている人がいなければ、県庁国際課を通じて開発途上国で農村開発に従事する NGO を紹介してもらっては。農村開発を視野に入れた NGO の方が PRA 等については詳しいだろう。N A - C 氏がどのようにして PRA を知ったか、どこで研修が受けられるか聞いてみては。

フィリピン・ボホール研修強化計画プロジェクトが作成した研修用テキストが参考になるかもしれない。

(4) 保健所の活動

研修目的には明記されていないが、N A - B 氏は最近保健ボランティアの養成研修などにも携わるようになったため、保健所の活動も見てみたいという。地域女性の保健ボランティア活動、食生活改良員、母子愛育会等の活動があれば視察してみてもどうか。県庁国際課を通して紹介してもらっては。

4. 議事録担当者考察

1) 海外技術研修員受入の問題点

通訳のつかない長期研修員の受入に関して、受入側が最も苦労するのは、言葉の問題であることがわかった。研修員担当者は研修プログラムの英訳だけでも、かなりの時間と労力を費やしているようだ。研修員に対する便宜供与を含む関連業務があるからといって、担当者の通常業務が減るわけではないので、研修員の受入は負担となっているように思われる。これでは研修員自身も肩身の狭い思いをせざるを得ない。加えて気遣いや話がうまく伝わらない時などのストレスも双方が溜め込むことになる。

人とのコミュニケーションは確かに、言語に拠らないところも多く、身振り手振りで伝わることもたくさんある。しかし、研修員の日本滞在目的はコミュニケーションを図るだけの「異文化交流」にあるのではない。研修員が帰国後、それぞれの国や地域で活動を開始させることができるように、技術やノウハウを学んで行くための研修である。そのためには普及事業に関していえば、ただ単に講習会や勉強会等のイベントに参加するだけでなく、普及理念、普及計画の立て方、補助事業の意図、行政業務、普及センターの運営等、言葉を通して理解しなければならないことも多い。例えば、研修プログラムにある「男女共同参画事業」をどのように説明するのか、研修担当者に伺ったところ、農繁期中は改良普及員もこの事業に関しての取り組みはしていなかったが、農閑期に入る 11 月から取り組むことになる、調印式等には研修員を同行することができるが、事業をどこまで説明できるかは分からないし、不安でもある。必要がなければ割愛するかもしれないという消極的な態度であった。このように実際には、普及事業に関する講義を研修員に対して行えるような人材と時間を各普及センター内で確保することは難しい上に、そこまで普及センター側に求めるのは酷ではないかと思われる。

わが国の農業改良普及事業から学んで欲しいことは多いにもかかわらず、長期研修員に関しては、イベントに参加する、目で見てわかるような技術を習う以外の研修の実施が普及センターでは行われていないという実情は非常に残念である（インタビュー中にN A - B氏があげた「これまでに習ったこと」は全て技術に関することである）。では、言葉で説明すべきところをどう補うか、以下に思いつきの案を紹介する。

2) 長期海外技術研修員受入研修改善案

(1) 既存の集団研修コースへの合流

長期研修員の滞在中に、JICA や(社)農山漁村女性・生活活動支援協会等が行う短期研修コースがあれば、その期間だけコースに合流することはできないだろうか。例えばJICA 筑波国際センターでは毎年2ヵ月程度の「農村女性能力向上研修」が実施されているし、同分野の国別研修も行われている。研修員の理解できる言語で行われる研修コースがあれば、それに参加して講義を通じて普及事業の概要を理解した上で、現場研修として普及センターに赴任するというプログラムはできないだろうか。

(2) 専技研修+現場研修プログラム

普及センター付けとなる研修員が全国に何人かいる場合、最初の1ヵ月でも一県にまとめて専門技術員による県行政や農政、普及事業等に関する講義を中心とした集団研修を通訳付きで行うのはどうか。上記同様、その上で各普及センターに残りの期間の現場研修を引き継ぐのはどうだろうか。先進地視察なども合同で実施するのもよいだろう。

(3) 青年海外協力隊OV等の活用

県庁国際課、青年海外協力隊OV(経験者)会ネットワーク等を活用し、通訳や研修員の生活相談相手として協力を得られそうな人材を、受入側や研修員に紹介できないだろうか。協力可能な人をリストアップしたり、登録しておいたりするのも役立つと思う。そのような人に、適宜ボランティアか日当をお支払いするなどして毎月一日でも協力してもらえるとよいのだが。研修員にとっても自国文化と日本文化の両方を知っている日本人の存在は頼りになるだろう。協力隊OVやその他ボランティア活動に興味のある人が活躍できる機会ともなるし、雇用も促進できれば双方にとってよいのではないだろうか。

(4) 受入側への「専門用語の日英辞典」の配布

JICA が研修受入を依頼する時に、例えば専門家や協力隊員に派遣前訓練中に配布している専門分野別の「専門用語の日英(その他の言語)辞典」を、受入側にも提供できないだろうか。

(5) 英語版教材の提供

これまでに当検討会で収集/作成してきた普及事業に関する英語版および英語翻訳したスライドやビデオを提供する。例えば農林水産省による普及事業概況や女性の起業化、「家族経営協定」、IDACA(アジア農業協同組合振興機関)による農協概況などのビデオには英語版の有用なものも多いので、活用できると思われる。

また、当検討会で収集した英語版文献資料や、報告書も教材として利用して頂きたい。これらは、研修生にとって有益であるばかりでなく、受入側にも翻訳の一助となるなど、有効に活用できるものと思われる。

(6) セクターを越えた研修は可能か

研修員の研修目的や背景、業務等は多岐に及ぶので、テイラーメイドの研修プログラム作成は、関

係機関との調整もあり，非常に難しいことは理解できるし，研修員の希望よりも，受入側にできること中心のプログラムとなってしまうことは，やむを得ないのかもしれない。しかし，研修員が希望した場合は，セクターを横断したプログラムを組むなど，柔軟な対応はできないものだろうか。本調査で聞き取りした研修員の本国での業務は，農業・農村，保健，教育と多セクターに跨っているが，一旦研修先が農業改良普及センターと決定してしまっただけからは，他セクターへの公式な訪問や研修はなかなか実現できないようである。一案ではあるが8カ月の研修を，農業改良普及センターに3カ月，公民館に2カ月，保健所，図書館，上記集団研修等にそれぞれ1カ月程度というように割り振ることもできるのではないだろうか。数カ月ごとに区切り，短期集中型で研修員を受け入れる方が受入側の負担も軽減されるように思われる。

あるいは，一カ所に定住しながらいくつかの機関の研修を同時進行で行うことはできないだろうか。主な研修先を農業改良普及センターとして，毎週月曜日の所内会議には必ず出席し，保健ボランティアの養成研修や母子愛育会活動などがある時は保健所に行き，毎月の公民館運営スタッフ会議には出席するといったように。限られた研修期間の多くを事務所で「レポート書き」として独りで紙と鉛筆に向かって過ごすのでは，研修員にとっても受入側にとっても好ましいものではないだろう。一カ所の研修機関で研修員の研修ポテンシャルを狭めることなく，多機関との協力連携で，より研修員の希望に添った有効な研修の実現を望む。